
武装せし神の姫

名も無き武装神姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装せし神の姫

【Nコード】

N2670X

【作者名】

名も無き武装神姫

【あらすじ】

元々は人間ですらなかった物がIS世界に転生。最強にするつもりは在りません。

イア、イア、マリーセレス。

*タイトルを変更しました

*基本的に18時更新です

*作者名を変更しました

Ver.1 (前書き)

注意：一部、武装神姫mk2のネタバレを含みます。

V
e
r
:

1

戦いは終わった。
終わったハズだったのに。

マスターがクズの代わりに落ちて行く。

高層ビルの屋上から落ちて行く。
ただ一言、落ちるハズだったゴミ野郎に言葉を伝え。

「責任を果たせ」

それだけ言つて、マスターは私の視界から姿を消した。
なぜ、マスターが死なねばならない？

力無く膝をついている勘違い大バカ野郎の代わりに死ぬ理由はな
んだ！

「お前が！！ お前がバカみたいな行動を取るから！！」

私は叫ぶ。

この小さな体で、力の限り叫ぶ。

「お前みたいなバカが存在しなければ…。マスターは、マスターは、
死ななかったのに！」

私は泣いた。

この身体には涙腺なんてありはしない。

けど、確かに涙を流し、嗚咽を漏らしながら泣いた。

そして、結局。この事件は事故として扱われた。

マスターの死因は屋上の手すりが錆び、風化を起こしていたから
という扱いになる。

納得は出来なかった。

だけど、私が真実を告げる事は出来ない。

だって、マスターがソレを望まないから。

だから私は、機能停止するまで真実を隠し続ける。

マスターを知り、あの場所に居合わせた者たちも誓ってくれた。

決して真実は口外しない。

秘密は守り続ける。

この約束は当事者全員が死に、全員が機能停止した後も守られ続けた。

マスターと共に生きた私は、マスターの眠るお墓の前で機能を停止させるべく移動する。

マスターが私のマスターとなり、私に与えてくれた名前を胸に。

『名前か、迷うな。うーん。よし、マリーチだ。よろしくな、マリーチ』

そう。

私は、O v e s t P o z z o F a b b r i c a（オヴェストポッツォ ファブリカ） 製、型番O P 0 1 0 T、テンタクルス型M M S マリーセレス。

マスターが与えてくれた名前は、マリーチ。

「マスター。マスターが亡くなってから90年の月日が立ちましたですう。ヤツはマスターとの約束を守り、信頼を回復させ、より発展させました。マスターが生きていた頃、私は新型で、最新型の名で呼ばれていたのが懐かしいですう。いまでは、フブキ型同様に旧式と呼ばれているんですけどね。だから、もう良いですか？ そちらに行っても良いですかあ？ そろそろマスターの暖かい笑顔を見たいのですう。だから、ダメと言われても、そちらに逝きます。いつまでも、いつまでも、お側に置いて欲しいですう」

マスターが死んだ時からずっと停止させたかった私の胸に収まるコアセットアップチップ
C O C、私はソレを自らの手で引き抜いた。

ユックリと意識が遠のいて行く。

思い出がシャボン玉の様に弾け飛び、マスターの顔しか思い出せない。

「あ、アア……。マ、スター。そこ、に。居たんですね。私も、そっちに。行くですう」

最後にマスターの笑顔が見えた気がする。
ちよっとだけ、照れ臭そうだ。

「マス、ター」

こうして、伝説的なチャンピオンである人物のパートナーは長い人生の幕を下ろした。

彼女は如何なる修理を行っても起動する事は無く、何をしても記録のサルベージに成功する事は無かった。

彼女の体はチャンピオンの親友であった人物の孫の手により、チャンピオンの墓に葬られる。

チャンピオンとそのパートナーの名は、決して忘れられる事無く語り継がれた。

彼と彼女が死した後に判明した事実により、武装神姫の未来を守る為に命を投げ出したチャンピオンを笑うマスターと神姫たちは誰も居なかった。

Ver.2（前書き）

修正

織斑一夏のプロフィール内容

『織斑一夏、中学3年生。今年、藍越学園』
3年生。藍越学園』
『織斑一夏、中学

理由

今年だと時間軸がおかしくなる為。

懐かしい夢を見た。

まだ自分がマリーチで在った時の夢。

「懐かしすぎるですう」

私はあの後、なぜか知らないが意識を取り戻した。

取り戻したのだけど、人間の赤ん坊になっていたのだ。

まあ、そんな混乱状態でも月日は経過する。

気がつくともう、この世界に誕生してから十三年くらいだ。

天蓋付きの豪華なベッドから降り、身体を伸ばす。

たこルカとかいうキャラクターが描かれたパジャマをササッと脱ぎ捨て、ポイ捨てる様にベッドの方に放り投げ、着替える。

記憶の中にあるマスターが着ていた服装。灰色のワイシャツに黒色のジーンズ、黒のテラードジャケットを少し着崩した感じだ。

実に女性らしくないが、別にどうでも良い。

服を着た後は、豪華な装飾が施された鏡の前で寝癖のチェックは欠かさない。

マスターも寝癖チェックだけは欠かさなかった。

でも、いつもいつもアホ毛ポイのが一本立っていて、私が一生懸命櫛で直していたのは良い思い出だ。

自分で起きて、自分で朝の着替えをする様になってから八年間。

耳は普通の人間と同じになったけれど、見た目はテンタクルス型

MMスマリーセスで在った頃となら変わりのない。

髪の毛の色はマスターの趣味でオリジナルカラーcolor Aではなく、color Cの赤茶色だ。

瞳のカラーだけはオリジナルカラーcolor Aのままで、翠眼だけ。

「ところで、ジイ。着替えの時は入ってくるなと言ったと思うのですがあ？」

私が振り向くと、豪華な造りの扉の前に背筋をビシッと伸ばした老執事が一人立っている。

「マリーチお嬢様。僭越ながら、マリーチお嬢様は、Ovest Pozzo Fabrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）総帥としての自覚が足りませぬ。いつ何時、マリーチお嬢様のお命が狙われるのではないかと思うと。ジイは、ジイは！！」

この世界での私の名前は、マリーチ「オヴェスト」ポッツォ「ファブリカ」という。

両親は私を生んですぐに他界…。したわけではなく新婚旅行に行き、今もどこかでラヴラブしている。

何で分かるのかですって？

毎年、毎年。

正月になると写真つきで年賀状が送られてくるからだよ！！

ったくよお。自分の娘ほおってなにやってんだア！？ ざけんじやねエ！！

「ジイは心配性過ぎですう。ココは日本ですよあ？ アメリカ支部ならいざ知らず、ここ日本支部なら問題ないですう。それにお父様とお母様が私に譲ってくれた支部は日本支部だけ、日本の安全性の

高さは折紙付きですう。白騎士事件がその証拠ですう」

O v e s t P o z z o F a b b r i c a（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）。

両親が運営すっぱかしてラブラブ、イチヤイチャと遅めの新婚旅行を6年以上も続けている為、私の管理するココ日本支部が実質の本部と成りつつあるIS開発企業の事だ。

日本のIS開発企業である倉持技研とは犬猿の仲だが、そもコンセプトが全く違うので問題ない。

倉持技研が作るISは、打鉄を初めとし、何となく日本のSAMURAIをイメージさせる物が多く、性能も特化型よりも安定した使いやすさを求めたタイプだ。

ソレに比べ、我が社O v e s t P o z z o F a b b r i c a（オヴェスト ポッツォ ファブリカ/以降、O・P・Fと省略）が作るISは何かにつけて特化型にしたがる傾向が強い。

まあ、開発部に自由に作るように指示しているし、その甲斐もあって私の意見も通りやすくなり、必然的に完全特化型なISが多数出来上がってしまった。

代表作は、第二世代型ISアーンヴァルとストライフだろう。

同期である打鉄、ラファールの安定したスペックと操縦しやすい汎用性とは違い、異彩を放っている。

前世の記憶を元に天使型アーンヴァル/高機動射撃型と悪魔型ストライフ/重装攻撃型を再現したISを製造したダケに過ぎないが。

「で、ですがマリーチお嬢様」

さっきからうっさいこの老執事はジイヤのセバスチャン「ウォン」オーデンという。

ウォルター・クム・ドルネーズよろしく、バトラーである。
一部では有名な軍人らしいのだけど、詳しくは知らない。

「もう、うるさいですう。嫌いになっちゃうですよ？ とりあえず、私はお腹が空いてるんです！！ 食堂に行くから仕事をする為の準備を整えておくです！！」

私は冷たく言い放ち、食堂へ向かう。
ジイヤにはコレくらいが丁度いい。

食堂へ向かうと、もう何人かの社員が食事を取っていた。
私の部屋とは大分違うが、社員食堂というよりは高級レストラン
というような内装だ。

実際、三ツ星店を経営するシェフたちが交替交替で朝食、昼食、
夕食、夜食を用意して待っている。
高級レストランと言ってもなんら間違いは無いだらう。

私の朝食はいつも通り用意されていた。
シェフに挨拶をし、すれ違う社員にも愛想を振り撒く。
そして、私を生んだ母に習い。前世のマスターがやっていた様に
手を合わせ。

「いただきますですう」

と言ってから朝食を取り始める。
私は基本的に日本食しか食べない。
なので、食べ終わったら当然。

「ごちそうさまでしたですう」

と言ってから食堂を後にした。

食事を食べ終わってから総帥というか社長として様々な書類に目を通し、印を押して行く。

その書類の中に見合い相手の写真が入っていたりもするのだが、ジイやがやっているのだろう。

確認次第、破いて捨てる。

マスター以外の男に興味はない。

「とんでもない地獄ですう。私が万能型天才だからこそなせるのですう。他の人なら真っ先に死ぬだろ」

愚痴が社長室を木霊する。

手伝うものは誰も居ない。

だからこそ、様々なIS関連企業からのメールを他所に別のプログラムを立ち上げる事が出来る。

パソコンの画面には一人の男性とその名前、プロフィールが映し出されていた。

『織斑一夏、中学3年生。藍越学園に入学を希望。容姿端麗、己の信念を貫く熱い一面を持ち合わせる。学生時代多くの女性に言い寄られたが、それらの行為に一切気がつかなかった事から？唐変木・オブ・唐変木ズ？と呼ばれていた。かの有名な織斑千冬の弟である。また、織斑千冬が第2回IS世界大会で不戦敗となった理由は、織斑一夏が何者かに誘拐されていた為との情報がもたらされている』

似ている。

記憶の中に何時までも輝き続けているマスターの笑顔にソックリ

だ。

性格こそ違っているが、容姿が似ており、たった一つマスターと全く同じである？己の信念を貫く熱い心？を持っているのであれば、確かめなければならぬだろう。

だがその前に。

私は、私である為の物を完成させなければならない。

織斑一夏の写真とプロフィールを厳重ファイルの中に戻し、私はもう一つのプログラムを立ち上げた。

それは、私が私である為に必要な物。

テンタクルス型MMSマリーセレス武装の設計図と様々な理論。

天才、篠ノ之束が創り出した白騎士を凌駕する為に考案した私による、私だけの、私のためだけに存在するIS。

？ク・リトル・リトル型IS、テンタクルスⅡマリーセレス？

現在試作中の第三世代型、セイレーン型エウクランテノ回避特化型とマーメイド型イーアネイラノ水中適応型は、世代すら与えられていない私専用のISを作り出す為の隠れ蓑に過ぎない。

「とりあえず、いまは仕事が優先か…。だりい」

あれから1年が立った。

我が社は倉持技研を潰さんとする様な勢いで急成長を遂げ、量産型ISのシェア世界第三位であるデュノア社と並ぶようになる。

特化型ISは確かに汎用性に優れたISに比べると物凄く使いにくい、IS学園のおかげでそこそこ特化型ISを使用できる操縦者が育ってきたという事だろう。

身近なところの話題はこんなところだ。

世間の話題はただ一つ。

とある男性がISを起動させたという、大事件とも言える事柄が取り上げられている。

？世界で唯一ISを動かせる男子？のニュース特集は中々に面白いものが合った。

「へえ。さすがはマスターとソックリな事はあるですう」

私はベッドから上半身だけを起こし、そのニュースを大型テレビで見ている。

だが、個人的な感想とすれば面白くない。

IS学園には女性しか居ない。当たり前だがISを動かせるのは女性だけだったのだ。

「チツ、面白くねえ…。セバスチャン！！ 私はIS学園に行く。入学手続きをしておけ、無理にでも割り込ませろ！！」

普段の口調など知った事か。

このままではマスター似の男が別の女に取られてしまう可能性がある。

その可能性を潰す為にも、私が赴くのが一番だろう。
それに。

「マリーセレスの試験日も近い。データ収集としては丁度良いだろう」

世界各国の企業から奪い取ったコアの数は4つ。

そして、そのコアを使用して作った専用ISの数も4つ。

私のマリーセレス。

専属侍女のプロキシマ。

吸収した会社、A / c u t e アキュート・ダイナミックス D y n a m i x が作ったラブティ

アスにアーティル。

まだ操縦者は決まっていらないが、優秀な人材を引き抜けば良い。

O・P・Fに逆らえる企業は少ない。世界で一位と二位、そして同位である三位の三社くらいな物だろう。

後数年もすれば、O・P・Fが一位となり、好き放題できるようになるかもしれない。

「ですが、お嬢様は今年で中学3年生、IS学園は一応高校で」

「割り込ませりやいいだろ。それにアメリカじゃプリンストン大学を卒業してるから怪しまれねえよ。ISの操縦技術を高める為に入学したとでもしておけ」

いつも通り扉の前でビシツと背筋を伸ばし待機しているジイやに冷たく言い捨てる。

少しシヨボンとしていたが、気にする事ではない。

私はキャミソールを脱ぎ捨てる。

キャミソールを脱ぎ捨てた瞬間、ジイヤが視線をこちらに向けた。何時もの事なので、愛用の三十二口径自動拳銃SIG | SAUER | P 230を顔面に向けぶち込んでおく。もちろん、当るわけが無い事も理解できている。

「着替えるから出て行くですう」

「ジイヤには、お嬢様の成長を報告する義務が」

SIG | SAUER | P 230から放たれた弾丸は、ジイヤの頬をかすめ、防弾使用の壁に当たり突き刺さった。

「出て行って言っただろ？」

「……。朝食の準備をしてお待ちしております」

ジイヤはビシッと背筋を伸ばし、部屋から出て行く。

ジイヤが確実に出て行ったことを確認し、私は普段通りの服に着替える。

「割り込ませたとしても入学は一カ月後くらいになるですね。なら、入学までにIS学園での部下を仕入れておく必要があるですう」

私はニヤリと微笑みを浮かべ、食堂へと向かった。

そして数時間後。

場所はベルリン。ドイツ連邦共和国の北東部に位置し、現ドイツ

連邦共和国の首都である。

かの有名なベルリンの壁があつた場所だ。

なぜドイツを訪れているのか？ 理由は簡単。

ドイツが所持するIS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ。通称？黒ウサギ隊？から人を一人だけ引く抜く為にやって来た。

他の国でも良かったのだが、ちょっと頭が面白い事になった研究者でも居たのだろう。

このIS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼの隊員たちは、肉眼へのIS用補佐ナノマシン移植者だけで構成されている。

ナノマシン技術だけは我が社も持ちえて入るが、実際に行おうとすると「非人道的だ」などの言葉を世界から貰う事は必然。だからこそ、技術はあれど、試す事が出来なかつたのだ。

そこで考えた。

我が社の技術を注げる存在はいないものかと。
世界は広い。

似たようなことを考える人間なんて無数に居る。

そして、見つけたのがドイツだったというワケだ。

「我が社の保有する第二世代型ISのアーンヴァルとストラーフを50機。第二世代強化型アーンヴァルトランシェ2とストラーフdisを10機。コアさえセットすればいつでも起動可能状態。悪い取引じゃないと思うですう」

高層ビルから外を見ながら、私は軍部最高司令官の男性と交渉を行う。

もちろん、O・P・F総帥としてだ。

「破格だな。どういっつもりだ？」

名前なんて覚える価値もない厳つい軍人が睨みを利かせる。
顔すらも覚える価値は無いだろう。

「どういっつもりもないですう。そちらのIS配備特殊部隊シユヴ
アルツェ・ハーゼから一匹。その中でも特に落ちこぼれの黒兎を譲
って欲しいだけですう」

厳つい軍人は私の話を聞き、余計に警戒を深める。

どう考えてもあちらにはメリットだけであり、承諾しない理由が
ない。

「しかし」

「うぜえな。テメえには断る理由なんてねんだよ！！　いいか？
こっちだって破格だって事くらいわかってんだ。それともアレか
？　テメえは、IS用補佐ナノマシンが世間的に公開されるとでも
思ってるのかア？　こんな旧式なんざ用はねエんだよ。私が欲しい
のは、私の為だけに動き、私がいくら弄り回そうが文句を言わない
従者。どうせだからある程度教育されてるのが欲しかったからテメ
えん所に来ただけだ。断るンなら別を当るですう」

少し強く言っただけで軍人の顔色は悪くなった。

我が社の所持するアーンヴァルとストラーフは、打鉄とラファール・
リヴァイヴ並に手に入りやすいが、その強化型であるトランシ
エ2とdisの入手は困難を極める。

第二世代の仲でも特に強く、デュノア社が所持するラファール・
リヴァイヴ・カスタム？のスペックを大きく上回ったISなのだから。

「クッ…。分かった」

「アハッ、最初から素直に頷いていれば良いんです。はあ、快感です」

一方的な交渉が終わり、部屋を出た。
もう様はない。

後日、日本支部に送られて来る我な黒兎を調教する為の準備でもしておこう。

落ちこぼれを私の手で私専用にすると思うと、頬が緩む。

「楽しみです」

O・P・F専用ジェット機に乗り、滞在時間2時間ほどでベルリンから住まいのある日本へと帰る。

微笑みは隠さない。

コレでやっと、マスターソックリの男に会うことが出来るのだ。
笑みを漏らすなという方が無理がある。

しかも、これから私専用の従者を調教できるのだから、余計に笑みが生まれる。

楽しい夢を見るように、私はジェット機の仲で眠りに付いた。

ドイツ軍との取引が終わり、4日間ほどたった。

我が社の方はその日のうちに品物を送ったのだが、あちらからは4日遅れ。

「まあ、良いですう」

私の目の前には、弱々しく怯える黒兎が一匹。

本当にIS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ所属だったのだろうか？

「あ、あの、軍よりこちらに」

「黙れですう」

「……」

眼帯はしている。

チェック用の生体センサーでもIS用補佐ナノマシンは確認された。

まるで群れから離れた兎。

「まあ、良いですう。予定通りの出来の悪さは褒めてやるですう。お前、名前は？」

「あ、はい。私は」

「黙れですう」

「……」

なんて素直で、弄りがいのある黒兎だろう。

黙れという度にビクリと肩を震わせ、私の顔色を伺うのだからたまらない。

「お前の名前は知ってるですう。ドロテアーリックン。IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ所属、IS用補佐ナノマシン移植者の一人。そして、軍部により我が社Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）に売られた哀れな黒兎」

私の部屋。

社長室にある豪華な作業用テーブルの上に肘を突き、品定めするようにドロテアーアを見る。

ドイツ人とは思えぬほど真っ黒なセミロングの髪。弱々しく私を見つめる瞳は軍人らしくない。

身長157cm、体重49kg、スリーサイズB89、W55、H88、血液型AB、誕生日不明。

誕生日が変わらないのは仕方ない。

ドロテアーリックンは、遺伝子強化試験体として生み出された試験管ベビーと聞いている。

生きているが生きていない人間というだろう。

「ドロテアーア。お前には専用機をあげるですう。それで私と一緒にO.P.Fの第三世代IS試験操縦者という名目でIS学園に入学するですう」

「え？ あの」

「口答えは許さないですう」

「……。はい」

ドローテアの専用機は決めていた。

IS学園入学まで、あと2週間と少しある。

それまでにアーテイルを調整すれば良い。

「良く聞けですう。お前にはこれから第零世代型ISのアーテイルの調整を受けてもらうですう。一日でも早く専用機になれるですう」

「第零世代？」

怯えた表情でありながらも分からない所を聞くのは良い。

私は椅子から立ち上がり、社長室から見える海を見ながら言う。

「良い所に気がつくですう。まあ、お前はソレに乗るのだから教えてやるですう」

？第零世代

それは、既存のコンセプトとは異なる形式を持ち合わせた次世代型ISの事。

第一世代でもなく、第二世代でもなく、第三世代でもない。

ましてや、第三世代を後継として進化するであろう第四世代でもない。

全く新しい世代。

そして、天才篠ノ之束に対する挑戦を込めた存在。

そして。

Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）が独自に開発したライドオンシステムにより、ISと操縦者の繋がりをより強くする事で更なる性能UPを行うことに成功した。

しかし、繋がりが強固になった事で初期化は困難となり、操縦者が登録されれば操縦者が死ぬまで権利を保持する。

たった一人の為に用意された本当の意味でのたった一つの機体。それが第零世代。？

私は説明を終えると、ドロテアの方を向く。

「もし、お前がダメダメならアーティルをバラして作り直さなきゃ行けなくなるですう。そうなたらお前は用済みですう。」

言葉を強め、テーブルを強く叩いた。

たったソレだけでドロテアは涙目になり、何か必死に言おうとしている。

だが、私が恐ろしいのだろう。

何も言えず、ただ立ち尽くしているだけだ。

「そんなに怯える必要はないですう。今の所、お前を破棄する予定はないですう。たとえ使えなくても私の専属メイド二号になってもらうですう」

できるだけ優しい微笑みを浮かべ、ドロテアに近づき髪を弄る。そして、その露出した首に爪を立てた。

「痛ッ……」

「うふふ。お前と過ごすIS学園での生活が楽しみですう。ジイ、ドロテアを部屋に案内して日々のカリキュラムを教えてあげるですう」

呼ぶと同時に社長室の扉が開き、ジイが現れる。

もしかしたら、扉の前ですつと待機していたのかもしれない。そう考えると、ちよつとなんかイヤだ。

「かしこまりました。では、ドロテア様。こちらへ。お部屋へ案内致します」

ジイやは礼儀正しく一礼し、ドロテアをエスコートする。

ドロテアはというと、慣れていないのだろう。

オドオドしながら私の方を見やり、頭を下げながらジイやに連れ添われ社長室を出て行った。

「フン、アーティル型に似ているから熱血漢かと思ったですがあ、違ったですね。まあ良いですう」

やたらと豪華な椅子に深く座り、もたれ掛かりながら思いを馳せた。

あと2週間。あと2週間ほどでマスターによく似た男と対面する事になっている。

なんと言おう。

人間、第一印象は大切だ。

他のヤツラに嫌われるのは構わない。

どうでも良い。

友達など要らない。

私にはマスターだけが必要なのだ。

「神様という名の存在が居るのならば、一度だけで良いですう。マスターの笑顔を私に……。ああ、マスター。マスター。会いたいですう」

誰にも知られない様に涙を流す。

見られてはいけない。

聞かれてはいけない。

だって私は O v e s t P o z z o F a b b r i c a（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）総帥、マリーチ〓オヴェスト〓ポッツォ〓ファブリカなのだから。

武装神姫テンタクルス型MMSマリーセレスのマリーチではないのだから。

Ver. 4.5 (前書き)

修正

武装？ハフ・ゲイファ？の説明

弾道 弾頭

理由

誤字

緒方 紅夜様に感謝

Ver. 4.5

名前

マリーチⅡオヴェストⅡポッツォⅡファブリカ

容姿

武装神姫テンタクルス型MMSマリーセレス型と同様

ヘアカラーcolor C（赤茶色）

アイカラーcolor A（翠色）

耳は尖っては居ない

設定

Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）の社長の娘として生まれる。

数年間は両親に育てられたが、ある日を境に両親が新婚旅行という名の仕事放棄を始めた為、3歳の時に貰ったOvest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）

日本支部で社長として働く事を強制された。

だが、前世である神姫同様の情報処理能力と記憶能力を持ち合わせていた為、Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）を支える実質の総帥として見られるようになった。

開発部には自身の設計図と理論を纏めたものを渡し、自由な作成と研究を許している為、発言力は強力である。

また、社長となってから数年間の間に世界中のIS開発企業を取り込み、勢力を伸ばした。

現在は世界シェア第三位のデュノア社と同位である。

性格

言葉遣いは可愛らしいものであるが、残忍さ、凶暴さが垣間見える事が多い。

自他共に認めるサディストである。

だが、ソレがイイ！！ という開発部は変態の集まりだろう。

最近、マスターにソックリな容姿を持つ織斑一夏に興味がある。

専用IS名

ク・リトル・リトル型テンタクルスⅡマリーセレス

設定

マリーチが自らの化身として開発に着手したIS。

開発陣営からも人気が高く、無茶苦茶な設計がされている。

操縦者を守る装甲らしき物が一切見当たらないという狂気の発想の体現。

スカートの様に展開された特殊ユニットが最大の特徴である。

頭部には大型ヘッドドレスの様なパーツ？ポントピダン？が採用されており、一見可愛らしさを醸し出している。

だが、このパーツは頭部を守るヘッドギアへと変化するように作られており、ヘッドギア状態になった時に制限されたリミッターを解除するように設定が施されている。

スカート状の特殊ユニット？アーク・E・トウーjis？は、マリ
ーチ曰く触手をイメージして作られたものらしい。

裏側にはスラストが無数に付いており、まるで吸盤を思わせる。
様々な箇所にも可動関節と可動軸があり、海生軟体生物の足の様に
自由自在に動かす事が可能だ。

また、特殊ユニットの位置を上半身側にズラす事が可能であり、
マントの様に使用する事も可能。

両肩には実盾ともなる？ダゴンスパツラ？が装着されている。

エネルギーを消費する事で通常のシールドバリアとは異なる強固
なバリアで全身を包む事が可能。

また、右腕にも？ハイドラ・スクード？という実盾が装備されて
いる。

こちらはエネルギーに一切頼っていない。

武装

双剣？サーペンタイン？

二振りの剣。扱いやすいサイズに収まっており、斬撃を行う際
にエネルギーを利用しシールドバリアを切り裂く仕掛けが施されて
いる。

エネルギーを使用せずに実剣として用いられるのがもつぱら。

絶対防御は切り裂けない

機関銃？イング・ペイカー？

ハンドガード部分に巨大な刃が付いた見た目ハンドガンな機関
銃。

弾倉内に直接弾丸を転送する為、拡張領域内の弾丸が無くなる
まで撃ち続ける事が出来る。

バズーカ？ハフ・グーファ？

弾頭に追尾センサーが取り付けられているパンファーフアウス
ト。

イング・ペイカー同様に弾を直接転送する為、拡張領域内の弾
が無くなるまで撃ち続ける事が出来る。

斧？エルヴァン・アクス？

装甲破壊というコンセプトの元に作られたハンドアックス。

拡張領域内に大量に収められており、一つ壊した所で何の意味
もない。

V e r . 4 . 5 (後書き)

シーフ嫁は死ねですう

O・P・F | NETジャーナル 第二回（前書き）

タイトル変更に伴い、サブタイトルを変更いたしました。

『なぜなに武神装甲』

『O・P・F | NETジャーナル』

O・P・F | NETジャーナル 第二回

「第一回、O・P・F | NETジャーナルを開始するですう」

「パチパチ、ワーワー」

「黙れ」

「……」

「えー。この？O・P・F | NETジャーナル？では、今後登場させる予定だけある武装神姫の紹介および感想の返答をおこなって行くですう」

「司会進行は、マリーチ様と私ドロテアの二人で行います」

「では、さっそく。現在名前だけ登場している武装神姫を紹介するですう」

天使型アーンヴァルおよび天使型アーンヴァルトランシエ2。

武装神姫第一弾パックにて販売された。

基本人格が素直で一番扱いやすいと思われる。

武装神姫バトルマスターズでは、後継機に役目を取られたが、装備自体は人気らしい。

悪魔型ストライフおよび悪魔型ストライフbis。

アーンヴァルと同時に武装神姫第一弾パックにて販売された。

基本人格は我侂な子供。だけど、後継機はクールな人格。私は昔の方が好きだった。

武装神姫バトルマスターズでは、後継機に役目を取られつつも装備は大人気という感じ。

「両者とも、後継機が出てからは生産されていないという設定なのでしょうか？」

「後継機でたから、もうレア物扱いなんですう。かわいそうですね」

「マリーチ様、あんまりかわいそうって思っていますよね？」

「あア!？」

「ひっ、ご、ごめんなさい。ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい...etc」

「んじゃ、次の紹介に行くですう」

セイレーン型エウクランテ。

武装神姫第五弾パックにて販売された。

神姫NETジャーナルで主役をやっていた事がある。

神姫NETジャーナルの記事一覧へ戻る為のアイコンは、武装神姫バトルロンドが終了するその日まできつと彼女らのSDが担当する事になるのだらう。

武装神姫バトルマスターズ Mk.2にてPSPにも参戦を果たしたが、バグが多くて色々と進まない。

マーメイド型イーアネイラ。

武装神姫第五弾パックにて販売された。

胸が異常なまでに大きい。

水中適応型として、あれで良いのだろうか？　しかし、あまり疑問に思っていると複数の武装紳士を敵に回しかねないので私は考える事を破棄する。

神姫NETジャーナルで主役をエウクランテと一緒にやっていた。

神姫NETジャーナルの記事一覧へ戻る為のアイコンは、武装神姫バトルロンドが終了するその日まできつと彼女らのSDが担当する事になるのだろう。

武装神姫バトルマスターズ Mk.2にてPSPにも参戦を果たしたが、エウクランテ同様にバグが多くて色々と進まない。

「ごめんなさいごめん」

ゴスッ。

「ひぎゅ……」

「壊れたテレビは叩けば直るですう」

「ひつ。も、もう治ってます。大丈夫です。だから、ジレーザロケットトハンマーを掲げないでくださいい！！」

「チッ、まあいいですう。さて、紹介したエウクランテとイーアネイラは今後登場させる予定ですう」

「登場箇所に関しては、すでに決まっています。のちに福音事件と呼ばれ」

ドゴンツ。

「みぎゆ…」

「ネタバレは程ほどにですう。それじゃ、感想返答と行くですう」

> kusari様<

はじめましてkusariです

名前が違ったから最初誰だか分からなかったです

武装神姫はあんまり詳しくありませんが頑張ってください
次回も楽しみにしています

「楽しみにしていただけるのはうれしいですう」

「背後のアファ」

ドスッ。

「ごふっ…」

「背後のアグラバイトも喜んでいますう」

> 蒼 龍一<

いつも爆発させられてた子とは思えんな・・・w

「よくわからないですう」

「きつと、アファ」

ザクッ。

「みぎやー!」

「とりあえず、今後ともよろしくですう」

>緒方 紅夜<

機体の登場は何時ぐらいかなー、とwktk。
にしてもどんだん性格が凶悪になっていく。

一夏とは合わん性格だなー。

そして黒兎がかなりウサギだな。

大丈夫か、こいつ。なんか途中で病みそうで不安。

IS的に三輪車とかは出ないけど、牛と虎は出てほしーなー。
というかあの人型ロボは出て欲しいなー、と。

「寅型ティグリスと丑型ワイトウルースの事ですなえ」

「人型ロボといえば、カブト型ランサメントとクワガタ型エスパデアを思い浮かべてしまいますね。あれ？ マリーチ様それは？」

「サソリ型グラフィオスとコウモリ型ウェスペリオーを合体させたドラゴンの設計図ですう」

「え…？ あ、そうそう。武装に関してはフィギュアを再現すると色々と無茶がありまして……。分けたのですが、良い判断と言っ

て頂けたのは素直にうれしいです」

「そうじゃん！ すっごくうれしいじゃん!」

「マリーチ様、エレキギター型ベイビーラズになってますよ!」

誤字報告有難う御座います。ちなみに、ハフ・グーフアですが、ゲーム内ではバズーカでフィギュアではパンツァーファウスト。そ

してレールアクションはミサイルという不思議武装です。おそらく、追尾センサーが付いた弾頭をマリーセレスが触手ユニットで分投げているからだと思われますが、どう考えても性能はミサイルでした。なので、通常時は飛距離の短いバズーカとし、マリーセレスの特殊アクションではミサイルとして扱って行こうと思います。

>歪曲詩<

分類分けとしては、主人公↓一夏のヤンデレものになるんだろうか
(笑)

それとも「似ているのに本人じゃない」と愛が憎悪に変わったとか。

何にせよ、続きが楽しみです。

ちなみに、私はヤンデレを相手が受け入れてイチャイチャする話が好きだったり…(聞いてませんよね(笑))

次回の更新も楽しみに待っています。

完結目指して頑張ってください。

「この私がヤンデレですって!」

「マリーチ様はどう見てもヤンデレですよ」

グシヤ。

「ひぎゃあ!!」

「私はヤンデレじゃないですう。デレデレですう。それに似ているだけという事は分かってるですう(Ver.3&Ver.4でソックリさんであり本人でないと判断しています)」

「そ、そういえば、まだソレはシリーズの完結が…」

ドスツ、ボコツ、メギヨ。

「ひゃうー!!」

「うるさいですう」

「とりあえず、今回はこんな感じですよ」

「うぐう…。はあ、はあ…。この？O・P・F | NETジャーナル
？は…。O v e s t P o z z o F a b b r i c a (オヴェスト
ポッツォ ファブリカ) とA / c u t e D y n a m i x アキュート・ダイナミックスの提
供で…。はあ、はあ、お送りしま、した」

パタリ。

「この程度で倒れるなんてまだまだですよ」

あれから2週間立った。

時が経過するのはこんなにも早いモノだったのか。

前世ではあんなにも苦しんだ時間が、いまの人生ではこんなにもアツサリと過ぎ去ってしまう。

胸が苦しい。

私は落ち込んだ気分を持ち直す為、ドロテアを苛める事にした。

「どこから壊すか迷うですう」

今日はIS学園でのテスト運用に向けた社内での最終テスト日。

今回、コレで異常が発見されなければ明日からIS学園に転入する事になっている。

もちろん、この最終テスト自体は100%成功する様になってはいるのだが、社長室で印を押してるだけの仕事なんぞやってられない。

身体を動かしていた方が幾分か楽になれる。

「お、お手柔らかに……」

「無理な相談ですう」

何もないただっ広い空間。

目の前に表示されたスクリーンのカウントが開始される。

・ 2

・ 1

テスト開始。

「死ね!!」

初手から瞬間加速を用いエルヴァン・アクスで斬りかかる。

イグニッション・ブースト
相手であるドロテアとてIS 配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハ
ーゼに配属される程の腕前を持つIS 操縦者だ。

そう簡単には当ってはいくれない。

この2 週間のカリキュラムだけでアーティルの特性を理解し、モ
ノにしたのだろう。

軽いバックステップだけで私の攻撃をかわし、機関銃で反撃して
きた。

ガガガガッ——。

耳障りな音がダゴンスパツラ辺りから響く。

私の専用IS マリーセレスは、私の性格からして攻撃型と見られ
るだろう。

だが、実際は防御に特化している。

シールドエネルギーを消費しないようにする為、エネルギー供給
のON、OFF まで切り替え可能にした徹底的な防御型。

ドロテアも手持ちの機関銃では私にダメージを与えられない事
を瞬時に理解し、距離をとる。

そもそも、アーティルは近距離タイプではない。

中距離、遠距離を得意とするタイプだ。

だから、このドロテアの判断は的確と言える。

「へえ、さすがですう。アーテイルの特性を良く理解してるですう。でも、まだまだ楽しませて欲しいですう」

アーテイルを作ったのはこの私だ。

その特性も弱点も理解している。

でも、今回はその弱点を突くつもりはない。

アーテイルの土俵で戦ってやろう。

エルヴァン・アクスをしまい、イング・ペイカーを二挺取り出す。
ドロテアは武器選択だけで私の考えを察したのだろう。

苦虫を噛み潰したかの様な表情をし、銃を構えた。

そして、盛大なガンパレードが始まる。

あたりに響く音は全て銃撃音で掻き消され、ハイパーセンサーから送られて来る視界だけが頼りだ。

ヴォオオオオ——。

アーテイルの背部にあるガトリングから無限とも思えるほどの弾丸が発射され、熱せられた薬莢が排出される。

私はソレを回避しながら思った。

なんと懐かしい光景だろうか。

ISとのライドオンシステムにより、擬似的には在るが一体感を感じる事が出来る。

私の知る闘いだ。

「当然なければ、意味はないですう」

無数の弾丸を回避しながら、イング・ペイカーで精密射撃を行う。

ダウン！　ダウン！

一発、一発の音が重い。

イング・ペイカーは機関銃なのだが、設定を変えることで単発式に変更が出来るのだ。

放った弾丸は、アーテイルの装甲に当り火花を散らす。

どうやらエネルギーの消費を抑える為に一部シールドをカットしているらしい。

「まだ、まだアー！」

ドロテアが吼える。

そして、背部ガトリングを乱射した状態のまま両手に機関銃を呼び出し撃ち込んで来た。

ヴォオオオオ——。

ドドドドドツ——。

凄まじい振動がドロテアを襲っているのだろう。

ハイパーセンサーで捉えることのできるドロテアの顔からは苦痛が見て取れる。

良い人材だ。

磨けば磨いた分だけ光を放つ。

軍のバカどもはドロテアの才能を見出す事の出来ないほどの無能ぞろいだっただという事だろう。

「数は力とは、まさにこの事ですう」

ありえない量の弾丸で出来た弾幕を避ける。

ガガッ！

避ける。

ガガガッ！

避ける。

ガガガガッ！

そして、避けきれない量の弾丸が私を襲った。

ズガガガガガッ！

シールドエネルギーの半分以上が消費され、ハイドラ・スクードは原型を留めていない。

まるで穴あきチーズのようになってしまっている。
ダゴンスパッラも半壊状態だ。

「はあ、はあ……。これなら！！」

ハイパーセンサーがドロテアの声拾った。

呼吸、心拍数、その他諸々の状態から察するに、いまの攻撃は全力だったようだ。

しかし、自らの攻撃で自らの視界を塞ぐ事は頂けない。

あまりにも激しい攻撃により、土煙の様な白い煙が発生してしまっている。

どうやら威力が強すぎてテスト空間の壁やら床やらが削れてしまったらしい。

「終わりですかあ？」

身体を包み込むようにしていたアーク・E・トゥージスを開き、ドロテアの前に姿を現す。

無傷ではないものの、全力攻撃を耐えられた事が衝撃的だったのだろう。

ドロテアは絶望的な表情を浮べた。

「不燃ごみになる覚悟は良いですかあ？」

アーク・E・トゥージスをいっぱいに広げる。

ドロテアから見れば、触手で出来た翼の様に見える事だろう。

そして、そのアーク・E・トゥージスの裏側には大量のイング・ペイカーとサーペンタイン。

ああ、ドロテアの表情がさらに絶望に染まって行く。

「快感ですう」

何の躊躇もせず、大量のイング・ペイカーの引き金を引き、大量のサーペンタインをドロテアに向けて投擲する。

全力攻撃の反動で動けないドロテアは、絶望の表情で私を見ながら脱力していた。

今日のスケジュールは一つだけ。

マリーチ様のお相手をし、アーテイルの最終調整とする事。
最初、勝てると思っていた。

私はマリーチ様に引き抜かれた出来損ないだけど、それでもIS
配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼにいた事を誇りに思っている。

でも、テストの前に見せられたマリーチ様の戦闘データを見た時、
その考えを改めさせられた。

だって、マリーチ様は過去にラファール・リヴァイヴ5機を未完
成のマリーセレスで落としているのだ。

無傷ではない。

辛勝という感じでは在ったのだけど、対戦相手の操縦者の顔を見
れば分かる。

まるで、拷問でも受けた人の様な表情をしていた。

マリーチ様は遊んだんだ。

長く苦しめる為にワザと遊んで苦しめたんだ。

そして、マリーチ様を満足させる事が出来なかったから、5人と
もトラウマになる様な倒され方をしている。

見た事もない斧で、クビを落とす様な倒されている映像を見たとき
は戦慄を覚えた。

ISには絶対防御が在るから死ぬ事はないけど、恐ろしかっただ
ろう。

怖かっただろう。

私もこれから映像の中の5人にトラウマを残した人と戦わなければ
ならない。

全力で行かなければ。

覚悟を胸に、テスト用アリーナに入る。

「どこから壊すか迷うですう」

開口一番、私は壊されるらしい。
手加減なんてしてもらえないだろう。

「お、お手柔らかに……」

「無理な相談ですう」

なんとか言葉を返したが、すぐに拒否された。
だが、この広い空間。

障害物は何も無い。

アーティルの長所を生かすことの出来る空間。

そして、目の前にスクリーンが表示され、カウントが開始された。

・ ・ ・ 3

・ ・ 2

・ 1

テスト開始。

「死ね!!」

マリーチ様が一瞬で目の前に現れ、手にした斧で斬りかかって来る。

だけど動きが直線的だ。

これなら避けられる。

私は軽くバックステップを行い、エクストリーマ・バレルを呼び出し引き金を引く。

ガガガガッ――。

エネルギーバリアを削る音だろうか。それとも、装甲を削る音だろうか。

激しい音が鳴り響いた。

ただ一つわかった事がある？エクストリーマ・バレル？の火力では足りない。

決定打には成り得ない。

だから、私は距離を取り、最大火力をぶつける事を選択した。

「へえ、さすがですう。アーテイルの特性を良く理解してるですう。でも、まだまだ楽しませて欲しいですう」

マリーチ様は余裕たっぷりの表情でそんな事を言う。

この人は戦いを楽しんでいる。

しかも、ISという競技ではない別の何か。

マリーチ様は何か別の、競技ではない戦いを楽しんでいる。

私だってIS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼの一人だった者だ。

色々な種類の人を見てきた。

だが、マリーチ様の様に？子供の様に戦いを楽しむ？人は始めて見る。

バーサーカー　ヒューマンキラー　シリアルキラー
戦闘狂、殺人鬼、快楽殺人者、世界には狂った人間も多い。

しかし、誰も彼も理性に少し欠陥があったり、本能を抑え切れなかったり、様々な意味で社会で生きるのには不要なものを抱え込んでいる。

それに比べ、マリーチ様はどうだろうか？

そういった何かは感じない。

もったこう別の……。

そうだ。

まるで機械の様な……。

そんな事を考えていると、マリーチ様の顔に邪悪な微笑みが灯った。

そして、斧をしまい、銃を二挺取り出す。

アーティルにも接近戦戦闘用武装は付いてはいる。

だが、ペネトレートクローとカタマランブレードはナックルとカタルだ。

マリーチ様の凶悪な斧の一撃を受けた場合、耐えられるとは思えない。

私はきつと、苦虫を噛み潰したかの様な表情をしている事だろう。舐められているのだ。

私はバカにされている。

生まれてからずっと、戦う為だけに生かされてきた。

銃だけを持たされ戦ってきた私に……。

銃の扱い方を延々と教えられてきた私のフィールドで戦ってやる

と、マリーチ様は言っているのだろう。

怒りが込み上げてくる。

私の生を踏み躪られた様な気分だ。

エクストリーマ・バレルを仕舞い、アーテイルが持つ最大火力、背部にセットされた大型ガトリング？バリステックブレイズ？を展開する。

あまりにも反動が大きい為、四つん這いになり、バリステックブレイズに取り付けられた尻尾の様な反動軽減足を地面に付けた。

フロントラウンダーのフェイスを下げ、マリーチ様をロックする。

打鉄やラファールならば、？バリステックブレイズ？をもらってしまったら絶対防御も空になり操縦者もろとも塵と消えるほどの最大火力。

受けてみる！

ヴオオオオオ——。

鳴り響く爆音。

あらゆる音を相殺し、知覚能力の一部すら奪ってゆく轟音の中、アーテイルのハイパーセンサーは捕らえていた。

まるで踊る様に弾丸の嵐を掻い潜るマリーチ様の姿を。

心には油断なんて無かった。

躊躇も無かった。

ただ、徹底的にターゲットを破壊する事だけを考える。

自ら私のフィールドに上がってきた相手なのだから、フィールドの中に居る間に倒してしまわなければならない。

もしマリーチ様が私のフィールドから出て、反撃を開始し始めたら。

勝てない。

「当然なければ、意味はないですう」

アーティルのハイパーセンサーがマリーチ様の呟きを拾う。そして、頭に強い衝撃が走った。

ダウン！　ダウン！

重たい音がバリスティックブレイズの爆音に混じり聞える。聞えるたび、身体に衝撃が走った。

アーティルの表面装甲に火花が散り、弾丸を弾く。エネルギー消費を抑える為に一部のシールドをカットしているのだらう。

装甲がダメージを吸収するが、衝撃までは吸収しきれていないらしい。

このままでは負ける。

イヤだ。

負けたくない。

負けるという事は、死と同義である。

「まだ、まだアー！」

私は知らず知らずのうちに吼えていた。

そして、バリスティックブレイズの最大火力をそのままに、無理やり身体を起こして行く。

四つん這い出なければ耐えるのも難しい衝撃を、二本の足と機械足の三本で支え、両手に？エクストリーマ・バレル？と？プレシジョン・バレル？を呼び出す。

そして、トリガーを引いた。

ヴォオオオオ——。

ドドドドド——。

身体を衝撃が襲う。

ISごと身体がバラバラになってしまいそうだ。

ハイパーセンサーで捉えたマリーチ様の顔には笑みが漏れている。

普段垣間見える狂気ではない。

まるで、私の成長を祝福するような微笑み。

初めて。

初めて、お母さんに褒められた様な気がした。

だから、私は。

手を抜く事は許されない。

「」

マリーチ様が何か言っているが、もはや聞えない。
すべては爆音に掻き消される。

ガガッ！

マリーチ様が避ける。

ガガガッ！

私はマリーチ様の避ける方向に身体そのものを動かし、鋼の嵐で
もって狙い打つ。

ガガガガッ！

そして、避けきれない量の弾丸がマリーチ様に襲い掛かった。

ズガガガガガッ！

床か天井の一部を破壊してしまったのだろう。

土煙が視界を塞ぐ。

アーテイルのハイパーセンサーは私の無茶に答えた為に機能低下
を起こしてしまっている。

これで倒せないなら勝てないだろう。

「はあ、はあ……。これなら――！」

呼吸を整えながら叫ぶ。

私は、期待に応えられたのだろうか？

それとも、やはり。

私ではダメなのだろうか？

「終わりですかあ？」

煙の中から装甲をマントの様に羽織ったマリーチ様が現れた。
両肩の装甲と左腕の盾。
破損しているのは二つだけ。

おそらくシールドエネルギーはかなり削れているだろう。

アーティルのシールドエネルギーは91%残っている。
それに絶対防御もある。

だが、それでも。

私は生き残れるだろうか？

S i d e セバスチャンⅡウォンⅡオーデン

多くの戦場を見てきた。

しかし、果たして。

これほど壮絶な戦いを見たことが在っただろうか？

二機のIS。

マリーセレスとアーティルの最終調整の為に用意された特殊な空間。

ISのシールドバリアだけを流用し、全領域に張り巡らせた空間だ。

アーティルはそのシールドバリアを貫通し、床と天井を破壊して見せた。

これはリミッターを設けなければならないだろう。

それにしても、恐ろしきはマリーチ様の方だ。

弾丸で出来た嵐の中に居ながらも微笑む事をやめず、ドロテア様を見据える目には狩人の如き鋭さが垣間見える。

神とはなんと不公平なのだろうか。

いや、そういえば。

遠い昔。

まだ幼かった頃のマリーチ様が言っていた。

『ねえ、ジイやは神様を信じてる?』

『神様ですか? そうすな。ジイやはあまり信じてはいません』

『ふうーん。なら私と一緒にすう』

『……』

『でも、もしも神様がいるのなら。私が信じるのは科学という名の神。機械仕掛けの神様』

懐かしい事だ。

マリーチ様は科学という名の神に愛されているのだろう。

彼の天才、篠ノ之束よりも遥かに……。

「救護班を待機させておけ、戦闘が終わり次第ドロテア様を回収。IS開発チームはマリーセレスとアーティルの修理準備をしておけ。明日からお嬢様はIS学園へ行かれるのだ。今日は寝れぬモノと思え!」

「イエッサー!」

その場の指示をし、最終調整データ収集室を出る。
勝負は決した。

もはやドロテア様では、マリーチ様に勝つ事は出来ないだろう。
こちら準備をしなければならない。

「やあ、セバスチャン。相変わらずマリーチお嬢様は残酷だ」

廊下を歩いていると、突然背後から声を掛けられた。

ロレーナ「ベルトンチーニ。」

お嬢様専属のメイドにして、ISプロキシマの操縦者。

宝塚で主役張っていそうな男装美人メイド。

「ロレーナ嬢。なんの様ですか？」

「いやなに、何を裏でコソコソとやっているのかな？　と思ってね」

相変わらず鋭い。

さすが、元イタリア代表候補生と言ったところだろう。

マリーチ様が生まれなければ、ロレーナ嬢がイタリア代表になっていた事は明確。

自身のプライドよりも、マリーチ様護衛を取る辺り、よほど旦那様と奥様に恩を感じているのだろう。

「ふつ、知れた事を」

「ほう」

ロレーナ嬢に隠すことなど何もない。
なぜならば。

「これからマリーチ様のIS学園制服を仕立てるのだ。そして、水泳の授業で使うであろう水着も選抜しなければならん！　マリーチ様に恥をかかせるは執事の名折れ！　それとだ。情報部員からもちたされた報告によると、マリーチ様は織斑一夏に興味をお持ちの様子。ならば、下着も用意せねばなるまい！」

「なるほど、それなら僕も協力を惜しまないよ」

ロレーナ嬢は同志。

普段、影よりマリーチ様を護衛している為、中々会えないのだが、これは良いタイミングで出会ったことが出来た。

マリーチ様、ジイやは頑張りますぞ！

Ver. 5 (後書き)

長すぎた。
謝罪。

Ver.5.5（前書き）

修正

武装？バリステイクブレイズ？の説明

砲等 砲頭

理由

誤字

ストラス様に感謝

修正

ア－テイルの設定の説明

波動 反動

理由

誤字

緒方 紅夜様に感謝

Ver.5.5

名前

ドロテア＝リツケン

容姿

武装神姫山猫型MMSアーティル型と同様

ヘアカラーoriginal（烏羽色／濡れ烏）

アイカラーoriginal（右：蒼／左：金）

左眼には白い眼帯をしている。眼帯はO・P・F社のロゴ入り。

設定

ドイツ軍、IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼの一人。

隊長であるラウラ・ボーデヴィツヒ同様、遺伝子強化試験体として生み出された試験管ベビーである。

IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼが設立された後、肉眼へのIS用補佐ナノマシンを移植。

部隊で最も弱い出来損ない。

本作Ver.4で供物としてOvest Pozzo Fabb
rica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）総帥、マリーチ＝
オヴェスト＝ポッツォ＝ファブリカの元へ送られる。

送られた後は、アーティアの操縦者として訓練を行いつつ、マリーチの専属メイドとしての訓練も行いつつ、レスクイーンよろしくO・P・Fのコンパニオンもしてる。

お給料は社員の倍。

不幸だけど、不幸じゃない子。

性格

目上の者、目下の者、誰にでも敬語を使う様にしている。
小動物が好き。特に猫が好き。

Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポツ
ツォ ファブリカ）社内では癒やし系とされ、ファンクラブまで出
来てしまったくらいに優しい性格。

マリーチ様、怖い。怖い。

専用IS名

リンクス
山猫型アーテイル

設定

マリーチが作り出したアーテイル型をオリジナルとしたIS。

マリーセレス同様に開発陣営からも人気が高く、無茶苦茶な設計
がされている。

絶対装甲すらぶち抜くほどの火力を持ち合わせるといふ狂気の発
想の体現。

背部にセットされた特殊ユニットが最大の特徴である。

頭部にはヘルメット型バイザーの？フロントラウンダー？が採
用されており、命中率を強化させている。

また、バイザーを下げる事により精密射撃能力を大きくアップさ
せる事が可能。

メインカメラが4つセットされており、ソレゾレが個別のハイパ
ーセンサーを有している為、ドロテアに移植されているバージョ

ンアップされたヴォーダン・オージェが無ければ制御しきれない。

背部にセットされた特殊ユニット？バリステックブレイズ？は、超大型ガトリングである、

実弾、エネルギー弾の両方が射出可能であり、エネルギー弾には追尾機能が付いている。

しかし、反動が大きく発射する際は四つん這いになり、バリステックブレイズについている機械足で衝撃を吸収する必要がある為、空中での連続発射は困難を極める。

腿には別動力を持つシールドバリアを発生させる？スタンドオフシールド？が装着されている。

これは、本体のシールドエネルギーを消費せずにシールドバリアを発生させる事が出来る為、両腕が使用できない状態での使用が推奨されている。

足は？フランクスエッジ？という特殊な靴を装備。

あらゆる衝撃を吸収、分散させ、操縦者のダメージを減らす。純粹に蹴りの威力を挙げる効果もある。

武装

ナックル？ペネトレートクロー？

近くの敵を打ん殴る為の装備。

威力は期待できないが、隙が少なく連続で攻撃が出来る。

カタール？カタマランブレード？

ペネトレートクローから刃を生やし、カタール状にしたもの。

ペネトレートクローよりも威力は高くなっている。

短銃？フェリスファング？

エネルギー弾を発射するハンドガン。
射程は決して長くないが、確実に相手のシールドエネルギーを削る事が出来る。

機関銃？エクストリーマ・バレル？

実弾、エネルギー弾の切り替えが可能な機関銃。
実弾使用の場合、弾倉内に直接弾丸を転送する為、拡張領域内の弾丸が無くなるまで撃ち続ける事が出来る。
エネルギー弾の場合、エネルギーパックが切れるまで連続しうが可能。

狙撃銃？プレシジョン・バレル？

実弾、エネルギー弾の切り替えが可能な狙撃銃。
実弾使用の場合、弾倉内に直接弾丸を転送する為、拡張領域内の弾丸が無くなるまで撃ち続ける事が出来る。
エネルギー弾の場合、エネルギーパックが切れるまで連続しうが可能。

ガトリングユニット？バリスティックブレイズ？

実弾、エネルギー弾の切り替えが可能なガトリング。
砲頭は二門。

トンでもない量の弾薬とエネルギーを消費し、反動も凄まじいが奇跡を起こせる一品。

実弾使用の場合、弾倉内に直接弾丸を転送する為、拡張領域内の弾丸が無くなるまで撃ち続ける事が出来る。

エネルギー弾の場合、エネルギーパックが切れるまで連続しうが可能。

Ver.6（前書き）

報告

感想受付の制限を解除しました。

ダメ出し、改善点、その他感想などお待ちしております。

感想返信は、ジャーナルの方で一括しておこなって行きます。

修正

経過時間

3 時間後 3 0 分後、 1 時間で 2 時間で

理由

時間経過がおかしかったため。

最終調整テストから30分後。

マリーセレスとアーテイルの方に実質のダメージはない。

強いて問題をあげるのならば、アーテイルの火力が強すぎる事が判明し、リミッターが設けられた事くらいだろう。

ただ、少しやり過ぎてしまったらしくドローテアが目を回している。

肉体的なダメージはない。

救護班が言うには、精神的ダメージが大きかったとの事だ。

「仕方ないですう。ドローテアを部屋へ」

「はい、分かりました」

救護班に指示をし、私は部屋に戻る事にする。

ドローテアならば、私の顔を見ただけで発狂したり、気絶したりする弱い操縦者ではないハズだ。

そこまで心配する必要性は無いだろう。

でもまあ。

「マスターが言っていたですう。どんな物でも大切にしろって」

だから、大切にアつかおう。

人間はソコソコ頑丈だが、どのタイミングで壊れるか全く分からない。

12時間後にはIS学園の生徒となっているのだから、これからドローテアの代わりを探す事は不可能。

IS学園では3年間同じクラス、同じルームで生活する事になっているから、3年間の間はドロテアを間違っ壊してしまうワケにも行かない。

面倒だ。

「はあ、ダルイですう。まあ、これもすべてはマスターのソックリさんを見定める為ですう」

2時間後。

私は社長室でグデツとしていた。

ありえない数の報告書とマリーセレス、アーティル、プロキシマ、ラプティアスの調整グラフに新規武装理論と設計図。

本来なら5日かけてユツクリやる作業を、本日は2時間でこなしただ。

私がIS学園に行っている3年間の間、この役目はジイヤとローナに代わって貰う事になっている。

だからこそ、自分で出来るだけの事はやっておこうと思ったワケだが。

「地獄の門が開いてるですう」

想像よりも苦行だった。

何か考える事すら面倒になる。

ということ、寝よう。

私は疲れた。

起きたらIS学園で授業を受けている事になるだろうし、自己紹

介はなんて言おう。

…。

……。

ドロテアは大丈夫か、少し心配ですう。

……。

Side ドロテア「リッケン

悪夢を見た気がする。

無数の銃弾と無数の剣が向かってきて。

「とんでもない所に来ちゃったのかも」

でも、もう遅い。

それに私には拒否権なんて無かった。

そういえば、さつきから視界にチラチラと入ってくる頭みたいなのは……。

「お気づきになりましたかな？」

ビクツとする。

気配もなしにセバスチャンさんが真横に現れた。

この人の事はよく知っている。

まさか、実際に会う事になるとは思わなかったが。

セバスチャン「ウォン」オーデン。

ISが登場する14年ほど前まで最凶の傭兵としてその名を軍に

轟かせていた人物。

姿を消して以降、どこかで暗殺されたとか、長期諜報任務を行っているのだろう等々、様々な憶測が飛び交っていたけれど。

まさか、O・P・Fで執事をしていただなんて。

「どこか身体が痛んだりしますかな？　ここは軍では在りません。痛いならば、仰っていただいて大丈夫ですぞ」

セバスチャンさんは、人の良さそうな微笑みを私の方に向けながら言う。

きつと、これが素の姿なのだ。

「大丈夫です。少し身体がダルいですが、問題はありません」

私は素直に答える。

別に隠す必要もない。

それよりも気になる事がある。

「あの」

「なんですか？」

笑顔で応えるセバスチャンさん。

「なんで、マリーチ様がこちらにいらっしゃるのでしょうか？」

「簡単な事ですな。マリーチお嬢様は口が大変悪く、全く素直ではない」

ちょうど私の太ももあたりにあるマリーチ様の頭がピクツと動い

た。

もしかして、起きてる？

「ですが、それは表現を知らないが故なのです。幼少の頃よりOvest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）の総帥となるべく様々な勉強をなされ、様々な兵器開発からIS開発に至るまで手がけてこられました。そのため、学校には行けず。通信教育あるいは有名大学から教師を招き一般常識と大学院以上のお勉強をなさっておられた。だから、ドロテア様に似ているでしょう。戦場でこそ無いものの、マリーチお嬢様には誰もいなかった。この私とロレーナ嬢はマリーチお嬢様が生まれてからずっとお側に置いて貰っておりますが、歳も近く、性別も同じ人間が、こうも近くに居る事は始めての事です」

誰もいない。

その辛さは嫌という程に分かる。

だって私にも誰もいなかったから。

私は会話するのが苦手だ。

だから、IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼに配属されてからも遠くから部隊のみんなを見ているだけだった。

実力は中の下、単独任務の時だけ中の中と言った感じ。

クラリッサ・ハルフォーフ副隊長は私を気に掛けていてくれたけど、なんだか私には遠い人に思えて、その優しさに報いる事は出来なかった。

ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長は元々、私の事なんて見てすらいなかった。

当たり前だろう。

隊長は一人でも強く、一人で何でもやろうとする人だったから。

でも、何時の日か。
きっと、良い隊長になると思う。
何となくだけど、そう思おう。

私は一人ぼっち。

「で・す・か・ら。ドロテア様には、マリーチお嬢様のお友達になつて頂きたいと」

セバスチャンさんが、私の顔を両手で挟み正面を向かせる。

真っ白な髪、真っ白な髭、燃える様な瞳に何も映していないだらう白い瞳。

顔には切り傷を縫った様な後が見て取れる。

見た目は老執事そのもののなのに、近くで見れば現役兵の様だ。

それに、その口から放たれた言葉は衝撃的だった。

「おともだち？」

そう言つと。

セバスチャンさんの顔が近づく。

近い！ 近い！

「そうです！ お友達。この6年間、そしてOvest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）としての重圧。世界の裏も表を否応無く知り尽くしてしまったマリーチお嬢様のお友達になつて頂きたい。ドロテア様ならば解るはずです。一人ぼっちの絶望。誰もいない。まるで半身を削り取られたか様な絶望を」

なんだか白熱しているセバスチャンさん。

ドンドン顔を近づけてくる。

このままじゃ、このままじゃ！

その時、太もも辺りから感じていた重さと暖かさが消える。

「なにしとるんじゃ、エロジジイ！」

マリーチ様は？号泣剣？と書かれたクレイモアの様な見た目をした何かでセバスチャンさんの頭を吹っ飛ばした。

なんかちよっと、微笑みを浮かべながら吹っ飛んで行くセバスチャンさん。

「ハア、ハア…。油断も隙もないですう。まったく、これだから変態は困るですう」

マリーチ様は少しだけ恥かしそうにしながら私を見た。

「ふん。あの程度で壊れるようならアーティルを預けられる様な人物じゃないと判断してメイドにしてみました。いまは休んで、明日からの学園生活に備えてるですう」

なんだか一生懸命感が伝わってくる。

私はいままで軍に仕えていた。

国じゃなくて軍部。

でも、これからは。

私はこの人に仕える事になる。

何処までも不器用な優しさを持った私の新しい主。

「はい。そうします」

「素直なのは良い事ですう」

マリーチ様は胸を張り、少しだけ偉そうな感じに頷く。

O v e s t P o z z o F a b b r i c a（オヴェスト ポツツォ ファブリカ）総帥だから偉いのだろうけど、最初に会った時に比べるとなんだか随分と柔らかい。

なんだなんだと言いながら、マリーチ様は私に毛布を掛け、微笑んだまま気絶している不気味な状態のセバスチャンさんを引き摺りながら部屋を出る。

数時間後には、IS学園でマリーチ様と一緒に生徒として3年間やっていかなければならない。

軍人だった私に生徒という役柄が務まるのだろうか？

私は暖かくなった胸に少しの不安を抱えながら、二度目の眠りに付いた。

Ver.6.5

名前

マリーチⅡオヴェストⅡポッツォⅡファブリカ

容姿

武装神姫テンタクルス型MMSマリーセレス型と同様

ヘアカラーcolor C（赤茶色）

アイカラーcolor A（翠色）

耳は尖っては居ない

その他

身長155cm、体重46kg、スリーサイズB82、W53、

H80、血液型AB、誕生日1月27日（マリーセレスの発売日同）

名前

ドロテーアⅡリッケン

容姿

武装神姫山猫型MMSアーティル型と同様

ヘアカラーoriginal（烏羽色／濡れ烏）

アイカラーoriginal（右：蒼／左：金）

左眼には白い眼帯をしている。眼帯はO・P・F社のロゴ入り。

その他

身長157cm、体重49kg、スリーサイズB89、W56、

H88、血液型AB、誕生日不明（12月16日／アーティルの発売日同）

名前

ローレーナ＝ベルトンチーニ

容姿

武装神姫ケンタウルス型MMSプロキシマ型と同様

ヘアカラーcolor B (金色)

アイカラーcolor A (金色)

その他

身長186cm、体重??kg (測定不可能)、スリーサイズB98、W62、H89、血液型C、誕生日1月27日 (プロキシマの発売日同)

名前

セバスチャン＝ウォン＝オーデン (ウォーデン＝ウォン＝オージン)

容姿

白髪、白髭、見た目は優しそうな老執事

物腰柔らかく、些か変態染みた行動を取るが紳士

顔には無数の傷跡があり、近くで見ると痛々しい

その他

身長193cm、体重81kg、血液型B、誕生日2月14日

名前 (武装紳士、武装淑女の皆々様)

マスター

容姿 (この作品では)

黒髪、黒瞳、織斑一夏のような見た目

熱い一面を持ち合わせ、武装神姫が関わる様々な事件に巻き込まれる体質

とある男を庇い死亡

その他

身長179cm、体重63kg、血液型？、誕生日7月15日（
武装神姫バトルマスターズの発売日同）

きつと、背後に流れているBGMは？Butter-Fly？だと、
私は信じてる。

なに？ 作品が違う？
良いじゃない。

結構合いそうだしさ。

O・P・F | NETジャーナル 第二回（前書き）

修正

ロレーナの台詞

武装募集の糸 武装募集の意図

理由

誤字

ストラス様に感謝

修正

セバスチャンの台詞

お嬢様の端 お嬢様の恥

理由

誤字

ストラス様に感謝

O・P・F | NETジャーナル 第二回

「それでは、第二回O・P・F | NETジャーナルを開始しますぞ」

「今回の司会は、僕とセバスチャンなんだね」

「マリーチお嬢様とドロテア嬢はIS学園ですからな」

「あとは、思いのほか僕が人気だったからかな？」

「それもあるでしょうな。さすがは、プロキシマ型でぞ」

「しかし、今回は紹介するISもとい武装神姫が登場していないね。どうでしょうか？」

「そうですね。専用機の説明補足なんかはどうですか？」

「それが良いね。そうでしょうか」

専用機補足。

プロキシマ、マリーセレス、ラプティアス、アーテイル。

これら武装神姫を元とした専用機は、初期カラーを第一形態としています。

武装神姫には、必ずと言っても良いほどリペイントVerというものが存在しており、武装も若干ながら変化したり、追加されたりし

ています。

このリペイントバージョンを第二形態とする予定ですが…。
実はまだ発売しておりません。

11月24日にラプティアスとアーティルのリペイントが発売し、
12月15日にプロキシマとマリーセレスが発売します。
楽しみですね！

「なんだか宣伝になってないかい？ 僕は別に構わないけど」

「あまり詳しく言うのもアレですしな」

「じゃあ、次は今後登場する予定の武器を紹介しよう」

登場予定の武器（必ずしも登場するワケでは在りません）

戦車型MMS ムルメルティアの装備より

インターメラル 超硬タングステン鋼芯

超硬質なタングステンを芯に使ったパイルバンカー。

IS用に強化が施されており、超硬タングステン自体にも特殊加工が施されている。

メルテュラーM7連射拳銃

見た目は通常の拳銃だが、性能はIS専用銃と変わらない。
見た目に騙されてはダメだ。（セバスチャン撃退用）

火器型MMS ゼルノグライドの装備より

P・A・R ポップアクションライオット ショットガン

Ze10 ロングレンジ 76mmガトリングキャノン

Ze1L・R スナイパーライフル

いわずも知れたゼルノグライドの三大火器にして専用レールアクション必需品。

ヒヤッハー。弾切れなんて関係無しに撃ちまくるであります！

オマケ

BC036型対物バズーカ：通称『アトミック・ジャベリン』

対IS用にも使用できる幻の銘品と言われた伝説の重火器。

一撃or一発の威力に拘る操縦者が欲しがること間違いなし！

ビームガトリング？スペシオース？

精悍なバレルから繰り出されるビームの束は威力も抜群。

型無

スタルクリーゲル武装セット

メカテイスト全開の攻撃的なシルエット！

全身を覆う追加武装。

フル・スキン

全身装甲型ISの様な見た目を持つが、ISの上に装備するという常識はずれな形態を持つ外殻。

指定キャラのない武装

ナヴァグラハ

黒い球体型のビット兵器。

8機で一つとされており、それぞれが個別の判断で攻撃対象を狙い打つ。

粒子ブラスター

ハンドブラスター&ランチャーブラスター

ガンハンマー

一撃の威力を高めた超大型ハンマー。
使いこなす為にはそれなりの技術が必要。

その他募集中。

（名前が分からなくとも、神姫。。が持ってたナイフとかでも分かるかと）

「こんな感じで良いかな？」

「そうですね。最後に武装募集をしたのには何か意図が？」

「そうだね。例えば、僕はケイローンという大鎌を愛用してるんだけど、人により様々な武器に思い入れが在ると思うんだ。だからねそういう武器を出来るだけ多く取り入れたいなと思ったのさ」

「なるほど、そうでしたか。おや？ 少し時間を取りすぎてしまいましたな」

「む？ そんなに時間を使ってしまったかい？ それじゃあ、そろそろ締め感想返答と行こうか」

「そうですね」

>蒼 龍一 様<

・・・デレ・・・デレ・・・????どう見てもヤンツン「ゴシヤ」
ギヤアアアアア!!?

「窓際に良からぬモノを見てしまったようだね」

「いやはや、外宇宙の神々は加減を知りませんからな」

>ストラス 様<

MK2が発売されてから少しずつ神姫の小説が増えて嬉しいストラスと言います。

最初はなんて無茶な設定と思いましたが、原画がデモベ書いてる人の所為なのかすんなり読ませてもらいました。

これから主人公がどのようなようになっていくのか楽しみです。（でも元神姫ならハーレム容認か?）

次回の更新、楽しみに待ってます。

「確かに、無茶苦茶な設定だね」

「元ネタに救われましたな」

「そうだね。そうそう、神姫だとしてもマスターを一人占めしたいという欲は在ると思うんだ。今回は回りに神姫が居るワケじゃないからね。どうなる事やら」

「疑問点に関してはこのセバスチャンが答えますぞ。ソレほどまで

にマリーチお嬢様は兎を一匹欲しがっていたという事ですな。もし
かしたら、強化型も作り、その発展形の製作に着手した時点で初期
型には価値を見出していない可能性もありますな。困ったもので
ぞ」

>ストラス 様<

感想を書いて戻ってみると、更新されてたのでまた書いてしまいま
した。

もうファンクラブまでいるのかこの子は！？でもお嬢の方は親衛隊
までいそうだし…まっ、いいか
しかしセバスチャン、下着まで用意するのはどうかと…（・・・）
IS用の銃が飛んで来ない事を祈りますw

「まず最初に、誤字報告ありがとうございます。すぐに直したよ」
「ドロテーア嬢は胸も大きいですからな。人気になるのは必然です
な。そして、執事たるもの！主に恥をかかせるワケには参りませ
ぬからな！」

「セバスチャンの骨は僕が拾って、ハーデスの元まで届けるさ」

>緒方 紅夜 様<

プロキシマ キターーッ！！

ニトロ好きにはたまらんです。

アマゾンにあったイグニスの刀持つてる画像で興奮した……
ヘッドセットの角がたまらんです。

容姿はそのまんまなのか、イグニスの色違いみたいなのか。
まあ、年齢が若いとお姉さまなのかだが、それが重要だ。

考えてみればプロキシマとアーティルの腰後の装備似てるな

「ふふふ。さすがに照れるね」

「イグニスのこという事は、リペイント版の事ですか。確かにアレはカッコイイですな」

「容姿はオリジナルプロキシマのままだね。髪と瞳は金色さ。歳は内緒としておくよ」

「このセバスチャンの目が確かならば、お姉さまタイプでしょうな。そして、歳に関しては織斑千冬の歳を考えればおのずと分かりますぞ」

「今回は、コレで終わりかな？」

「ですな。では、？O・P・F|NETジャーナル？はOvest Pozzo Fabricaアキユート・ダイナミックス（オヴエスト ポッツォ ファブリカ）とA/cute Dynamixの提供でお送りしましたぞ」

Ver.7

ぐっすりと寝て数時間。
朝になっていた。

「うーん。良く寝たですう」

普段通りにベッドから降りようとしたら、何か柔らかい物を掴んだ。

もにゅもにゅ。

「…ん」

なんですかぁ。

この妬ましい柔らかさは。

「う…んんっ、んっ」

この柔らかい物の正体は分かっている。
触った瞬間に思い出した。

そう、ここはIS学園1年生学園寮。
私とドロテアに与えられた一室だ。

時は一日ほど前に遡る。

私とドロテアはIS学園に向かっていた。
ジイヤの運転する見た目だけはロールス・ロイス「ファントム」

2003に乗って。

やはり、ジイやもO・P・Fの一員ということだろう。

車両重量、エンジン形式、総排気量、最高出力、等々の細部に至るまで改造が施されている。

私はあまり車に詳しいワケではないが、元の値段が4、725万だったものが、ジイやの手に掛ければ9、854万の出費になってしまふのだから、この車は一体どんな魔改造を施されているか分かったものではない。

私がまだ幼かった頃、ジイやと言っていた「如何にして出費を抑え、魔の付くような改造を行うか。それが、ジイやの改造コンセプトですぞ」とかなんとか。

「あと5分ほどで到着いたします」

ジイやが告げる。

早いものだ。

1年の月日もあっという間。

「マ、マリーチ様。お、お飲み物は如何でしょうか？」

ドローテアが私の専属メイド化してからは数時間しか立っていないハズだが、元々そういう属性の持ち主だったのだろう。メイド服が良く似合う。

「アイスコーヒー」

「は、はい」

「やっぱし、オレンジジュース」

「え？ は、はい」

「やめた。紅茶にするですう」

「ふえ！？ こ、紅茶ですね」

面白い。

次々と飲み物の注文を変える度に慌てながら用意しなおすドロテ
ーア。

その姿は、可愛らしさすら覚える。

ゆったりとした車の中。

私室にある最高級のソファーに比べれば些か硬いが、それに深く
腰掛け、背を預ける。

到着まで5分では眠る事もできない。

ドロテアーの用意した紅茶を飲みながら、流れ行く外の景色を眺
める。

「紅茶の入れ方がダメダメですう。ちゃんと練習しておくですう」

「は、はい…」

怒られた子犬の様に身を縮めるドロテアー。

バックミラーから見えるジイやは、孫を見守るような優しい微笑
みを浮べている。

たまにはこういうのも悪くない。

遠い昔。

マスターと二人。

余計なお荷物が4匹。

マスターのお友達とダメ猫、マスターに興味を持つツンデレ女とお説教悪魔。

マスターが暮らす街全てが見える丘、そこにピクニックへ行つた事がある。

あの時は楽しかった。

そう、いまはまるで。

あのピクニックが始まる前日の様な。

前日の日に感じた不思議な高鳴り。

ソレに似ている。

空になったティーカップをドロテアに渡し、何となくだがドロテアの頭を撫でる。

少し前にテレビで見た。

猫でも犬の様に躡ける事が可能だと。

アーテアは山猫型だ。

ドロテアが山猫みたいな性格をしているのか？ と問われれば、どちらかと言えば子犬みたいな性格をしている！ と断言するだろう。

だが、いつ。

リンクスとしての本性を表すとも分らない。

首輪は早めに付けておくにこした事はないだろう。

「ドロテア」

「は、はい！」

「ちょっと、目を瞑るですう」

「え？ わかりました？」

ドロテアは困惑しながらも目を閉じる。

バックミラーから見えるジイアの視線にイヤらしいものを感じたので、睨みつけておいた。

O・P・Fを出発する前、ローレーナから渡された紅い首輪。

ライトチョーカーというお洒落の一つなワケだが、リードを付ければ完璧な首輪だ。

さらに言うのなら、これはアーティアの待機状態。

ずっと付けていても肌は痛まず、息苦しさも感じないという優れたもの。

「もう良いですよお」

「？」

ドロテアは自分の首に付けられた物を確認し、複雑な表情をする。

ソファアーに身を沈め、ドロテアを眺めた。

「ソレはアーティアの待機状態ですう。そして、お前が私の所有物である証でもあるですう。大切にするですよ？」

なんだか少し、ドロテアの顔が引きつった様な気がしないでもない。

だが、気にする事はないだろう。

ドロテアから視点を外し、自分の左手。
薬指に付けられた指輪を見る。

深海の様なダークブルーの色をし、ソレでいてなお蒼い光を生み出すソレは、マスターとの結婚指輪。
マリセレスの待機状態でもある。

私は視線を前方に戻す。

車内からでも見て取れる。

IS学園の校門が。

「マリーチお嬢様、ドロテア様、IS学園に到着致しました」

Side ドロテア「リッケン

IS学園へと向かう車の中。

運転手はセバスチャンさんだ。

車の内装は、護衛任務の時に見たリムジンの車内の様になっている。

マリーチ様だけが座る為に用意された大きなソファア。

私はそれに向かい合う様に置かれた小さなソファアに座っている。
後ろには様々な飲み物を作る為の道具。

たぶん、これでマリーチ様に飲み物を出したりするのも私の役割なのだろう。

「あと5分ほどで到着いたします」

運転席側とこっちは、ガラスで遮られているのでスピーカーから

セバスチャンさんの声が聞えてくる。

このガラス、恐らくは防弾、防音仕様の特注品だろう。
あと5分。

5分在れば、飲み物くらいは飲めるだろうか？

用意されているティーカップは比較的小さい。
おそらく、車内だからという理由なのだろう。

私は、意を決してマリーチ様に話しかけた。

「マ、マリーチ様。お、お飲み物は如何でしょうか？」

マリーチ様は、私の声に反応しこちらを向く。
そして、私を少し観察する様な目で見てから言う。

「アイスコーヒー」

おそらく、マリーチ様は私の服を見ていたのだ。
マリーチ様はES学園の制服を着ているが、私はロレーナさんから頂いた専属メイド専用戦闘服というものを着ている。
メイド服なのに戦闘服と呼ばれる理由はよく分からなかった。
だが、着てみれば分かる。

この服は防刃、防弾仕様なのだ。
そして、他のメイドに与えられているミニスカートではなくロングスカート。

コレにも理由が合った。
サイホルスター、アングルホルスターを隠すため。

この服の正体、そしてこの服を着る者の役目を理解した時、私は戦慄を覚えた。

要人警護などの任務を行ったことは在るが、このような存在を身近においている人物は見たことがない。

O v e s t P o z z o F a b b r i c a (オヴェスト ポツツォ ファブリカ) 総帥。

その肩書きを、私よりも一歳年下のマリーチ様は生まれた時から背負っているのだ。

ただ戦うだけだった私には想像もつかない。

「は、はい」

そんな事を考えながら、アイスコーヒーを淹れようとすると。

「やっぱし、オレンジジュース」

注文を変えてきた。

「え？ は、はい」

少し焦ったが、すぐにオレンジジュースを淹れようとし。

「やめた。紅茶にするですう」

また変えられた。

「ふえ！？ こ、紅茶ですね」

うう。

マリーチ様は、いままで見たこともないDSな人。

IS 配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ内には、このタイプの人間はいなかった。

また変えられるのでは？ とビクビクしながら紅茶を淹れたが、
変えられる事はなかった。

マリーチ様は私からティーカップを受け取ると、優雅な仕草でソ
レを飲みつつ、外の景色を見ている。

その横顔は何処か儚く、この世の者ではない様な美しさ、神々し
さを放つ見惚れてしまう横顔だった。

神様が創り出した、最高級のお姫様。

そんな様な感じだ。

でも、マリーチ様は戦いを好み、マリーセレスという鎧を纏う。

パツと思い付いた言葉は？武装神姫？だ。

マリーチ様には相応しいような気がする。

武装する神の姫。

「紅茶の入れ方がダメダメですう。ちゃんと練習しておくですう」

マリーチ様は横目で私を見ながら言った。

なんだか睨まれている様な感じがする。

「は、はい」

カリキュラムの中に紅茶の淹れ方は入っていた。

だからと言って、2週間そこでプロ並の実力を付ける事は不可
能。

ロレーナさんから筋が良いと言われ、セバスチャンさんからも褒
められた。

O・P・Fで働く人々にもウケは上々だったのに。

知らず知らずのうちに肩が落ちる。

そして、空っぽになったティーカップを受け取った。

その時だ。

マリーチ様に頭を撫でられる。

少しでも上目遣いでマリーチ様の表情を伺ってみたが、垣間見える狂気ではなく。

優しい。

とにかく暖かな顔をしていた。

見たことは無いけれど、そう、まるで、お母さんの様な表情。

「ドロテア」

突然名前を呼ばれる。

「は、はい！」

私は反射的に答え、簡易テーブルと言っても物凄く豪華なテーブルにティーカップを置き、マリーチ様の方を見た。

「ちょっと、目を瞑るですう」

「え？ わかりました？」

少し疑問に思ったが、私は素直に目を瞑る。

何をされるか不安になったが、マリーチ様の凝縮された殺気が私の横をかすめた様な気がした。

後ろの方に向かっていった様に思えることから、セバスチャンさんが何かやったのだらう。

マリーチ様の殺気は、歴戦の軍人すら怯ませる。

ロレーナさんから聞いた話だが、私を引く抜く際、軍司令官を脅

したらしい。

物理的ではなく精神的にとの事だが、マリーチ様は精神的に相手を屈服させる事が得意なようだ。

良い匂いがする。

それに、顔になんとか柔らかい物が当たる。

それと同時に、首に違和感が。

何か首に取り付けられているらしい。

カチンツという何かが固定されるような音が聞える。

「もう良いですよ」

「？」

私の首には、紅い首輪が付けられていた。

革製ではない。

鉄製でもないようだ。

でも、なにかこう。

慣れしたんだ素材で作られている物の様な気がする。

「ソレはアーティアの待機状態です。そして、お前が私の所有物である証でもあるです。大切にするですよ？」

IS。

この首輪は、ISアーティアの待機状態らしい。

そして、所有物宣言されてしまった。

もしも壊したりしたらどうなるのだろうか？

転んだりしたら危ないかもしれない。

お風呂は、待機状態とはいえISなのだから大丈夫だろう。

マリーチ様は、すでに私から視線を外し左薬指に付けられている指輪を見ていた。

アレは知っている。

マリーチ様の専用ISマリーセレスの待機状態だ。

「マリーチお嬢様、ドロテア様、IS学園に到着致しました」

いつの間にかIS学園に到着している。

だけど、どう考えても5分以上掛かっている事を察するに。

「ドロテア様、私は空気を読める執事ですぞ」

スピーカーの音量を最低限まで絞り、私にだけ聞える様にセバスチャンさんが言う。

なんの空気を読んだのだろうか？

とにかく、これからマリーチ様との学園生活が始まる。

私の服装はメイド服のままなのだろうか？

Ver. 7 (後書き)

[illegible]

IS学園1年1組。

なんとも間の悪い事に転校生が他にも2名いた。

片方は見たこともない。

デュノアの御曹司だというが、デュノアに跡取り息子はいたかどうか？

覚えがない。

もう片方はよく知っている。

IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ隊長、ラウラ・ボーデヴィツヒ。

ドロテアの上上司だ。

そして、織斑千冬という後押しが無ければ何も出来なかった癖に、無駄に？私最強！？感を出している勘違い女。

ドイツもあんなのを代表候補に据えるなんてどうかしている。

IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ副隊長、クラリッサ・ハルフォーフを代表候補とするのならば、多少は評価を改めたのだが、所詮は利益のみを考える大馬鹿の集まりだったという事か。

やはり、送ったISに無茶な解析をされたら自壊するプログラムを仕込んでおいて正解だった。

「シャルル・デュノア」

「？」

私の弦きが聞えたのだろう。

金髪の御曹司、シャルル・デュノアがこちらを向く。

「私の名は、マリーチィオヴェストィポツォィファブリカ。O・P・F総帥ですう。まさかライバル会社の御曹司と同じクラスになるとは思わなかったですう。社として見れば？敵？ですがあ、IS学園にいる間は同級生としてよろしくお願いするですう」

人の良い笑顔。

殺気すら抑え、ありとあらゆる負を抑え、善しか表に出さない微笑み。

今のところ、コレを見抜けたのは世界でただ一人、ジイゃくらないモノだ。

「はい。この国では不慣れな事も多いと思うけど、同級生としてよろしく願います」

デュノアの名を持つ男と握手を交わす。

柔らかい。

柔らかすぎる。

コイツ、本当に男か？

まあ、デュノアの社長ならば何をしてもおかしくは無い。

あの大馬鹿なゴミクス野郎ならば、自分の娘に男装させてでも利益を生もうと考えるだろう。

利益の為ならば、家族すらも平然と切り売りする様なクスだ。

人間のクス野郎だ。

機会が合ったら、事故死という名目でぶち殺す予定だが、その時にコイツは止めるだろうか？

まあ、いい。

顔を横に向けると、そこには微妙な雰囲気ドロテアと完全に

ドロテアを無視しているラウラ・ボーデヴィツヒの姿がある。

そして、ドロテアは山田真耶先生になにやられている様だ。
気にする必要もないだろう。

私たち4人は、山田先生を先頭とし1年1組へと向かって行く。

その途中、第1回IS世界大会総合優勝および格闘部門優勝者である織斑千冬。

かの有名なブリュンヒルデと合流した。

「では、SHRが開始するまで、こちらの部屋で待っていてください」

空き教室というヤツだろう。

まだ、SHRまで10分ほど時間がある。
待たされるとしても仕方ない。

それに、いつの間にか織斑千冬もいなくなっている。

「まだ少し時間が在る様ですう」

「そうだね」

私に相槌を入れるデュノア。

ドロテアはソワソワし、ボーデヴィツヒは腕を組み、目を閉じている。

「ドロテア」

「は、はひッ!？」

全身をビクツと震わせ、反応する。

舌でも噛んだのだろう。

悶えていた。

「なにやってるんですかぁ。新しくしたバロールの調子はどうですう？」

ドロテアは眼帯を少し触り、目を閉じた。

眼帯をしてあるのは念のために過ぎない。

ヴォーダン・オージェをさらに数回バージョンアップさせ、O・P・Fで開発されたIS用補佐ナノマシンを適応させた物がバロールだ。

擬似ハイパーセンサーという役目は同じだが、脳への視覚信号の伝達速度をさらに高速化させ、超高速戦闘下での動体反射を5倍ほどまで引き上げる。

デメリットが在るとするならば、専用ISアーテイル以外ではドロテアの反応速度に追いつく事が出来ず、逆にISの動きが鈍くなるというものがある。

だが、ここの訓練機をドロテアに使わせるつもり等ない。

問題は無いだろう。

「はい。大丈夫です」

「何かあったらすぐに言うですう。ソレはまだまだ試作段階の眼。ほおっっておいて脳が焼き切れたじゃ、笑い話にしかないですう」

「……。はい」

デユノアが複雑そうな表情をし、私を見る。

ラウラも少し反応したが、無視する事にした様だ。

そして、数分後。

私たち4人は、織斑千冬。織斑先生に従い1年1組へと向かった。

教室へは先に織斑先生が入る。

私たちは廊下で待機だ。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます」

騒がしかった教室が静かになる。

織斑先生の統率力はかなり高いようだ。

さすがは、ブリュンヒルデと言ったところだろう。

私は廊下を見渡し、学校という初めての施設を見る。

場所が場所だからなのだろう。

テレビで見た学校というよりも、新兵を育てる為の軍施設と言った印象だ。

しかし、やはり。

雰囲気が違う。

これが学校というモノなのだろう。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します。しかも四名です」

「『ええええええっ！？』」

うるさい。

仕方がない事だろうけど。

このIS学園に転校するには色々と苦労した。

本来、国の許可なんかを貰わなければならないのだが、O・P・Fの権力を持ち、所持するISをチラつかせたり色々としてやっと転校できたのだから。

「失礼します」

「失礼するですう」

「失礼致します」

「……………」

とりあえず、デュノアに続けて教室に入る。

静まり返った教室。

おそらく、デュノアに注目しているのだろう。

あとは、私はテレビのCMやらニュースやらでO・P・F総帥として出ているから知っている者は知っているのかもしれない。

Side ドロテア「リッケン

なんでココにラウラ隊長がいるのだろう？

何か話すべきなのだろうか？

でも、何を話せば良い？

マリーチ様は、デュノア様に話しかけている。

外交なんかで手腕を揮うマリーチ様に、敵対会社だから話しかけ

ないという感情は無いのだろう。

むしろ、敵対会社だからこそ話しかけ、情報を引き出すとか考えているかもしれない。

「あの、ドロテア・リツケンさん」

「は、はい！」

背の小さいメガネの人に話しかけられた。

先に説明されていなければ、この人が教師である等と考えが及んだか分からない容姿をしている。

「なんでしょうか。山田様」

「や、山田様？ あ、先生で良いですよ」

「はい。私に何か用でしょうか。山田先生」

出来るだけロレーナさんから習った喋り方を維持する。

一流のメイドは、自らの心を悟られてはいけないと、ロレーナさんが言っていたのを思い出す。
む、難しい。

「えつとですね。なんで、その、メイド服なんでしょうか？」

あ、その事でしたか。

私はてつきり眼帯の事を言われたりするのかと思っていた。

眼帯にはO・P・Fの会社ロゴが印刷されており、会社のロゴを無意識に人に記憶させる役割を持っている。

このメイド服の肩の部分にもロゴは入っていたりする。

「マリーチ様の御付として、急遽IS学園の入学を認められた為、制服が間に合わず。とはいえ、普段着で来るわけにも行きませんので、制服が届くまでは仕事着であるこちらでの対応が相応しいかとマリーチ様が判断いたしました」

そう。

私の制服はまだ届いてはいない。

だから、マリーチ様が「届くまでメイド服で良いですう」と言ったのだ。

そう言われると逆らえない。

シュヴァルツェ・ハーゼの軍服で来る訳にも行かないし。

そもそも、もうシュヴァルツェ・ハーゼの一員ではないのだから、袖を通すつもりもない。

「そうだったんですか。早く届くと良いですね」

「はい。私もこの姿が目立つ事は重々承知しております。いち早く届くようお願いして在りますので、2～3日中には制服姿となっているかと」

プロのメイドらしく一礼する。

ロレーナさんから習った通りに出来ているだろうか？

それから少し時間が経過し、山田先生を先頭として移動を開始した。

でも、時間的にはまだ余裕がある。

きつと、1年1組に近い待機教室に移動するのだろう。

予想通りだった。

途中で有名なブリュンヒルデと合流したが、少しだけ山田先生と会話をし、ブリュンヒルデは何処かに行ってしまう。

「では、SHRが開始するまで、こちらの部屋で待っていてください」

流れる沈黙。

なんとも重苦しい。

私はこっぴうのは苦手だ。

「ドロテア」

なんとも落ち着かず、ソワソワしていると。
マリーチ様から突然名前を呼ばれた。

「は、はひッ!？」

身体が勝手に反応し、ビクツと震えてしまう。
しかも、その震えで舌を嚙んでしまった。
痛い。

「なにやってるんですかぁ。新しくしたバロールの調子はどうですう？」

呆れたような口調でマリーチ様は言う。

バロール。

私の瞳に移植されたIS用補佐ナノマシンを強化させた物。

以前よりも脳への負荷と肉眼への負荷を減らした上で、効力をあげた物らしい。

詳しく説明されてはいたが、よくわからなかった。
ただ、チェックの仕方だけは聞いている。
私は両目を閉じ、眼帯を触る。

『現在待機状態。接続可能ISアーテイル。自己メンテナンス正常。
擬似センサー正常。肉体補助正常。体調管理システム正常。システム
通常運行を確認。バロールに異常は診られません』

頭の中に合成音声が流れた。

ほんと、私は一体どういう処置を施されたのだろう。

いまのところは異常が無いから良いけれど。

私は素直に報告をする。

「はい。大丈夫です」

「何かあったらすぐに言うですう。ソレはまだまだ試作段階の眼。
ほおっておいて脳が焼き切れたじゃ、笑い話にしかないですう」

「……。はい」

脳が焼き切れるらしい。

脳には痛覚が無いから、きっと死ぬ時はソコまで痛くないだろう。
でも、できるのならば死にたくはない。

異変を感じたらすぐに報告する事にしよう。

そして、数分後。

私たち4人は、ブリュンヒルデ。織斑先生に従い1年1組へと向
かった。

教室へは先に織斑先生が入る。
呼ばれるまで廊下で待機だ。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます」

騒がしかった教室が一瞬で静かになる。
さすが、ブリュンヒルデ。

あのラウラ隊長が恩師と仰ぐ存在である。

これからその人に色々と教えてもらえると思うと、胸が高鳴るが。
同時に恐怖を覚えてしまう。

私は、マリーチ様のお怒りを買わない様にしなければならないから。

教室内からは、織斑先生の声が聞える。
定時連絡の様なことをしているのだろう。

私は少しだけ他の3人に視点を向ける。
ラウラ隊長は、腕を組み目を閉じていた。
さっきからずっとあんな感じ。

デユノア様に視点を向けると微笑みを返してくれた。
マリーチ様とは違いお優しいイメージ。

マリーチ様は廊下を見たりしている。
まるで学校そのものが珍しいといった様な感じ。
実際、珍しいのだろう。

3人を見ていると、教室から山田先生の声と他の生徒の声が聞え

た。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します。しかも四名です」

「「「ええええええっ!?」」」

凄い音量だ。

マリーチ様の表情に一瞬だけ怒りが垣間見える。

うるさいのが嫌いな方なので、仕方ないだろうけど。

出きるだけ同級生の方々には騒がないで欲しい。

私の寿命が縮まる。

一番最初に教室に入ったのはデュノア様。

それに続くように入るマリーチ様の後に私も続く。

ロレーナさんが言っていた。

常に主の一步後ろを歩けと。

「失礼します」

「失礼するですう」

「失礼致します」

「……………」

先ほどの喧騒が嘘の様に、教室は静かだった。

みんなの視点はデュノア様、マリーチ様、私、ラウラ隊長の順に移り。

デュノア様に一番多く集中している。

私は、上手く自己紹介できるだろうか？

自己紹介の先陣を切ったのは、デュノアだった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

実に模範的な自己紹介。

デュノア社の方で色々と教育されたのだろう。

しかし、本当に男か？

「お、男……？」

クラスの誰かが言う。

実に正常な反応だ。

ISを唯一操縦できる男が居るクラス。

そこにさらに男のIS操縦者が着たともなれば、確認したくもなるだろう。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を——」

ん？

肩をドロテアに叩かれた。

全く、自己紹介の場でなんだと言っただけ？

小声で確認する。

「なんですう」

「マ、マリーチ様。コレを」

ドロテアから手渡されたのは耳栓だった。
意味が分からないが、ドロテア自身はすでに耳栓をしている。
そして、教室をコッソリと指差す。

興奮のあまり今にも叫びだしそうな女子。
しかも、クラスの一人を除いた全員。
なるほど。

「ふん、よく勘付いたですう。褒めてやるですう」

「あ、ありがとうございます」

本当に嬉しそうな顔をするドロテア。
そして、私はすぐに耳栓をする。

「きゃ……」

「はい？」

デユノアは気がついてはいない。
ボーデヴィツヒは興味すらない様だ。

「きゃあああああ——っ！」

耳栓をしているのに完全には塞ぎきれない。
耳栓をしたうえで耳を塞いで何とかやり過ごす。

「男子！ 二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった~~~~！」

最後の一人。

今すぐインスマスに供物として差し出してやろうかですう。

同じ地球だし問題ないですね？ 地球に生まれてよかったんだろお？

「お、落ち着いてくださいマリーチ様。お顔に出ています」

少し顔に出してしまったらしい。

しかし、ここの壁が防音であるとは思えない。

別の教室にもこの騒音は聞えているだろう。

休み時間は余計にうるさくなりそうだ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

次は私の番だろう。

自己紹介をしなければ行けない。

「マリーチ〓オヴェスト〓ポッツォ〓ファブリカですう。Overs
t Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファ
ブリカ） 日本支部を拠点としてるので日本は慣れているですが、
学校という環境には不慣れですう。色々ご迷惑を掛けてしまつと

思いますが、よろしく願いするですう」

可愛らしい微笑みを浮かべ、頭を下げる。

総帥としての威厳より、アイドルとしての親しみやすさをイメージしてみたのだが、中々に上々。

「可愛い」

「うわあ、すごい美少女」

「美男子に美少女の転校生なんてツイてる」

「テレビで見たことある」

群集は扱いやすくて助かる。

この教室には比較的日本人が多いようだ。

私もかなりテレビ出演しているが、日本を拠点としているだけに日本のテレビに映る事が最も多い。

私の次はドロテアアの番だ。

S i d e ドロテアア＝リッケン

と、とうとう。

私の番が来てしまった。

教室内の全員の視線が私に突き刺さる。

動揺は表面に出しては居ない。

だが、それでも「メイド服？」という疑問視の込められた視線をものともせずシッカリと自己紹介を行えるか不安だ。

「皆様、初めまして。マリーチ様の専属メイド、ドロテア・リッケンと申します。本日は制服が間に合わず、仕事着での自己紹介をお許し頂ければ幸いです。マリーチ様共々、よろしくお願い致します」

ロレーナさんに習った様にスカートを少しだけ掴み、軽く礼をする。

完璧なハズだ。

事前に練習した通りに出来た。

これなら、マリーチ様にも怒られない。

「ほ、本物のメイドさん？」

「美男子、美少女、メイドさん。あれ？　ココって学校だよね？」

「メ、メイドプレイ？」

いいえ。違います。

「プロって感じがするよ……」

プロです。

メイドのプロじゃないですけど。

私のときは、デュノア様やマリーチ様の時みたいに騒がしくなかった。

啞然としてるという感じ。

仕方無い事だろう。

そして、最後に残ったのはラウラ隊長だ。
隊長の視点からすれば『有象無象が目の前で騒いでいる』程度なのだろう。

先ほどから腕を組み、下らない物を見るような視線を女子に向けていた。

隊長は相変わらずな様だ。

「……………」

しかし、すぐに視点をブリュンヒルデ。
織斑先生へと向ける。

「…挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

素直に頷き、佇まいを直した。
そういえば、聞いた事がある。

昔、隊長は出来損ないの烙印を押されていたらしい。

いまでは、その烙印を押されているのは私なのだけど、当時は隊長だった。

そんな隊長を鍛え、いまの地位にまで押し上げたのがブリュンヒルデ、織斑先生だ。

だからなのだろう。

織斑先生にだけ素直なのは。

いまでも、信頼すべき絶対の教官なのだ。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

背筋を伸ばし、踵を揃える。

何処まで行っても軍人なのだろう。

私とは違う。

出来損ないの烙印を押された理由だって、越界の瞳の制御が上手く行かなかったから。

私の様に最初から最後まで出来損ないじゃない。

誰だって、最初から完璧にこなせたりしたら苦労はしない。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

教室に重い沈黙が流れる。

ど、どうしたら良いのだろうか？

マリーチ様は。

「……………」

織斑様を見ていた。

なにかこう。見定めるような。品定めをしている様な。

そんな様な視線で見ている。

デュノア様は困惑の表情を浮かべ、何も出来ないでいた。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が何とかラウラ隊長に声を掛ける。

普段、ラウラ隊長に声を掛けられるのは、クラリッサ副隊長だけだった。

おそらく、山田先生の場合は大分削られていると思う。
少し尊敬の念を懷いた。

そして、ラウラ隊長の目が織斑様に向いた時、殺気のような物が身体から溢れる。

理由は分からない。

だけど、ダメだ。

良くない。

もしも、織斑様に何か在れば、マリーチ様が暴れ、八つ当たりで私が苛められる。

「！ 貴様が——」

つかつかと織斑様の方へ歩いて行くラウラ隊長。

私は、その後を悟られない様に追う。

いまの私は、昔の私じゃない。

この眼は、ラウラ隊長の眼よりも優れ。

この身体は、シュヴァルツェ・ハーゼにいた時よりも強化されている。

パシッ。

織斑様の前に割り込み、ラウラ隊長の手首を掴んで止めた。
睨まれる。

私はただ「マリーチ様のメイド」としての強い意志とロレーナさんから貰った誇りを瞳に宿し、その目を見る。

「貴様、ドロテアーリックン。出来損ないが何のマネだ」

「違います」

私はすかさず反論する。

「私はマリーチ様の専属メイド。アートのドロテアーリックン。すでにボーデヴィツヒ様の知るドロテアーリックンでは御座いません」

意志は揺るがない。

ロレーナさんが言っていた。

マリーチ様が人間嫌い。

なのに私を破棄せずに、使えなくとも側に置くと言った。

私は必要とされているのだ。

だから、必要とされなかった頃の私ではない。

「チツ……。手を離せ」

隊長の手を離す。

だが、臨戦状態は解除しない。

マリーチ様の視線を感じた。

それは、私を褒める時に向ける視線。

褒められた。

嬉しい。

この喜びの為だけに、私は頑張らなければならない。

ラウラ隊長は、織斑様を睨みつけ言う。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

そして、つかつかと指定されている席に移動すると、腕を組み、目を閉じた。

当分は動かないだろう。

私は後ろを向き確かめる。

「織斑様、お怪我は御座いませんか？」

「え？ あ、ああ、ありがとう」

「感謝の言葉は必要御座いません。私はただマリーチ様の利益となる事をしただけに過ぎません」

「え？」

行儀良く一礼し、マリーチ様の元へと引き上げる。

引き上げたそこには、笑みを浮べるマリーチ様がいた。

「良くやっただすう。褒めてあげるですう」

「は、はい。お褒め頂き有難う御座います」

一礼ではない。

片膝を付き、頭を垂れる。

頭を撫でてくれるマリーチ様の手は柔らかく、優しかった。

この束の間の幸せの為に。

マリイチ様の障害となる物は許さない。

マリイチ様の敵は、私の敵。

たとえ、隊長であつたとしても。

マリイチ様の気分を害するものの存在など。

認めることは出来ない。

そして、マリイチ様、デュノア様、私の三人は山田先生に言われていた席に付く。

「あー。ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

こうして、初めてのHRは終わった。

Ver.9（後書き）

ストックホルム症候群。

セルフ・マインドコントロール

恐怖と生存本能に基づく自己欺瞞的心理操作である。

だがもし、解放される事なく常に共にいた場合はどうなるのだろうか？

それはもう、心の束縛でしかないのかもしれない。

恐怖から逃れる為に恐怖に同化する。

示された僅かな希望に縋りつく。

生存本能に従い。

心を縛る存在に消されない様、心を縛る存在の敵対者を狩り続ける。

本人に取っては、幸せなのだ。

与えられる希望という名の蜜を啜る事だけが。

ただ一つの幸せ。

テケリ・リ。

最初は怯えていた兎が、今では怯えるどころか褒められる為に行動している。

恐怖による心の束縛だけではなく、アメも与えてきた効果が現れてきたのだろう。

「おい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

織斑先生の言葉を受け、デュノアが織斑一夏に近づき話しかけた。まあ、女子だけの教室で着替える事は出来ないので当然だろう。

「君が織斑君？初めまして、僕は――」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

織斑一夏は、デュノアの手を取り教室から出て行く。

喋る機会を失った。

まあ、しかし。

なんと呼べば良いかも分からない状態だし、焦る必要もない。

幸い、ドロテアが切欠だけは作ったのだから。

「まあ良いですう」

そう呟き。

私は周りの生徒同様に着替え始める。

ドロテアは私の側に控え、私の脱いだ制服を丁寧に畳んで行く。どうやら、ロレーナに相当教育を施されたらしい。

「うわぁー」

「やっぱし、メイドさんなんだ」

とかなんとか聞えてくる。

そして、廊下からは黄色い声が聞えてきた。

やはりと言っべきだろう。

織斑一夏。

ブリュンヒルデの弟にして、男性で初めてISを動かした存在。
注目するなという方が無理がある。

しかし、どれだけ本気な人間が居るのだろうか？

「愛でもなければ、恋でもない。ただカッコイイから…。尻軽女ばかりですう」

少し絡まれたが、ドロテアが全て対処したので面倒な事にはならず第二グラウンドに着いた。

しかし、カメラを持った上級生。

非常にウザかった。

あとで消しておこう。

周りを少し確認したが、まだ織斑一夏とデュノアは来ていないようだ。

ふむ。

男子用のISスーツは着るのに手間取るのだろうか？

ならば、それも会話に繋げる事が出来る。
情報収集も兼ねて、我が社のＩＳスーツを提供するのも良さそう
だ。

何よりもマスターにソツクリな人物。
少しくらいサービスしても問題ないだろう。

「遅い！」

織斑先生の怒鳴り声が響く。

この人物は、どう考えても教師というよりは教官。
軍関連にいた方が違和感がない。

だが、これは使える。

少し友好を作っておくのも悪くないだろう。

「オルコットさん、オルコットさん」

「？　なんですか？」

「織斑先生はいつもあんな感じなんですか？」

私は織斑一夏を引つ叩く織斑先生をチラッと見た。
それだけで、理解してくれたオルコットは答えてくれる。

「ええ、いつもあんな感じですね。貴女も注意しないと怒られてし
まいますわよ」

「なるほど、ありがとうございます」

私がオルコットとの会話を終了した時。
頭を擦りながら織斑一夏がこちらにやって来た。

デユノアは叩かれてなかったようだが、なぜか楽しそうな表情をしている。

「ずいぶんゆつくりでしたわね」

若干だがオルコットの言葉には棘がある。
嫉妬という名の棘だ。

「スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

確かに、なぜ時間がかかったのだろうか？

さすがに移動教室での移動を邪魔するような生徒はいないと思うが。

それに、男性用にカスタムされたと思われるISスーツは、マリ―セレス用のISスーツに何処となく似ている。

ウェットスーツの様な全身を覆うタイプなのだ。

まあ、私の場合は下半身が少し露出しているが。

ちなみにドロテアのISスーツは、セシリアのISスーツに似ているが、胸の上の部分が開いており、ただでさえ大きめなのに余計に大きく見えた。

妬ましい。

ドロテア自身も恥かしらしく、頬を少しだけ紅く染めている。しかし、この状態のドロテアをしても織斑一夏が反応を示さない理由はなんだ？

「道が混んでいたんだよ」

「ウソおっしやい。いつも間に合うくせに」

会話に集中して気がついていない。

こんなところだろう。

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方との縁が多いようですから？　そうでないと二月続けて女性からはたかれたりしませんわよね。まあ、今日は未遂でしたけれど」

なぜか仰け反る織斑一夏。

少しオーバリアクション過ぎないだろうか？

「なに？　アンタまたなんかやったの？」

後ろから聞き慣れない声でした。

2組の知り合いか何かだろう。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ！？　一夏、アンタなんでそうバカなの！？」

ドロテアが庇ったから叩かれてはいない。

私も会話に参加するべく喋ろうとした時、ドロテアに抱き付かれた。

「？」

ワケが分からずドロテアの方を見る。

コイツを百合属性にした覚えはない。

「——安心しろ。バカは私の目の前にも2名いる」

なるほど。

ドロテアは、コレを伝えようとしたワケか。
目の前で引っ叩かれるオルコットと2組の誰か。

私はドロテアの頭を撫でながらその光景を見ていた。

Side ドロテア「リッケン

最初の授業は移動教室。

しかも、ISの訓練らしい。

着替えなければいけないのだけど、ローレーナさんが言っていた。

主が脱いだ服を畳むのもメイドの役目だと。

だから私は、自分の着替えを後にして、マリーチ様のお着替えの手伝いをする。

といっても、マリーチ様は基本的に自分で着替えるので、私はマリーチ様が脱いだ服を畳んでいるだけ。

「うわぁー」

「やっぱし、メイドさんなんだ」

全員とまでは行かないけれど、視線を感じる。

恥かしい。

恥かしいけれど、役目を放棄したら後で苛められるし、怒られると思う。

大丈夫。

私は当然の事をしているだけなんだから。

マリーチ様のお着替えが終わり次第、私も着替える。
アーテイル用のISスーツは、なぜか胸が強調されているから恥かしい。

だけど、開発部の人曰く「バリスティックブレイズの熱を逃がすための処置」だという。

嘘だと思った。

だけど、アーテイルは専用のISスーツを必要とする特殊なISだからコレしか選択肢がない。

「うわ、大胆」

「ぐぬぬ、勝てない」

「アレ、引つ張られたりしたら危なくない？」

「さ、触りたい」

なんだか色々言われてる。

ただ、最後の人だけには近寄って欲しくない。

恥かしい気持ちを何とか根性で押さえ込み、私はマリーチ様の後に続いて第二グラウンドへと向かった。

途中、様々な人が話しかけてきたけど。

「申し訳御座いません。次の授業は第二グラウンドですので急いでおります」

「織斑先生にご迷惑を掛ける訳には参りませんので」

「本日転入致しました為、授業に遅れぬ様にどうかご配慮をお願い

致します」

とか色々な理由を付けて断る。

なんだか新聞部とか言う人たちが凄くしつこかったけど。部活動というヤツなのだから仕方ないのだろう。

きつと、ソレが役目なのだ。

少し早めに第二グラウンドにつく事が出来た。

マリイチ様は周りを見渡している。

たぶん、織斑様を探しているのだろう。

「ねえ、ねえ、ドロテー。ドロテーのＩＳスーツって大胆だね」

突然話しかけられた。

見た目の印象は、ほんわかした人だろう。

しかし、名前が分からない。

「……えつと」

「あ、私ね。布仏 本音。よろしくね」

のんびりした口調で自己紹介をされた。

そして、ニッコリと微笑みを浮べる本音様。

「ご存知かと思いますが、ドロテーア＝リッケンです。よろしくお願いたします。本音様」

「様なんて、付けなくても良いよ。私もね。メイドさんなんだ」

のんびりした人。

布仏本音という人物も誰かのメイドらしい。

「あ、そろそろ授業が始まるから。静かにしておかないと、織斑先生に怒られちゃう」

立ち話は厳禁なのだろう。

軍の頃からソレは当然な事だ。

私は、本音さんに微笑み一礼する。

本音さんも微笑みを返してくれた。

そして、マリーチ様の方を向くと。

なにやら殺気立っているブリュンヒルデ、織斑先生の姿が目に入る。

マリーチ様の方を向いているが、視線はマリーチ様ではなく、オルコット様と2組の方を見ていた。

いまこのタイミングでマリーチ様が喋るのはまずい。

まずい。

マリーチ様の口が少しだけ開く。

喋ろうとしているのだろう。

止めなくては。

だけど、私が喋っては本末転倒。

ど、どうすれば……。

どうしよう！

何も思い付かなかったが、身体が勝手に動き、マリーチ様を抱き締める。

「？」

喋ろうとしていたマリーチ様の興味が私に移ったと同時に、織斑先生がオルコット様と2組の方の頭を叩いた。

きつと、抱きつくという行動にマリーチ様は怒りを覚えるだろう。私も叩かれる覚悟をしなければならない。

そう覚悟を決めたのだが。

いつまでたっても叩かれる事はなく、逆に頭を撫でられた。

褒められたのだ。

嬉しい。

私はマリーチ様から体を離し、横に並ぶ。
楽しい授業になりそうな気がした。

O・P・F | NETジャーナル 第三回

「それでは、第三回O・P・F | NETジャーナルを開始しますぞ。今回はジイや一人ですな」

「感想の返答だけですぞ」

>ストラス 様<

お嬢様がたのIS学園での彼女達との出会いではどんな活躍をするのか楽しみです。

最強物ではないとありますが、最終テストの話を見る限りでは、勝負を挑んできそうな蒼い涙とチツパイはフルボッコのような…

次回は学園かな？楽しみに待ってます（▼）

追伸

エウクランテ型とイーアネイラ型以外に登場予定っておりますか？作者さんの犬猫も見たいですが、自分としては実況役としてツガル型が見てみたいです

「いやはや、ジイもお嬢様方の活躍は楽しみですぞ。入学した時期が時期ですからな、味方うちでの戦いは少なめですの」

「はあゝい。IS学園大会実況を担当するツガルです。よろしくね」

「登場が早いすな。とりあえず、ツガル型は登場しますぞ」

> 緒方 紅夜 様<

あとがきw w w w w w w

「セバスチャンは、あの胸に懷かれ……！！」

グウォーン！！

（少し角度がありすぎた為、猟犬が現れました）

> ストラス 様<

今回の誤字報告無しです（^-^）

セバスチャンの魔改造…かのボンドカーを彷彿させそうだ（^o^；
しかし基本携帯からなのであとがきが見れなくてorz

「ほほほっ、ボンドカーなんぞ敵ではありませんぞ！ ちなみに、
あとがきはイーアネイラのAAですな」

> m o t t i 様<

待機状態が首輪とかマリーチ独占欲全開ですな

セバスチャンの紳士っぷりがバトルマスターズに登場する敵マスター
達を彷彿とさせてツボりました

登場予定の武器”アトミック・ジャベリン”

バトルマスターズのあのイベントを見たことのある自分には爆発オ

チしか想像できないw

「いやはや、マリーチ才お嬢様の独占欲は昔から高いですからなあ。困ったものですぞ。」

「ちなみに、あのイベントは健在ですぞ！」

> kusari 様<

連日更新お疲れさまです

原作突入ですね

ドロテアとマリーチの二つの視点からの場面は二人によって注目しているところが違うので面白いです

個人的な質問ですが今現在ドロテアとラウラはどっちが強いのでしょうかI Sの性能を無視して操縦技術や戦闘での判断力ではどっちですか

ソレは、幻の機体DEATHも更新待っています

次回も頑張ってください

「そうですね。現在のドロテア様ではラウラ様には勝てないでしょうな。さて、幻の方はアフア子殿が頑張ってくれとジイも信じておりますぞ」

> 蒼 龍一 様<

AAがカワイイかったw

「ほほほ、龍一様とは気が合いそうですね」

>歪曲詩 様<

「ペットは飼い主に似る」という言葉を聞いたことがあります。

何が言いたいかというと、ヤンデレのペットは、やっぱりヤンデレ（笑）

最近、「月光」というライトノベルを読んでから悪女系・小悪魔系の主人公が可愛くて仕方ない。

主人公の一夏攻略戦（笑）を期待しています。

次回の更新楽しみに待っています。

「ドロテア様までヤンデレ化されると困りますな」

>緒方 紅夜 様<

シヨゴスで吹いたwww

あー、こっちの方にいましたか。

まだまだ主人公は見極め中。

今んとこドロテアに出番食われとるが、まだまだ先は長いからな。この四人転校生での原作乖離は大まかな流れでは企業・国家系、小さなもんだと他のヒロインの嫉妬がライバルフラグ。

そしてインスマス村がどこにあるのか知ってるのかマリーチ……

あと会社のほかの支部のメンバーとか出てくるのかな？

そこらへんも期待しときます。

シヨゴスで思いましたが、どっかのライトノベルでシヨゴスをメイドにしているのあったなー

「会社のほかのメンバーですか。みな目立ちたがり屋ですから。出てくると思いますぞ。ジヨゴスのメイド、スライムメイドです。悪くないですよ。」

> kusari 様<

更新お疲れさまです

あとがきから察するにドロテアはマリーチにより恐怖と同時に生きる希望を与えられている
飴と鞭の状態ですね、

マリーチお嬢様は計算されてやっているのかそれとも素でやっているのかわかるのか想像すると怖いですね
素なら天然の支配者ですか

ドロテアの変化をラウラはどう思うか少し気になりますね
次回も頑張ってください

「マリーチお嬢様は計算でしょうなあ。そうですね、ドロテア様の変化をラウラ様がどう思うか…。その内わかるかもしれませんのう。」

「さて、今回はこんな感じですか？」

「いやはや、このセバスチャン一人では寂しいですな。では、? O .
P . F | N E T ジャーナル?はO v e s t P o z z o F a b b
r i c a (オヴェスト ポッツォ ファブリカ) とA / c u t e
D y n a m i x アキュート・ダイナミックスの提供でお送りしま

したぞ
」

織斑先生の声が第二グラウンドに響く。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

1組と2組。

合同というだけあり、なにやら気合が入っている様な気がする。

2組の生徒からすれば、ブリュンヒルデから指導を受ける数少ない機会の一つと言えるからだろう。

「くうつ……。何かというすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

横でオルコットが涙目になりながら頭を押さえ、後ろからは2組の誰かさんの声が聞えた。

ドロテアが止めなければ、私も一緒に頭を押さえていたのだろう。

2組の誰かさんが織斑一夏を蹴っているのが目に移る。

「では、今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。——凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで……」

嫌そうな顔をするオルコット。

しかし、私にも声が掛かると思ったが、掛からなかった。
私の隣でドロテアが織斑先生を見つめていたが、理由は分からない。

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出る」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

渋々前に出る二人。

織斑先生がその横を通り過ぎる時、二人に何か耳打ちしていた。
内容は聞えなかったが、その言葉で二人はヤル気を出したらしい。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの
出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」

何を言ったのか、大体は想像が付く。
おそらく「織斑一夏に良い所を見せれる」などと言ったのだろう。
実に単純な事だ。

そう考えていた時。

隣から、カシュンッと小さな音が聞えた。

これは、ドロテアの首につけられた首輪が解放され、アーティ
ルが呼び出された時になるギミック音。

「それで、相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構い
ませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は——」

キイイイン。

耳障りな音が上空から聞える。

どうやら山田先生がミスって突っ込んできたらしい。

「あああーっ！ ど、どいてくださいーっ！」

「マリーチ様！ 私の後ろへ！」

アーテイルを展開したドロテアが私の前に出る。

だが、山田先生の落下方向から察するにこちら側ではなく織斑一夏の方に向かっているようだ。

そういえば、マスターも武装神姫関連の事件に毎度毎度巻き込まれていたっけ。

家を出ればミミックに襲われ、少し戦いで勝ち抜けばラブレター染みた挑戦状で複数ハンデ戦を申し込まれ、優勝すれば殺人事件まで起こる始末。

そして、目の前を通過する山田先生。

接触ギリギリの所で白式を展開させる織斑一夏。

ドカーン！

なんともマヌケな。

カートゥンアニメでも見ているかのような気分だ。

「ケホッ」

舞い上がった土煙で軽く咳き込む。

「マリーチ様、大丈夫ですか？」

咳き込んだ事で心配そうな表情をするドロテア。
いままで様々な人間を見てきたから分かるが、こいつは心の底から私の事を心配しているらしい。

「大丈夫ですう」

コイツは撫でられるのが好きだった。
安心させる意味合いも込めて頭を撫でておく。

「ひう」

私がドロテアの頭に向け手を伸ばすと、ビクリと震えた。
だが、優しく撫でてやった途端、嬉しそうな表情をする。
そして、なぜ震えたかは寮部屋でユックリ聞くとしよう。

「ちょっと心配しすぎですう」

「で、ですが…。はい」

周りは織斑一夏と山田先生のやり取りを見ており、こちらを見てはいない。

まあ、幸いだったと言えるだろう。
私に百合の属性は無いし。

ドローテアを撫でるのを中断し、織斑一夏の方に視界を向けた瞬間。

ヒュン！

私の真横を蒼いレーザー光が通過する。

そのレーザーを放ったのはオルコットだろう。

そして、そのレーザーを回避する織斑一夏。

中々の反射神経と危機感知能力を持っているようだ。

「ホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

試しに振り返ると、そこには般若みたいなオルコットがいた。

無論、表情は笑みに溢れている。

雰囲気的というヤツだ。

豆知識ではあるが、女性の怨霊を表現する面の事を般若というらしい。

いまのオルコットには相応しい面と言えよう。

さて、横では2匹目の般若が動き出す。

ガシーン！

という何かを組み合わせる音。

二振りの巨大な青竜刀を連結し、振るかぶる。

どうやら、アレは連結する事で投擲用武器にもなる物らしい。

ブーメランの様なものだろう。

「躊躇いの無い投擲ですう」

「助けに入った方がよろしいでしょうか？」

私の呟きに即座に反応するドロテア。

おそらく避けれるだろうし、山田先生の实力を見るためにもここは放置する。

「山田先生が対応するですう。今の所は様子見ですう」

「承知いたしました」

ドロテアは一礼し、私の後ろ斜めへと移動した。

そして、案の定。

織斑一夏は、高速で飛来する投擲物を避けてみせる。

「うおおおっ!？」

だがまあ、予想通り。

アレはブーメランの様な物らしく、戻ってくる。

織斑一夏は絶望的な表情を浮べていたが、その横では山田先生がすでに動いているので問題ないだろう。

「はっ!」

ドンッドンッ!

短く二発。

その二発を投擲物の両端に当て、軌道を変える。

さて、なんの因果か軌道を変えられた投擲物がこちらに迫っているワケだが。

さては、あの教師。

胸を揉まれた事で、織斑一夏のことしか頭に無かったな？

「はあ、あまあまですう」

擬態し、不可視となっているアーク・E・トウージスで投擲物を叩き落す。

それはもう、つまらなそうな顔をしながら。

鉄が鉄を弾く何とも言えない音を響かせ、投擲物は大人しくなった。

「不注意厳禁ですう」

マリーセレスは海洋軟体生物を模したISなのだから、擬態など様々な事ができる。

神姫の時よりもモデルへの傾向は強くなっているのだ。

「す、すみません！」

「気にしなくて良いですう」

山田先生は物凄い勢いで頭を下げ謝ってきた。
ちなみに周りは啞然としている。

というか、状況について来れていないと言っべきだろう。

ドロテアは短銃を抜き打ちする様な体勢で固まっている。
まあ、私がアーク・E・トウージスで押さえつけているからなワ

ケだが。

ことも終わったし、離してやろう。

さて、この状況に置いても全く動じなかった織斑先生が口を開く。

「山田先生はああ見えて元代表候補だからな。今くらいの射撃は造作でもないが、ファブリカとリッケンの対応は意外だったな」

「日頃の訓練の賜物ですう。師の名は、ロレーナ。ロレーナ・ベルトンチーニですう。織斑先生なら知ってると思うですう」

「ほう、彼女か…。ならばその実力も頷ける」

ロレーナの名は有名だ。

自ら代表の座を投げ出した稀代のIS操縦者。

織斑千冬が現役だった頃、唯一対抗できるであろうと言われているだけに知名度は高い。

その名が出たのに周りが騒がないのは、授業中だからだろう。

「さて小娘ども、さつさと始めるぞ」

織斑先生は啞然としたままでいるオルコットと2組の凰という名の女子、専用機持ちという事とその名前から察するに、おそらく中国代表候補生なのだろう。

その二人に声を掛ける。

そして、我に返った二人はバカな事を口にした。

「え？ あの2対1で……？」

「いや、さすがに……」

相手の力量すら見抜けないなんて情けない。

いまのお前たちじゃ、逆立ちしたって山田先生には勝てっこない。私とドロテアならば五分五分と言った所なのだから。

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

負ける。

その言葉で単純な二人の瞳に闘志が宿る。

織斑先生に前に出された時もそうだったが、この二人は些か単純すぎやしないだろうか？

だが、しかし。

あんまりにも早く倒されては楽しくない。
なので、私は囁いた。

「オルコットさん、オルコットさん」

「なんですの？」

「頑張ってくださいですう。山田先生はラファールなので、得意距離は中距離。おそらく同士打ちなんかも狙って来ると思っていますう」

「……。助言感謝しますわ」

少し考える様な表情をし、私に微笑みを向けるオルコット。

織斑先生の視線を少し感じたが、気にしない。

それに、織斑先生も私の本性と性質に関して完全に気がついた様ではなさそうだ。

二人が一步前に出ると織斑先生が口を開く。

「では、はじめ」

号令と同時にオルコットと凰が飛翔する。

山田先生はソレを確認し、続くように飛んだ。

「手加減はしませんわ!」

「さっきのは本気じゃなかったしね!」

「い、行きます!」

戦いは始まった。

織斑先生はソレを見てすらない。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試してみせろ」

「あつ、はい」

どうやら山田先生の勝利を確信しているらしい。

よほど、山田先生を信頼しているのだろう。

そんな織斑先生に指名されたデュノアは、自社ISの説明をしている。

もはや研究し尽くしたISの事などどうでも良い。

細部に至るまで記憶し、記録し、その進化系統まで予測し、さらにスペックを上げ想像しながら作ったISが、わが社の第二世代強化型なのだから。

だが、使いやすさを追求されたラファール・リヴァイヴ。

そして、その後継たるラファール・リヴァイヴ・カスタム。さらに後継であるラファール・リヴァイヴ・カスタム？。

汎用型というのもまた美ではあるが、作り手の気持ちよりも利益を考えるゴミ野郎の意志がラファールを汚している以上。

どんなに素晴らしかったであろう機体も地に落ちる。

なんとも悲しい事だ。

そういえば、デュノア社と我が社O・P・FのISとは、基本思想が全く違う。

自由という名の混沌たる理論。

百を超える研究者たちが互いの意見を混ぜ合わせ、迷宮の様な構造理論を再定義しながら考え抜いた異形^{シロモノ}。

それら全ての混沌を私が吸い上げ、私なりに形を与えたのがO・P・FのISだ。

あのゴミ貯めの様なデュノアの頂点が、無意味に命令し、作らせ、社の安定だけを考え無駄に量産された機体。

思想自体が全く逆だ。

相容れぬわけなのだが、デュノア社のIS開発チームには同情を覚えてしまう。

しかし、まあ。

「その量産型ですら、我が社の強化型に地位を奪われてるですう」

そう呟き、視界を上空に移す。

そこでは全く連携が取れておらず、山田先生に良い様にあしらわれている二人の姿があった。

私の忠告を聞いていたオルコットは、凰を援護するような射撃を行っている。

凰の方は連携など関係無しに突っ込むばかりだ。

「今代の代表候補は微妙な質ですう。機体に振り回されてるですね。ま、3年間でどの程度成長するか、見物ですう」

仕舞いには戦っているさなかで罵りあい誘導されて行く。

そして案の定、衝突した。

おそらく、二人には山田先生が投擲したグレネードすら見えていないだろう。

爆発が起こり、二人は地面に落下してゆく。

「シングルの戦いはどうかかわらないですがあ、ダブルでの戦いは下の下ですう」

横では二人を心配そうに見るドロテア。

だが、クラス全体からはクスクス笑いが聞える。
専用機持ちでアレなのだ。

お前らだったら秒殺も良いところだというのに。

「使えないヤツらぞろいですう」

さすがに呆れて溜息を付くが、あんな闘いを見せられては仕方もないだろう。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

パンパンと手を叩く織斑先生。

この手を叩くという行為、意志を切り替えるために多用してきたのだろう。

周りでクスクスと笑っていた生徒らの雰囲気が変わる。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰、ファブリカ、リッケンだな。では六人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれる」

織斑先生が言い終わるや否や、織斑一夏とデュノアに向かって2クラス分の女子が殺到する。

数名、私とドロテアの方にも来たが、二人の人気は凄まじいものだ。

変わりにオルコット、凰、ボーデヴィツヒの方には誰も行っていない。

当然だろう。

オルコットと凰はあんな失態を演じたのだ。

ボーデヴィツヒに至っては絡みにくいのだろう。

喋らないし。

「マリーチさん、よろしくお願いします」

「はい。よろしくですう」

微笑みを作り対応する。

面倒な事だ。

ドロテアの方は……。

Side ドロテア「リッケン

私の前には本音さんと数名の1組生徒。

マリーチ様の方にも数名の方が行っている。

「やほ〜。ドロテ、よろしくね〜」

「ドロテアさん、よろしくお願いします」

「はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

集まった人と挨拶を交わすのだが。

「この馬鹿どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！
順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背
負ってグラウンド百周させるからな！」

織斑様とデュノア様に人が流れすぎた結果だろう。
織斑先生は非常にめんどくさそうな顔をしていた。

そして、織斑先生の言葉により、蜘蛛の子を散らすように移動が始まる。

「ありやりや」。ドロテー、またね」

本音さんは私のグループではない様だ。
オルコット様の方へ向かって歩いて行く。
グループ分けに要した時間は2分ほど。
最初からこうしていれば良かったのではないだろうか？

私は集まった方々の顔を記憶し、一礼して口を開く。

「皆様、よろしく願います」

「「「よ、よろしく願います」」」

私の挨拶と一礼につられる様にして集まった方々も一礼しながら言う。

緊張しているのがよく分かった。

「そんなに緊張せずとも大丈夫ですよ」

マリーチ様をマネてにつこりと微笑みを浮べる。
なぜか皆さん頬を紅く染めたが、なぜだろうか？

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一斑一体取りに来てください。打鉄が四機、リヴァイヴが三機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

どうやらどちらかを取りに行く必要があるらしい。

マリーチ様は迷わずに打鉄を選んでいた。

別にリヴァイヴが嫌いというワケではなく、デュノア社の社長が大嫌いなだけらしい。

私は会った事がないので、デュノア社の社長という方がどういう人物かは知らないけれど。

「では、私たちはリヴァイヴにしましょう。取って来ますね」

「……はい!」「……」

皆さんやる気がある。

誰かに教えるというのは初めてだけど、頑張らなければならないと思った。

アーテイルを解除し、リヴァイヴを操縦しながら班の場所に帰った時、山田先生の声が聞える。

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切ってください。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』

ISのオープンチャンネルで各班長に連絡を行っているようだ。

さて、こちらにも実習を開始しなければならぬが、一つ聞いておく必要がある。

「皆様は、ISに何度か乗った事はおありでしょうか？」

「……授業で数回だけあります」「……」

「承知しました。では、始めましょう」

「「はい！」」

授業で数回という事は、歩行も満足に出来ない。
限られた時間の中で出来るだけ丁寧に教えなければ。

私はリヴァイヴをしゃがませ、アーテイルを装着する。

マリーチ様のマリーセレスにも言えることだが、アーテイルとマリーセレスには脚部ユニットと腕部ユニットが存在していない。

そのため、大きさだけ見るとリヴァイヴの方が圧倒的に大きく映る。

ちなみに、マリーチ様はマリーセレスを起動させてはいるが擬態したままで行うつもりらしく。

全くISが見えない。

ISスーツのまま空中に浮かび、不可視の手で持って指導している。

「よろしく願います！」

「はい、よろしく願いますね」

一人目の方が元気な声をあげた。

そして、リヴァイヴを起動、装着する。

ここまでは問題はなかったが、歩行に若干だが難があった。

「少し重心が左側に傾いていますね」

「う、こうかな？」

重心を少しだけ右に傾ける。

転びそうになったところを私がサポートし、予定していた位置まで歩ききった。

「ここまで。お疲れ様でした」

「有難う御座いました」

一人目の方が終わり、そのまま降りようとする。

「待ってください」

「？」

一人目の方は不思議そうな表情で私を見た。
でも、このまま降りたら次の方が円滑に練習を行うことが出来ない。

「ISをしゃがませなければ、次の人がコックピットに乗る事が出来なくなってしまう」

「あ！ そつか…。ごめんなさい」

私の言葉でハツとした表情となった一人目の方は謝罪を述べ、リヴァイヴをしゃがませる。

「いえ、次からは気をつけてくださいね」

私は微笑みを向けそう言った後。
二人目の方の練習を開始した。

「では、次の方」

実習の時間は概ね成功したといえる。

ラウラ隊長は全く教える気が無かったのか、途中から山田先生が指導していたけれど。

私の方は班の方々に感謝された。

「ドロテアさんって教えるの上手だね」

「次もよろしくね」

「ドロテアさん、ありがとう」

等々。

班の方々から感謝を述べられるのは嬉しかった。

これならきつと、マリーチ様も褒めてくれるだろう。

また、頭を撫でてくれるかも知れない。

そんな期待を胸に授業の終わりを確認次第、マリーチ様の元へと向かった。

Ver.13(前書き)

修正

ナヴァグラハの展開個数

8 9

マリーチが持つ目の個数

9 10

理由

ナヴァグラハの武器個数を間違えていました。

緒方 紅夜 様に感謝

午前中の実習が終わり、いま私はドロテアと一緒に食堂に来ている。

普段から会社の食堂で食事を取ってはいるが、あそこは食堂というよりもレストランだ。

なので、どうせなので一般的な食堂の料理を楽しもうと思ってきたワケだが。

「思いのほかに人が多いですう」

「デュノア様を見に来たのではないのでしょうか？」

ドロテアが言う。

その通りだろうとは思いますが、残念な事に食堂にデュノアは来ていないらしい。

「肝心のデュノアはいないですう。でもまあ、キャツキャツキヤと騒がれるのはウザイので丁度良いですう」

こういった食券を買って食べるタイプの食堂は初めてだ。

しかも並んでいる。

非常にめんどくさい。

「マリーチ様。あちらの席が空いていますので、ここは私にお任せください」

「任せるですう。適当な物で良いですう」

「承知しました」

食券をドロテアに任せ、私は端の方の開いている席に座った。それなりに人は多いが、完全に席が埋ったワケではない。いや、食堂自体がかなり大きな作りになっているのだろう。1年生から3年生まで、全学年の生徒らが使用する食堂だ。しかも、IS学園には様々な国の少女らがいる。ならばこそ、多種多様な食文化にあわせるため、食堂を大きく設計したのだろう。

「学生か……。そういえば、マスターも学生だった頃はこんな感じだったんですかあ？」

いまは亡きマスターの姿を思い浮かべ、一人呟く。
誰にも聞えないだろう。

私の呟きは無数の雑音の中に紛れ消えて行く。

「マリーチは何が食べたい？」

「神姫は食べ物なんて食べれないですう」

「あ、そっか……。悪い」

「気にしなくても良いですう。でも、もしも食べれるならアレが食べたいですう」

「ああ、コレな。コレはアイスクリームって言うんだ」

「そ、そんなこと知ってるですう」

懐かしい事を思い出してしまった。
らしくない。

「あの…。マリーチ様？ どうなさったんですか？」

ドロテアの声が聞える。

その声色には困惑が混ざっていた。

「ちょっと目にゴミが入っただけですう」

私は目を擦り、ドロテアが持ってきた食べ物を食べ始める。

「日替わり定食というものが在りましたので、そちらに致しました。」

これは日替わり定食というらしい。

まあ、食べねなくもないから良いだろう。

これが庶民の味というヤツなのかどうかは知らないが、マスターは学生時代にこういうものを食べていたのだろうかと思うと。

なぜか、美味しく感じる。

O・P・F社長の娘として生を受けてから、食べ物に困った事はなかったし、常に最高級の物を使った食べ物しか食べて来なかった。それに比べると、あんまり美味しくはない。

なのに、マスターの顔を思い浮かべるだけで美味しくなるのは何でなんだろうか？

私は食事の時間。

マスターの事ばかり考えてしまって涙が出そうになったが。

ドロテアは何も聞かず、普段通りに接してくれた。

恐怖を与えるのは、やめにしてやろうと思う。

S i d e ドロテア「リッケン

夜になった。

昼食の時間、突然マリーチ様が泣き出したのには驚いたけど平気かな？

ロレーナさんから教えてもらった秘密なのだけど、マリーチ様はどこかで大切な人を失ってしまったらしい。

なにを切欠にしているか分からないけれど、涙を流す事があるそうだ。

今回のがソレだったのだろうと思う。

午後の授業は普段通りのマリーチ様に戻っていた。

大浴場を使うときも普段通りだった。

夕食の時は、平然とした様子でオルコット様と凰様と会話なさっていたし…。

もう、大丈夫なのだろうけど…。

そんな事を考えながら寮の廊下を歩く。

制服の発注確認をしていた為、マリーチ様より少し遅れて寮部屋に戻る事になったのだ。

そして、部屋の扉を開けて中に入ると。

「マリーチ様。そちらの物体は……？」

マリーチ様が不可思議な黒い物体を宙に浮かべていた。

「コレですかあ？ 名称はナヴァグラハ。ISのビット兵器ですう」
ビット兵器。

基本的に全方位からのオールレンジ攻撃が可能な自律兵器あるいは遠隔操作兵器の事。

たしか、オルコット様のブルー・ティアーズもビット兵器を採用しており、そのビット兵器の名前が直接ISの名前になったモノだと資料に書いてあった様な気がする。

しかし、重要なのはソコじゃない。

「あの、さすがに寮内で起動するのは不味いんじゃないでしょうか？」

そう、いかにIS学園と言えども、どこでもISを展開しても良いわけではない。

指定された場所。

例えば、グラウンドとかアリーナとか。

それら以外でのIS起動は基本的に厳禁であり、罰則すら在るほどだ。

「問題ないですう。コレにも擬態機能を付け、瞬時に消す事が出来るから問題ないですう」

自慢するように言うマリーチ様。

バレなければ良い。という思考はマリーチ様の基本行動の一部なのかもしれない。

「しかもお、コレには超高感度ハイパーセンサーが個別に一つ取り

付けられてるですう。1セットで9基が基本のナヴァグラハ。なにも武器としてだけ使うのが脳じゃないですう」

武器にもなるし、目にもなる。

マリーセレスのハイパーセンサーにナヴァグラハに搭載された超高感度ハイパーセンサー。

簡単に考えて、マリーチ様は合計10つの目を持つ事になる。でも、それは……。

「脳に負担がかかるのでは？」

9箇所から同時に様々な映像が脳に投影される事になるはずだ。それらを統括する事など、私のバロールを持っても不可能。

「もちろん、考えてあるですう。マリーセレスに処理させて別枠の画面として表示するように設定してあるですう。前後上下左右斜めと様々なところからISが解体されるサマを見れるなんて、快感ですう」

うつとりした表情をされるマリーチ様。

その解体されるISに心の中で合掌しつつ、対象が私にならない事を祈る。

怒らせたら面白半分で解体されかねないから。

そこで、私はふと時計を見た。

時計の針は、10時を刺している。

「マリーチ様、そろそろ消灯時間かと」

「はあ、もうそんな時間ですかあ？ まあ良いですう。今日は疲れてるから寝るですう」

そういつてマリーチ様はなぜかマリーセレスを部分起動させ、アーク・E・トウ・ジスでベッドをくっ付ける。
なぜ？

「あの」

「ドロテア。お前は今日から3年間、夜は抱き枕ですう。□答えは許さない。いいな？」

最後の方のマリーチ様の声は、かなり怖かった。
ドスの効いた声というヤツは、ああいう声の事なのかもしれない。

「……。はい」

さつさとパジャマに着替え、ベッドに入る。
私のパジャマはいたって普通のパジャマだ。

マリーチ様はシルクキャミソールという薄っぺらい布みたいなのを一枚。

なんだか寒そうだ。

だから、抱き枕が必要なかもしれない。

「寝るですう。おやすみなさいですう」

「はい。おやすみなさい」

こうして、私は3年間の抱き枕代わりを命じられベッドに入る。
マリーチ様は私に抱きつくとすぐに寝てしまった。
呼吸音などから察するに、本当にグッスリと寝ている。

物凄い力で抱きつかれるわけでもなく、ふんわりとした優しい力で私に抱きつくマリーチ様。

マリーチ様のぬくもりを感じつつ、私も眠りに付いた。

その夜は、なんだかフワフワした不思議な夢を見た様な気がする。

Ver.14 (前書き)

修正

マリーチの台詞

「あらかた、そのISも」 「おおかた、そのISも」

理由

誤字

小説好き 様に感謝

修正

マリーチ視点の一夏の行動

分かったのは分かっていないのか、一夏は頷く←

分かったのか分かっていないのか、一夏は一応頷く

理由

?は か? 誤字

?一応? 追加

ストラス 様に感謝

もにゅもにゅと柔らかい物体を触りながら、1日の出来事を考える。

そこでふと、廊下を歩いている時に小耳に挟んだ情報を思い出した。

「一夏君とシャルル君って放課後に訓練するらしいよ」

「え、ほんと！」

「見学しに行かなきゃ！」

という様な内容。

私も参加させてもらう事にしようか。

ナヴァグラハでのシューティングゲームならば、そこそこ良い訓練になるだろうと思う。

「う…。んんっ、んっ」

しかし…。

これが、7の差か。

私は結局、ドロテアが目覚めるまで妬ましい物体を揉みつづけた。

そして、数日。

ISがある為か、平凡とは少し違うような学園生活だが、ISが

関わらない場所は概ね普通の女子校みたいな感じなのだろう。

数日の間にオルコットに近寄り、土曜日の訓練に同行させてもらっているワケだ。

土曜日は午前中が理論学習、午後がアリーナ全解放の自由時間となっている。

しかし。

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

一夏にはデュノアがベツタリだ。

「そ、そうなのか？ 一応わかっているつもりだったんだが……」

デュノアにこつ酷くやられた後に「一応わかっているつもり」という言葉が出るなんて、やはりマスターとは少し違う。

マスターならば「まだまだか……」。なあ、少し練習に付き合ってくれないか？」とか何とか言って、他のマスター相手に練習を始めるのだけど。

仕方ない、少し助言をしてやるか。

「？一応？？つもり？じゃ、ダメですう。いまの一夏さんは、説明書を見てその内容を知っているだけの状態ですう。瞬時加速も直線的 and 乱用のしすぎで軌道予測が楽々ですう」

「そうだね。反応できなくても軌道予測で攻撃で来ちゃうし。あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ」

「空気抵抗、圧力、摩擦、その他諸々が重なって機体に負荷が掛か

るとお、骨がポツキリ逝くですう」

私とデュノアは息ピッタリで一夏に助言をして行く。

なんだかんだと、このシャルル・デュノアは、私が見てきたデュノア社の人間とは比べ物にならないほど人間らしい。

このデュノアが社長になってくれれば、O・P・Fもデュノア社を潰そうなどとは考えない。

「……なるほど」

素直に頷く一夏。

ちなみに、デュノアは専用機であるラファール・リヴァイヴ・カスタム？で実際に相手をし、私は部位限定でナヴァグラハだけを呼び出し、間接的に相手をしている。

他のオルコット、篠ノ之、凰たちが教える姿も見たことはあるが、アレは酷かった。

篠ノ之は擬音ばかり、凰は感覚的だのとぬかし、オルコットは角度やら何やらを指定している。

オルコットだけは教えるのが下手なだけで何が言いたいのかは分かるのだが、初心者向けの教え方じゃない。

他の二人はダメだ。

出直してきた方が良い。

「一夏様、誰しも最初からすべてが出来る訳では御座いません。ゆっくりと出来る様になれば良いかと」

ドロテアが一夏に声を掛ける。

そのドロテアの後ろで、こちらを恨めしそうな瞳で見ている三人がぶつくさと呟いているが、知った事ではない。

「一夏の白式って後付武装がないんだよね？」

デュノアの言う様に、白式には後付武装が存在していないのだ。

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

「ワンオフ・アビリティーですう。一夏の白式には強力なワンオフ・アビリティーが発現してるですう。それが拡張領域を全て使ってる考えるのが妥当ですう」

「ワンオフ・アビリティーっていうと……えーっと、なんだっけ？」

私はデュノアと顔を合わせ苦笑いをする。

「言葉通り、唯一仕様の特殊能力だよ。各ISが操縦者と最高状態の相性になった時に自然発生する能力のこと」

Love30まで上げる事で使用可能になる専用EXレールアクションだと考えると分かりやすい。

あれもライドレシオンMAXの時にしか使用できないし、ワンオフ・アビリティーに少し似ている。

「普通は第二形態から発現するですう。でも、殆どの機体に発現する事がないですう。O・P・Fでも発現させた事があるのは、ローナのサイフォスBくらいなものですう」

「ワンオフ・アビリティー以外の特殊能力を複数の人間が使える様にしたのは第三世代型ISだよ」

「第三世代型ISでワンオフ・アビリティーが発動したら良いなって、企業も国家も考えてるですう」

分かったのか分かっていないのか、一夏は一応頷く。

「なるほどな。それで白式の唯一仕様ってやつぱし？零落白夜？なのか？」

？零落白夜？。

聞くところによると、エネルギー性質のモノであればなんでも無効化し消滅させるらしい。

噂に名高いブリュンヒルデと同じワンオフ・アビリティー。

しかし、その特殊能力の代価は自らのシールドエネルギー、LPライフポイントを削り使用する諸刃の刃。

果たして使いこなせるか否か…。

そう考えている間にも一夏とデュノアの会話は続き、なにやら射撃武器の訓練をする様な話になっている。

「デュノア、私は少し考え事をするですう」

「あ、うん。わかったよ」

デュノアだけに一夏を任せ、私は思考に入った。

姉弟だからと言って、こつも都合よく同じワンオフ・アビリティーが発生するなどマズありえない。

あの白式には何らかの秘密が在ると見るべきだろう。

いや、もしかしたら…。

アーンヴァルmk2の様に二つのレールアクション、いやワンオフ・アビリティーを持ち得ている可能性だ。

何にせよ例外というものはある。

二つのワンオフ・アビリティーを使用するとするならば、零落白夜は織斑千冬のワンオフ・アビリティー。

ならば、織斑一夏のワンオフ・アビリティーはなんだ？
純粹にまだ目覚めていないと考えるのが普通だろう。

二つ目の力が在るとするならば、目覚めるのは第二形態となった時？

いや、真の意味で――。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だっけ聞いてたけど……」

アリーナが騒がしくなる。

私はやむ終えず思考の海から顔をあげた。

「チッ、勘違い女がウゼえですう」

こちらを見下すように見るボーデヴィツヒ。

視線は一夏に向けられている。

「おい」

ISの開放回線で声を掛けてくる。

ドロテアはソワソワしているが、気にする事ではないだろう。

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

戦闘狂か…。

戦闘経験値を得るのには丁度良いが、いまはまだ早い。

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくとも私にはある」

面倒な女だ。

少し私の戦い方を見せておくのも勉強になるだろう。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

一瞬だけ辛そうな顔をする一夏。

だが、それでも一夏に戦う気はないらしい。

「また今度な」

「ふん。ならば——戦わざるを得ないようにしてやる！」

そう言うや否や。

ISを戦闘状態へシフトし、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「ぬるいですう」

私はソレをアーク・E・トゥーリスで受け止める。

威力が高かったためか、擬態が剥がれ一瞬だけ機械触手がその姿を現した。

その黒い触手の一本はうねりをあげ、放たれた実弾を意図も容易く握りつぶす。

「おおかた、そのISも我が社の強化型ISを解析し作り上げた発展形に過ぎないですう。それになクソ虫、てめエはドロテアを出来損ないって言ったよなあ？ 虫ケラの分際でウゼえんだよ」

周りの生徒と一夏、デユノアにおバカさん人組みがギョツとした表情で私を見る。

ドロテアはなんだか感動しているようだ。

「貴様……」

計5つの触手パーツで構成されたアーク・E・トゥーリスが姿を表し、うねうねと動き出した。

一見ランダムに動いている様に見えるが、すべて私の意志で動く様に造られている。

「綺麗なスクラップにしてあげるですう」

「ぬかせ！」

私は何処までも虫ケラを見下したような表情を浮べる。

とはいえ虫ケラも代表候補に選ばれるだけの實力はあるのだから、油断をする事は出来ない。

V e r . 1 5 (前書き)

報告

風邪をひきました。

V e r . 1 6 が1日ほど遅れそうです。

なにか変わりに適当なもの書くかも知れません。

修正

誤字脱字多数

Side ドロテア「リッケン

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

アリーナのスピーカーから教師と思われる人の声が聞えてくる。
誰かが担当教師を呼んだのかも知れない。

「チツ、見逃してやるですう」

「ふん。今日は引こう」

興が削がれたのか、マリーチ様もラウラ隊長もあっさりとISを量子化する。

マリーチ様は普段通りの微笑みを浮かべ、一夏様へ近づいて行き、ラウラ隊長はアリーナゲートへと去って行った。

「一夏さん、大丈夫ですう？」

「あ、ああ。助かったよ」

微妙に一夏様が引いている様な気がする。
無理もない。

いまのマリーチ様は先ほどまでのマリーチ様とは異なり、普段通りの優しい微笑みを浮べている。

そのギャップはあまりにも……。慣れていない人には衝撃を与え

る事だろう。

それに、微妙に機嫌が悪いみたいだ。

「きよ、今日はもうあがるつか。四時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしさ」

「お、おう。そうだな」

デュノア様も引いてる。

オルコット様、篠ノ之様、凰様の三名も引いていた。周りで見ていた生徒の方々からは恐怖に近い表情が伺える。

一夏様とデュノア様は着替える為に更衣室へと向かう。

オルコット様、篠之乃様、凰様もISスーツを着ていたためか、そそくさと更衣室へと向かった。

「マリーチ様。えっと、その…。怒っていらっしゃるのですか？」

「別に怒ってないですう。ただ――」

「ただ？」

マリーチ様そのまま歩みを進め、私の横を通り過ぎる時に呟く。

「次は、あの虫ケラを綺麗なスクラップにしてやるですう」

ゾクツとした。

身体が震える。

心が恐怖に縛られ、一步も動く事が出来ない。

「……」

私が立ち止まっている間にマリーチ様は歩いていつてしまった。しかし、追いかける勇氣は出ない。

下手に追いかけると八つ当たりされるかもしれないからだ。

「はあ……。マリーチ様のお怒りが早めに鎮まることを祈るしかないよね」

自然と肩が落ちてしまう。

私は溜息を吐きながら1年生寮へと戻る事にした。

——1年生寮。

トボトボと寮の廊下を歩いていると…。

「あれ？ ドロテアさん、どうしたの？」

「なんか落ち込んでるみたいだけど？」

私に話しかけてくる生徒がいた。

確か名前は、山田妙子さんと夕暮有紀さん。

この二人は実習の時、私の班にいた方だ。

「いえ、大丈夫です」

「とてもじゃないけど、大丈夫そうには見えないよ？」

「うんうん。なんか顔色も悪いし」

二人とも心配そうな表情で私を見る。
それほどまでに私の顔色が悪いのだろうか？

「話すだけでも少しは気分がまぎれるよ？」

「そうそう。私たちだとソレくらいしか出来ないけどね」

二つの優しい笑顔が私の瞳に映った。

私は…。

優しい二人に、少しだけ相談に乗ってもらうことにした。

—— 食堂。

難しそうな顔をする二人。

「ふむ、アリーナでそんな事が起こってたのか」

「うーん。さすがに怒りっぱなしは無いと思うけどね」

私は二人にアリーナでの出来事を話した。

二人はISでの戦闘より、ISを整備する事を主にシフトしたらしく、整備に関する勉強をしていたらしい。

だからアリーナでの出来事を目撃しなかったそうだ。

「怒った状態のマリーチ様は…。とにかく怖いんです」

長く話していた為か、この二人が相手だと素の口調に戻ってしま
う。

丁寧な口調というのも以外に疲れるし、息抜きになって助かる。

「そんなに怖いんだ」

「普段すごく優しいそうだもんね」

私の言葉に頷く二人。

やはり、怒っている時のマリーチ様を知らぬ状態では、あの恐ろしさは分らない。

逆に言えば、見てしまえば最後。

心の弱い人ではマリーチ様に逆らえなくなってしまうかねない。

私の場合は短期間とはいえ、あの怒りに触れていたから震えたり、落ち込んだりするだけですんでいるけれど。

「私も怒っていない時のマリーチ様はすごく優しく大好きなのです
が……」

どうやって怒りを静めるか、それが問題である。

「「「はあ……」」」

三人で溜息を付く。

ただ一つのお題。怒っているマリーチ様の怒りを鎮める方法が中々思いつかないのだ。

「ケーキセットとかどうかな？」

「お嬢様だから宝石とか？」

「どうでしょうか？ 私もマリーチ様の好きな物って知らなくて」

三人で頭を抱える。
どうしたものか？

結局、なにか良い案はでなかった。しかし、私を含め妙子さんと有紀さんの三人で就寝前に食堂で開くこの話し合いは日課となる。後に会議として有名となり、様々な人の悩み相談の場へとなつて行く事になるのだが、当時の私たちは知るよしもない。

——マリーチ and ドロテアの寮部屋。

なんだか色々と忙しかった一日だけれど、その一日の終わりには私を抱き枕代わりに眠るマリーチ様の寝顔があつた。

無論、食堂から戻り次第シャワーを浴び、強制的に抱き枕にされる私の恐怖もあつたワケだけれど。

この可愛らしくも優しい寝顔を見るためならば、多少の苦難は些細な事だろう。

「おやすみなさい。マリーチ様」

私は小さな声でそう囁き、眠りについた。

Ver・15（後書き）

マリーチの性格は、ヤンデレ（むしろサツデレ（殺す気満々。しかし、惚れると蝶（誤字ではない）デレる）を比率にすると9：1くらいだと思う。

この1が発動するとどうなるの？
逆に完全に病んでしまったら、一夏殺されてバッドエンド直行なのかもしれない。

Ver・000（前書き）

デモンベイン^{ライトノベル}軍神強襲とセラフィックフェザー（漫画）の影響を受けて書いてみた。
セラフィックフェザー楽しい。

ソレには名が無かった。

だが、ソレは自らの役目を確信し、自らの行すべき事柄を知っている。

遠い昔、ソレはとある男を襲う役目を負っていた。

だが、その男は在ろう事か複製品へとなったソレを自らの仲間としたのだ。

男が死んだとき、ソレは誓う。

三度自らに姿形が与えられたのならば、男の為に死のうと。

なんの因果か、ソレは新たな姿を与えられ、新たな世界で目を覚ました。

そこは、ISという兵器がある世界。

主に似た姿を持つ男を尾行し、^{ストーカー}ソレはIS学園へと辿り着く。
そこで…。

「!？」

「な、なんだ？ 何が起こって!？」

突如現れた所属不明のIS。

そして。

「な!？ アンタいったい？」

主に似た男を守るため、存在すらしない黒染めの武装を纏った人型が現れる。

「うつうつうきゃあああああつ!!」

黒染めのソレは、なんの躊躇も容赦も無く所属不明ISを破壊した。

そして…。

「織斑先生これは…!」

「自立型のISだと？　だが、なぜコイツは一夏を守った？」

ソレはIS学園の地下で眠りに付く。
二度目に目覚める時は……。

「私と戦え!」

「また今度な」

「ふん。ならば——戦わざるを得ないように……!」

黒きISの前に立ちふさがる黒染めの人形。

「な、おまえ!?!」

「うつうつう……」

黒と黒は、唸りを上げ静止する。

鈍色の乙女が目覚めた時、ソレはアリーナの地面をぶち抜いて現れた。

「あああああつ!!」

そして、その偽りの刃を自らの体で持って受け止める。

「おまえ……」

「ううう」

「…。ありがとよ！ さあ、覚悟しやがれ！ 偽者野郎！」

少女の中にソレの思考が流れ込む。

『なんだ？ これは？』

《マスター、マスター、マスター、私、マスター、マスター、マスター、守る、マスター守る》

それは、意味不明な言葉の羅列。

しかし、一つだけ少女にも理解できるものがあつた。

《私は守る。この身を犠牲としたとしても守る。偽りの私に生を与

えたくれたマスター。私からの片思い《

『……。これは』

《お前が羨ましい》

『私が羨ましい？』

《お前は口が利ける。私は口が利けない。マスターはお前を守ると言った。だが、私はプログラムに過ぎない》

『…………』

《マスターと共に生きられるお前が羨ましい。お前は、私の分までマスターに甘えても良いと思う》

『私が？ 甘える』

《…………》

『ま、まで！ お前の名は？』

《…………。私の名は——》

少女は知る。

黒塗りの人形の思いを。

そして、自らの仲に芽生えた一夏への気持ちを……。

「お、お前は私の嫁にする！！ 決定事項だ！！ アイツも言って

いた甘えても良いと、故に異論は認めん!!」

「よ、嫁？ 婿じゃなくて？ ってアイツで誰だよ？」

次に黒塗りが目覚めたのは、海の上で戦う主の危機を知った時。
少年が少女を庇い、瀕死の重症を追う寸前。
ソレは現れた。

「うううううきやあああああつ!!」

「La...」

意志持つ人形と意志奪われし人形は戦い始める。
それは、自らの存在意義を確かめる為の戦い。

「くつ、新手か!？」

「また、助けてくれるのか？」

「一夏？ 何を言っている？」

「そうか。分かった。第、一旦退くぞ」

「一夏？」

「早く！ 俺たち二人じゃ勝てない」

白と紅は戦場から退いて行く。
仲間を引きつれ、黒と共に戦う為に。

だが、やはり。

少年と少女たちは間に合わなかった。

「アレは、セカンドシフト!!」

第二形態となった意志奪われし人形の一撃は、意志持つ人形の胸を貫く。

力なく落下するソレを抱きとめたのは、少年だった。

「しつかりしろ。いま、すぐに……!!? お前、コレは!!?」

少年の目に飛び込んできたのは、機械仕掛けの身体。

「あああ」

「な、ダメだ! ?死ぬな! ?」

意志持つ人形は感動を覚えていた。

機械仕掛けの自分に向かって「死ぬな」と言ってくれる少年に対して。

だからこそ、ソレは自らを託そうと考えた。

意志ある人形は少年に抱きつき、白式へと同化して行く。

白式に自らの戦い方、自らの経験、自らの技、自らの全てを明け渡す為に。

「な、一夏！」

「白式が第二形態へ!？」

人形は最後に言った。

『私は守れなかった。だから、償いにマスターに似ているアナタを守った。でも、アナタは私とは違う。アナタなら多くを守れる。だから、私を使って』

少年は変化する白式の中で一人の少女と一人の騎士、そしてボロボロの黒いローブを纏った少女と対峙する。

『なぜ力を求める?』

「みんなを守る為に」

『そっか、なら行かなきゃね』

「ああ、みんなの元にな！」

『……』

「いままで守ってくれてたんだろ? ありがとう。名前を聞いても良いかな?」

『……。私の名は、雪羅』

意志ある人形は白式と一つとなり、少年と共に空を駆ける。

時がたち、少年と少女たちに更なる試練が訪れた時、第4世代型IS白式の左手、雪羅に青白い光が奔った。

それは白式という意志の奥、異なる世界より舞い降りた意志を持つ人形の軌跡。

人形、ミミックの雪羅が意志はソコで共に戦う。

少年の守るという意志と一つになり、少年が守ると決めた者たちを守る抜く為に。

Ver・000（後書き）

「うううううきやあああああつ！！」の聲がハイリンの声（声優さん）だと知った時の驚きは凄まじかった。

そして、未だに私の手元には強化タイプが訪れない。
あと何体破壊すれば良い？

O・P・F | NETジャーナル 第四回

「それでは、第四回O・P・F | NETジャーナルを開始しますぞ。今回もジイや一人ですな」

「感想の返答だけですぞ。寂しいですな」

>蒼 龍一 様<

何故だろう、マリーチ嬢がマトモに褒めるのに違和感が・・・(汗) 毒舌だな(第3世代が第二世代にあしらわれている時点ではないけど)

「ほほほ、きっとアメをあげているんでしょうな。マリーチお嬢様の毒舌は生まれつきですな」

>ストラス 様<

自由と言う名の混沌…マリーセレスは海洋生物だけでなく、神話関係も多少入ってるので納得ですね(^^)

本当にマスターの神姫関係の不遇っぷりはハンパなかったですね。

(最初の頃ハンデ戦に何回泣かされたか(T|T))

ドロテア嬢が後で受けるかもしれないお仕置きにもw k t k

こんなに更新速度が早くて後半持つのか心配しながらも、次回の更新も楽しみに待ってます(▼)

一夏の特訓にお嬢は参加するのか？
ツガル型の出番はいつ頃になるのか？

「クトウルフですな。いやはや、なにやらアフア…ゴホッ、ゴホッ、名も無き武装神姫殿はそれらも少し関わらせるようですな。ああ、ジイやも久しぶりにお仕置きされたいですぞ！」

「更新速度に関しては、ソレと異なり切る所は切る用にした結果の速度らしいですな。質問の二つに関してはVer16 18までお楽しみで良いですか？」

>蒼 龍一 様<

不可視の手ってわかりづらい気が・・・（汗）

「マジメに教える気がないんでしょうなあ。困ったものですのう」

>ストラス <

お嬢の出番が食われかけてる！？

学園ゆえに一夏が関わらない事には、おとなしくしているのかな？
まあ、まだ転校1日目なのでこれからか…

「マリーチお嬢様は以外に慎重ですからな。回りの動きを見ているんでしょう」

>緒方 紅夜 様<

しかし、バトルロンドで命中マイナス武器だったやつですか。カットよかったですで覚えてます。

ハイパーセンサーで命中は上がったのか、そのままなのか。

たしか投げる武器だったんで、そのままっすか？

それとも光学・粒子兵器？

そしてドロテの調教終了フラグ
やったねドロちゃん！

しかしそれでもあんまり変わらなかった命令時の寒気www

なんか百合くさいルートが量子展開しかけてますな。

「仕様はバトルマスターズで行く予定ですよ。分類はビット兵器ですな。取り囲んで9方向から攻撃を行う装備ですよ」

「命令時の寒気が快楽に変わったら、大変な事になりそうですね。百合の予定は無いようですぞ。ドロテア嬢の方は知りませんがのう」

（その内、一夏に嫉妬するドロちゃん書きたい。と窓ガラスに血文字が現れた）

> kusari 様<

更新お疲れさまです

今回出てきたナヴァグラハは戦闘に使うよりも諜報用として使いそうですね、これで一夏のプライベートを覗き放題ですね

なんだかシャルのバレフラグが建った気がします、マリーチ様の事だからこれを材料にデュノア社を潰しそうですね

もしくはシャルをいただきメイド三号か執事二号の誕生でしょうか暴走しましたすいません

次回も頑張ってください

「攻撃ばかりではバランスが悪いですからな。シャルル様の扱いは微妙ですよ。デュノア社の社長はソレくらいで揺らぐ人物とは思えませんぞ」

>ストラス 様<

ドロテア嬢の抱き枕…なんと羨まっゲフンゲフン
それは置いといてナヴァグラハの擬態も見破りそんな人が約一名い
そうなので過信は禁物かと…（^- - ^）

誤字と言うかちよつと分からない文章が一ヶ所

分かったの”は”分かっていないのか、一夏は頷く。

↓ここは「分かったの”か”」が妥当かと、後このままでは文章も
変なままなので「一夏は”一応”頷く。」と付けたほうがいいと思
います

「おおお！ ストラス様とは気が合いそうですねア！ かの有名な
ブリュンデヒルデならば気がつくかも知れませんが。マリーチお嬢
様もまだまだ未熟と言ったところでしょうか。最後に指摘感謝致し
ます」

>小説好き 様<

>あらかた、そのISも我が社の強化型ISを解析し作り上げた発
展形に過ぎないですう。

「あらかた」じゃなくて「おおかた」では？

「誤字報告感謝ですぞ」

>骨皮 筋男 様<

初めまして。骨皮です

直線的云々を聞いていると、一夏のルールアクションが出来そうで
すね

だとすると、小剣と大剣。sゲフンゲフンはランチャーかライフル

あたりかな？

「レールアクション時の速度は、瞬時加速並と考えれば再現できそうですね。ただ、ルート変更の時に身体を痛めそうな欠点がありますのう。ワンオフ・アビリティーとは異なり、技術として登場するかもしれませんな」

> 蒼 龍一 様<

ラウラ・・・なんという死亡フラグを・・・（汗）
グッドエンドでお願いします（土下座）

「大丈夫ですぞ。まだあの程度ならば死亡フラグは立ちませんでな。エンドに関しては、ジイからは何もいえませんのう」

「さて、今回はこんな感じですか？ 返信が遅れた事、ココでお詫び致します。次回のジャーナルはコメントが4〜5溜まり次第、書くツモリですぞ」

「しかし、このセバスチャン一人では寂しいですな。では、？O・P・F―NETジャーナル？はOvest Pozzo Fabb
rica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）とA/cute
Dynamixアキュート・ダイナミックスの提供でお送りしましたぞ」

O・P・F | NETジャーナル 第四回（後書き）

全然関係ないけれど、久々にM H 3 r dの終焉を喰らうものをやった。

なんとか、5分針でクリア（たぶん、8分くらい）

装備一覧

覇砲ユプカムトルム、増弾のピアス、シルバーソル（頭以外）

発動スキル

装弾数UP、弱点特化、通常弾UP、ブレ抑制+1、攻撃力UP【
小】

Ver.16 (前書き)

ペルソナ4アニメが面白いです

そして、武装神姫mk2のクリア後に戦えるガイア……。

貴様！ DL武器外せよー！ フリーズするじゃないかー！

武装紳士、武装淑女の方々は注意してください。

修正

マリーチの台詞

「私色の染め様かと」 「私色に染め様かと」

理由

誤字

ストラス 様に感謝

確信のない噂が学園内に満ち溢れていた。
それは、廊下を歩くだけで耳に入ってくる。

色々と脚色されていそうなソレを楽しそうに話す生徒の姿は、私の瞳には滑稽に映った。

しかも、一部ではソレを本当に信じている生徒まで出ている始末。
なんというか、哀れだ。

「ドロテア」

「はい」

「この噂の出所は何処ですう？」

後ろを歩くドロテアに問いかける。

「それが、どうも篠ノ之さまの告白を偶然聞いた方が勘違いをし、
ココまでの形になった様です」

「……。哀れですう」

篠ノ之といえば、一夏と最も長い付き合いでありながら告白する機会を逃し続け、やっとの思いで告白してみればこの騒ぎ。

しかも、内容には尾ひれが付き、自らとの交際ではなく優勝者との交際に置き換わるなんて。

「恋愛死兆星の元にでも生まれたんですかねえ？」

「おそらく、織斑様自身も付き合うというのは買物に付き合う程度の感覚だったかと思われます」

篠ノ之本人が聞いたら泣き出しかねない事をサラリと言うドロテ
ーア。

まあ、事実だろうし何とも言えない。

「この件は無視ですう。現状は一夏さんを鍛える事を優先するです
う」

「承知いたしました」

そうだ。

こんな戯言に構う余裕が在るのならば、まだまだマスターには程
遠い一夏をマスターに近づけなければ。

この世界にマスターはいない。

だが、マスターとソックリの男はいる。

ならばだ。

私好みのマスターとして育て上げれば良いだけの話。

「マスターへの思いは変わらないですう。ま、死ぬまでに人間の恋
愛を体験するのも良い経験ですう」

自然と微笑みが漏れる。

私好みのマスター、私だけのマスター、私が理想とする人物像を
投影した男。

悪くないかもしれない。

——放課後。

一日中、一夏をどうやって私色に染め様かと考え、早めに第三ア
リーナに来てみれば……。

バカ二人組みとゴミ虫が死闘を繰り広げていた。

「当れー！」

「こちらも行きますわ」

「はっ、ザコが群れた所で私に勝てると思うな！」

現状を鑑みるに、オルコットと凰の二人ではボーデヴィツヒを倒
す事は不可能に近い。

その証拠に二人のISはもはやボロボロの状態になりかけている
が、ボーデヴィツヒのISは軽症だ。

「はあ、ドロテア。ここであの二人が死んだら一夏は悲しむです
う？」

「悲しむと思います。私が行って止めても良いでしょうか？」

ドロテアは握りこぶしを作り、ボーデヴィツヒを睨みつけ今に
も飛び出して行きそうだが、私の手前ソレが出来ないのだろう。

しかしまあ、いまのドロテアでは軽くあしらわれて終わりだ。

私は溜息を付き、無意味な戦いに割り込む事を決める。

隙あらば、ボーデヴィツヒの命を奪う為に……。

「ドロテア」

「はい」

「お前は待つてるですう。お前が怪我をするとふかふかの抱き枕がなくなるですう」

私はそう言つて、第三アリーナ内部へと向かう。

なんだかドロテアが惚けているが、気にする必要もない。

第三アリーナ内部に入ったとき、一番最初に聞えたのは耳障りなゴミ虫の声だった。

「終わりか？ ならば――」

一瞬でマリーセレスを身に纏い、二振りのサーペンタインを手に斬りかかる。

「私のターンですう。死ね！ むしけら！」

突然現れ、ボーデヴィツヒを首を狙つて斬りかかる私に呆然とする二人。

そして、斬りかかれた本人はギリギリの所で緊急回避をしてみせる。

「避けてんじゃねえよ！ クソ虫がア！」

「くっ！」

あれほど余裕ぶっていたとしても、少なからずダメージを負っているのだろつ。

サーペンタインを避ける時の表情はかなり必死だった。

だが、続け様のエルヴァン・アクスでの一撃をA I Cで止められた事でボーデヴィツヒの顔に余裕が見え始める。

「ふつ、停止結界の前では無意味だ！」

「バカかお前？」

「なに？」

擬態させていたアーク・E・トウージスを見えるようにし、ボーデヴィツヒに向け口を開く。

しかし、よほど私は良い笑顔をしていたらしい。

口を開く瞬間、ボーデヴィツヒの表情に僅かながら本能的な恐怖を見ることが出来た。

「二人との戦いを見て分かったですう。お前、A I Cを一方向へしか展開できないですねえ。ならあ、これは停止できないですう？」

擬態を解いて姿を表したアーク・E・トウージス。

その機械触手の一本一本にはサーペンタイン、イング・ペイカー、ハフ・グーフア、エルヴァン・アクスが無数にひしめき合っている。それら機械触手はボーデヴィツヒを取り囲むように展開されており、目の前のA I Cを解けば私が手に持つエルヴァン・アクスをまともに喰らい、このままA I Cを展開し続けると上下左右後からの一斉攻撃を喰らう事になるワケだが、ボーデヴィツヒのA I Cは一方方向。

結局は5つの攻撃を喰らう。

私に懐に入られた時点でそもそも逃げ道なんて用意されちゃいない。

「はあ、普段余裕ぶってる分、その絶望に染まった顔は快感ですう。じゃあ、沢山悲鳴をあげると良いですう」

「おの…れ……」

そして何の躊躇いもなく、私は攻撃を開始した。

「うふふ。あつははははつ、気持ちいですう。ほらほら、さっさとどうにかしないとデッドゾーン突入ですう」

「ぐがぁ！？ がはっ……」

全ての触手が同時に攻撃を行い、エルヴァン・アクスを握る手に力を込める。

A I Cに掛かる力を感じた事で、ボーデヴィツヒは目の前の私の攻撃を無意識に優先してしまった。

それは即ち、5つ触手の攻撃を全て喰らう事となり、アツという間にボロボロになって行く。

たった一瞬の出来事でオルロットや凰以上にボロボロになるボーデヴィツヒの表情ときたら何とも言えない快楽を私に与えてくれる。

とはいえ、全快の状態でサシの殺り合いとなっていたのならばこうは行かなかっただろう。

多少とはいえ、ボーデヴィツヒにダメージを与えたオルコットと凰には感謝しなければならない。

「さーて、ゆつくり解体してやるですう」

動くことすら困難な状態になったボーデヴィツヒに向け、サーペ
ンタインを振り下ろしたのだが、その一撃は乱入者により阻まれた。

「ガキの相手はこれだから疲れる」

乱入者、それは――。

「チツ、織斑先生が来たならやめるですう」

ISはもちろんこと、ISスーツすら纏っていないブリュンヒル
デがIS用接近ブレードを手に乱入してきたのだ。

いまの状態ならば或いは勝てるかもしれないが、一夏が見ている
手前なにかするワケにも行かない。

「この戦いの決着は、学年別トーナメントで付けてもらおうか」

ボロボロの状態で何とか立ち上がりながらボーデヴィツヒは言う。

「ゴホッ……。くっ、教官がそう仰るなら」

「別に逆らう気はないですう」

織斑先生は、私とボーデヴィツヒの顔を見比べると溜息を付いた。

「はあ、頭痛の種は一つで十分なんだが……。学年別トーナメント
まで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンツと織斑先生が手を叩く、私はその音と共に振り返り、オル

コットと凰の方へ足をむけた。

二人は未だに呆然としていたが、私が近寄ると怯えすら隠さない。

「そんなに怯えなくて良いですう。とりあえず、保健室ですう。怪我してるですう」

「え？ あ、うん」

見事にシンクロし、私に答える二人。

とりあえず、私はオルコットと凰を立たせ保健室へと向かった。

Ver・16（後書き）

強さ基準（現状での単体戦闘力）

番外：織斑千冬、ロレーナ〓ベルトンチーニ

1位：ラウラ〓ボーデヴィツヒ、マリーチ〓オヴェスト〓ポッツォ
〓ファブリ

2位：シャルル〓デュノア、ドロテア〓リッケン

3位：セシリア〓オルコット、凰鈴音

4位：織斑一夏

5位：篠ノ之箒（打鉄使用）

——保健室。

私がボーデヴィツヒをマジで殺そうとしてから30分ほど経過していた。

目の前ではドロテアの治療を受け、大人しく椅子に座るオルコットと鳳がいるワケだが、二人とも私を怖がっている事がよく分かる。

しかしまあ、二人ともプライドだけは維持しているらしい。

「別に助けてくれなくてもよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

このプライドも一夏とシャルルがいるから、強がったことだろう。

ドロテアは二人の治療をしながら苦笑をしている。

「ハッキリ言うですう。私が乱入しなかったら私にやられたボーデヴィツヒさんみたいにボロボロになってたのは二人ですう。良いですかあ？」

「マリーチ様は戦いともなりますと口も悪くなり、行動も凶悪になります。それは、貴女方を守るという気持ち故なのです。分かっていただけと幸いです」

ドロテアが言葉を付け加えたが、なんだか微妙にジイやを思い出す台詞だ。

こういう時には、こう言えとでもジイやに言われていたのだろう。

とりあえず、私は一夏とシャルルを放置した状態でオルコットと鳳の座る椅子の前へと移動した。
そして、腕を組み睨みつける。

「「ひつ」」

二人は明らかに怯えの表情を見せるが、知った事ではない。
これ以上この二人が物理的に傷つく事は、あまり面白くないのだ。

「二人とも良く聞きます。何が原因で戦いを始めたかは知りませんが、情報のない相手と戦い。しかも、自らよりも力量が上である事など一目瞭然。オルコットさん、鳳さん、貴女方二人が傷つけば心を痛める人がいます。それなのに無謀な戦いを行うのは愚の骨頂！」

「でも、アイツは一夏の事を！」

「ですが、一夏さんの事を！」

必死な顔で反論してくる二人。

ああ、やっぱし。

一夏関連のことで挑発されて、勝てない喧嘩を買わされたワケか。

「黙れ」

「……」

「……」

二人を一喝し、完全に黙らせる。

あんなに近くで私を見てしまったのだから、二人の心は私への恐怖で当分は縛られたままだ。

「相手が軍人だという事は一目で分かります。確かに二人は代表候補として他のIS操縦者よりも高い水準でISを操れるですが、それでも恐らくは実戦経験すら持ち合わせるボーデヴィツヒさんの前では経験不足と言わざるおえないです。しかも、連携が出来るならばいざ知らず。二人の連携のダメダメ具合は山田先生との戦いで明白にされてたです。ボーデヴィツヒさんだつてソレを理解したうえで喧嘩を売ったハズです。おそらく、貴女方をボコボコにすれば一夏さんが自らと戦うと判断したんです」

そこで一旦話を区切り、一夏とシャルルの方を1度だけ見る。

最初の方は怯えていたのかもしれないが、正論を言ったことで二人とも私への恐怖は薄れている様だ。

私は、オルコットと凰に近づき耳打ちをした。

「好いている人を貶されて怒る感情、私にも分かります」

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！」

「べべっ、別にわたくしはっ！」

二人に向けて「だ・ま・れ」という意味合いを込めた微笑みを送る。

「……。はい、ごめんなさい」

どうやら通じたようだ。

後ろの一夏はクエツションマークを浮かべ、シャルルとドロテー

アは苦笑している。

「もしも二人が大怪我を負ったら、一夏さんは悲しむですう。しかも、その原因が自分だと知れば、重荷を背負ってしまうかも知れないですう。その事を考えて耐えることも女には必要なのですう。分かったですう？」

コクコクと頷くオルコツトと鳳。

本当に分かっているのだろうか？

「とりあえず、経験を積むまでは上の相手とは戦ってはダメですう。力量を見極める眼がないというのならばあ、私が叩き込んであげるですう」

微笑みながら言う。

最後の台詞を言った瞬間、二人はフルフルと首を横に振ったのが気に喰わないが、そんな感情を消し去るような地鳴りが聞えてきた。

ドドドドドドドドドッ……！

「な、なんだ？ 何の音だ？」

音がする方向を見る一夏。

その方向は、ちょうど保健室の扉がある場所なので廊下から聞えてきているのだろう。

「なんだか、近づいてきていないかな？」

「その様ですね」

シャルルに同意するドロテア。
そのやり取りから約1秒後ほどだろう。

ドカーン！ という音と共に保健室の扉が吹き飛ぶ。
結構頑丈そうな扉だと思ったが、呆気ないほど簡単に吹き飛び、
扉の正面にある壁にぶち当たって止まった。

「織斑君！」

「デュノア君！」

入って来たのは数十名の女子だ。
そこそこ広く、ベッドが5つもある保健室いっぱいなのだから一
つの組の半分くらいの人間が雪崩れ込んで来たのだろう。
一夏とデュノアはアツという間に取り囲まれてしまった。

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちよつと落ち着いて」
うるさい。

しかも、保健室といえば怪我人が治療を受け、安静にしている場
所だというのに小娘どもが！

「黙れ！ ここを何処だと思ってる！」

一喝。

その瞬間に保健室は静まり返った。
織斑先生に怒られた時のような感じになっている。

「なにが合ったかは知らないですがあ、ここは保健室ですう。保健室は怪我人が安静にしなければならぬ場所ですう。ギャーギャー騒いで良い場所じゃない！」

なんだか今日は、かなり奮発している様な気がしてならない。
というか疲れる。

「それで？ 何があつたですう？」

そう聞くと、怯えた表情で一人の生徒が？ 申込書？ を差し出してきた。

その内容はこうだ。

『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする』

締め切りも在るようなので、いち早く一夏かデュノアと組みたかったのだらう。

「はあ……。気持ちは分からないでもんですう。ですが、保健室に突っ込むとかあ、織斑先生が知ったらIS背負ってグラウンド50週くらいは余裕ですう」

怯えていた表情が一齐に青ざめた表情に変わった。

うん。私もIS背負ってグラウンド50週は無理だから気持ちは分かる。

「それで、織斑さんとデュノアさんはどうするですう？」

放置しても可哀想なので確認を取っておく。

「えっと…」

「みんな悪い。俺はシャルルと組むからさ」

怯えと恐怖すらも掻き消し、考え始める数十名の女子たち。

「まあ、そういうことなら」

「他の女子と組まれるよりはいいし…」

「男子同士っていうのも絵になるし……ゴホッゴホッ」

そう言いながら撤退してゆく女子たち。

しかしまあ、私に怒られたためか戻る時は大人しく歩いて戻っていた。

Ver.17 (後書き)

武装神姫mk2のジュービジーが早く使いたい
収穫の季節の恐怖を思い出したいー

Ver.18 (前書き)

修正

マリーチの思考

「デュノアがクソ社長」

「デュノアのクソ社長」

理由

誤字

緒方 紅夜 様に感謝

保健室から女子が居なくなつた途端、オルコットと凰が騒ぎ始める。

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

二人は先ほどの大群が可愛いと思うほどの勢いで一夏に迫つた。

「あ、あたしと組なさいよ！ 幼なじみでしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

迫られ、肩を揺さぶられる一夏。

かなり困つた表情をしている。

前々から思つていた通り、一夏は朴念仁だ。

しかも、超を2乗しても足りないくらいの朴念仁なのだが、一夏に惚れている方もなんだか攻め方が微妙な気がしてならない。

身体を使うというのは、学生ゆえに発想としてないのは分かる。

だが、なぜこうも猪突猛進な感じなのだろうか？

少し大人しくなり、日本にある大和撫子という言葉が体現したような攻め方をしても良いのではないか？

恋は盲目という言葉の本で見たことが在るが、ソレにしたって盲目になり過ぎだろう。

これは、元々私が武装神姫だからそう思うのだろうか？

自身の心はマスターに届いて欲しい。

だが、それでマスターが幸せであるのなら良いが、幸せでないのならば、私は自らの心を封じ接する事も厭わない。

彼女たちの考えと私の考えは異なってるのだろうか、彼女らは一夏の幸せを考えたりしているのだろうか？

自らの幸せのみを願っている様にしか見えない。

「ダメですう」

溜息を付き、呆れた顔を作りながら？やれやれ？と言った様な感じで首を振る。

なんだか一瞬だけオルコットと凰から敵意を感じたが、一睨みしたら大人しくなった。

「良いですかあ？ 一夏さんはデユノアさんと組むと先ほど言ったじゃないですかあ。私だって一夏さんと組みたいですう。でも、それだと先ほどの一夏さんの言葉が嘘になるですう。そうなればあ、先ほどの方々に一夏さんが囲まれるのは必然となるですう。それだけは阻止せねばならないですう。そこで、オルコットさんは私と凰さんはドロテアと組むのが最適ですう。オルコットさんは遠・中距離型、接近戦闘は苦手と見たですう。私は中・近距離型、遠距離も出来なくはないですがあ、パートナーとしては丁度良いですう。凰さんは中・近距離型、私と同じですがあ、基本的に近距離タイプの傾向が強すぎですう。ドロテアは遠・中距離型なのでえ、凰さんの隙間を埋めるのには向いてるですう。本来ならば私とドロテアが組むのも最も良いパーティなのですがあ、オルコットさんと凰さんのコンビネーションのダメダメ具合は先ほど見たですう。みっちり鍛えてやるですう」

そして、満面の笑みをオルコットと凰に向ける。

凄く嫌そうな表情をされた。

一瞬で機械の触手が現れ、オルコットと凰の方に先端を向けてウネウネしている。

二人は逃げ出した。

保健室にある唯一の扉の前には優しい笑顔のドロテアが。

「申し訳ありません。マリーチ様の命令は絶対です」

ドロテアは笑顔で二人の顔の前に銃を突き出した。

二人は大人しくなった。

ゲームクリア！

経験値0、オルコットと凰を入手した！

「ということで、一夏さん。この2匹は私が預かるですう」

「「2匹って言うな！」」

振り返り反論する二人。

しかし、後ろにドロテアが居るからなのだろうが微妙に言葉に覇氣がない。

怯えてるのに何とか搾り出している感じだ。

「お、おう」

一夏とデュノアは若干引き気味だが、デュノアの方はそろそろ慣れてきたのだろう。

硬直時間が先程よりも短くなっている。

「あ、そういえば。なんで二人はボーデヴィツヒさんと戦ってたの

かな？」

不思議そうな表情をするデュノア。

だけどわかる。あの表情の裏には？すでに分かっているデュノア？が存在している事が。

分かっているのに聞いているのだろう。

二人を応援しているのだろうが、いまの二人にソレを察する余裕とかは全く無いだろうに。

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

一夏の頭の上にはクエッションマークが浮かんでいるに違いないだろう。

？マークがよく分かる表情をしている。

「ああ、もしかして一夏のことを——」

閃いたような顔をしていたが、一瞬だけ私にも近い笑みを浮かべるデュノアが見えた。

もしかしたらシャルル・デュノアは私と同類なのかもしれない。

いや、シャルロット・デュノアと言うべきかな。

フランス支部にいる第三世代型アークの操縦者であり支部長クトウグア、同じく第三世代型イーダの操縦者であり副支部長イクタアに調べてもらった所、シャルル・デュノアという存在が現れたのは一ヶ月前後らしい。

ということは、その前には存在すらしていないのだ。

そして、シャルル・デュノアが登場してからの一ヶ月。
一人の人物が消えている。

名は、シャルロット・デュノア。デュノアのクソ社長が妾に生ませた子供らしいが、最近まで放置していたとの事だ。
社を大きくするために呼び戻し、利用したのだろう。
相変わらずどこまでも腐った事をしてくれる。

「あああつ！ デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですね！ まったくです！ おほほほほ」

デュノアとオルコット、嵐が戯れている間に私は一夏に近寄り話しかけた。

「一夏さん、一つ覚えておくですう」

「ん？ なんだ？」

「ボーデヴィツヒの真の狙いは一夏さんですう。気を引き締めて行くですう。零落白夜に頼る戦いだけは厳禁ですう」

ボーデヴィツヒの名が出たところで一瞬だけ険しい表情をする一夏。

だが、すぐに普段通りの表情に戻り力強く頷いた。

「ああ、わかつてる」

そして、少しの間だけ私は一夏の隣でデュノアと戯れる2匹を見ていた。

やはり一夏はマスターではない。

しかし、マスターに限り無く近い？ 思い？ を持ち合わせている。
ならば私は手を貸すべきだろう。

それが私、武装神姫マリーセレス型マリーチが出来る唯一の事柄。

マスター育成計画も悪くないが、この一夏がどこまでマスターに
近い男になれるか。

ソレを見るのも悪くない。

まあ、一夏をどうするかは計画は後々決めて行こう。

当面は、オルコットと凰を鍛える事に集中するですう。

Ver・19（前書き）

修正

マリーチの思考

「ほどこの中にまで」 「ほどこの中にまで」
理由

誤変換

k u s a r i 様に感謝

黒い球体がとある一室を見ていた。

ソレは風景に溶け込み、一切の気配を放つ事はない。

そして、見聞きした情報を記録し、主の元へと戻って行く。

——数週間後。

一夏、シャルル、セシリア、鈴、箒の特訓をしていたら、いつの間にか時は経過し学年別トーナメント当日。

実に早いものだ。

ちなみに特訓している間に全員とは名を呼び捨てにするほどの仲にまでなった。

一夏、シャルル、鈴、箒からはマリーと呼ばれるようになり、セシリアからはチーフと呼ばれる。

セシリアには、少しスパルタが過ぎたのだろう。だが、反省はしていない。

いまのセシリアの実力はドローアを少し下回る程度だが、全くといっても良い程でなかった接近戦闘もある程度こなせる様になった。

我が社のIS用ダブルナイフ？コート＆コーシカ？を与えてみたところ、まだまだ完璧とは言えないが、使える程度の実力だ。

ブルー・ティアーズ（BT兵器）の方も動きを止めずに使用できるようになったようだ、集中力を割いているためか、他の武装での命中率は80%少しと言ったところだろう。

さて、いま私は暑苦しい更衣室にいる。

「ギユウギユウ詰めですう」

言葉通り、許容量オーバー状態の更衣室。

本来ならば、2箇所の更衣室でそれぞれの組の女子が着替えを行うわけだが、片方を男子に貸し出している為、一つの更衣室に1年全ての女子が集合している。

超過密とでも言えば良いのだろうか？

空調は効いているが、それでも暑いと感じてしまう。

「マリーチ様、お飲み物をお持ちしました」

ドロテアが気を利かせ、ポカリを持って来てくれる。

余談だが、私はアクエリ派でもポカリ派でもなく、ゲータレード派だ。

争うまでも無く結果など見えている。

「対戦相手の発表はまだですう？」

「そろそろだと思えますわ」

呟きに答えるセシリア。

ちなみに、私のパートナーはセシリアでドロテアのパートナーは凰だ。

一応、箒にも私流の剣術らしき何かを教えたのだが、日本のKENDOUとは相性が悪かったらしく全く使いこなせていない。

ただ、ドロテアの精密射撃とKENDOUの精神集中は相性は

良かったらしく、そこそこ精確な射撃が出来るようになっていた。
モニターがトーナメント表へと切り替わる。
内容は何とも面白いものだった。

？学年別トーナメント第一回戦。織斑一夏& a m p ;シャルルⅡ
デュノア v s ラウラⅡボーデヴィツヒ& a m p ;篠ノ之箒？
？学年別トーナメント第二回戦。マリーチⅡオヴエストⅡポッツ
オⅡファブリカ& a m p ;セシリアⅡオルコット v s ドロテー
アⅡリッケン& a m p ;凰鈴音？

最初からクライマックスとは、こういう事を言うのだろう。
一部から冷たい風が流れてくるが、ボーデヴィツヒと箒であるこ
とは分かりきっている。

二名ほど頭を抱え、1組2組の生徒から励まされているが…。
こちらからしてみれば、どの程度成長したかを見るには丁度良い。
それに、自らがどの程度成長したのかを確かめる確認にもなる。

「……。一夏さん」

私の横で心配そうに呟くセシリア。
心の底から心配しているのであろう。

「セシリアは心配のしすぎですう」

「でも、チーフ……」

「そろそろ、そのチーフっていうのやめて欲しいですう。マリーチ
で良いですう。あと、信じて待つのもまた強さですう」

セシリアは今一度トーナメント表を見た後、ほんの少しだけ目を

瞑った。

目をあけた後のセシリアの表情は、私の言葉通りに一夏を信じて待つ事を決めた女の表情をしている。

「チー……。マリーチさんの言うように、信じて待つことにしますわ。一夏さんが負けるはずありませんものね」

軽くガンを飛ばしたただけなのに、慌てて言い直すセシリア。
随分と従順になったものだ。

「とりあえず、一夏とデュノアの死合……。コホン。試合を見るための場所取りに行くですう」

「マリーチさん、発音が違いすぎますわ……」

なんだかシヨンボリするセシリア。
私の言葉違いには、随分と耐性が付いたらしい。

「ほら、ドロテアに鈴。お前たちも一緒に見に行くですう」

そう言うと二人はユックリと立ち上がり、トボトボと更衣室を出て行く。

なんか映画で見たゾンビみたいだ。

「箒さんに声はかけませんの？」

「セシリアは、あの絶対零度の一角に手を突っ込みたいですう？」

「……。一夏さんの試合ともなれば場所取りは奪い合いですわ。わたくし、先に行って場所をキープしてきます」

ゾンビ二人に続いて更衣室を出るセシリア。
さて、私はどうするか。

「……」

少し考えたが、面倒なので特に何も言わずに三人の後を追う事にした。

——学年別トーナメント開催アリーナ。

「これより学年別トーナメントを開始します！」

なんだかイヤにテンション高い2年生が実況の様な事をしている。季節感をぶち壊す様なサンタクロースをイメージしたであろう真赤な服装を身に纏い、アイスクリームの様なマイクを片手に司会席を一人で陣取っていた。

胸にはデカデカと？ツガル？と書かれたネームプレートを掲げている。

ツガルといえば、IS学園に通っている現役アイドルの事だ。

専用機は持つてはいない様だが、IS適性Sというトンでもない人物でもある。

ドロテア、シャルル、セシリア、鈴でさえ適性Aだというのに……。

一夏は適性Bで、箒が適性Cという状態だ。

ちなみに私も適性Sだったりするが、マリーセレスとの適性は測

定不可能と出ている。

そもそも自らの一部なのだから、測定も何もないという感じなのだろう。

「第一回戦のカードはー！　ISを操縦できる男子ペア！　織斑一夏ー！　アーンド！　シャルルⅡデユノアー！」

紹介と共に現れる一夏とシャルル。

ツガルの方はなにやらハイテンションで細かな紹介もしているが、殆ど女子の声援という名の津波に飲まれて消えている。

「対戦相手はー！　ドイツ代表候補にしてドイツ軍所属と思われる謎の美少女& a m p ；天才篠ノ之束博士の妹ペアー！　ラウラⅡボーデヴィツヒー！　アーンド！　篠ノ之箒ー！」

これまた紹介と共に現れるボーデヴィツヒと箒。

あんまりにも冷たい空気をまとっている為か、声援を送っていた女子たちの声が途絶えた。

だが、ツガルのハイテンションには絶対零度すらも意味が無いらしく新聞部が集めたと思われる情報を紹介している。

「それではー！　試合開始のカウントを開始します！」

．．．3。

．．2。

．1。

試合開始！

こうして、四人の戦いが始まった。

試合開始直後。

動いたのは一夏だった。

開始合図とほぼ同時に瞬時加速を使いボーデヴィツヒに斬りかかる。

ソレを読んでいたかのようにAICで停めるボーデヴィツヒ。

どうやら一つの対象を止めるのに対し、AICを糸の様に張り巡らせ完全に停止させる様にしたい。

私と戦ったときは点で武器を止めていたが、現在は面で止めている。

中々に厄介だ。

だが。

「チーム戦だって事を忘れてるですう」

隣で一夏を心配そうに見ているセシリアに聞えるか、聞えないか程度の呟き。

そう、今回はチーム戦なのだ。

ソロでの戦いを中心とし、仲間がいるのにまったく仲間に頼らないボーデヴィツヒは不利だろう。

しかも、自ら一人で勝てると思い込んでいる時点で一夏とシャルルの勝率を上げていると言っても良い。

脳筋染みた考えで軍人。

しかも、それが隊長とは片腹痛い。

作戦も全く練れず、感情の赴くままに行動している輩と何が違うのか？

もし私がボーデヴィツヒならば、箒を最大限に利用し勝利を掴もうとするだろう。

勝者ことが真実であり、事実なのだから。

「さて、次の一手は大型レールカノンでの攻撃と見るですう」

予想通り、ボーデヴィツヒは動きを止めた一夏に対し、右肩に装備された大型レールカノンの砲頭を向けた。

ボーデヴィツヒの視点からは見えていないだろうが、若干上から見下ろすような形になっている私にはよく分かる。

一夏を壁とし、ボーデヴィツヒに迫るシャルル。

箒は若干遅れを取ったが、そのシャルルに気がついた様だ。

「マリーチ様。どちらのペアが勝つと思われますか？」

横に座っているドロテアが話しかけてくる。

ちなみに私の左にセシリア、右にドロテア、そのドロテアの右に鈴の並び順で座っている。

現状ではまだまだわかり難いが、ボーデヴィツヒの行動はあまりにも軍人らしからぬものであるため。

「勝利の女神は、一夏とシャルルに微笑むと思うですう」

「なぜそう思うんですの？」

「私もマリーチ様がお考えになっている理由が知りたいです」

声こそ掛けてこないが、鈴も私の方を向き理由を聞いたそうにしている。

まあ、おそらく鈴も何かしら言っているのだろうが、周りの声援に言葉を掻き消されているのだろう。

「簡単ですう。ボーデヴィツヒは一人で戦っているのに対し、一夏とシャルルは二人で戦っているですう。箒もいるですが、現在の箒の実力では一夏にもシャルルにも勝てないですう。出来たとしても精々数分の時間稼ぎ。数分程度なら一夏もシャルルもボーデヴィツヒを抑えられるですう。あと、ボーデヴィツヒは1対1ならば無類の強さを誇る部類ですが、複数戦となるとAICの長所は活かしきれず、逆に短所が目立つようになってくるですう。そうなれば最後、AICを使用して一夏がシャルルのどちらかを止めようものならば、停めた際に発生する硬直が隙となるですう。無意識でAIC使えるようにでもならなきゃ複数戦にAICは向かないですう。動き回ってワイヤーとレールカノンで対応するとは思いますが、それでもやはり2対1ですしい、ボーデヴィツヒは一夏は接近戦しか出来ないと思い込んでいる辺りも一夏とシャルルの勝率を大きく引き上げてるですう」

あくまでも私の考えた理由なワケだが、実際も私の言ったように事が進んでいる。

ボーデヴィツヒは助けに入った箒の足をワイヤーで牽引し、アリナ脇まで吹き飛ばしているのが見て取れた。

きっと、あちらでは怒号が飛び交っている事だろう。

実況もハイテンション気味に……。

「おおっと！ ラウラ選手、箒選手を助けたー！ かに見えたが、邪魔だからポイしたみたいー！」

誰かあの釘宮ボイスとめて来いよ。

そういえば、ツガル型はコールドスリープ状態にある菱宮津軽の精神構造をロジック化し移して作り出されたらしい。

あそこで司会してるハイテンションもそうだったりするのだろうか？

まあ、人間みたいだしソレはないか。

「とりあえず、見てるですう」

三人は頷き、試合を見る事に集中し始めた。

現在では、一夏VSボーデヴィツヒ、シャルルVS箒の構図になっている。

一夏はボーデヴィツヒのワイヤーブレードに切り刻まれ、戦況はよろしくない。

シャルルの方は的確な射撃で箒を一瞬で追い込み、そろそろ倒しきるだろう。

「ああ、一夏さん……」

心配そうな声色でセシリアが呟く。

一夏は、ワイヤーブレードで行動を封じられ、いままさに大型レールカノンで撃たれよとしているのだから無理もない。

が、セシリアにはシャルルが箒を倒し、かなりの速度で回り込んでいるのが目に映っていないようだ。

シャルルと戦っていた箒の腕もかなり上がっているように見えたが、接近ブレードで弾を斬ったり、実体シールドで防御したりしたところで、シャルルの高速切替による猛攻の前では長く持たなかったらしい。

ISが訓練機なのだから仕方ない結果としか言えないが、もし刀を用いた専用機だったのならばもう少し粘っていただろう。

さて、一夏の前に割り込んだシャルルは砲弾を防ぎ、ワイヤーブレードを断ち切る。

即座にその場から後退するあたり、シャルルの判断能力の高さが伺える。

アサルトライフルを量子化せず、そのあたりに捨てたのもフラグだろう。

察するにアンロックした状態の物をあたかも弾切れで捨てたように演出したのだろう。

そもそも、量子化してしまえる物を捨てるという行為自体、なんらかの意味が在ると感じるべきだ。

量子化しなければ、処理が早くなるとかそういった事はない。逆に量子化しなければ、足元に転がっている銃が邪魔になる可能性だって少なからず在るのだ。

そんな事すらも頭の片隅に思いつかないなんて、ボーデヴィツヒの狂信者ぶりが伺える。

織斑千冬の偉業を邪魔した存在を倒さなければとか、そんな感じの考えが脳内を支配している様だし、先に脳筋と表現したが、狂信者と表現したほうが最適だろう。

「強さを攻撃力と思い込むあたりが愚の骨頂。そういうヤツから死んでゆくですう。そして、絶対。何処かしらで誰かに迷惑を掛けるですう」

誰にも聞えないように呟く。
ボーデヴィツヒを見ているとイライラする。

マスターの代わりに生きながらえたゴミ虫を思い出して仕方ない。

ワアアアッ！

声援というなの音の波が耳に痛い。

一夏が零落白夜を発動させた途端にコレなのだから、困ったものだ。

零落白夜は確かに一撃必殺だろう。

必ず殺すと書いて、必殺。

だが、当てることが出来なければ意味はない。

戦いはここからと言ったところだろう。

V e r . 2 1 (前 書 き)

修正

全体的に内容を修正しました。

理由

ボーデヴィツヒに迫る一夏は、急停止・転進・急加速などの行動を行っている。

AICの見えない糸に捕らわれない対策として複雑な軌道を描いているのだろう。

ワイヤーブレードの攻撃も加わり、一夏は追い詰められて行くが、そのワイヤーブレードを的確に狙い撃ち、ボーデヴィツヒへの牽制も忘れないシャルル。

デュノアの名を持つ者だが、可能ならば我が社に欲しい。

この前、ナヴァグラハが面白い映像を持ってきたからソレを利用し、シャルルをシャルロットに戻し、デュノアと切り離してやるのも面白い。

いや、それともシャルロットをデュノアの頭に沿え、企業連合としてO・P・Fに取り込むのも悪くないか…。

まあ、何にせよ。いまは試合を見ることにしよう。

思考をやめ、視点をアリーナに戻すと、一夏はワイヤーブレードを掻い潜り、ボーデヴィツヒに入り体当たりをしようとしている所だった。

ボーデヴィツヒとしてみたら、斬撃を行うと思っていたら刃を向け体当たりをしてきたのだから驚くだろう。

だが、面による停止を主体に持ってきたボーデヴィツヒならば一夏を停める事は容易い。

「それにしても、本当に学ばないヤツですう」

ボーデヴィツヒは開幕直前にも同じ様な事をやったにも関わらず、再度シャルルの接近を許していた。

2対1だというのに、頭の中には1対1の構図しかないらしい。なんとも愚かな事だ。

シャルルは零距离でショットガンを乱射し、ボーデヴィツヒの大型レールカノンを破壊した。

これでボーデヴィツヒは最大火力であり、遠距離攻撃手段を失った事になる。

ワイヤーブレードとプラズマ手刀は中・近距離用武装であり、シャルルとの相性は最悪。

怯み後退したボーデヴィツヒめがけ、零落白夜を発動させた一夏が斬りかかる。

いまのタイミング、このタイミングならば確実に当たるだろう。

だが、勝負の女神とは何とも気まぐれなもので、切っ先が触れる寸前に零落白夜の白い光がゆっくりと萎んでゆき、消えてしまった。白式には、零落白夜を発動させられる程のエネルギーが残っていなかったらしい。

啞然とする一夏。

そして、それにより発生した隙を見逃すほどボーデヴィツヒも甘くはない。

一瞬で一夏が追い込まれ、助けに入ったシャルルは吹き飛ばされる。

ボーデヴィツヒが一夏に向け攻撃を行うと、二人の間に閃光が走り、その後に現れたのは白式の力を失い膝をつく一夏の姿だった。

ここでトドメを刺さないボーデヴィツヒは愚かだろう。

少しでもエネルギーが残っていれば動く事が出来るというのに……。

しかも、勝ち誇ったようなポーズを取り、その隙をシャルルに突かれ、攻撃を許している。

ここまで慢心し、油断しているボーデヴィツヒならば、先のフラグに気が付くことはない。

そう、相手が相手ならすぐに分かるだろう。まるで計ったかの様に一夏の足元にあるソレに……。

シャルルが最初に投げ捨てたアサルトライフルが、一夏の足元に転がっている事に……。

一夏は自身がラウラの視界と興味から外れた事を確認すると、ゆっくりとアサルトライフル片手に立ち上がる。

こちらからは、ボーデヴィツヒに狙いを定める一夏が丸見えなワケだが、シャルルの対応に追われ、一夏を確実に倒したと思い込んでいるボーデヴィツヒが気が付く事はない。

もちろん、撃たれるまでは……。

撃たれ、気が付いた時にはすでに遅い。

シャルルの切り札。

通称、盾殺しと呼ばれるソレはすでにきられている。

第二世代型最強と謳われた装備であり、すでに我が社のEVFベイオネットに最強の名を奪われたものの威力は折り紙つきだ。

リボルバー機構により、炸薬交換による連続打撃が可能なパイルバンカー。

これをAICで止めようとするのなら、杭の一点。先端を停止させなければならない。

無論、焦りにより集中力の乱されたボーデヴィツヒでは盾殺しを停めることはまず不可能。

予想通りに腹部に盾殺しを叩き込まれ悶絶している。

シャルルはボーデヴィツヒの様に甘くないらしく、確実に倒す為に連続で三度ほど叩き込んでいるが…。

「なにかおかしいですう」

「なにがですか？」

「あとすこしで一夏様とシャルル様の勝利では在りませんか？」

何かが、おかしい。

過去、アストライアーと1回目に戦い終わった時に感じた違和感。何かまだ、トンでもないものが隠れているような気配…。

人間、当って欲しくない予感という物は良く当るようで、ボーデヴィツヒのISから突然電撃が放たれ、シャルルを吹き飛ばした。

そして、ボーデヴィツヒのISが変異を始める。

ドロドロとした銀色の何かに変化して行くボーデヴィツヒのIS。その見た目は経験値沢山くれるけど逃げまくる、某スライムを丸くした様な感じだ。

本来、ISはこんな劇的な変化などしない。

多少装甲の形が変わることは在れど、完全に見た目が変わるような変化などしないのが普通だ。

「なんですか？ あれは？」

「なんなのよ。あれ？」

「マリーチ様。どういたしましょう？」

「……。お前たちは被害が出ないように避難の手伝いをするですう。私はアレの動きを止めるですう」

三人をすでに始まっている非難の手伝いに向かわせ、私はボーデヴィツヒのISを見つめる。

三人に関しては、訓練という名の調教が上手くいったらしく私の指示通りに避難の手伝いに行った。

そこまで拘束力のあるモノではないが、無意識に私の指示を聞く様にしてみたのだ。

もちろん、本人が拒否する事なんかは強制できない。

先にも言ったが、拘束力はないのだ。

だから、こういう時くらいにしか役に立たない。

三人の気配も遠く離れた事だし、私も動くでしょう。

新しい武装、魔爪ヴァナルガンドを試すのにはもってこいのシチュエーションだ。

O・P・F | NETジャーナル 第五回

「うきゅ？ うきゃー（訳：第五回O・P・F | NETジャーナルを開始。今回は私一人）」

「きゃ（訳：感想返答だけ）」

>蒼 龍一 様<

番外というより最早殿堂入りだろこの二人w

「きゅ（訳：仰るとおりで）」

>ストラス 様<

番外編の感想から

最後まで読んで少し眼が潤みました。

意志を持ったミミックがカッコよかった、最後に同化してまで一途に一夏のために尽くした姿に眼の奥があつくまりました。

Ver.16の感想

さすがお嬢、逆光源治とは考えることが違うなあ

「きゅあ／＼／（訳：照れているらしくて何を言っているか解読不能）」

「うきや（訳：失敗に1ペリ力賭ける）」

>緒方 紅夜 様<

さて、ここまでのところを見たところ、恋愛感情というものに発展はしていないというか、どこか観察段階というような感じ。

神姫だったからなのか、いまだ恋愛が分からないからなのか、どっちにしてもまだまだですな。

そしてさりげなく三輪車が……

市街地戦とか想定してか？

正直ないと思っていたが。

たしかに神姫の武装はISよりは小型だが三輪車は比較的大きく並のISと同じくらいだからあんまりうまみはないと思うんだが……

（自分のフィギュアを見ながら）

そしてここでクトウグア、イタクーア。

だとしたら鳥とか人魚は……

タッグは予想外に世話焼きなマリーチさんが介入しましたね。

正直主従タッグでオーバーキル並に爆発と硝煙の過剰投入かと思っ
てました。

あと、原作キャラのマリーチへの内心思っていることが知りたいです。

一話くらい番外でお願いできませんかね？

「きゅ？（訳：模造品である私に恋愛に関する質問は答えできませんが、たぶん観察中なんだと思います？）」

「うきゃあー（訳：大丈夫、アークとイーダなら！　きっと、きっと！（リペイント版を眺めながら））」

「うきゅ！（訳：了解しました。番外では在りませんが、定期的にお話形式でみんながマリーチの事をどう思っているかを載せ様と思います）」

> kusari 様<

更新お疲れさまです

笑顔で銃を向けるドロテア想像すると怖いですこの時の姿はメイドですか

鈴とセツシーの魔改造フラグが建ちましたね、どこまで成長するかまた何処に魂が逝ってしまうか楽しみですう

そしてデュノア社がマリーチ様の潰す対象に含まれた気がしたのは気のせいでしょうか

次回も頑張ってください

「きゅ！　うきゃー（訳：あ、制服です。一部に手直しを加えておきます！　気のせいでは在りません）」

「ううきゃあああ（訳：がんばります）」

>ストラス 様<

あれ？第三世代型は試作機で鳥と人魚だけだったのでは？（Ver. 2の段階で）

いつの間に三輪なんて作ってたんだ？

ここでクトウグアとイタクアが出てくるとは…このまま行くと蜘蛛とか鏡とか時計兎なんてのも出て来るのか？

次回も楽しみに待ってます。（▼）

「きやうう…」（訳：番外編をご用意しました！　しばしお待ちください…）

「うきゅ（訳：名前は色々あります。中には結構マニアックな物まで）」

>kusari 様<

更新お疲れさまです

セシリアは弱点を克服とまではいかないみたいですけどピット操作しながら行動できるのはかなりの進歩ですね

鈴とドロテアはゾンビ化していますが一体なにがあったか気になります

マリーチお嬢様の行為にいくらか耐性があるドロテアこの状態とは何を行ったか想像しづらいです

今回はラウラ戦ですねどんな事が起きるのか楽しみです

次回も頑張ってください

「うきゅ（訳：自分が怖いと感じた者と戦わなければならない時、人はゾンビ化するらしいです。少し修正します）」

>ストラス 様<

ここでツガルがキターwwこれでカツるww（このまま消えそうな気もするが…）

セシリアの強化は順調なようだが、いつの間に箒まで一緒に特訓してたんだ？（ここでの箒はほぼ空気だからか？）

「うきゃああ（訳：消えます！ でも、後々再登場します。いつ登場するかは内緒です）」

「うきゅ。きゅああああ！（訳：今回はコレで終わります。 またまた返信が遅れました。次回から本気出す！）」

「うううきゃああああ（訳：？O・P・F―NETジャーナル？はOvest Pozzo Fabrica（オヴエスト ポッツォファブリカ）とA/cute Dynamixアキュート・ダイナミックスの提供でおくりしました）」

O・P・F | N E Tジャーナル 第五回（後書き）

ねもい

うきゅあーの名前は、雪羅です。

稀にアドパに出現します。

バグで止まった人は居ないので大丈夫！

たぶんね……。

最近、最初から最後までクライマックスが多い様な気がする。
ちょうど目の前で箒が一夏の頬を叩き、バランスが崩れた一夏が
横向きに転んだ所だった。

敵と思わしきモノの前で何をやっているのか。

だが、目の前で漫才が繰り広げられているにも関わらず、女剣士
みたいな見た目に変化したボーデヴィツヒだったモノが動く気配は
ない。

状況から察するに、アレは自らに敵対行動を取った者に対しての
オートカウンター
み自動迎撃で反撃する何かの様だ。

動きが機械的である事から、操縦者を守る何らかのシステムの暴
走と考えられるが……。

なにかどこかで…。

こんな様な行動を取るシステムを聞いたことがあるような気がする。
る。

「敵の前で漫才とは、見上げた根性ですう」

「「!?!」」

一夏、箒の二人は、周りをキョロキョロと見渡す。

高感度ハイパーセンサーを持ってしても見破られ難いマリーセル
スの擬態を通常のハイパーセンサーで見つける事はほぼ不可能。

幾ら探したところで見つけれられるワケがない。

だが、さすがにいつまでも探させているのは悪いので全身擬態を
解く。

「とりあえずう、理由を説明するですう」

多少驚いたようだが、何事もなかったかのように対応された。

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」

「お前は……いつも千冬さん千冬さんだな」

「それだけじゃ——ぐふっ!？」

情けなくグダグダと喋る男は嫌いだ。

マスターならば、喋る前に考えて最善の行動を取る。だからだろう。

私はほぼ無意識の内に、一夏を蹴飛ばしていた。

「!？なにをする！」

「ちよつと黙るですう」

イング・ペイカーの銃口を箒の米神に当て黙らせる。

「一夏、良く聞けですう。私には昔、好きな人がいたですう。その人は一夏にソックリな人でした。如何なる困難が立ちふさがっても文句も言わず、泣き言も言わず、諦めずに困難を乗り越える人だったですう。ウジウジ、グダグダと情けない事を言っている一夏には似ても似つかないですねえ。でも、私は一夏にその人を見てたですう。だから、本当は自分でやりたいんじゃないですかあ？ ならどうすれば良いか考えるですう。口から文句垂れ流したり、アホみた

いに暴れたりすんのは後でもできんだよ！」

二人はキョトンとした表情をしていた。

一夏の表情だけは次第に変わり、マスターの面影を伺わせる顔となる。

「……。そうだな。そうだ。ここで引いたら俺じゃない！ 織斑一夏じゃない！」

「だが、エネルギーは——」

「無いなら他から持って来ればいい。でしょ？」

私の後ろに、電撃で吹き飛ばされたシャルルがやってくる。

どうやら持ち直したらしい。

「普通のISなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「本当か！？ だったら頼む！ さっそくやってくれ！」

「けど！」

シャルルが一夏を指差し、普段の優しげな雰囲気とは異なる有無を言わせぬ強めの言葉で言う。

「けど。約束して。絶対に負けないって」

「もちろんだ。ここまで啖呵を切って飛び出すんだ。負けたら男じゃねえよ」

「じゃあ、負けたら一夏は明日から女子の制服で通ってね」

「うつ……。い、いいぜ！ なにせ負けないからな！」

どうせだから私も乗っておこう。

「ついでに、水泳の授業は女子用スクール水着で受けるですう」

「え？ いや、それはちよつと……」

「負けないなら大丈夫ですう」

「……。お、おう。負けないから大丈夫だ！」

普通に嫌そうな顔をする一夏。

だが、良い具合に緊張もほぐれ、一夏の表情に微笑みが戻る。

コレならば大丈夫だろう。

さて、私は私の役目を果たすでしょう。

「じゃあ、はじめるよ。——リヴァイヴのコア・バイパスを開放。エネルギー流出を許可。一夏、白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜が使えるようになるはずだから」

「おう、わかった」

シャルルが一夏の白式にエネルギーを送るのを確認した後。

私は、三人とボーデヴィツヒだったモノに背を向け、駆けつけてきた教師部隊に微笑んだ。

「ということであ、ここは一夏に任せるですう」

「一生徒にアレの対処を任せることは出来ない」

まあ、教師としては当たり前な回答だろう。
しかたない。

「誰に向かって口をきいてるですう？」

「？」

「私はマリーチ。マリーチ〃オヴェスト〃ポッツォ〃ファブリカ。
O v e s t P o z z o F a b b r i c a（オヴェスト ポッツ
オ ファブリカ） 社、総帥であるこの私に意見するとは、いい度
胸ですう」

擬態していたナヴァグラハを視認可能状態にする。

もちろん、すでに教師部隊を取り囲むように配置済みだ。

動揺する教師部隊を他所に、私は左腕に最近マスターアップが完了したばかりの新作、魔爪ヴァナルガンドを装備する。

見た目は邪悪な感じのグローブだ。

これは、装着した腕そのものを量子化する事で切り離しを可能としたもので、夢のロケットパンチが出来る武器でもある。

本当は両腕なのだが、まだ肉体量子化の技術が未完成であり、出力が安定していないため、両腕に付けるともっていかれてしまうのだ。

だから今回は片腕のみ。

試験用人形の腕がもっていけなかったので、このヴァナルガン
ドは恐らくは大丈夫だろう。

「何人たりとも一夏の邪魔はさせないですう」

ニッコリと天使の様な微笑みを教師部隊に向け、私は攻撃を開始した。

Side ドロテア「リックン

ラウラ隊長のISが暴走し、学年別トーナメントは中止となった。ただ、コレまでの結果を見るため、後日トーナメント形式ではない試合が行われるかもしれないと避難の手伝いをしている時に山田先生から聞いている。

マリーチ様との戦いから逃れられたと思えたのに……。
どうせだから抽選もやり直しにならないかな？

そうそう、ラウラ隊長は無事に救助され保健室で寝ているとのことだ。

避難の手伝いが終わり、引き返している時に織斑先生に聞いたので確かだろう。

織斑先生も保健室に向かっていているようだし、目覚めた隊長も目の前に織斑先生が居れば取り乱す事もない。

私たち、セシリア様、鈴様に私の三人は、戻る理由も失い寮に戻ろうとしていた所で凄まじい内容を耳にしてしまう。

一夏様がラウラ隊長を止めるために戦っている間、ラウラ様を止めに来た教師部隊をマリーチ様がボコボコにしまったという内容だ。

予めナヴァグラハで囲み、出力の安定していない未完成武装の実験台するなんて…。

その話をしていた人の見た目から察するに、きっと教師部隊の一人だったのだろう。

今にも泣き出してしまいそうな声色だったし、瞳も少し充血して

いた。

そして、榊原先生が本気で慰めているあたり、よほど怖い思いをしたのだと思う。

どうやらマリーチ様は、Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）総帥という肩書きを使っていたらしい。

普段は一生徒として紛れ、総帥としての在り方は霞んで見え難いが、世界第三位の大企業トップに怪我を負わせようモノならば最後に学園をクビにされてしまう可能性もありうる。

いや、それで済めば良い。

一個人とOvest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）で裁判沙汰にもなりかねない。

Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）内部でのマリーチ様支持率は脅威の100%だ。そんな人間しかいないのだから、マリーチ様の意思とは関係なしに裁判を起こしかねないし、裁判になてなったら個人ではまず勝てない。

最悪、法すらも歪めてしまいかねない権力と財力を持っているから性質が悪い。

裁判沙汰にならなかったとしても、マリーチ様に忠誠を誓いまくってしまっているマッドの称号を持つ研究部の方々は許してはおかないだろう。

「はあ。先行きが不安です」

「同感」

「同感ですわ」

溜息を吐きながら1年生寮の廊下をトボトボと歩く。
マリーチ様、一夏様、シャルル様の三名は、教師陣から事情聴取を受けているので、夕方過ぎくらいまでは寮には戻ってこないだろう。

「セシリア様、鈴様、非難した方々はみな食堂に居るようですし、私の寮部屋でノンビリしませんか？」

「あー、うん。いまは喧騒から離れた所に行きたい」

「鈴さんと同意見ですわ」

こうして、私たちは寮部屋で休む事にした。

——寮部屋。

部屋のベッドが一つになっているのを見た二人は、なぜか哀れみの表情で私を見る。

「いえ、大丈夫です。抱き枕にされてるだけなので」

「それって大丈夫なの？」

「大丈夫そうには思えませんわ」

哀れみが同情に変わったただだった。

その後、私たち三人は私側のベッドに腰掛様々な話をする。
基本的にマリーチ様に対することだったが…。

——ドローテアの場合。

「ドローテアってさ。結構前からマリリーの所でメイドしてたの？」

「いえ、まだ1年も経っていません」

「あら、意外ですね。他から見ても忠誠心の高さは伺えますもの」

「うーん。他の人には内緒ですよ？ 私、元々はドイツ軍に所属していたんです。ラウラ隊長と同じ所属でした。ただ、私って本当にダメダメで、出来損ないって言われていたんです。そんなある日、突然出来損ないって言われていた私を引き抜いてくれた方がいまして、それがマリーチ様だったんです。最初はなんだか良く分からないうまにメイドのプロセスとかISの勉強なんかをさせられて、気がつけば専用機も与えられていました。あと、ISアーテイルの調整をしていた整備士の方から聞いたマリーチ様の印象は最悪でしたね。アーテイルを使いこなせなければ、廃棄処分にされるって聞いていたので……。まあ、その整備士の方は「マリーチ様は至高の方だとか「素晴らしい天才」だとか言っていた方が印象に残っていますけどね。狂信者的な意味合いで」

「……」

「……」

「でも、アーテイルの最終調整の時に「専用機を使いこなせなくても専属メイドとして側に置いてやる」って言われたんです。よくよく考えれば、最初にマリーチ様に会った時にも言われてるんですけど

どね。使えなくてもメイドとして側に置いてやるって……。はじめて、人に必要とされたんです。軍では出来損ない扱いだった私を必要としてくれる人に会えたんだって、うれしい気分になりました。あと、生まれて初めて褒めてくれたのがマリーチ様だったんです。だから仕えている時間は短いですけど、私を必要としてくれて、褒めてくれたマリーチ様の為に頑張ろうと……。あれ？ お二人ともどうしたんですか？」

「ドロテア、あたしたち（わたくしたち）応援するからね（しますわ）！」

「え？ はあ？ ありがとうございます？」

—— 鈴の場合。

「あたしが一番マリーとの接点が少ない？」

「そうですね。ドロテアさんがパートナーでしたものね」

「ただ、よく怒られていたのは鈴さんでしたよね」

「……。はあ、アレでしょ？ 「狭いところ（満員のアリーナ）で双天牙月を投げるんじゃないですう」って言われて丸いビットみたいなのでフルボッコにされたヤツでしょ？」

「その間、わたくしへの攻撃の手が緩むので助かっていましたわ」

「満員状態のアリーナだと他の人に当たってしまいますからね」

「でもさ、ドロテアって基本中距離だし…。双天牙月で斬りかかるにも距離的にさ。龍咆だって避けるし」

「鈴様は、龍咆で撃つ場所を見る癖がありましたので、ハイパーセンサーで目の動きを追っていれば大まかな攻撃位置の予想が出来ましたので、予想される範囲から外れるように動いただけですよ？」

「普通そんな事できないから」

「はあ、それにしても鈴さんが羨ましいですね。マリーチさんの恐怖を体験したのがあの一件だけなんて」

——セシリアの場合。

「セシリア様は、マリーチ様がパートナーでしたからね」

「あの時のマリーの事は思い出さないようにしてたのに…。ラウラが可愛く思える程だったし、目の前に助けに現れたのは、一夏でもなく、正義の味方でもなく、恐怖の魔王でしたみたいな感じ」

「わたくしはその魔王がパートナーでしたのよ？ 終始、地獄の様な日々でしたわ」

「……」

「……」

「訓練中は生かさず殺さずのギリギリラインを基本として、BT操作時の隙を狙って半殺しなんて当たり前でしたわ。BTは6基、マ

リーチさんのナヴァグラハは9基。BTを迎撃に回しても3基は確実に狙って来るあの恐怖は忘れられせんわ。おかげで、BTを操作しながら動けるようになりましたけど……」

「アリーナにマリーとセシリアがいる時は、セシリアの悲鳴を聞かない時がなかったしね。知ってる？ みんな出来るだけ訓練中のマリーとセシリアには近寄らないようにしてたの」

「……。知っていますわ」

「あの、一つ疑問に思っていたのですが、セシリア様はマリーチ様のことをチーフと呼びになっていましたよね？」

「それあたしも気になってた。なんでチーフ？」

「簡単ですわ。マリーチさんの教え方はムチだけじゃなくてアメもありましたの。上手く行動したり、攻撃を掻い潜ったりしたら褒めてくれましたわ。本当にマリーチさんは人を褒めるのが上手い方ですわ。ボロボロなのにやる気が出て来るような褒め方をするんですもの。だから尊敬の意を込めてチーフと呼ぶ様にしましたの」

「……。マリーチ様はその技能（飴と鞭）でO・P・F内での支持率は脅威の100%なんですよ」

「……。なにその究極女王……。ほんと、あたしのパートナーがドロテアでよかったわ」

「それに、チーフって呼べば……。わたくしは強くなる為に頑張ってるんだって思えましたの」

「うん。頑張ったのね。セシリア」

「セシリア様、頑張ったんですね」

こうして、私たちの話し合いは部屋にマリーチ様が戻ってくるまで続いた。

後に、話し合いの場所はラウラ&シャルロット部屋に移ることになったが、基本的な話題が変わることは無く、全員が思うマリーチ様に対する事を話し合う場所として一日も欠かされる事はなかった。

Ver. 24 (前書き)

外伝

Ver. 1の少し前のある支部でのお話

Side フランス支部 in 支部長

私の目の前には、日本支部で開発された第三世代型が2機ある。
日本支部と言っているが、日本支部こそ本社と言っても良い扱い
になっており、O・P・F総帥であるマリーチ様が拠点としている
場所だ。

「くつ、日本支部に遅れを取るなど……。私たちフランス支部の第
三世代型の完成はまだか！」

一番最初に第三世代型の開発に着手したのは、我々フランス支部
のハズだった。

だが、先に完成したのは日本支部。

本来ならば、マリーチ様をお迎えし、第三世代型アークと第三世
代型イーダをお見せするハズだったのに…。

「クトウグアお姉さま、落ち着いてください。今年の五月には完成
いたしますわ」

何時からそこにいたのか、優雅に紅茶を飲む妹。

副支部長イクタアの姿がある。

「だが、このままではマリーチ様を呼ぶことが出来ないじゃないか
！」

「だ・か・ら、落ち着いてくださいまし、クトウグアお姉さま」

そう私に言うイクタア。

だが、イクタアの方が私の様に焦るべきなのだ。

イクタアはマリーチ様の家庭教師を務めていた過去がある。
私以上にマリーチ様に会いたいハズ。

「全く、そんなのだから何時まで立つても結婚できないんですわ」

「な！ それは関係ないだろ！」

「はあ、エリーとジルにはこうなつて欲しくありませんわ」

娘の写真が入ったロケットを開き、ウツトリとした表情をするイクタア。

ちなみにイクタアは18の時に籍をいれ、21の時に双子を出産している。

その後、22の時から23までの1年間、マリーチ様の家庭教師を務めたのだ。

そういえば、こんな事もあった。

以前、イクタアの娘を愛する心が爆発し、第三世代型エストリルと第三世代型ジルリバーズというISの設計図を持ってきた時はさすがに焦った。

なにせISには絶対数が存在する。

フランス支部が保有するコアの数は3つ。

現在作成中の私専用ISAーク、イクタア専用ISIーダで2つ使っているのに、さらに二つの専用ISを作るとなると、他の支部からコアを譲渡してもらわなければならない。

ドイツ支部のナラトウース（専用ISMルメルティア）、トゥーサ三姉妹（専用ISゼルノグラード）。

アメリカ支部のファロル（専用ISシャラタン）、ルサ（専用ISベイベーラス）。

ブラジル支部のウトウルス（専用ISオールベルン）、フルエフル（専用ISジールベルン）。

ギリシャ支部のシュブ（専用ISヴェルヴィエッタ）、ニグラート（専用ISリルビエート）。

彼女らに頼むのは非常に屈辱的だ。

特にギリシャ支部の二人には頼みたくない。

二人とも既婚者であり、大恋愛の末に結婚したとして他の支部でも中々に有名なのだ。

む、話がソレだが、この様にイクタアの方が私よりも感情的になり易いハズなのに……。

「焦った所で完成が早くなるワケではありませんわ。それにフランス支部はデュノア社を抑える為の要。マリーチ様がもっとも訪れる可能性が高い支部ですわ」

ロケットを閉じ、また優雅に紅茶を飲み始めるイクタア。

確かに、フランス支部はデュノア社を抑える為の要として他の支部よりもO・P・F本社から様々な援助を受けている。

マリーチ様が視察しに来る回数も一番多い。

「ああああ！？ もう！！ 私は走って来る！ 何かあったら電話してくれ」

「分かりましたわ。でも、またスピード違反で捕まらないでくださいましね？ 迎えに行くわたくしの身にもなって欲しいものです」

「っ！？ わ、わかつてるわよ！ それじゃ、いつてくる」

「いつてらっしゃいませ」

そう言つて、私は支部長室を後にした。

向かうは、愛用バイクのある倉庫。

そんなやり取りの数カ月後、マリーチ様からの命令によりデュノア社のシャルル・デュノアという人物を調べる事になる。

相も変わらずデュノア社のやる事は外道だ。

なんとしても、あの会社はフランス支部が沈めなければならない。私の正義のために！

そして、マリーチ様に褒めてもらう為に……！！

Side 開発コンピューター

第三世代型ハイスピードトライク「アーク

フランス支部支部長クトウグア「デュルフェ（27歳）の専用IS。」

O・P・F社の中で最も早く製造に着手された第三世代型だが、完成は日本支部のエウ克蘭テとイーアネイラの方が先だった。

市街戦をコンセプトとした特殊なISであり、IS本来の在り方である宇宙開拓などは不向き。

宇宙空間での活動は想定外だが、惑星に降り立てばどのような地形であっても走ることが可能である。

また、トライクモード（パトロクロス）という状態では理論上

最大時速8000kmで走行可能。

地球上でこの速度を出す事は絶対に不可能。出せても摩擦で自滅する。

第三世代型ハイマニューバートライクⅡイーダ

フランス支部副支部長イクタアⅡカザノヴァ（旧姓デュルフェノ26歳）の専用IS。

アークと同時に製造された姉妹機である。

市街戦をコンセプトとした特殊なISだが、アークとは異なりアームパーツによる宇宙開拓などにも確りと視点が置かれている。

アーク同様にトライクモード（ヴィシュヴァ・ルーパー）になる事が可能。

理論上の最大速度は時速1000kmとアークに比べるとかなり遅いが、それでも速い事に変わりはない。

第二世代型コンバットビークルⅡムルメルティア

ドイツ支部支部長ナトウースⅡシュローター（36歳）の専用IS。

徹底的なまでに軍事利用を考え抜いた末に完成した。

最初は量産型として売り出す予定だったが、あまりにもこたわってしまった為、常人では使いこなせないピーキーISと化してしまふ。

現在使いこなせるのは、ムルメルティアを専用機としているナトウース一人。

第二世代型シューティングアイアンⅡゼルノグラード（三姉妹仕

様)

ドイツ支部副支部長フィネートウーサ(20歳)、テアートウーサ(18歳)、イルマートウーサ(16歳)、トウーサ三姉妹の専用IS。

デュノア社のラファール・リヴァイヴ・カスタムに張り合つて作り出された第二世代型ISである。

ただし、徹底的なまでに火器使用を考えたピーキーISであり、操縦者は様々な銃器・重火器を使いこなせる腕前、どのタイミングでどの銃火器を使用するかなどの判断能力を求められる。

量産型では在るが、ゼルノグラードを専用機としているのはトウーサ三姉妹だけだ。

三女イルマがゼルノグラードベリク、次女テアがフォートブラッグダスク、長女フィネがゼルノグラードヘビーとなっている。

第二世代型ガンバッテリーフォートブラッグ

テアートウーサがゼルノグラードを改造しまくった末に誕生したIS。

固定砲台である。

火力は現存するISの中でも最大であり、中距離、遠距離戦闘においては無敵の文字を与えられている。

しかし、固定砲台で在るが故に近づかれると脆く、三女と長女の守りにってこそそのISと言えるよう。

第二世代型ストラディヴァリッシュヤラタン(紗羅檀)

アメリカ支部支部長ファロルアシュリー(28歳)の専用IS。

音に視点を置いて製造された異色のIS。

一応第二世代として登録されているが、実際は未完成であり何世代型とも言えない。

『Pluck thy my flower, My dear』

第二世代型エレクトリック「ベイビークラス」

アメリカ支部副支部長ルサ「ブラックマン（15歳）の専用IS。

シャラタン同様に音に視点をおいて製造された異色のIS。

ルサ「ブラックマン及びアメリカ支部員数名で結成されたロックバンドにより製造された為、何時まで立っても未完成。

常に改造と理論組み換えが行われている。

第二世代型ソードクイーン「オールベルン、ソードマスター」ジールベルン

ブラジル支部支部長および副支部長ウトウルス「アレニウス（13歳）、フルエフル「アレニウス（13歳）の双子の専用IS。

アレニウスはスウェーデン出身であり、北欧神話に影響されて製造されたISである。

接近戦闘に特化されており、連続して瞬時加速を行う事が可能。オールベルンが白を基調とし、ジールベルンが黒を基調としている。

第三世代型ビクバイパー「ヴェルヴィエッタ」

ギリシャ支部支部長シュブ「メティス（22歳）の専用IS。

まだ未完成でありその全貌は定かではない。
しかし、いままでのISとはコンセプトそのものが異なるIS
として製造されている。

第三世代型ビクバイパーⅡリルビエート

ギリシャ支部副支部長ニグラートⅡメティス（21歳）の専用
IS。

ヴェリヴィエッタ同様に全貌は定かではない。
姉妹機として作られている為、見た目は似たような感じの様だ
が……。

Ver・25（前書き）

修正

教室の扉が物凄い勢いでた。

教室の扉が物凄い勢いで開い

理由

脱字

ストラス 様に感謝

暴走事件の件から一日。

SHRにシャルルの姿はなかった。

一夏に理由を聞いても食堂で別れ、その理由は聞いていないとの事だ。

オマケにボーデヴィツヒもない。

ボーデヴィツヒ自身はそこまで重傷ではなかったと思うが、ISの方は半壊状態だろう。

今頃、ISの修理を行っているのかも知れない。

「み、みなさん、おはようございます……」

なぜか山田先生は元気がなかった。

テンションガタ下がりというよりは、何か衝撃的な事が在って氣力を失っている感じがする。

「織斑君、なにを考えているかはわかりませんが、私を子供扱いしようとしているのはわかりますよ。先生、怒りますよ。はあ……」

一夏が何か山田先生を子ども扱いするような事を考えていたらしい。

しかし、怒りますよと言っているわりに覇氣がない。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といえますか、すでに紹介は済んでいるといえますか、ええと……」

山田先生の説明は微妙なものだ。

私も含め、すでに4人もの転校生が来ているというのに、ここに来て5人目とはなんともし難い。

やはり、ブリュンヒルデが担任という事で1組に入りたい人間は多いのだろう。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

聞いた事のある声がした。

「シャルロット＝デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

女子制服を着たシャルルもといシャルロットが礼儀正しく一礼する。

クラス全員が啞然とした表情をしている。

表情にこそ表していないものの、私も少なからず啞然としていた。私が考えていた以上に、シャルロットという人物は積極的な女性のようなのだ。

これでシャルロット引きこみ作戦は白紙に戻ってしまったが、なんとかしてシャルロットをデュノア社の社長にまで引き上げてやるう。

なに、3年間もあれば耄碌爺を一人落とす程度は容易い。

そんな事を考える私の瞳には、クラスの全員がシャルロットに釣られるように一礼している光景が映る。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はああ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業がはじまります……」

なるほど、山田先生に覇気がなかった理由はその部屋割りをやり直すのがイヤだったからなのか。

しかし、その程度で落ち込む教師というのはどうなのだろうか？

「え？ デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったわけね」

そういえば……。

昨日は確か……。

「って、織斑君、同室だから知らないってことは——」

「ちょっと待って！ 昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

そうだ。

一夏とシャルロットが大浴場を……。

「マリーチ様？」

一夏がハーレムを作るのは許せる。

何人妾が居ようが問題はない。

これは、私が武装神姫マリーチとしての記憶を有しているからなのだろう。

マスターは私以外の武装神姫を買わなかったが、普通は数種類の武装神姫を持っているものだ。

だから、何人の相手がいようが構わないし、欲を言えば私が本妻であって欲しいが、別に妾でも構わない。

だが、お風呂は許せない。
裸で……。

「一夏あつ!!!」

何か聞えたような気がした。

でも、この胸の底から湧きあがってくる何かを…。

フツフツと湧き上がってくる何かを知る方が先決だ。

《ソハ、ワタ イバ ヨダ。ワ ノバ ヨダ》

Side ドロテア「リッケン

教室の扉が物凄い勢いで開いた。

「一夏あつ!!!」

そこには、鬼の様な形相をした鈴様がいる。

1組女子の声が2組にまで聞えてしまったらしく、鬼人ゲージが
一気に振り切れて常時鬼人強化状態になってしまったらしい。

「死ねっ!!!」

普段よりも早い速度でISを展開し、展開とほぼ同タイミングで
両肩の龍砲をフルパワーで一夏様に向けて解放した。

この速度では一夏様のIS展開は間に合わないだろう。

場所的に一夏様を助ける為に駆けつけることが出来ない。

それになんだかマリーチ様の様子もおかしい。

しかし、このままでは一夏様がご自身のトマトケチャップ塗れになってしまう。

プレシジョン・バレルならば、龍砲を相殺できるが同時に相殺時の余波で一夏様が木っ端微塵になってしまう可能性もある。

それに、マリーチ様が行動を起こさないのはおかしい。

絶対に何かしら行動を起こすと思っていたのだけれど……。

なんか、私もおかしい。

考えが纏まらないし、自分でなに考えているのか分からなくなってきた。

ズドドドドンッ！

結局、混乱した私は、何もしないままその光景を見守ることしかできなかった。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

肩で息をしている鈴様の姿は、怒った猫の様にも見える。

元々鈴様はねこ科の様な感じがあつたし、猫は好きなので、私には鈴様も可愛らしく見えていた。

なんの因果か、アーテイルも山猫型らしいし…。

いつか鈴様には猫耳を付けてもらおう。

そして、写真を1枚撮って携帯の背景にするんだ。

そんな感じで現実逃避をしていたのだけど、逃避先の妄想から戻ってきた時、私の目に映ったのは信じられない光景だった。

あのラウラ隊長が、一夏様を守っている。

しだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

そう吹き込んだのは、おそらくクラリッサ副隊長だろう。
クラリッサ副隊長は日本の少女漫画の熱狂的なファンで、そこから日本文化の知識を得ている。

そのためか内容はかなり偏っており、間違いだらけだ。

私もO・P・Fに来た当事は、クラリッサ副隊長が言っていた事を少し信じていた節はあったが、当の日本人から間違いだと言われ、現実とアニメの絶対的な差を思い知る。
恥かしい思い出だ。

「あ、あつ、あ……！」

どうやら鈴様が再起動したらしい。

それと同時に龍砲の方も再チャージが開始されている。

「アンタねえええつ……！」

「待て！ 俺は悪くない！ どちらかというと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！ 全部！ 絶対！ アンタが悪い……！」

一夏様は早々に説得を諦め、教室後ろ側出口から脱出を試みている。

だが、それはうまく行かないだろう。

「ああ、一夏さん？ どこかにおでかけですか？ わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。 ええ、突然ですが急を要しますの。 おほほほ……」

鈴様同様にゲージが振り切れてしまい、病んでいる状態になってしまったセシリア様がゆつくりと席を立つ。

その手にはスターライトmk.3が握られており、二度目の射撃に備えてトリガーに指がそえられている。

一夏様はドアからの脱出を諦め、窓の方へ向かう。

白式を展開し、脱出するつもりなのだろうが、窓側には箒様の席があり……。

「……一夏、貴様どういふつもりか説明してもらおうか」

「待て待て待て！ 説明を求めたいのは俺の方で——おわあっ！
？」

問答無用で斬りかかる箒様。

法の外側に在るとはいえ、真剣を教室に持って来ても良いものなのだろうか？

窓からの脱出も不可能となった一夏様は、デタラメな逃走をはじめ。

その先に笑顔を湛えたシャルロット様がいるとも知らずに……。

「にこっ」

「に、にこっ」

にこって自分の口で言う時点でかなり怒っている事が分かると思うが、一夏様には分からなかったらしい。

それとも、シャルロット様のエンジェルスマイルは怒りすらも覆い隠す効果があるのだろうか？

「一夏って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりだな」

「あのー……シャルロットさん？ 俺はされたんであって、したわけではないし、そしてなぜISを起動させているのか」

「なんでだろうね」

シャルロット様はそういうと、左腕に装備された盾をパージする。その下から姿を現したのは、69口径パイルバンカー灰色の鱗殻。

「は、はは、ははは……」

「ふ、うふふ、うふふふ、あはははは」

一夏様の気の抜けた笑い声と共に、マリーチ様の狂ったような笑い声が教室に響く。

みんながギョツとした表情でマリーチ様を見たときにはすでに遅かった。

「地獄の扉が開くのですう。——グジュグジュのギョルギョルのビチビチですう！」

ドカアアアアンツ……！！

展開された機械触手の下から無数の弾丸が放たれ、教室は轟音と爆音に包まれた。

「アッハハハハッ……！！」

後日聞いた話だが、1組から絶える事なく聞えてきたのは、底冷える様なマリーチ様の高笑いだけだったらしい。

S i d e マリーセレス

システムメッセージ：ワンオフ・アビリティ・バツカルコーン＋E83が使用可能となりました

O・P・F | NETジャーナル 第六回

「初めまして、今回よりO・P・F | NETジャーナルを担当する事になった忍者型MMSフブキのアドウムブラリと申します」

「うきゅ（訳：一人だとつまらないので、次回に引き続き一緒にいるミニツクの雪羅です）」

「今後は二人でやって行きます。それでは、第六回を開始します」

「きゃきゃきゅ（訳：わーわー、パチパチパチ）」

「とりあえず、私アドウムブラリの説明をしましょう」

忍者型MMSフブキ/名前：アドウムブラリ。

武装紳士、武装淑女が一番最初に受け取る武装神姫。

元々ネット限定だったが、人気があつたためホビー化した。

ちなみに作者もフブキはかなり気に入っており、マリーセレスよりも先にLoveが30になった。

（現在、86とか断トツである。アーンヴァル？ ごめん、Love38で止まってるや……）

本作に登場する予定はない。

登場するのなら式式装備になると思われるが、12年2月23日発売なんだよね。

おそらく、その頃には完結していると思われる。

補足説明、アドウムブラリ。

アドウムブラリは、どこかの次元で青みがかった靄に隠された深遠の奥底に棲息している？生ける影？と呼ばれる存在だ。

自分の意志で動く事は不可能だが、人間そっくりな使者を作って次元を超えて送り込む事ができる。

使者は、主人の為に人間（獲物／餌）を捕らえるらしい。

「では、感想の返信に移ります」

「うきゃー（訳：今回は比較的早めに返信できた。やったね）」

>緒方 紅夜 様<

支部内忠誠度が異常ですなww

マスターの睨を自分なりにまねたのかな？

武道の師範とかそんな感じで厳しくかね。

ヤクザの手法、どん底から手を伸ばすではなくてよかったwww

そういえばマリーのセリフ途中で豹変するのはどんな感じでなるのかな？

いきなり般若みたいになるのかそのままの顔で言ってるのか、気になる。

あと、量産型の方々を全部姫神で想像したら萌えた。
ぜひともアイドル型の登場がみたい。

武装はどんくらいだったっけな、アイドル。

てか姫神の武装のネタ武器を作るかどうかだな……

「ヤクザの手法は、下克上される可能性が微妙にありますからね」

「きゅうきや？（訳：自らに信頼を寄せさせる事で下克上の可能性すらも減らしてる？）」

「さて、アイドル型ですが……。一部、出せそうな箇所があるので試してみます。ネタ武器に関しては、号泣剣クレイモアもありますので、多少は出す予定です」

「きや（訳：豹変の描写をどこかで書いてみます）」

> k u s a r i 様<

なんだかあっさりと終わってしまって少し物足りない気分です
てつきり前回の最後から一夏そっちのけで教師陣との戦闘が描かれるのかと思いきやいきなり終わっていたのでおどろきです

今回はマリーチ様は出ておらず後で「私をのけ者にしたおしおきですう」とかいつてドロテアが何かされないか心配です

「書こうとは思ったのですが、背後のスキル不足です。申し訳ありません」

「ううきや（訳：でも、福音との戦いはシッカリ描写します）」

> 骨皮 筋男 様<

ゼルノ三姉妹ですか！

ってことは、勿論死亡フラグ癖も・・・？

神姫の中で一番好きなのは、実はゼルノグランドだったりします（
フィギュア持っていないけど・・・）
ベリク欲しいなあ・・・

「無論です。死亡フラグのないゼルノグランドなんていません！」

「きょう（訳：呼吸するように死亡フラグを乱立）」

> 緒方 紅夜 様<

まともなのがブラジルしかない現状……

そしてギリシャには頑張ってほしいっ！

あの形状には心躍る！

エストリルとジルリバーズはかつこいい。

こっちの方が市街地戦向きでは？

比較的すっきりした感じですし、平時はバイクですし。

三輪車え……

高重力の星では活躍しそうですが……限定的ですね。

PICが逆に邪魔ですし、でもない制御もままならない。
はっ！ 逆に考えるんだ！

キャノンボール専用機に違いない！

「アメリカ支部も比較的まとめますよ。支部長がまったりなので」

「ううきやう（訳：ギリシャ支部は、とある事件の時に完成して駆けつける予定があったり）」

「O・P・F社は自由な思考を優先します。使える使えないは、二の次ですが、もちろん企業なのでお金稼ぎの事も考えて……（以下略）」

>しんかー様<

ジルリバース型が一番好きですが、声が箒とかぶるという……。

でもISとして見ると実用性に疑問大ですね。残念です。走るより飛んだ方が、直線距離を移動できるので絶対速いですから。

「ご安心ください。ジルリバース型がモデルである人物はイーダ型がモデルである人物の娘なので、年齢的に幼く、登場したとしても子供時代の箒みたいな声になるかと」

「きゆう（訳：ヘリツシユクレイドルEXを空中で発動すると、飛んでる様な感じになったんできつと大丈夫）」

「または、浪漫であると……」

> 骨皮 筋男 様<

吹っ切れてワンオフ解除ですか!!

恐ろしやマリーチ様……

そういやゼルノはロシアでしたね。んでもってフォートはアメリカ、ムルメはドイツ……。実はめっちゃ仲悪いんじゃない……

「一番年上がムルメルティア型がモデルの方なので、姉妹の方で喧嘩をする事は無いようです」

「ううきやあ（訳：乱立する死亡フラグを押し折ったり、代わりに押し付けられたりするフォートブラック）」

「うきゅ。きゅああああ！（訳：今回はコレで終わります。 前回の宣言通り、本気だせた！）」

「それでは、O・P・F―NETジャーナル？はOvest Po
zzo Fabrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）
とA/cute Dynamixアキュート・ダイナミックスの
提供でお送りいたしました。次回もコレくらいのペースでやりたい
ですね」

朝っぱらから騒がしい事だ。

遅刻しそうになりシャルロットが部位展開を行つたらしい。

「本学園はISの操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためこの国にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けないがしかし――」

出席簿の頭を引っ叩かれる一夏とシャルロット。
実に痛そうだ。

「敷地内でも許可されていないISの展開は禁止されている。意味はわかるな？」

「は、はい……。すみません……」

優等生が規律違反を犯したのが衝撃的だったのか、啞然としている生徒が多い。

ちなみに、一夏とシャルロットが怒られている間に箒とラウラはコッソリと自分の席に着いていた。

「デユノアと織斑は放課後教室を掃除しておけ。二回目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」

「はい……」

その後、二人が席に付くと共にチャイムが鳴る。

「今日は通常授業の日だったな。IS学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

実に面倒な事だが、IS学園も一応は高校。

すでに大学を卒業している私としては、暇で仕方がない。

中間テストがないため、面倒なイベントが一つへって嬉しいけれど、期末テスト一回で成績が左右されるのは一部の生徒にとってはきつくないか？

「それと、来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物なとするなよ。三日間だが学園を離れる事になる。自由時間では羽目を外し過ぎないように」

七月頭に行われる校外実習、いわゆる臨海学校。

去年ならその時期はプライベートビーチでノンビリしているところだが、今回はお預けだ。

だが、海という事は一夏の水着が見れる。

「悪くないですう。いまから楽しみですう」

「ではSHRを終わる。各人、今日もしっかり勉強に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」

委員長タイプの鷹月が織斑先生に質問をした。

朝から山田先生の姿が見えなかったから少しは気になっていたが……。

「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。」

なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する」

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行ってるんですか！？ いいな」

「ずるい！ 私にも一声かけてくれればいいのに！」

「あー、泳いでるのかなー。泳いでるんだろうなー」

山田先生とて仕事で言っているわけだから泳いでいる可能性は低いだろう。

それに、山田先生はかなりマジメな性格をしているし……。

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行ってるんだ。遊びではない」

「……はい」

実に鬱陶しそうに言う織斑先生。

その言葉に一齐に返事をする1組も中々度胸が付いてきたと思う。

——そして臨海学校初日。

休日になにやら面白いイベントが合ったらしいが、一夏は鈍感なので大丈夫だろうと判断し、私は一日中ドロテアを抱き枕にして寝ていた。

実に抱き心地が良い。

日に日に柔らかい部分が大きくなっている様な気がするあたりに

イラストとするが、まあ良いだろう。

「海っ！ 見えたあっ！」

はあ……。

いまま隣の席に座っているドロテアに抱き付きながら惰眠を貪っていたのに……。

1組はみんな元気だ。

むしろ、元気すぎるくらいだろう。

ちなみに一夏の隣に座れたのはシャルロット、セシリアの隣にはラウラ、私の隣はドロテアという感じになっている。

さらに一夏とシャルロットの席の向かい側がセシリアとラウラの席だ。

箒はセシリアとラウラの席の後ろにいる。

私とドロテアの席はそのさらに後ろだ。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

織斑先生が口を開くと、全員文句を言わずに従う。

私もあれほどの指導能力が欲しいものだ。

「マリーチ様、そろそろ到着するようです。起きてください」

そう言って私を揺さぶるドロテア。

おそらく私が起きている事には気がついてはいるが、一応形式的に行っているのだろう。

「むう……。わかったですう」

さもいま起きたという感じに伸びをし、軽くあくびをしながら目を擦った。

ほどなくしてバスは目的地である旅館前に到着する。なんかもう殆ど寝ていた様な気がするが、どのクラスにも私みたいなのは一人くらいいるだろう。

身体の方は少しだけ寝ぼけていたため、ドロテアに手を引かれ1年1組の列に整列する。

4台のバスから出てきたIS学園一年生の総数はかなりの物だ。一般客が居たら間違いなく「邪魔」と思うことだろう。なにせ、旅館の出入り口を占拠しているのだから……。

だが今回、というか……。IS学園での場合はそういう心配はない。

なにせ、旅館そのものを貸切状態に出来る財力を満ち合わせている。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「……よろしくおねがいします」

織斑先生の言葉の後、一年生全員が元気良く挨拶をする。

それに答えたのは、三十代前後と思われる着物姿の女性だ。旅館の女将さんなのだろう。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね
今年の一年生もか……。

IS学園の一年生は、毎度毎度元気が有り余っている女子ばかり

なのだろうか？

もう少し、私みたいな武装淑女を育成した方が良いと思う。

「あら？　こちらが噂の……？」

女将さんは一夏を見た後、織斑先生に質問をしていた。
しかしまあ、女将さんと織斑先生の世間話に興味はない。

「ドロテア。初日の予定はなんですか？」

「はい。初日は終日自由時間です。海に行けますか？」

あー。

ジイヤが用意した水着があつたな。
確認はしていないが……。

「ま、水着はあるし、荷物置いたらすぐに行くですう」

「承知いたしました」

そんな話をしていると、ちょうど女将さんと織斑先生の世間話も
終わったらしい。

「それじゃあみなさん、お部屋の方へどうぞ。海に行かれる方は別
館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用な
さってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いて
くださいまし」

「……はい」

みんな元気に返事をし、旅館の中へと向かって行く。

途中、一夏がドロテアの友達に捉まっているのが見えたが、少し話すと織斑先生に呼ばれて別の場所へと移動していった。

「部屋に行くですう」

「承知いたしました」

「私も行こう」

「わたくしも行きますわ」

「ほら、ラウラも行こう」

「……。あ、ああ」

鈴を除いた私、ドロテア、箒、セシリア、シャルロット、ラウラは割り振られた部屋へと急いだ。

やはり海は良い。

なにせ、海は私の領域だから……。

Ver. 26 (後書き)

武装神姫マリーセレスって、装備品からしてクトウルフがモデルだ
と考えているのは、絶対に私だけではないと思う。

クトウルフは水を象徴する旧支配者の一柱とされているが、別に水
の属性を持っているワケではないらしい。

その証拠に、クトウルフの精神崩壊テレパシーは大量の海水により
遮られている。

眷属には右腕のムナガラー、父なるダゴン、母なるハイドラ、水棲
種族「深きものども」(レッサー・オールド・ワン/ディープ・ワ
ン)などがある。

住処であるルルイエが海底に沈み、自身もその場に封印されたので、
周りの水棲生物を片っ端から支配下に置いて守りを固めたんじゃない
かな?と勝手に妄想をしてみる。

ちなみに、最も信仰されている旧支配者だが、実力は中の中くらい
であんまり強くないらしい。

中の上くらいから強さがインフレを起こす事を考えると、弱い部類
に入るかもしれない。

目の前に広がるのは、何処までも繋がり、地球の半分以上を支配する海。

ああ、海は素晴らしい。

すべての生命を育み、生み抱いたもの。

Side ドロテア「リックン

気がつくと、マリーチ様が姿を消していた。

確かに更衣室には一緒に入ったはずなのに……？

「どうした？」

箒様が不思議そうな表情で私を見ながら聞いて来た。

「それが、マリーチ様の姿が見えなくなってしまった」

「あら？ マリーチさんなら物凄い速さで海に向かいましたわよ？」

1分くらい目を離したただけなのに……。
さすが、マリーチ様。

「私は先に行くぞ」

水着に着替えた箒様はさっさと海に向かってしまった。

セシリア様もなにやら少し用意したあと、箒様に遅れて更衣室を

後にする。

シャルロット様は、なにやら包帯オバケと化しているラウラ隊長を更衣室から出そうと四苦八苦していた。

「まあ、考えてても仕方ないですよね？」

誰に言うわけでもなく、私はそう呟いてから海へと向かう。

その途中、背後から鈴様に強襲を掛けられ、少し揉まれてしまったが……。

「……。うう……。うわぁ〜ん!？」

とか、半泣きになって走り去る鈴様を見ることが出来たので良しとしよう。

私は走り去る鈴様を追うように砂浜へと向かった。

——砂浜。

鈴様に続けて砂浜に到着した私の目に映ったのは、蒼い海、白い砂浜、照りつける太陽。

そして、やはり元気な１年生の皆様。

あと、鈴様が直進する先に準備運動をしている一夏様が見えた。鍛えているらしく、そこそこ筋肉が付いている。

確か、幼少の頃に箒様と一緒に剣道をやっていたらしいし、織斑先生に鍛えられたと聞いているから、ある程度筋肉が付いているのは当然なのだろう。

中々男らしくて良いと思う。

私は恋愛にあんまり興味ないし、マリーチ様に一生仕えるので一夏様を見ても特に何も感じない。

「い、ち、か~~~~っ！」

鈴様は一夏様にある程度近づくと、そう叫びながら一夏様の背中に飛び付く。

小さい為か、それとも幼い頃から抱き付いていたから慣れているのか、一夏様は鈴様が飛びついても別に何も感じていないようだ。

「あんた真面目ねえ。一生懸命体操しちゃって。ほらほら、終わったんなら泳ぐわよ」

「こらこら、お前もちゃんと準備運動しろって。溺れてもらねえぞ」

「あたしが溺れたことなんかないわよ。前世は人魚ね、たぶん」

そんなことを言いながら、一夏様の身体をよじ登り肩車の状態になる。

ちなみに鈴様の水着はおへその出ているスピーティーなタンキニタイプだ。色はオレンジと白のストライプ。

私の水着は、セバスチャンさんが用意した物をそのまま使っている。

白いI型モノキニという水着だ。

前から見るとワンピース水着ぽく見え、後ろから見るとビキニに見えるというヤツ。

ついでに言うのなら、マリーチ様も同じタイプの水着で色は黒紫でダークな感じだったと思う。

「あの……。鈴様、一夏様が困っていますよ」

私は一夏様に近づき、鈴様に言った。

なんだか一夏様の顔が紅くなった様な気がした辺りから、一夏様の視線を感じる。

「……。ぐはっ!？」

肩車状態の鈴様が一夏様の胸部に思いっきり踵を入れた。

鈴様を落とさない為か、なんとか体勢を崩さないようにしているが、凄く痛そうだ。

「ちよつと一夏!？ ドロテアのどこみてんのよ！ 監視塔が一点ばかり見つめてんじゃないわよ!」

「いてえな…。てか、監視塔かよ」

なんだか、鈴様と一夏様は楽しそうだからそのままにしておこう。セシリア様も加わったようだし……。

はあ、マリーチ様はどこに行ってしまったんだろう？

「一夏さん、さっそくサンオイルを塗ってください!」

「「「えっ!？」」」

大きな声が聞えたので、一夏様の方に視線を向けると……。すでに一夏様は複数の女子に囲まれていた。

「私サンオイル取ってくる!」

「私はシートを!」

「私はパラソルを！」

「じゃあ私はサンオイル落としてくる！」

なんだか最後の人だけ少し違うような気がする。

1組女子は、最後に発言する人は微妙に違うような事を言うのが決まりなんだろうか？

しかも、今回は言うだけではなく、実際に海に入りサンオイルを一生懸命落としていた。

彼女は本気で一夏様に身体を触ってもらいたいのだろう……。

女子たちも解散し、——各自用意が出来たらまた戻ってくるのだろうけど——私も特に一夏様の側にいる理由を感じなかった為、その場を離れた。

途中、シャルロット様に手を引かれて移動するオバケ。もとい、ラウラ隊長が目にはあったが、お二人も一夏様争奪戦できっと忙しいのだろう。

私には気がつかず、一夏様の方へ向かっていった。

私は、みんなが遊んでいる砂浜から少し離れ、海底洞窟ポイントになっていて岩肌が露出している場所を目指して泳ぐことにした。特にコレといった理由は無いが、なんとなく何か在りそうな気がする。

何か危険な物があつたとしても、私の首にはアーティルの待機状態である首輪が常に付いているので問題ないだろう。

「なにか面白い物を見つければ、マリーチ様が喜ぶかもしれませんね」

そんな事を眩き、水泳部トップを軽く凌駕する泳ぎで目的の場所へと向かった。

この時の私は考えもしなかった。

その先で、恐ろしいものを見てしまうなんて……。

Ver. 28 (前書き)

修正

天災はとのかく

天災はとにかく

理由

誤字

ストラス 様に感謝

さて、彼女と会う約束をしてるのはこの洞窟のはずだ。

約束の時間が近いからという理由でドロテアを置いてきたのに、私を待たせるとは良い度胸をしている。

「マリーチ様、申し訳御座いません。お待たせしてしまいました」

洞窟内部にある岩場に腰掛ける私の前に、イーアネイラBを装備した女性が上半身だけを海から出して一礼する。

彼女の名は、網ハイドラ（あみ はいどら）という。

O・P・Fの極秘IS部隊の隊員だ。

ちなみに彼女の夫の名前は、網あみ舵たこ権。

O・P・FでIS開発中間管理職として働いている。

「遅いです。それで、海底プラント？イハンスレイ？プロジェクトはどのくらい進んでるんです？」

「現在の全体進行状況は46%ほどです。太平洋38%、大西洋36%、小笠原諸島近海63%となっています」

海底プラント？イハンスレイ？は、完成したらO・P・FのIS製造ラインを一手に受け持つ事になっている巨大プラントの事だ。海底と付くだけに海の底に作っているワケだが、コレにもシッカリとした理由がある。

どの軍にも手出しが出来ないようにしたうえで、天災篠ノ之束から我が社の資産を守るために私が始めた秘密プロジェクト。

海底ならば守りやすいし、少し偽装してやればバレもしない。

いかに天才と言っても、未知なる海の底ならば分からないだろう。

そしてだ。ある程度完成したらIS研究者以外も移住できるようにイハンスレイを改造し、海底コロニーへと変化させる計画もある。

ちなみに、イハンスレイに人々が移住する事をレッサー・オールド・ワン計画という。

移住する人々の事は、ディープ・ワンと名称する予定でいる。

「それにしてもお、日本のイハンスレイだけがイヤに早いですう」

「O・P・Fの海底テーマパークという名目で造っていますからね。他の場所に比べると資材を運びやすいんですよ」

「暫定名称シーパークですかあ？ まあ、テーマパークとしての収入も増えて一石二鳥ですう。それにい、一般人という盾があれば、天災はとにかく、軍は手出ししにくくて一石三鳥ですう。お前にはソコでも活躍してもらおうですう」

「承知しております」

礼儀正しく一礼するハイドラ。

装着しているISがイーアネイラだからなのか、それともハイドラの胸が元々デカイ…。

巨乳なのか、ぷるんと揺れる。

「……」

「？」

ハイドラは、私を見ながら可愛らしく小首をかしげた。

忘れていたが、ハイドラの年齢は18歳だ。
見た目は二十代後半の美女だけど……。
ついでに、結婚したのは16歳の時らしい。

「牛乳好きですう？」

「え？ ええ、朝食・昼食・夕食の三食で必ず三杯は飲むくらい好きです」

やはり、牛乳好きな人は大きくなるのか？
いや、ドロテアは牛乳じゃなくて、いちごミルクが大好きだったし、乳製品が効果的なのか？

「ん？ ああ、なるほど」

ニヤリつと微笑みを浮べるハイドラ。
そして、自分の胸を持ち上げる様にしながら言う。

「揉まれると大きくなるそうですよ」

凄くム力つく……。

が、確かにドロテアの胸が成長しだしたのは、私が抱き枕指定した後当たりからだ。

いや、だが……。

私もドロテアも成長期なワケだから、運動すれば……。
って、何を考えているんだ私は？

とりあえず、ニヤニヤ顔のハイドラがム力つく。

「チツ……。あんまり余計なことばっかり言っつてと、搾乳機つけて農場にぶち込むぞ？」

「笑顔のままで怖い事を言うのは相変わらずですね。怖いので私は、イハンスレイの指揮に戻ります」

全然怖がった雰囲気を見せず、私に微笑みを向けて海底プラント？イハンスレイ？へと帰って行くハイドラ。

そんなハイドラを溜息と共に見送り、後ろを振り向いた時。呆然と立ち尽くしているドロテアの様が目に入る。

「見たですう？」

微笑みを浮かべ、できるだけ優しい声でドロテアに話しかた。

「ひつ、ごめんなさい。私、何にも見てません。聞いてません！」

ふむ。

どうやら、イハンスレイ計画を聞いてしまったらしい。仕方ない。

ドロテアには少し気の毒だが……。

「聞かれちゃったら仕方ないですう」

S i d e ドロテア「リッケン

微笑みを私に向けるマリーチ様。」

普段よりも優しい微笑みだったが、普段よりも怖く感じられた。

「聞かれちゃったら仕方ないですう」

マリーセレスが展開され、私の周囲を取り囲むナヴァグラハ。
マリーチ様の手には、見たこともない武装が現れる。

「どうですう？ 最初期に作られたIS用接近包丁。趣味の一品ですう」

ニコニコとしながら包丁を見つめるマリーチ様。

確かに、見た目は巨大な肉切包丁だ。

ただ、あんまりにも大きすぎてスプラッター映画辺りにしか出番がなさそうなシロモノに見える。

しかも、その刃は赤錆に覆われており、対象を斬る事ができる武器なのかも怪しい。

「名をスクラマサクスというですう」

その声は、なぜか私の真後ろから聞える。

瞬時加速を使ったようだ。

私の後ろに回ったマリーチ様は、私の髪の毛を少し弄り、首筋をなぞるようにしアーツィルの待機状態である首輪に触る。

そして、強い衝撃と共に――。

私は意識を失った。

「と――えず、少し――け寝――う。起き――はきれ――
――つぱり、こ――出来――は忘れ――すう」

――。

—。
—。

気がつくと、マリーチ様を下から見上げるような状態になっている。

「やっと、起きたですう。溺れてたからビックリしたですう」

どうやらマリーチ様に膝枕をしてもらっているらしい。
どうしてこんな状態になったのだろう？

「あの、マリーチ様」

「大人しくしてるですう。溺れてだいぶ海水を飲んだみたいだから、寝てるですう。海で遊びたいなら、明日からにしますですう。足りないなら夏休みに我が社のプライベートビーチで遊べば良いですう」

何か、重大な事を忘れているような気がするが……。
思い出すことは出来ないし、なんだか考えるだけでも頭に痛みが
奔る。

だから、私は大人しくマリーチ様の言葉に従った。

初日に海で遊べなかった事は残念だし、私に付つきりだったマリーチ様もパラソルの下でみんなを眺めているだけで遊んではおらず、
なんだか悪い事をしてしまった様な気分になる。

でも、たまにはこういうのも良いかもしれない。

V e r . 2 8 (後 書 き)

喧嘩相手のハスターをどうしようか考え中

楽しい時間はすぐに過ぎてしまう。

気がつくと、もう七時半。いまは大広間三つを繋げた大宴会場で夕食を取っている。

昼食も夕食も刺身が振舞われ、生徒らは豪勢だと喜んでいるが、私としてはそうでもない。

生まれてこのかた、食事には一切困らず。

むしろ、豪華な食材を食べ過ぎて舌が肥えているほどだ。

だからこそ、庶民的なものを要求したかったのだが……。

この旅館の食事もO・P・Fの食堂に比べてしまつとかなり格下だとしてもだ。

まあ、浴衣着用での食事は新鮮だったから良いとしよう。

ちなみに、なぜかお食事中は浴衣着用とされている為、全員浴衣姿で食事をしている。

服を汚さない為とか色々あるのだろう。

「うん、うまい！ 昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなあ」

「そうだね。ほんと、IS学園って羽振りがいいよ」

目の前では一夏とシャルロットが楽しそうに話をしている。

その横で一人辛そうにしているセシリアが少し哀れだが、正座に慣れていないのだろう。

私の横のドロテアも正座に慣れていないためか、かなり苦しん

でいる。

「う~~~~~っ~~~~」

知ったこっちゃない。

「マリーチ様、テーブル席に移——」

「嫌ですう」

肩を落として落ち込むドロテア。

別にイジメているつもりはない。

なんであれ、ドロテアは専属メイドとして常に私と共に在らなければならぬし、日本企業から接待を受けるときは大体正座する様な場所が用意されている。

正座に慣れておかなければ、後々辛い思いをするのはドロテア自身だ。

「ぐう……。が、がまん……。しま……。す……」

辛そうだけど仕方ない。

がんばれ、ドロテア。とか心の中で考えながら、私は夕食をパクパクと食べた。

途中、一夏がなにやらイベントを起こして非常に騒がしくなっていたが、いままで黙々と食事をしていた織斑先生が一括し、一瞬で鎮圧する。

やはり、織斑先生の指導能力は欲しい。

その後。

食事が終わった私とドロテアは、温泉に入りのんびりとしていた。

「温泉は良いですう」

「温泉とはこういうモノなんですね」

「ドロテアは、温泉に入るのは初めてですう？」

「はい。軍ではこういうのは……」

「なら、こんどO・P・Fが買収した温泉旅館に連れて行ってやるですう」

「あ、ありがとうございます」

「別に良いですう。ただ、その胸を……。ふふふ……」

「え？　ちょ？　マリーチ様？」

「うふふ……」

「！？　きゃ……………！？！？！？」

——しばらくお待ちください。——

さて、その後——。

温泉を満喫した私たちは、なんとなく一夏のいる部屋へと向かつ

た。

私の類は、誰が見ても分かるほどにテカテカしてたと思う。
変わりにドロテアは、誰が見ても分かるほどに疲れていた様な
気がしないでもない。

さて、一夏の部屋の前に来たのは良いが……。

「……」

なにしてんだコイツら？

一夏の部屋の前で固まっている鈴、箒、セシリアの三人。
まあ、なんにせよ。

コッソリと三人の後ろに回ってみる。

そして、三人がなぜかドアに顔を寄せ、耳をぴったりとつけた時
――。

バンッ！と非常に痛そうな音が聞え、すぐに三人の悲鳴らし
きモノも聞えた。

「へぶっ！」「」

非常に痛そうだ。

それに悲鳴も無様なモノだった。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

「は、はは……」

「こ、こんばんわ、織斑先生……」

「さ……さようなら、織斑先生っ!!」

すぐさま逃走を開始しようとする三人だが、後ろに私が気がついておらず、振り向いた瞬間に青ざめていた表情がさらに絶望に染まって行く。

どうやら、私はかなり良い顔をしていたみたいだ。

「盗み聞きは良くないですう。ほら、大人しくするですう?」

ニツコリと優しい微笑みを浮べる。

織斑先生も私と同じ様に微笑みを浮べていた。

織斑先生とはソコまで話した事はないが、話をすれば以外に話が合うかもしれない。

「ふむ。感心はできないが、ちょうどいい。入っていけ」

「『えっ?』」

目を丸くする三人。

とりあえず、グッタリしているドロテアの頭を撫でながら聞いておく。

「私も良いですう?」

「ああ、構わんぞ。ほかの二人——ボーデヴィツヒとデユノアも呼んでこい」

「は、はいっ!」

いち早く動いたのは鈴、次に動いた筈の二人は、ボーデヴィツヒ

とデユノアを駆け足で呼びに行く。

「それじゃ、お邪魔しますですう」

私はぐったりしているドロテアと、啞然としたままのセシリアを引き摺って部屋に入る。

途中、セシリアが胸元の乱れを直す際に下着が見えたが、何を考えての事が黒く欲情的な下着だった。

「セシリアはエロいですう」

「……」

「どうしたですう？」

「……ルームメイトにも言われましたわ」

「……ご愁傷様ですう」

凄く落ち込んだセシリアを見た事が出来た。

おそらく、部屋でからかわれたのだろう。

確か、セシリアのルームメイトといえば、布仏とその友達2名だったと記憶している。

まあ、なんにせよ。

一夏の部屋に入ることが出来たのは大きいだろう。

織斑先生がいるのでなんらかのお話になるのだろうが、どんな話が聞けるか楽しみだ。

Ver.30(前書き)

武装神姫 BATTLE COMMUNICATIONだと……。
どうしよう。凄く悩む。

でも、武装神姫とはなんか違う様な気がする……。
なんでだろう？

さて、私の目の前ではセシリアが一夏にマッサージされている。
非常に気持ち良さそうだが、織斑先生がいる手前自滅行動にしか
見えない。

「ドロテア」

「……」

暇つぶしにドロテアで遊ぼうと思ったのだが、ドロテアから
の反応がない。

気になったので横にいるドロテアに視線を送ったら……。
丸くなって寝ていた。

お前は猫か？

「……。すうゝ、すうゝ」

しかし、織斑先生が居るのにココまで気持ち良さそうに寝るか……。
これは一種の才能と言えるかも知れない。

「おー、マセガキめ。しかし、歳不相応の下着だな。そのうえ黒か」

「え？……きゃあああっ!？」

セシリアの悲鳴で子をあげて見ると、なぜか織斑先生がスカート
捲りの様な事をやっている。

何をやっているんだか……。

まくれ上がった浴衣の裾からセシリアのヒップと着けている下着が見えた。

脱がされる事を前提とした両サイドを紐で縛ってあるだけのタイプ。

ひもパンと呼ばれる下着の一種で、一般的に生地が薄く肌に密着している。

日本だとかつては、ストリップショーとか遊戯的意味合いが強かったが、いまはデザインの一種として受け入れられているが、勝負下着の分類にはいる事だけは確かだ。

ちなみに私の下着はローライズというタイプである。

よくアニメとか漫画とかだとローレグと呼んでいるが、ローレグというのは正しくはない。

正しい服飾用語はローライズである。

ついでに、私の上はスポーツ……。

なにを暴露してるんだ私は？

「さて、織斑先生。いつまでセシリアとじゃれ合ってるんですう？」

「ん？ ああ、そうだな。聞き耳を立ててる四人。そろそろ入ってこい」

少しの間を置いてから、四人が入ってくる。

篝、鈴、シャルロット、ラウラの四人はもちろん浴衣を着ており、聞き耳でも立てていたのか微妙に顔が紅い。

「一夏、マッサージはもう良いだろう。ほれ、全員好きなのところに座れ」

織斑先生に手招きされ、五人ともベッドとチェアのどちらかに座る。

ちなみに、私はベッドの方に座っているのだが、理由はドロテーアが寝てしまったためだ。

「ふー。さすがにふたり連続ですると汗かくな」

「手を抜かないからだ。すこしは要領よくやればいい」

「いや、そりやせつかく時間を割いてくれてる相手に失礼だって」

「愚直だな」

まあ、少し一夏と織斑先生の話は続いたが割合する。

四人は何かしらの行為を想像していたらしいが、目の前で見ていた私としてはマッサージだというのも分かるし、一夏に何かしらの行為をする気概も無ければ、そこまで考えを発展させられる思考パターンを有していない事は、ここ数ヶ月の付き合いで把握できた。

鈍感を通り越して唐変木。

不能なんじゃなかるうか？ と考えた事もあったが、恥かしそうにしているシーンも多々あることからソレは無いだろうという結論に至った。

結局、一夏は自分がモテないとも思い込んでいたのだろう。

だから、周りの微妙なアピールには気がつかない。

もし気がつかせたいとするのならば、ド直球なこちらの羞恥心を捨てたような言葉、あるいは行動に取るしかないわけだ。

ラウラ見たいなのは逆効果の様だが……。

さて、タオルと着替えを持って部屋から出る一夏。
出る寸前に。

「くつろいでつてくれ。って、難しいかもしれないけど」

と言が残した。

確かにまあ、この状況では難しいだろう。

一夏が去った部屋は沈黙が支配し、私とドロテアを除く全員が固まっている。

「お葬式、あるいは通夜みたいですう」

「確かにな。おい、いつものバカ騒ぎはどうした」

五人は一度顔を合わせてから、口を開く。

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

伝言ゲームでも流行ってるんだろうか？

織斑先生の要望に応える伝言ゲームか、難易度高いな。

ダークソウルで心が折れなかった私でも、折れるかもしれない。

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。マリーチ、何がいい？」

いままで見ていただけだったのだが、突然名指しされる。どう考えても私ではなくて篝あたりが適任だろうに……。

「それじゃあ、お茶あるですう？」

「ん。しかし、ジジ臭いというか、ババ臭いな」

「O・P・F総帥というのも中々大変なんです。朝から晩まで書類整理とサイン記入、様々な企業との会議に支部間連絡会議、100を超える計画書のチェックと新規ISおよびIS武装作成のGOサインチェック、山の様にあるのです。最初はコーヒーを飲んだですがあ、あんまり沢山飲むと気持ち悪くなるのでやめたです。炭酸系はお腹が膨れるです。ジュースは何か食べたくなります。最終的に辿り着いたのがお茶だっただけのことです。ちょっとトイレが近くなるですがあ、社長室という名の拘束空間から出れるです。100点満点の飲み物として重宝したです」

緊張している五人の表情は変わらなかったが、織斑先生だけは頷き「お前も苦労してるようだな」と言ってくれる。

織斑先生もブリュンヒルデという肩書きを持つ人間だ。

それなりの苦労を味わってきたのだろう。

「それで、他の五人はなにがいい？」

話を振られた五人は肩をすくめ、困っている。

緊張に耐えられないといったような感じだ。

結局、織斑先生が旅館備え付けの冷蔵庫の中から5本選び、五人に配ってゆく。

「ほれ。ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶だ。それぞれのがいいやつは各自で交換しろ」

五人とも受け取った物で満足であつた為か、交換会は開かれなかった。

「い、いただきます」

全員で同じ事を言い、全員で飲み物を口にする。
すさまじいシンクロ率だ。

まあ、私はお茶のペットボトルを五人よりも早く受け取った為、先に飲んでしまっているが……。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの！？」

「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちよつとした口封じだ」

さて、そう言って織斑先生が取り出したのは缶ビール。

発泡酒ではなく、それなりに高いビールの方だ。

啞然とする五人の事なんぞお構い無しに缶ビールの口を開け、飲み始める織斑先生。

美味しそうな飲み方をする人だ。

ロレーナもビールをよく飲んでいたが、缶から直接飲む事はせず、コップに移してから飲んでいた。

コップの大きさはかなり大きく、3缶全部注いでいっぱいになるくらいだったと記憶している。

ま、ロレーナの場合は、美味しそうというよりも、豪快という言葉のほう先立つが……。

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところだが……それは我慢するか」

啞然としている五人。ラウラに至っては信じられないといった感じで何回も瞬きをしている。

尊敬する教官としての織斑千冬しか見てこなかった故だろう。

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

ISを装着しなくとも、IS並に強いんだから作業オイルを飲んでいてもおかしくないと思ってしまふ。

「いえ、そういうわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……」

四人が順々に言う。

ラウラだけは呆然としたままで、コーヒーをグビグビと飲んでなんとか自分を落ち着かせようとしていた。

「いまさらですう。それにもう、口止め料もらっちゃったじゃないですう？」

お茶のペットボトルをみんなに見えるように軽く振ってみる。
その事で気がついたのか、全員「あっ」と声を漏らした。

「ラウラ、冷蔵庫の中からビールを一つ取ってくれ」

「……。は、はい」

もう一本目のビールを空にしたのか、二本目のビールをラウラに
取らせ飲み始める織斑先生。

どうやら、かなり酒には強いらしい。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をす
るか」

グビグビと二本目を煽ったあと、織斑先生は奇妙な事を聞いてく
る。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立ただけで
すので」

という筈。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

もごもという鈴。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしただけです」

先ほど、織斑先生に尻をつかまれ、一夏に下着を見られた事に反発しているのだろう。

なんだか、ツンツンした感じでいうセシリア。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

しれっとした表情をしているが、実に楽しそうに織斑先生が言う。

「」「言わなくていいです」「」

三人は即座に反応し、織斑先生に詰め寄っているが、織斑先生は楽しそうにしながら缶ビールを傾ける。

「僕——私は……やさしいところ、です」

恥かしそうに言うシャルロット。

実際にそう思っているのだろう。

「ほう。しかしなあ、アイツは誰にでもやさしいぞ」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ」

言っていてさらに恥かしくなったのか、頬をパタパタと扇いでいる。

素直に言わなかった三人組の視線が刺さっているように見えたが、本人は気にしていないようだ。

「で、お前は？」

ラウラの方を向いていう織斑先生。

ビクリと肩を震わせてから、ポツリと呟くラウラ。

「つ、強いところが、でしょうか……」

「いや弱いだろ」

ラウラにしては珍しく、織斑先生の言葉に反発する。

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

「そうかねえ……」

そういつつ、二本目のビールを空にした織斑先生はこちらを向いた。

次はお前の番だ。というような感じの視線でだ。

「一夏が似ているからか？」

「この前の私の言葉を聞いてたですかあ？ まあ、いいです。確かにソレもあるです。でも、一夏は私を見たです。O・P・F総帥としての私ではなくて、マリーチとしての私を見たです。だからですかねえ？ ただまあ、あの人に近づいて欲しいという心が在るのも確かです」

その瞳には、まるで何かを確かめるような物を垣間見える事が出来たが。

「まあ、いい。あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージだってうまい。そうだろ、オルコット」

セシリアは頬を赤らめ、うつむきながら頷いた。

「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

私以外の全員が一斉に顔をあげる。

何かを期待するような顔をしているが、織斑先生が微笑みを浮かべている時点でワナだと気がつくべきだ。

「く、くれるんですか？」

今回、あまり発言していないラウラが聞く。
もちろん、回答は……。

「やるかバカ」

その言葉を聞き、私以外が落ち込む。

私はというと、細めで落ち込んでいるメンバーを見つつ、寝ているドロテアの髪を撫でていた。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

立ち上がり、三本目のビールを口にしながら言う織斑先生。

ほんと、ビールが好きなんだなあ。とか、私はどうでも良い事を考えていた。

「それにしても、お前はほかと違っらしいな」

なんかもう頬の紅く、酔い始めている織斑先生が私を見ながら言

う。

「最初か奪う気の私に隙はないですう。欲しいものは、力と知力で奪う主義ですう」

キョトンとした表情を浮べる織斑先生。

その後、はっはっはっと楽しそうに笑いながら五人に言う。

「お前たち、うかうかしてられないな」

織斑先生は、実に楽しそうな表情をしながらそう言った。

無論、私に対する視線が強くなったが、一睨みしたら視線が弱くなったのは言うまでもない。

O・P・F|NETジャーナル 第七回（前書き）

ダメだ……。

私には武装神姫 BATTLE COMMUNICATIONは向かない。
無理……。

神姫NETかむばあ〜く！

O・P・F | NETジャーナル 第七回

「それでは、O・P・F | NETジャーナル第七回を開始したいと思います」

「うきゅう（気がつくともう七回目、早いね）」

「そうですね。そういえば、作者がミミックに水着を着せようと無駄な努力をしていました」

「きゅう……（まだDLC復活してないのに……）」

「どうでも良いですね」

「……」

「さて、今回も例の如くに感想返信のみです」

「きゅう（次回は武装紹介も出来ると思います）」

> 緒方 紅夜 様<

旧支配者は主人公ポジションですね分かります。
抱き枕……欲しいな。

そして忍者。バトルロンドではお世話になりました。
ただし一番強かったのは天使だったが。

主砲がやばいほど当たりまくってね！。

悪魔は近距離で安定した防御力でナイト的な役割。

忍者？ 回避でよけまくって鎌をぶん回してました。

そういえばレジンキャストの未塗装のやつは出てくるのかな。
出るならファントムタスク側が似合うよな。

白い方は箒（髪型的に）か千冬（白騎士的に）が似合いそう。

そしてフルバレルになるのだろうか、ドロテは。

「鎌と手裏剣で鉄板でしたが、忍者刀も捨て難いですよね。ドロテ
ーアは、フルバレルになる予定は在りますよ」

「きゅう（色々と設定を考えて登場させようかと思います／未塗装
組）」

>ストラス 様<

お嬢…それは天使のイベント……でも考えてみると、これで一夏への
思いが変わってきたのかな？

あと、お嬢のアビリティーはどんな感じなんだろう？

やっぱりフブキ型は出ませんか…そうなると飛鳥型もお休みだろう
な…ま、予想はしていたので良いんですけどね。

ここで雪羅の名前が出ましたね、前のジャーナルではちょっと分か
りにくかったですからね。でもこれで本編に出て来る可能性が上が
たかも

26の感想

いよいよあのセバスチャンの選んだ水着の登場ですが、自分の予想では旧白スクなんてマニアックな物のような……はっ！？そうなる
と、ドロテア嬢も同じ物になるのでは？胸の名前の部分が平仮名
で”どろて”になったりして……ん？誰かきたのかな？

「主人公がマリーセレスですが、武装神姫の様々なイベントを持っ
て来ようかと思っています。ワンオフのバツカルコーンは、その内
使用する予定です」

「うきやー（私の本編登場予定は……。未定ですー）」

「その水着良いですね。何かの機会使いますね」

> kusari 様<

まとめて読みましたラウライイベント時にマリーチ様がキレましたね
やはり武装神姫の経験でハーレムは許すのですねだけど風呂での裸
の関係は許せないのですか

しかしこんな形で単一能力の発現が起こるとは少々びっくりデス

臨海学校前の水着イベントはスルーで一気に臨海学校ですね

今回がマリーチ様が出ていませんが後で何かイベントが起こりそう
ですね

ドロテアのマリーチ様依存度は病気レベルですね、個人的にはラ
ウラと模擬戦などとして欲しいです

「かつこよく目覚めるのも良いですが、ISが操縦者と最高状態の

相性になったときに自然発生する固有能力との事なので…。IS「マリーセレスと操縦者」マリーチが最高状態の相性なのはココしかないと思ひまして、こんな形になりました」

「うきゆきゆきゆあ（水着イベントも考えていたのですが、それだと水着を用意したセバスチャンがあまりにも報われないのでカットしましたが……。セバスチャンサイドも書く予定です。おじいちゃん、一人で女性用水着を二着選んでいる楽しい図（？）を想定しています）」

>緒方 紅夜 様<

おいー……

ちやくちやくと棲みか建設中www

そして夫婦。夫の容姿が気になる。数値はいかほどののか。

比叡山とか帝都地下のハスター神殿とかでないと思うけど。

そして肉切り包丁出たwww

あえなく……ということではなく記憶封印ですか。

古典的（こう、バットでね）にかISによる干渉か……

部下に黒いイルカがいるんですね分かります。

それにしても原作のISのコア数は圧倒的に少ないと思ってましたが、この作品このままだと各国の保有数少なくなりそう。

500弱で十機ずつだと45カ国くらい。企業にいくと軍部の保有

数は少なくなる。

パワーバランスが崩れますな。

せめて1000以上欲しいところ。

まあ、これがこの作品で絡むとしたら元軍人の雇用者とか、IS持つてない国にISのスピノフ技術使った子会社を立てるとかか。

「夫の容姿は、数値4くらいです。でも、妻はそんな夫を心から愛しています。二人揃うとイチャイチャしてマリーチの話すら聞かないという設定があったりしますね」

「きゅきゅうきゅ？（壊れたテレビは叩けば直る見たいな感じです。古典的って良いですね？）」

「確かに、ISコアの数が矛盾し始めています…。各支部の長を各国代表候補に添えたり、辻褄あわせをしてゆく予定です。一部、軍部も取り込む予定です」

>蒼 龍一様<

・・・便利(?)な首輪だ・・・。

「きゅ（便利な首輪です）」

>ストラス様<

ハイドラさん…あれで十八だと！？しかも結婚したのが十六！？お嬢と比べるのは酷だが、凄過ぎだ（色々な意味で）

もうすでに住みかの建造をしていたのには驚きでした、次は何が出て来るのか楽しみです

「イーアネイラBですからね……。あの体型は憎いです」

「うきやつ……（イハンスレイは暫定的な住みかですね。最終的にはルルイエが……）」

> kusari 様<

おーなんだかとてもない計画が進んでいますね、どこかスパロボのクレイドルを思わせますな

けどこの夫婦の名前は仏像やインドで聞いたような気がします

そして肉切り包丁いつたいなんのコンプセントとして作られたか気になる一品ですね

ドロテア的首輪にはよく魔法で奴隷が逆らわないようにするシステムでも付いているのですか

「元ネタは、ゲーム機が出来る前の物ですね。是非、クトウルフの呼び声というTRPGルールブックをご購入ください」

「うきやつ、きゅきゅ（夫婦の名前は、創作神話クトウルフ神話に登場するクトウルフ（おそらくマリーチのモデル）の眷属である父なるダゴンと母なるハイドラです。本来の神々とは別物ですよ）」

「

「コンセプトは、ホラー映画の恐怖を現実にも！ だと思えます。首輪にそういったシステムは付いていませんが、病気レベルの依存ゆえという感じですね」

「うきゅ。きゅあう（訳：今回はコレで終わります。 キャラクタ―設定まとめとか書こうかなと思ったりしています）」

「まあ、予定は予定のままですけれどね。 それでは、O・P・F・I・NETジャーナル？はO v e s t P o z z o F a b b r i c a（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）とA / c u t e D y n a m i xアキュート・ダイナミックスの提供でお送りいたしました。次回もコレくらいのペースでやりたいですね」

O・P・F | NETジャーナル 第七回（後書き）

いまだに武装神姫 BATTLE MASTERS Mk.2の対人戦闘は慣れない。

固有スキルのないミミックじゃ勝てないというのか！（プレイヤースキルが無さ過ぎるだけですね……）

Ver.31(前書き)

修正

試験に負われること

試験に追われること

理由

誤字

kusari 様に感謝

臨海学校二日目。

午前中から夕食になる頃合までISの各種装備運用試験に追われることになる。

専用機持ちはこの機会に大量の装備の運用テストを行う為、夜まで大変だろう。

私は関係ないが、ドロテアが変わりに大量の武装テストを行っているハズだ。

さて、私は私で極秘装備を試すでしょう。

O・P・Fから学園側に通達はいっているのし問題にはならない。ふふふつ、色々と試すでしょう。

Side ドロテア「リッケン

「ようやく全員集まったか。——おい、遅刻者」

「は、はいっ」

織斑先生に呼ばれた遅刻者とは、信じられないことにラウラ隊長だった。

あんまりにも信じられないものだったから、夢かと思って頬をつねってみたけど痛かったから夢じゃない。

「そうだな。ISのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ISのコアは――」

コア・ネットワークの説明を始めるラウラ隊長。

普段のラウラ隊長と異なり、丁寧の説明を続ける。

それにしても、ラウラ隊長は一夏様と出会ってからかなり柔らかくなったと思う。

シュヴァルツェ・ハーゼの指揮も上がっているハズだ。

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

安心したように息を吐くラウラ隊長。

あのラウラ隊長が胸をなでおろすという光景も珍しいけれど、織斑先生がドイツで教官をしていた時期に色々と合ったのだろう。

その頃の私はISの訓練もしつつ、出来損ないという事で兵として運用されていたと思うのだけど、あまり思い出せない。

ただ、一日一日が必死だったのは確かだ。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

「……はい」

『はい』ではなくて『はい』という間延びした感じが、ここが軍ではないと私に実感させてくれる。

現在使われているこの場所は秘密基地ポイ感じ。

四方を切り立った崖に囲まれ、海に出る為には一度潜って海中に出来た自然のトンネルを抜けなければ行けないらしい。

ほんと、秘密基地って感じた。

この秘密基地に搬入されたIS用試作装備と新型装備の数はかなりの量になる。

だからこそ、一年生全員で試験を行うのだろう。

さて、私も準備を――。

「ちーちゃ~~~~~ん!!」

ずどどどど……! っと物凄い音と共に誰かを呼んでいるらしい人物が迫ってくる。

一見、ISを着けていないように見えるが、あの速度は普通に走って出せる速度ではない。

「……束」

織斑先生の眩きが聞えた。

束……。ISを造り出した創造主。

稀代の天才、篠ノ之束博士。

これは、マリーチ様が必要とする情報を拾えるかもしれない。

私は即座にアーテイルを装着し、記録モードを起動する。

《記録モード起動。センサー内のあらゆる情報を記憶します。記録時間の初期設定は12時間です》

アーテイルに付けられている記録モードとは、その名の通りアーテイルが捉えたハイパーセンサー内に存在するものの情報を記録する状態の事だ。

ここで得られた情報は、コア・ネットワークではなく、アーテイルとマリーセレスを繋ぐISとは個別の特殊な回線により送信される。

そのため、コア・ネットワークにより他のISに情報が渡る事は

ない。

「やあやあ、会いたかったよ、ちーちゃん！」

他のすべてを無視し、織斑先生と話を始める束博士。
かなり親しい仲らしい。

また、束博士は箒様にも話しかけていたが、箒様はあまりよく思っていないようだ。

日本刀の鞘で思いつき叩かれている。

見かねた山田先生が何か言っているが、撃沈されたく肩を落としていた。

私は記録モードが悟られぬよう作業をしつつ、周りの生徒同様にチラチラと束博士の奇行を観察する。

稀代の天才と言われる束博士だ。

行動一つで記録モードに感づくかもしれない。

「それで、頼んでおいたものは……？」

「うつうつ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧ください！」

真上を指差す束博士、織斑先生以外は皆ソレに釣られて空を見上げてしまう。

何かが光り、物凄い速度で落下してきた。

なんとも言えぬ轟音を響かせ、銀色の落下物は砂浜に小さなクレイタを作る。

そして、正面らしき場所が倒れ中が露になった。

中に在った物は、紅色をしたIS。

O・P・F社が有数あらゆるIS情報にも記載されていない新しいISだ。

「じゃーん！ これぞ篝ちゃんの専用機こと？ 紅椿？！ 全スベックが現行ISを上回る束さんお手製のISだよ！」

そう束博士が言った瞬間。

アーテイルが低い、とても低い唸り声をあげた様な気がした。

「努力も——ず、——労も知——。弄ぶ者——！ 許
い。——ない！？

丸みを帯びていたアーテイルの装甲が少しずつ尖って行く。

まるで、怒って毛を逆立てる猫の様に……。

そして、それはとある一言でさらに顕著になる。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？ 有史以来、世界が平等であつたかなど一度もないよ」

明確に感じられる怒り。

アーテイルの底から湧き上がる憤怒の感情。

「努力も——ず、苦勞も知——ぬ。弄ぶ者——！ 許る——
い。——ない！？

先程よりもハッキリと聞えたそれは、機体を徐々に黒く染め上げる。

「あとは自動処理に任せておけば——。ん？ ねえ？ 貴女だれ

「？」

いままで私を見てすらいなかった束博士が私の方を向く。
瞳には好奇心ではなく、警戒心が伺えた。

「……。私は、O・P・F総帥マリーチ様の専属メイド、マリーチ様より与えられたアーティルの専属操縦者ドロテアーリックケンです」

「ふ〜ん。ねえ、その子。私に敵愾心を持ってない？」

「……。いえ、その様なことは」

軍では味わった事のない不思議な威圧感にたじろぐ私。
本能的になんだか関わりたくないのだ。
マリーチ様とも少し違うが、狂気染みた物を感じる。

「ふ〜ん」

「束。その辺にしておけ」

「うん。ちーちゃんが言うならそうするね。あ、いっくん！ 白式を見せて。束さんは興味津々なのだよ」

織斑先生に救われた。

だが、束博士が言ったようにアーティルはなぜか束博士に敵対心を持っている。

なんだかよくわからないが、緊張感のある武装試験になりそうだ。

Side ドロテア＝リッケン

先ほどからずっと束博士の視線を感じる。

といっても、こちらを向いていないので何かしら使っているのだろっ。

「ちなみに、後付装備ができないのは为什么呢ですか？」

「そりゃ、私がそう設定したからだよん」

「え……ええっ！？ 白式って束さんが作ったんですか！？」

「うん、そーだよ。っていつても欠陥機としてポイされてたのをもらって動くようにいじっただけけどねー。でもそのおかげで第一形態から単一仕様能力が使えるでしょ？ 超便利、やったぜブイ。でねー、なんかねー、元々そういう機体らしいよ？ 日本が開発してたのは」

「馬鹿たれ。機密事項をべらべらバラすな」

思いつきり頭を叩かれる束博士。

良い事が聞けた。

しかし、日本IS企業といえば倉持技研だろうか？

倉持技研は、単一仕様能力を第一形態から使用できるISを作り

出す技術を手に入れられたのかな？

いや、でも……。

白式自体は第三世代型と聞いているから、使えるように成るかも知れない程度だったが、倉持技研の技術では作る事が出来ずに廃棄。その廃棄された白式を束博士が拾い、手を加えた物が現状の白式なのだろう。

本人は「動くようにいじっただけ」と言っていたけれど、天才とまで称された人が「動くだけ」でとまれるモノなのだろうか？

たぶん、未完成な何かが使われていて、束博士でもその未完成な物の全容をつかめていない状態なのかもしれない。

その後は、特にコレと言ったことは無かった。

一夏様がからかわれたり、セシリア様が精神的に追い詰められたりしていたが、事前情報で束博士は一部の人間にしか心を開いていないと合ったので、アレが素の姿なのだろう。

自らで自らの価値を固定し、自らの思想だけで動くのが束博士という人物なのだと理解した。

一つの事を突き詰めるという点では良いかもしれない。

だが、人間は無限万能ではない。

有限無能なのだ。

ソコを見誤っている時点で、マリーチ様が束博士の事を「一人で何でも出来ると思ってるアホ垂れは不要ですう。自分で作った玩具を弄繰り回して、認めてもらえないからと駄々を捏ねるヤツに様はないですう。まあ、ISという神姫への足がかりを作ってくれたことには感謝してやるですがあ」と言っていたのも頷けてしまう。

シンキというのが何であるか……。

私は教えてもらっていないが、ISが足がかりということは、ISを超えた何かなのだろう。

あの新しいIS、紅椿のデータは必ずや必要になる。

なんとしても入手しなければ……。

「んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。篝ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

紅椿に連結されたケーブルが外され、篝様が目を閉じた次の瞬間。おそらく、エウクランテをも超える飛翔速度で空に舞い上がった。現状、公に発表されているO・P・F社の第三世代型IS。しかも、速度特化をも上回る速度となるとかなり早いだろう。

だが、非公式に製造されているアーンヴァルmk・2の飛翔速度に比べれば可愛いものだ。

コアすら接続されていないのに飛行パーツとして機能するアーンヴァルmk・2の武装変化形態グランニユーレ。

マチーリ様は、グランニユーレを外部装備として使用する事を検討に入れており、今回IS学園とは別にO・P・F社総帥としてなにやら動いているそうだ。

このグランニユーレには一つ大きな問題がある。

なんと、突撃にガード不能効果が適応されてしまっていたのだ。

幸いグランニユーレは速度型なので、シールドバリアーと絶対防御をぶち抜いたとしても操縦者が死ぬ事は無いだろう。

まあ、グランニユーレの姉妹機であるジャーヴァル・クルイクの方は洒落になっていない。

テスト段階であり非公式でも使えるものではないと聞いている。

なんでも、完全攻撃型らしく……。

擬似起動状態にされたストラーフ強化型のシールドバリアーと絶

対防御をぶち抜き、装甲を完全破損させ、コアもあとすこしで破壊してしまいそうになっていたらしい。

このジャーヴァル・クルイクは、ストラーフ強化型の発展型であるストラーフmk・2の武装変化形態だ。

試運転されている紅椿の武装は確かに凄まじいと思う。

右の雨月は日本刀の形をした射撃武器として捕らえられる。

左の空裂も日本刀の形をしているが、振った範囲に自動で衝撃波を発生させる物らしい。

16発のミサイルを一撃で落とすあたり、かなり強い装備と思われる。

？努力も——ず、苦——も知——ぬ。弄ぶ者——！許せない。————ない！？

また、アーテイルから唸り声が聞えた。
ハッキリと？許せない？と聞えた。

そして、みんなが紅椿の姿に魅了される中、アーテイル同様に束博士を睨みつけている人がいる。

織斑先生はまるで敵でも睨みつけるかのような表情で、束博士を見ていた。

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

いつも異常に慌てた感じで現れる山田先生。
何かとんでもない自体が起きたのだろう。

「どうした？」

「こ、こつ、これをつ！」

山田先生から渡された小型端末を見た織斑先生の表情が曇る。
途中までは会話を行っていたのだが、途中から手話での会話を始める二人

ええつと……あれは？

？ハワイ沖で試験運用していた銀の福音が、外部からの不正アクセスによって原因不明の暴走を起こし日本に向かい進行中。対処され
たし？かな？

なんだか、大変な事になってるみたいだ。

「全員、注目！」

織斑先生は手を叩き、生徒全員の意識を自分に集中させる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト
稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館へ戻れ。連絡が在るまで各
自室内待機とすること。以上だ」

「え……？」

「ちゅ、中止？　なんで？　特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

「とつと戻れ！　以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を
拘束する！　いいな！！」

「……はっ、はいっ！」

騒ぎ立てる女子たちを一喝したあと、専用機持ちの方に視線を向ける織斑先生。

まあ、IS学園にいるとはいえ一般人。

下手に関わらせるよりも、関わらせない事の方が良いことも多い。むしろ、関わってもよい事の方が少ないかもしれない。

「専用機持ちは全員集合しろ！ 織斑、オルコット、デユノア、ボ―デヴィツヒ、凰、リツケン！ ――それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

一人、気合の入った返事をする箒様。きつと、分かっているのだろう。

自らが手にした力の重さを……。人間を虐殺できてしまうその力の重さを……。

「リツケン、ファブリカとの連絡は付くか？」

箒様を見ていたため気がつかなかったが、近くまで織斑先生が歩いてきていた。

言葉につられる様にマリーチ様に連絡をつけようとするが……。

？現在、マリーセレスとの交信は不可能です？

なぜか連絡はつかなかった。

素直に首を横に振る。

「そうか……。連絡がつき次第報告しろ。いいな」

「はい」

こうして私たちは、風花の間に設けられた臨時作戦会議室へと向かった。

Ver. 32 (後書き)

アーンヴァルmk.2の武装変形形態ですが、本来の名称は？ラファール？といいます。

でも、これだとデユノアのラファールと被るため、技名称である？グランニユール？を名称として使用する事にしました。

ストラーフmk.2の？ウラガン？も同様の理由で？ジャーヴァル・クルイク？となっています。

武装を切り離して作り出す変形形態は、本来型の在った神姫でないと使えないらしいのですが、本作では使えるようにして行くつもりです。

これならば、神姫が登場する予定がない武装も使う事が！

コウモリ型メカ・ルブルムとサソリ型メカ・ウィリデの合体であるドラゴン型メカ・ゼオ（ゼオ・ライドモード）とか……。

電撃ホビーマガジンで紹介されていたゼオの状態を保ったままの武装装備とかカッコイイです。

ロマンですね。

Side ドロテア「リックン

「では、現状を説明する」

照明が落とされた薄暗い室内、そこに大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

元々、宴会用の大座敷だっただけに部屋自体はかなり広い。

ディスプレイ以外にも、数名の教員が作業に当たっている。

何をやっているかは分からないけれど……。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS？銀の福音？が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの報告があつた」

一夏様以外の全員が厳しい顔つきになっている。

私としても、第三世代が制御下から離れたとなれば、O・P・Fの一員として社の損害を考えなければならぬけれど、マリーチ様との連絡がつかない状態でマリーチ様が銀の福音と接触してしまう可能性のことも考えると気が気ではない。

相手は軍用ISなのだ。

さすがのマリーセスでも相手が軍用ISとなると……。

O・P・Fがどこで極秘試験を行っているのかなんて聞いていないし……。

「それでは作戦会議をはじめ。意見があるものは挙手するように」

「はい」

最初に手を挙げたのはセシリア様だった。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

まずは、対象となる相手の事を知らなければならぬのは基本中の基本だ。

今回の目標、銀の福音のスペックをまとめるとしたら……。

アーンヴァル強化型に非常に近いスペックだが、大幅に強化されたタイプとして捕らえる事が出来る。

ただ、広域殲滅を目的とした銀の鐘というのが厄介だ。

おそらく攻撃手段はこれ以外には持ちえていないだろうが、全砲身36門の同時展開が可能であるようだし、射撃能力はアーンヴァル強化型を大きく上回っている。

攻撃力もあり、速度も早いと……。

データには無いが、格闘戦もそれなりに出来ると判断すべきだ。

「織斑先生。銀の福音が出せる最高速度を教えてくださいませんか？」

「最高速度は、時速2450kを超えるとされている。現にこの機体はいまも超音速飛行を続けている」

時速2450kで突進なんてされたらかなりダメージを受ける。

ただ、2450kならば？エクステンドブースター・ルミル？を装備すれば、ギリギリ追いつける速度だ。

「となると、偵察は行えませんか。接触はよくて2回……。いえ、最悪1回の可能性が高いでしょうか？」

私の発言に山田先生が続く。

「1回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当るしかありませんね」

その山田先生の言葉で、全員が一夏様の方を見る。

「え……？」

「一夏、あなたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に回さないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度がだせるISでなければいけないな」

啞然とする一夏様を他所に、鈴様、セシリア様、シャルロット様、ラウラ隊長と続く。

「超好感度ハイパーセンサーも必要になるでしょうね」

そして、私もラウラ隊長に続いて発言する。

「ちよっ、ちよっと待ってくれ！俺が行くのか！？」

「『『『当然』』』」

四人の声が見事に重なった。

とりあえず、私は静観している。

箒様が一切喋らないのが非常に気になってしまっけれど――。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

少しだけ一夏様は怯んだが、自らを奮い立たせるように言う。

「やります。俺が、やってみせます」

一夏様がそういったとき、アーティルに通信が入った。

「マリーセレスの現在位置を確認。海中で特殊待機状態に入っているもよう？」

はい？

「ん？ どうした。ドロテア」

ああ、いけない。

すっかり声に出してしまった。

「いえ、それが……。マリーチ様の居場所が分かったので外しても良いでしょうか？ 今回の作戦では私は役に立たないでしょうし……」

「そうか、いいだろう。だが、戻ったら報告しろ。いいな」

「了解しました」

こうして、私は会議室を後にした。

そして、そこで……。

「やあ、ドロテア。悪いけど、少しのあいだ寝ていてもらおう？」

なんだか怪しい微笑みを浮かべているロレーナさんに――。

S i d e マリーチⅡオヴェストⅡポツツオⅡファブリカ

私の上空を物凄い速度で飛んでゆくISがいる。

あれが銀の福音という暴走ISだろう。

アーテイルに盗聴機能を付けておいたのは正解だった。

ただまあ、天災が近くにいたため通信で場所を移動させ、同時通信しておいたロレーナにドロテアごと回収させた。

「一夏と……。見た事もない機体ですう。これが、アーテイルから送られてきた天災が造り出した紅椿ですかあ」

銀の福音を追う様に白式と紅椿が現れる。

当分は観戦させてもらおう。

「さてえ、どうなるか楽しみですう」

V e r . 3 4 (前書き)

ちよつと、別の書き方の練習……。
誰か文才を私にください；；；

零落白夜を発動させた白式が銀の福音に迫る。

だが、刃が触れそうになった瞬間。

銀の福音は速度をたもったまま反転し、身構えた。

白式は押し切る事にしたらしく、そのまま銀の福音へと向かってゆく。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。銀の鐘、稼動開始」

オープン・チャンネルで抑揚のない機械音声が告げる。

それは、銀の福音が白式と紅椿を敵として認識した証。

自らの体を回転させ、零落白夜の刃を回避する銀の福音。

装甲に当るか当たらないかの数ミリの精度を誇るソレは、一流の操縦者ならばこそできる動きであった。

その動きを暴走している銀の福音が出来るという事は、暴走してなおISに搭載されているであろう自動プログラムが健在であり、人間では行わないであろう事を平然と行う証でもある。

しかし、操縦者が乗っている状態では無茶苦茶な機動は不可能。操縦者を輩出すれば、ISは動かなくなる。

既存のISは、操縦者がいなければ起動すら出来ないのだから……。

「くっ……！あの翼が急加速をしているのか」

高出力多方向推進装置を積むISは他にも多く存在しているが、出回っているISとは比べ物にならない精度を誇っている。

さすがは、重要軍事機密と言った所だろう。

「篤！ 援護を頼む！」

「任せろ！」

白式は紅椿に背を預け、ふたたび銀の福音に斬りかかった。だが、翻弄するような動きで白式の零落白夜を避けて行く。

「くっ！ このっ……！」

回避され続ける焦りと、零落白夜の使用限界の焦りにより白式が大振りの一撃を放つ。

隙だらけの大振りを見逃すほど銀の福音は甘くない。

なにせ、人間ではなくて自動制御のプログラムなのだから。

「……！」

白式が気がついたときには、銀の福音のスラスターの一部が開き、その下から砲口が現れた。

翼のようだったスラスターは、攻撃の為の砲口と化し、一斉に白式に標準を合わせる。

そして、無数の光弾が白式に放たれた。

「ぐうっ！？」

光弾は、白式に突き刺さるや否や爆発を起こす。

しかもだ。その連射速度が凄まじく早い。

幸いなことに、命中率はそこまで高くないようだが……。

爆発する弾を超高速連射されるなど、たまったものではない。

「第、左右から同時に攻めるぞ。左は頼んだ！」

「了解した！」

左右から同時に責められている銀の福音だが、複雑回避行動により白式と紅椿の攻撃を回避し続ける。

もちろん、攻撃の手も緩めない。

「一夏！ 私が動きを止める！！」

「わかった！」

紅椿が二刀流で銀の福音に迫る。

刃の攻撃と腕部展開装甲から発生するエネルギーの三重攻撃が銀の福音を襲うが……。

「はあああつ！！」

「La……♪」

甲高いマシンボイスが聞えた直後、全てのスラスタが砲口と化した。

その数、36門。それらは全方位に向けて攻撃を放つ。

「やるなっ……！ だが、押し切る！！」

紅椿は光の雨と化した攻撃を全て紙一重で回避し、銀の福音に迫撃する。

このとき、白式だけが気がついてしまった。

戦闘が行われている空域の眼下、ちょうど三機がいる真下に人間を乗せた船が在ることに……。

白式は、唯一で来た隙に追撃する事はせず、真下の海面に向かって急降下を始める。

「一夏!？」

「うおおっ!!」

残り少ないエネルギーで瞬時加速と零落白夜を最大出力で使用する白式。

そして、追いついた光弾を掻き消した。

「何をしている!? 折角のチャンスに——」

「船がいるんだ! 海上は先生たちが封鎖したはずなのに——ああくそっ、密漁船か!」

それを見殺しにせず、助けに向かった白式。

唯一のチャンスを逃し、エネルギーもほぼ全て使い切ってしまった銀の福音を止める事は不可能。

「馬鹿者! 犯罪者などをかばって……。そんなやつらは——!」

「箒!!」

敵の眼前で会話を始める白式と紅椿。

そして、紅椿のエネルギーも限界に近づいているのだろう。

操縦者は気がついていないようだが、各部の展開装甲が閉じ始め

ている。

「箒、そんな——そんな寂しい事は言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

その同様に隠すように手で顔を覆った紅椿。
手から滑り落ちた刀は、具現維持限界により粒子化して行く。

そんな事を悠長に話している白式と紅椿に攻撃をしない銀の福音ではない。

銀の福音からしてみれば、隙以外の何物でもないだろう。

「LaLa……♪」

標準を紅椿に合わせ、一斉射撃を行った。

エネルギーの切れたISは異常なまでに脆い。

シールドエネルギーがなくなってしまうえば、装甲のないISでは攻撃を生身で受けるしかないのだ。

絶対防衛分のエネルギーが残っていたとしても、その分のエネルギーを使いきってしまうえば最後……。

銀の福音が使用する攻撃を全て喰らえば最後、確実に死しか訪れないだろう。

「箒いいっ！！」

S i d e マリーチ〓オヴェスト〓ポッツォ〓ファブリカ

目の前で繰り広げられる光景は、あまりにも、あまりにも情けない物だった。

たった一機の第三世代に押される一夏と箒の二人組。

しかも、箒は与えられた力に溺れており、醜態を晒し続けている。もちろん、ソレにより一夏がピンチとなれば、いつまでも海中から観察しているワケには行かない。

「ナヴァグラハ、行けですう」

Ver.34（後書き）

フルバレルの発売日が未定になっちゃった……。

男性素体と女性素体を買ってきてオリジナルの自作するからいいもん。

色々なパーツ（ガンプラとか他の神姫のとか色々）を削ったり、切ったり、彫ったりしながら新しい装備作るんだ。

パテで色々とやるんだ！

でも、硬化不良の部分が現れたらちよつと凹んで猫をナデナデして活力を……。

武装淑女or武装紳士は自分で妄想したものを形にするんだ！って、神姫NETで昔知り合った人に言われたんだ……。

とりあえず、色んなライフルを組み合わせて固めて、なんか尻尾ポイものを付けて……。

ライン・ヴァイスリッターのハウリング・ランチャーもどきを作ってみて……。

生き物ぽさを増して……（妄想の世界にロゲインしました）

簞をかばうように抱き締める一夏。

その背中に無数の光弾が突き刺さる。

白式のエネルギーシールドですら相殺しきれない爆発が一夏に襲い掛かった。

だが、白式のアーマーが破壊され、一夏の肌が少し焼かれたあたりから一夏を襲っていた衝撃が止んだ。

「くっ……」

「一夏っ、一夏っ、一夏あっ!!」

気を失った一夏を抱かかえ、混乱する簞。

その周りを守るように浮かぶ、6基にまで減ったナヴァグラハには気がついていない。

「ちっ、いつまでもギャーギャー騒いでんじゃねえですう。さつさと逃げるですう」

そして、機械触手？アーク・E・トウジス？で二人をガードする様に海中へ引きずり込むマリーチ。

その援護をする様に、残った6基のナヴァグラハが銀の福音に襲い掛かった。

「La……」

甲高い機械音声を響かせ、ターゲットをナヴァグラハに変更し戦闘を始める銀の福音。

マリーチは傷ついた一夏と箒が水圧でやられない様、二人を庇うためにエネルギーシールドの保護範囲を広げ、海中を高速で移動しながら退避する。

「戻ったら足腰立たなくなるまで鍛えなおしてやるですう」

「……いちかあ」

完全に気を失っている一夏を抱き締めながら涙を流す箒。

ソレを見たことで怒りの表情を露にするマリーチだが、先の箒の様にその程度の事で戦闘中であるという意識は失わない。

「……。うぜえ餓鬼ですう」

Side ナヴァグラハ&銀の福音

6基のナヴァグラハは、搭載された試作型人工知能と超高感度ハイパーセンサーにより複雑な軌道を描きながら銀の福音に迫る。

もとより小型であり、敵の隙を付くことを目的とした物だけに、銀の福音のハイパーセンサーの隙を縫う様に攻撃を続けた。

一つ計算外のことがあったとすれば、ナヴァグラハに搭載されている試作型人工知能は、あくまでも操縦者が操作するISを対象としている。

だからこそ、あまりにも予測行動とは異なる攻撃をする銀の福音の前では、時間稼ぎにしかない。

「LaLa……」

銀の福音は主武器である銀の鐘、全砲身36門を同時展開し、周囲を取り囲むナヴァグラハを一掃しに掛かる。

デタラメな全方位射撃は、精密な機械動作で攻撃を避けるナヴァグラハであっても避けられる物ではない。

避けそこなつた1基が落とされ、それに続くように2基、3基と落とされてゆく。

「LaLaLa……」

残り3基となつたナヴァグラハ。

それらに積まれた人工知能は一つの決断をした。

マザーである人工知能はマリーセレスに積まれているため、ナヴァグラハが何基壊れようが問題はない。

そしてなによりも、機械であるが故に自己保存の法則など存在しない。

「La……？」

操縦者のいる銀の福音にはない思考パターン。否、システムパターン。

3基のナヴァグラハは、銀の福音を囲むように3方向から襲い掛かる。

追尾効果のあるエネルギー弾を放ちながらまっすぐと突貫し、銀の福音に接触すると同時に爆発を起こした。

その自爆によるシールドエネルギー減少は微々たるモノだったが、爆発時に撒布されたISのハイパーセンサーを一定時間無効化する特殊チャフにより、銀の福音はセンサーで捉えていた三人の姿を見失ってしまう。

「……」

粉々になり、粒子化することなく海に落ちるナヴァグラハを見つめる銀の福音。

ほんの少しの間、木っ端微塵となりゆっくりと海底へ沈んでゆくナヴァグラハをハイパーセンサーで確認し続けると。何かを振り切るように銀の福音は移動を開始した。

それはまるで……。

何かから逃げるような……。

S i d e o u t

旅館の一室。

その一室に入る障子の前で、マリーチは腕を組んでいた。

「……」

その室内には意識のない一夏、ずっと項垂れて話もしない箒がいる。

普段のマリーチならば怒鳴りつけていただろう。だが、マリーチには分かるのだ。

いまの箒の気持ち、大切な人を失う気持ちがよく分かる。

「……。だけど、お前はまだ失っていないですう」

小さく呟き、その場を後にするマリーチ。
そのマリーチとすれ違う鈴。

「マリーは、なんにも言わないの？」

「私の役目じゃないですう。その役目は、お前の役目。箒の次に一夏と共有した時間が長いお前の役目ですう。ミスるんじゃないですう」

「そっか……。うん、わかった。やってみる。でもさ、一ついい？」

「なんですか？」

言葉とは裏腹に、何が聞かれるか分かっているような口調で言うマリーチ。

その口調に微笑みを浮べる鈴。

もちろん、すれ違い状態である為、互いの表情はわからない。

「協力はしてくれるでしょ？」

「ハッ、なに当然なこと言ってるですう」

そう言っで、マリーチは鈴から離れ歩いて行く。

失った装備を補充する為に……。

「ほんと、心強いよ。マリーはさ」

そう呟いき、鈴は表情を変えて一夏の眠る一室の扉を勢いよく開けた。

一夏に会ったためではなく、落ち込んでいる箒を立ち上がらせる為

に。

Ver. 3.5 (後書き)

むむう……。
下手なのか？

Ver.36(前書き)

修正

素粒子を亜高速で射出

素粒子を亜光速で射出

理由

変換ミスor誤字

装脚戦車 様に感謝

そして、名前が気になって検索したところで面白い動画を見ることが出来た事も感謝♪

修正

ナヴァグラハが粒子化

ナヴァグラハが量子化

理由

誤字

Dai 様に感謝

マリーチの向かった部屋。

そこには、気持ち良さそうに眠ったドロテアが一人。
他に目につくものといえば、備え付けのテーブルに置かれた一枚の紙だろう。

？やあ、お嬢様。良い感じに出来たみたいだね。補充のナヴァグラハを2セット置いておくよ。それじゃ、がんばってね？

という内容の後に、by・ローレーナと書かれている。
すごく微妙そうな顔をするマリーチ。

そして、なんの容赦も無くドロテアを蹴り起こした。

ガンッ！

「へにゅ！？」

顔面から床に目掛けて落ちるドロテア。
マリーチはそれを見下して言う。

「いつまで寝てるですう。ほら行くですう」

「にやう？……。はっ、はい！」

床に置いてあったナヴァグラハが量子化して行く。

マリーチはそれだけを確認すると、ドロテアには目もくれず部屋から出る。

ドロテアはしわくちゃになってしまった制服を引っ張り、伸ば

しながらマリーチの後に続いた。

「ま、待つてください。マリーチ様っ!？」

二人が向かう先はただ一つ。

一夏が眠り、他のメンバーが全員揃っているであろう部屋。

「——完了しましたわ」

「——いつでもいける」

セシリアとシャルロットの声が聞え、その後姿が見える位置でマリーチは止まる。

その後ろには、制服を脱ぎISスーツに着替えたドロテアが控えていた。

「で、あんたはどうするの？」

「私……私は——」

マリーチは瞳を閉じ、部屋の中から聞える声に耳を済ます。

「戦っ……戦って、勝つ！ 今度こそ、負けはしない！」

「決まりね」

鈴の言葉と共に、マリーチは歩を進め扉を開ける。

「やっと決心しました。それじゃ、勝つ為の作戦会議です」

全員がマリーチの顔を見て頷く。
そして、ドロテアが主の意を組むように言う。

「それでは皆様、空き部屋を一室確保して在りますのでそちらへ。」
こうして、一夏を除く専用機持ち全員と銀の福音との闘いがはじまった。

——海上の200m。
そこには、胎児のような格好をする銀の福音がいた。

「確認したですう。ナヴァグラハ、18基同時起動。マリーセレス、超高感度ハイパーセンサー・mk2起動」

普段、装備を呼び出し使用する為に、一々口を開かないマリーチが武装名を言いながら装備を展開させる姿に信じられない表情を浮かべる専用機持ち達。

だが、その理由もすぐに分かった。

「……くっ、カハッ——」

マリーチが口元を押さえると共に少量の血が吐き出される。

「」「」「マリー！？」」「」「」

「マリーチさん！？」

「マリーチ様！？」

突然血を吐いたマリーチに驚く全員。

「うるさいですう。ちょっと、新しく装備したセンサーの負荷が予想以上だっただけですう。でも、これでえ——」。私の目は肉眼合わせて20個ですう。ラウラ、始めろですう」

若干苦しそうな表情をするマリーチに頷くラウラ。

その表情は、一夏に出会いより高みへと昇った軍人の顔をしている。

「分かった。全員配置に付け」

全員が頷き、それぞれの配置場所へと移動して行く。

マリーチは銀の福音から最も離れた海中で待機し、目を海中に張り巡らせる。

ドロテアは、マリーチのいる場所の海上付近で待機。

残り全員は、ラウラのはるか上空。

いつでも降下できる状態で待機する。

「砲撃を開始する」

ラウラは銀の福音から5000mほど離れた空中に陣取り、砲戦パッケージ？パンツァー・カノニア？およびアマウント荷電粒子砲？アポカリプス？を展開。

パンツァー・カノニアは、80口径レールカノン？ブリッツ？を二門左右の方に装備し、遠距離からの攻撃に備えた4枚の物理シールドを左右と正面に展開させる武装。

追加装備としてマリーチからラウラにと渡されたリアマウント荷電粒子砲？アポカリプス？、これは背部に接続するタイプの武装で

あり、二門の巨大な砲塔が付いている。

使用時には、背部の接続部が可動、肩に背負うような形となる武装。

物理弾を打ち出すブリッツとは異なり、アポカリプスは超大型バツテリーと加速器を内蔵することで素粒子を亜光速で射出する。

ブリッツから放たれた弾丸は、銀の福音に命中し大爆発を起こす。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

ラウラに気がついた銀の福音は、翼を広げラウラへと迫った。

「ラウラと敵機接触までおよそ30秒。全員準備を怠るなですう」

専用回線で全員に言うマリーチ。

銀の福音は気がついてはいないが、全てのナヴァグラハが距離6200mを保ち、海中から常に監視の目を光らせていた。

「ちいっ！」

接近されている最中もラウラは、ブリッツによる砲撃を行う。

だが、それら砲撃の半数を翼から放つエネルギー弾で撃ち落とし、銀の福音はラウラに接近していた。

そして、銀の福音がラウラに右手を伸ばした時――。

「セシリア、撃つですう」

「待っていましたわ」

強襲用高機動パッケージ？ストライク・ガンナー？を展開させた

セシリアが銀の福音の腕を狙撃する。

この状態ではBTを使用できないが、ソレを補う為の武装、全長2メートルを越す大型BTレーザライフル？スターダスト・シューター？を装備。

さらに、ストライク・ガンナー装備時の移動速度時速500kに対応する為のバイザー状超高感度ハイパーセンサー？ブリリアント・クリアランス？を頭部に装着している。

そして、ブリリアント・クリアランスには――。

20の目からなるマリーチの360度全方位情報が処理された状態で送られ続けている。

「箒、鈴、銀の福音予想進路海中に待機するですう。シャルロット、銀の福音反転進路を送ったですう。接近して叩くですう」

セシリアは送られてくる情報を元に、シャルロットが背後を取れる位置に銀の福音を誘導した。

「敵機Bを確認。排除行動へと移る」

「遅いよ」

セシリアに誘導されたとも知らずにシャルロットの接近を許す銀の福音。

そして、シャルロットはその背に向けて散弾銃？P・A・Rショットガン？二挺による零距离射撃を浴びせる。

一瞬だけ姿勢を崩す銀の福音。

だが、すぐさま反転しシャルロットに銀の鐘による反撃を行った。

「おっと。悪いけど、このガーデン・カーテンとマリーから貰ったエンゼルブローチは、そのくらいじゃビクともしないよ」

二枚の実体シールド、二枚のエネルギーシールドがカーテンの様に前面の攻撃を遮る。

マリーチがシャルロットに与えたエンゼルブローチは、特殊な超音波によりISのシールドを強化すると共にエンゼルブローチそのものを分離させあらゆる攻撃を防ぐ遮断壁を形成することも可能。

防御の間も得意の高速切替で攻撃を行うシャルロット。

さらにセシリアの狙撃とラウラの砲撃が加わる。

「……優先順位を変更。現空域からの離脱を——」

「箒、鈴、銀の福音が予想進路を取ったですう。叩き落してやれですう」

専用回線で箒と鈴に言うマリーチ。

その通信の直後、銀の福音が全方位にエネルギー弾を放ち全力で離脱を計る。

「もらったああ!!」

「離脱などさせるか、叩き落す!」

強行突破を行おうとした銀の福音に体当たりをする箒。

その箒の後ろでは、鈴が機能増幅パッケージ?崩山?を戦闘状態に移行させる。

両肩の衝撃砲が開くと同時に増設された二つの砲口が姿を現す。

「筭、鈴の準備が完了したですう。離脱するですう」

「わかった」

銀の福音を抑えていた筭が離脱すると同時に衝撃砲の一斉射撃が降り注ぐ。

いつもの不可視の弾丸とは異なり、炎を纏ったソレは熱殻拡散衝撃砲と言えるものだった。

「やりましたの!？」

「機能停止にはまだ足りないですう。つ、銀の福音に高エネルギー反応確認。全員退——、防御するですう!」

マリーチの言葉と共にその両腕を広げ、翼を外側に向ける銀の福音。

「銀の鐘、最大稼動——開始」

いままでとは考えられない程のエネルギー弾が全員を襲う。それはまるで、光が爆ぜたかの様だった。

V e r . 3 7 (前 書 き)

銀の福音が終わるまでこの書き方を貫く！

シャルロットが筈の前に割り込みエネルギー弾を防ぐ。

鈴、セシリア、ラウラ、ドロテア、マリーチの5名は離れた場所 にいた為、回避行動を取る事で何とかダメージを抑える事が出来た。

「シャルロット、そっちは持ちそうですっ？」

「まだ大丈夫だけど……これはちょっと、きついね」

防御専用パッケージと防御専用武装を用いたとしても、かなり近い距離から行われた異常なまでの連射を、立て続けに受ける事は厳しいものがあつた。

マリーチと通信しているさなかでも、物理シールドが一枚碎け、遮断壁にも歪みが発生する。

「ラウラ、セシリア、銀の福音を止めるですう」

「言われずとも！」

「お任せになつて！」

後退するシャルロットを援護するように銀の福音に左右から襲い掛かる二人。

マリーチの的確な予想処理の行われた座標にブリッツとアポカリプスで砲撃を行うラウラ。

セシリアは高機動を生かした移動射撃を行った。

「鈴、いまですう！」

マリーチの叫びと共に銀の福音に突撃する鈴。

銀の福音は真下からの強襲に対応しきれず、斬撃と拡散衝撃砲を
まともにくらい体勢を崩す。

「もらったあああつ！！」

デタラメに銀の鐘を放ち応戦する銀の福音に、鈴も拡散衝撃砲で
対応する。

互いにダメージを追いながら攻防は、仲間の援護と信頼を背負つ
た鈴に軍配が上がった。

鈴の放った斬撃は、銀の福音頭部に接続されたマルチスラスター
？銀の鐘？の片翼を斬り落とす。

「はっ、はっ……！ どうよ——くっ！？」

片翼を斬り落とし、満足げな表情を浮かべていた鈴は、海中から
飛び出してきた黒い球体に弾き飛ばされる。

鈴を弾き飛ばした黒い球体。ナヴァグラハは態勢を立て直した銀
の福音の回し蹴りを喰らい、砕け散った。

もしも、この一撃が鈴に当たっていたのならば、ナヴァグラハの合
った位置、鈴の左腕アーマーは破壊されていたに違いない。

最悪、左腕の骨を砕かれてもおかしくはない破壊力を有した蹴り
だった。

「ちいつ、ドロテア。嫌な予感がするですう。防御体勢で待機」

「はい」

目の一つを砕かれたマリーチは、自らの上にドロテアを配置し
防御体勢を取らせる。

その間にも銀の福音に攻撃を続ける筈。

だが、自らの装甲が焼き切れるのも無視して刀身を掴む銀の福音。

「なっ!？」

さすがに驚きを露にする筈。

銀の福音は刀を掴んだ状態で手を広げ、残った翼でエネルギー弾
を放とうとする。

「早く武器を捨てるですう！」

しかし、筈はマリーチの警告を無視し刀を手放さない。

それどころか爪先の展開装甲を開き、エネルギー刃を発生させ、
銀の福音にかかと落としの様な格好になりながらの斬撃を行った。

「たあああああっ!!！」

その一撃は、銀の福音に残った翼を斬り落とす。

両方の翼を失った銀の福音は、重力に引かれ海面へと墜ちていっ
た。

「はっ、はあっ、はあっ……!!！」

「無事か!？」

ラウラが慌てた様子で筈に近づいた。

筈はラウラに支えられながら、乱れた呼吸を整える。

「私は……大丈夫だ。それより福音は――」

「全員、退避！」

マリーチの叫び声と共に、水中に在ったナヴァグラハ4基が消滅し、爆発を起こす。

そして、海面が強烈な光の球によって吹き飛ばされた。

その中心、そこには蒼い雷を身に纏いうずくまる様に自らを抱く銀の福音がいる。

「これは……！？ 一体、何が起きてるんだ……？」

「！？ まずい！ これは――」

「なにしてるですう！ 第二形態移行が完了したら一人じゃ手におえないですう。さっさと離れ――」

だが、遅かった。

「キアアアア……！！」

獣のような咆哮を発した銀の福音がラウラに向かって飛び掛る。

無論、ラウラとて逃げようとはしたが……。

左脚を掴まれてしまった。

「なにっ！？」

「ラウラを離せえっ！」

接近ブレードに持ち替えたシャルロットが銀の福音に切りかかるが、刃は呆気なく片手で受け止められてしまう。

「よせ！ 逃げろ！ こいつは——」

ラウラは言葉を最後まで言うことなく、海へと墜ちてゆく。

「鈴！ ラウラを回収して一次離脱！」

「わかった！」

墜ちゆくラウラを高速で回収し、即座に離脱する鈴。
そして、シャルロットは……。

「シャルロット、退くですう！」

「ラウラをよくもっ……！」

マリーチの話を聞かずにブレードを捨て、ショットガンの銃口を銀の福音の頭部に押し付け、躊躇わずに引き金を引いた。

ドンッ……！という爆音が聞えたが、その直後に吹き飛んで行くシャルロット。

爆音はショットガンのものではなく、第二形態に移行した銀の福音が放ったエネルギー弾の迎撃音。

そして、銀の福音の全装甲がひび割れ、タマゴから孵るひな鳥の様に小さな翼を広げる。

だが、出てきたのはひな鳥ではなく、完全に成長した無数の翼を持つ凶悪な鳥だった……。――

「な、何ですの！？ この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な」

「ちいっ！！ セシリア、さっさと逃げるですう！」

瞬時加速をも上回る爆発加速でセシリアに接近する銀の福音に向けて体当たりをする3基のナヴァグラハ。

接触と共に大爆発を起こす。

その爆発はセシリアの意識をも奪ってしまったらしく力なく落下してゆく。

「ドロテア！ セシリアを回収して離脱するですう。ついでに、離脱時に撃てるだけ撃って弾幕張っていけですう！」

「ご命令の通りに！」

瞬時加速をし、セシリアが海面に叩きつけられる前に回収するドロテア。

そして、銀の福音がいる方向に向かってデタラメにバリステイツクブレイズを撃ちまくり離脱してゆく。

「箒！ 別れて攻撃しても勝てないですう。上下で挟むですう」

「わかった！」

箒は急加速し、銀の福音の真上に移動する。

マリーチは、ナヴァグラハを全て銀の福音へ突貫させ、自身はその真下へと移動した。

こうして、残った二人による最後の攻撃が始まる。

重力と瞬時加速により何倍もの速さを獲得した箒は、上空から銀の福音に目掛けて特攻する。

「うおおおっ!!」

ナヴァグラハを相手取っていた銀の福音は、近づいてくる箒に向かって迎撃の姿勢をとるが……。

真下の海面が異常なまでに波打っている事に気がつき、自らを抱きように防御姿勢と取った。

その直後、海面から飛び出てくる無数の刃。

マリーセレスに装備されている実剣サーペントインがこれでもかというほどの量で銀の福音に投擲されたのだ。

「数は力ですう!!」

無数の刃と共に海面に上がってくるマリーチ。

空と海からの攻撃により、銀の福音は防御と回避に徹していた。

数の暴力をエネルギー体と化した翼で防ぎ、箒の攻撃をギリギリで回避する。

だが、局部的にだが展開装甲を用いた箒の動きは凄まじく、徐々に銀の福音が押され始めた。

「地獄の扉が開くのですう…グジュグジュのギョルギョルのビチビチですう!!」

台詞と共に海面からあがり、機械触手?アーク・E・トゥージス?をいっぱいまで広げるマリーチ。

防御に回していたナヴァグラハすらも攻撃に回している。

そして、そのマリーチの姿を確認した箒も紅椿に残ったエネルギーすべてを雨月に注ぎ、必殺の一撃を放とうとしたのだが……。

「これで、トドメだ！」

キュウウン……と、力が抜けてゆくような音をたて光を失ってゆく紅椿。

「なっ！ エネルギー切れだと！？ なぜ！？ ——ぐあっ！」

マリーチの単一仕様能力？ バッカルコーン+E83？ を耐え抜いた銀の福音により、マリーチの方向に向かって吹き飛ばされる箒。吹き飛ばされてきた箒を何とか受け止めるマリーチだったが、そこに生まれた隙を銀の福音は見逃す事はなかった。

「……。負けですう」

箒とマリーチに目掛けて放たれる無数のエネルギー弾。

それは、第一形態の時とは比べ物にならない量と威力を伴っていた。

「いち、か……」

マリーチの手の中で気を失って尚も一夏の名を呼ぶ箒。そんな箒を見ながら、マリーチは一つの決断を下した。

「まったく……。何時まで経っても一夏、一夏ですう。お前も一夏の事を言えた義理じゃないですう」

箒を抱きかかえる様にし、アーク・E・トウーグスで包み込む。
そして、誰も見たことのない微笑みを箒に向けながら光の濁流に
飲まれていった。

トドメとばかりに出力をあげてゆく銀の福音。

しかし、第二形態へ移行した銀の福音ですら防ぎきれない荷電粒子
砲の一撃でもって彼方へと吹き飛ばされてゆく。

「!？」

さらに続くように無数の禍々しいエネルギー弾が銀の福音に襲い
掛かった。

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」

意識を保っていた者たちが見たのは、白く輝きを放つ機体。

白式の第二形態・雪羅を纏った一夏と……。

黒く刺々しい形状へと変化し、怒気を身に纏った機体。

アーティルの第二形態・フルバレルを纏った怒りに満ちたドロテ
ーアの姿だった。

Side ドロテーア「リックン

セシリア様を安全な岩場へと連れて行き、治療をして戻ってきた
ら……。

マリーチ様がボロボロにされていた。

光の弾がマリーセレスの装甲を抉り、マリーチ様の肌を傷付けて

ゆく。

「ねえ？ なにしてるの？ なに、マリーチ様を傷付けてるんだ！」

怒りが肌を焦がす。

憎しみが心の底から湧いてくる。

だが、何かが頭の中で囁いてきた。

『奇跡は起こせる。起こしてみせる！』

助けられるのだろうか？

だけど、アーティルの装甲を盾にしてもマリーチ様を救えないだろう。

ならばどうすれば良い？

？T・ARMS？

見たこともないプログラム名がアーティルの画面に表示される。
さらに続くように二つ表示された。

？咆哮？

？CHIKARA？

だけど、なんだか次にもう一つ表示される。

？武装ランチャーが装備されていない為、咆哮とCHIKARAは
使用できません？

……。

だったら、表示させるなよ！と思った私は悪くない。

「ああ、こうしている間にもマリーチ様が！」

焦りが頭の回転を遅くする。

だけど、たった一つだけの考えは変わらなかった。
マリーチ様を助けなければ、なんとしても……。

「そ、そうだ……。奇跡を起こせばいい」

とんでもない事を考えているのは私にも分かる。

奇跡なんてそう易々と起こせるものではない。

だけど、私にはコレしかなかった。

焦りは怒りとなり、アーティルの装甲を黒く染め上げる。

自分でも何を考えているのかよく分からない。

だけど、気がつく……。――

私は、銀の福音に向かってありったけのエネルギー弾を撃ち込んでいた。

Ver. 38 (後書き)

ヤンデレ、ヤンデル？

忠誠心も行き過ぎると狂気と変わらないよね？

「再戦と行くか！」

一夏の叫びと共に白式と銀の福音は正面からぶつかり合う。
雪片式型を右手で構え、斬りかかる白式。
銀の福音は、まるで蝶の様にひらりとソレをかわすが……。

「マリーチ様を傷付けたヤツは……。許さない！」

絶賛大暴走中のドロテアの蹴りをまともにくらい体勢を崩す。
その隙を逃がす事無く、一夏が新たに発現した装備。左腕と一体化している多機能武装腕？雪羅？から発せられるエネルギー刃をクローの様に変化させ、銀の福音の装甲を薙ぐ。
攻撃自体はシールドバリアーにより阻まれはしたが、その一撃は確実に銀の福音にダメージを与えた。

「敵機の情報を更新。攻撃レベルSで対処する」

甲高い無機質な機械音声で告げる銀の福音。
そして、全身のエネルギー翼を大きく広げ、態勢を立て直した直後に全力掃射を開始した。

「そう何度も喰らうかよ！」

一夏は避けようとせず、多機能武装腕？雪羅？を前に突き出し進む。

雪羅の形が変化し、光の膜が一夏の前面に広がる。

それは、零落白夜で構成されたエネルギー無効化能力を持った盾。

「数には数！ 奇跡が起きないというのならば、無理にでも起こします！」

ドロテアも一夏の様に攻撃を避けようとはしない。

アーティルが第二形態移行をし、フルバレルとなった事で丸みを帯びたピンクの装甲は刺々しい黒の装甲へと変わり、何処となく防御色を漂わせていた身体は攻撃色に染まっている。

その特性を生かすかのように銀の福音から放たれるエネルギー弾一発一発に対し、同様の威力を持ったエネルギー弾を撃ちだし漏らすことなく相殺した。

「うおおおっ！」

第二形態移行した事で強化された大型ウイングスラスター4機をフルに使用し、二段階瞬時加速を行い銀の福音へと迫る一夏。

「状況変化。最大攻撃力を使用する」

一夏とドロテアにより追い詰められた銀の福音は、甲高い機械音声で告げる。

瞬時に自らの体をエネルギー翼で包み、まるで繭の様な形状へと変わった。

誰が見ても分かるほどにまずい状態。

そして何よりも、機械音声による宣言もされている。

一夏とドロテアの二人が身構えた瞬間、銀の福音が攻撃を開始した。

全ての翼が回転するように展開され、全方位に向かって高出力エネルギー弾が嵐のように降り注ぐ。

それを見た一夏が仲間の守りに入ろうとするが――。

「一夏様！　ここは私にお任せを――。一発たりとも抜けさせはしない！」

一夏の目の前に割り込むようにドロテアが銀の福音――。高出力エネルギーで出来た弾雨の中に突っ込んで行く。

その背にフルバレルという名の由来でもあり、第二形態へ移行した今も不完全で名称不明な大型重火器を背負い。

ドロテアは、黒光りする銃身と禍々しいまでの存在感を放つ砲口を銀の福音に向ける。

そして、何の躊躇いもなく頭の中に投影されたトリガーを弾いた。

？CHIKARA？

音すら発生させない禍々しい超大型なエネルギー弾。

それが銀の福音の放ったエネルギー弾すべてを呑み込み進んでゆく。

互いに打ち消しあう相殺ではない。

圧倒的な差のある質量とエネルギー量。

一発一発が嵐の様に降り注ぐソレとは異なる使い方、ありつただけのエネルギーをただの一発に凝縮した形。

暴飲暴食とでも言えばよいのだろうか？

その巨大なエネルギーの塊は、銀の福音が放ったエネルギーの嵐を綺麗サッパリ食い尽くしてしまった。

「まだまだあ！」

咆哮と共にありつただけの武装を体中に転送するドロエーア。
多弾頭ミサイル？ビーハイヴ？、高速ミサイル？S L U M - ハイ
マニニューバ？、特化ミサイル？ニンブス？、速射砲？アリサノス？
？ドラゴンキャノン？、対I S ロケット弾？ヨルムンガンド？。

「試作品ですが、威力は申し分在りません。さあ、耐えて見せてくださいな！」

全ての武装が一斉に火を噴いた。

それらは、確実に銀の福音からエネルギーを奪い去ってゆく。

「一夏様！ いまです！」

「任せろ！」

アーテイルから放たれる問答無用の弾幕は、銀の福音から機動力を奪い去り、防御という選択肢以外のすべてを消し去っていた。

そこへ向けて、脚部展開装甲を開放し、残った全てのエネルギーを雪片式型へと注いだ一夏が突っ込んで行く。

「おおおおっ！！！」

零落白夜を銀の福音の胴体に突き立てる。

そのエネルギー刃を身体から引き剥がそうと、銀の福音は一夏の首に手を伸ばす。

本来ならば、エネルギー翼で叩き落す事も出来ただろう。

だが、その翼は問答無用の爆撃にも等しい銃撃により封じられている。

「おおおっ!!」

爪が少しだけ一夏の首に食い込んだところで、銀の福音はその機能を停止させた。

そして、粒子へと戻って行く。

「おおっと! あぶねえ、あぶねえ」

銀の福音というアーマーを失い、意識を失っていた操縦者が海へと落下する前に拾い上げる一夏。

こうして、暴走IS事件は幕を閉じた。

後日、試作弾すべてを使いきったことが判明したドロテアは、マリーチと研究長にしてアイルランド代表アルトアイネスのエル・バイアクヘーにこっぴどく叱られたらしい。

Ver.39(後書き)

O・P・Fはアイルランドを取り込んだ。

簾をかばい、銀の福音の攻撃を受けてしまったマリーチは旅館の一室で横になっている。

背中に大きな傷を負ってしまったてはいるが、それ以外にダメージはない。

「手痛いダメージですう。まあ、アーティルが予想外に第二形態移行をしたのは良い収穫ですう」

「僕としては、お嬢様の背中に傷が付いたのは許し難いんだけどね」

一人呟いたマリーチの言葉に反応するロレーナ。
だが、部屋にはロレーナの姿形すらない。

「別にいいですう。とりあえず、銀の福音のコアを入手する様にアメリカ支部に言っておけですう」

「わかった。伝えておくよ」

フォンという小さな音が部屋に響き、それ以降は静寂とマリーチの小さな溜息だけが部屋に響いた。

「ちょっと、神出鬼没すぎるですう。フブキやミズキも探せばいるかも知れないですねえ」

「探してみようか？」

「さつさとアメリカ支部に行けですう」

「H A H A H A」と陽気な笑い声を響かせながら、今度こそ本当にロレーナの気配は消えた。

S i d e マリーチ〃オヴェスト〃ポッツォ〃ファブリカ

さて、なにやら私が寝ている間に面白い事があつたらしいが――

関わる事が出来なかった。

ドロテアも私の世話をしていたため、何が在ったかは知らないらしい。

「はあ、ダルイですう」

私はドロテアの助けを借りてバスへと向かっている。

その途中、織斑先生と銀の福音操縦者がなにやら話をしていた。

「――私は許しはしない」

「――しばらくはおとなしくしておいたほうがいい」

鋭い気配を纏った福音の操縦者と同様に鋭い気配を纏った織斑先生がいる。

まあ、盗み聞きもアレだし……。

福音の操縦者は、銀の福音の事を思っていたようだから、良い事を教えてやろう。

「それは忠告ですか、ブリュンヒルデ」

「アドバイスさ。ただのな」

よしよし、この辺りで割り込むか。

「ちょっと話良いですう？」

突然話しかけた私に、訝しげな表情を向ける福音操縦者。
そして、なんか嫌そうな表情を向ける織斑先生。

「えっと、貴女は？」

「私は、O・P・F総帥。マリーチⅡオヴエストⅡポッツォⅡファ
ブリカですう」

訝しげな表情を浮べていた福音操縦者は、驚きの表情を浮べる。

「さてえ、銀の福音思いな貴女に良い事を教えてあげるですう。銀
の福音のコアは本来、凍結処理させられる予定だったのですがあ、
我が社で開発している試作型ISのコアとして使用できるよう現在
交渉中ですう。どの企業も手を出せなかった無人機の開発の足が
かりとする予定ですがあ……。ま、成功するかは不明ですう」

につこりと微笑みを浮かべて言ってみたが、何とも言えない表情
になった福音操縦者。

織斑先生も何とも言えない表情をしていた。

「ま、完成したらあわせてやるですう」

「……。お前はもう手に入れたつもりなのか？」

「無論ですう。ここ数ヶ月で世界第2位に上り詰めたO・P・Fを舐めてはダメですう」

「……はあ」

織斑先生に溜息を吐かれてしまった。

だけどもあ……。

問題はないし、私は私の行動を止める事はない。

「それじゃ、福音の——」

「ナターシャ。ナターシャ・ファイルスよ」

「——それじゃ、ナターシャ。またどこかですう」

ナターシャの顔に少しだけ微笑みが戻ったのを確認し、私は帰路に就く。

ドロテアは一言も喋らなかったが、満足そうな表情をしていた。

八月。

IS学園は遅い夏休みに入ってる。

ということ、私も夏休みなワケだが……。

O・P・F総帥という立場があるため、日本支部の私室へ戻ってきて仕事をしていた。

「それで、銀の福音のコアは手に入ったですう？」

「はい、問題なく手に入りましたよ」

「問題ないじゃん！」

んで、いまは何をやっているかというところ。

アメリカ支部支部長と副支部長に、コアに関する経過報告をおこなってもらっている。

空中投影型ディスプレイを用いてのテレビ会議というヤツだ。

私の部屋にあるディスプレイは我が社の製品なのだが、3Dになったり、防犯機能が付いてたりとか無駄な機能を満載してしまったため、試作段階で企画中止となった物を使っている。

私としては、コレといって問題はない。

だが、社の利益を考えると、無駄が多すぎて売り物にならない物を出すわけには行かない。

ISに関してはかなり多めに見ているが、IS以外の商品に関して厳しくしなければ元が取れないのが現状だ。

「それじゃ、それでミミックの作成に取り掛かるですう。アメリカ支部だけ第三世代も微妙、他企業の取り込みも微妙、軍への介入も

微妙、一般市場も微妙と……。成績足りてないですう」

「申し訳ありません。でも、コンサートが忙しかったりと」

「ちょっと、ライブで忙しかったじゃん！」

私の指針でO・P・Fは基本的にフリーダムだ。

各支部のIS製作コンセプトなどに関しても本社は口出ししたりはしていない。

だが、だからと言って、売上げノルマが存在しないワケではない。

「次、ノルマ達成できなかったら——。とりあえず、合唱団とライブチームを解散してもらうですう。それでえ、ちょっと足りない分は身体で払ってもらいますう？ シャラタンにベイビークラスとなれば、貸し出しだけでもかなりの額になりそうですう」

「え。すつ、すぐにミミック計画に取り掛かります！ 必ずや良いご報告をマリーチ様に！」

その台詞と共に、プツンッ！と音を鳴らして消えるディスプレイ。

さて、残った山済みの仕事をしなければならない。

分割して積んであるが……。

全部あわせたら2〜3mくらいありそうだ。

「眩暈がしてきそうですう」

結局、私の夏休みは書類と会議などの仕事だけですべてが費やされてしまった。

。。
。
。

「ああ、気がつけば夏休みは終わり……。なんとも虚しいものです」

「ですが、ほら！ マリーチ様が夏休みを全てO・P・Fで過ごされたおかげで社内指揮は一気の向上。世界シェア第一位にまで上り詰めましたし」

そう……。

ドロテアが言うように、夏休みのあいだO・P・Fからは一步も出ることは無かった。

一步も、だ！

ありえない。

プールにも行きたかったし、一夏が教えてくれた@クルーズとか、五反田食堂とか、他にも色々な場所にも行ってみたかったのに……。

「はあ……。まあ、時は戻らないですう。お前はなにしてたですう？」

夏休みの間、ドロテアはロレーナの指揮下に入っていたため、私とは別々だったのだ。

「私ですか？ 私はO・P・Fが運営する私立女子校聖マリアンヌ女学院のデータ整理を行っていました。1年生から3年生までの簡易IS適性検査を実施していましたので」

「でえ、良さそうな人材データは見つけたですう？」

「はい。五反田 蘭という中等部3年生がIS適性Aランクとして登録されていました」

ドロテアはそう言いながら、五反田 蘭の写真とデータを私に見せてくる。

見た感じは、ロングヘアーのウェスペリオーみたいな感じだ。どうせならジュビジーみたいな娘が欲しかったな。

「……ライトアーマーシリーズも作りたいですう」

「？」

「なんでもないですう」

そんな話を話していると、いつの間にかIS学園前に到着していた。

S i d e ドロテア＝リッケン

時は少し戻り、夏休み真っ只中。

マリーチ専属メイドとしてそれなりの地位を与えられているドロテアは、仕事の一環として新たな人材探しをしていた。

本来ならばロレーナがしなければならぬ仕事なのだが、ロレーナは日本国内でコアを所持している軍及び企業に交渉を持ちかけに行っている。

「O・P・FってIS以外の事もたくさんやってるんですね」

無数のPCに囲まれた一室にいるドロテア。

ここは、O・P・Fでも限られた人間しか入ることが許されていない情報収集室だ。

様々な情報が集中している為、警備システムも最高の物が使用されている。

「えつと……。あ、あつた。これですね」

ドロテアは情報の中から私立女子校聖マリアンヌ女学院の生徒名簿及びIS適性簡易データを引き出し閲覧し始める。

殆どの生徒がIS適性Cであり、O・P・Fとしてはあまり必要とはしていない。

私立女子校聖マリアンヌ女学院からはIS操縦者を補給し、姉妹校である私立女子校聖ヘルヴェティア女学院からはIS整備などに特化した人間を補充している。

マリアンヌは基本的に一般よりも高水準な勉強を教え、初期部分だけながらもISの授業も行っている。

ヘルヴェティアはマリアンヌとは異なり、一般水準の勉強と高水準なIS関連授業を行っている専門学校とも言えるだろう。

ヘルヴェティアは入学は非常に楽だが、卒業が困難であることで有名だ。

だが、卒業する事が出来れば将来は安定であり、IS学園に行かずともヘルヴェティア女学院高等部に行くことでO・P・Fの保護下の元、IS整備技術を学ぶ事が出来る。

就職先はもちろんO・P・F本部が一番だが、他は支部で埋っている。

「ふむふむ、IS適性Aの生徒は一人だけの様ですね」

ドロテアはそのIS適性Aと出た生徒の写真とデータをコピーすると、O・P・Fのロゴが入ったジュラルミンケースに入れた。そして、情報収集室を後にする。

個人情報の入ったジュラルミンケースをマリーチ専属メイドのみに与えられる自室に置き、ドロテアは次なる目的地へと向かう。

目的地とは……。

オヴェストゥポツツォファブリカ専属メイド仲間であり、ドロテアがマリーチ専属メイドになってから出来た友達の部屋に訪れている。

「こんにちわ」

「いらつしゃい」

「いらつしゃーい」

青っぽいメイド服を着た女性エスパディア、赤っぽいメイド服を着た女性ランサメントの二人がドロテアに向けて微笑んだ。

結局、ドロテアは夏休みのあいだ情報収集室とエスパディア&ランサメントの部屋を行き来する生活を行う。

「そつえばさー、なんでドロテアは私たちの部屋で寝泊りしてるの？」

「気になる」

「……」。部屋が機密資料で溢れちゃって、寝れる状況じゃないんで

すよお
」

その時の泣きそうな表情をするドロテアを見た二人は、不思議な胸の高鳴りを感じたそうだ。

余談だが、のちにこの二人は？ヘラクレス？というISとは全く関係ない超兵器を作り出してしまう。

Ver. 41 (後書き)

全然関係ないけど、超兵器って良いよね。

でも、日本軍（鋼鉄の咆哮シリーズの）……。

艦首にドリル付けて突っ込んでくるのはやめて、怖かったから！
本気で怖かったから！

最近色んなゲームに手を伸ばしている名も無き武装神姫でした。

Ver. 4.2 (前書き)

夏休みの外伝風味

4.3 もその予定

実はね。一度書いたの消えちゃったんだ……。

間違えてね……。

即効で書き直したんだけど、なんかおかしいんだ……；

Side セバスチャンⅡウォンⅡオーデン

執事服を着た初老の男性が、どことも知れぬ通路を散歩でもするかのように歩いている。

彼が歩む通路端には、幾人かのISスーツを着た女性が倒れ、気絶していた。

「ふむ、こういう理由で古巣に戻ってくるとは思いませんでしたな」

初老の男性、セバスチャンは顎鬚を軽く撫でる。

その表情はどこか呆れていた。

「いやはや、相変わらず盗品だらけの組織ですな。愛国者を募り、第二次世界大戦のさなかに生まれた組織のハズだったのですがね。もはや、何の為に存在しているのか分かりませんな」

そんなセバスチャンの後ろには、各国のISスーツを着た女性が5名。

スペイン、オーストラリア、エジプト、ベネルクス、アラビアの国旗が肩にあり、同時にO・P・Fのロゴまでも刻印されている。

それぞれが国に仕える国家代表なのだが、O・P・F——。オヴェストⅡポッツォⅡファブリカ家に忠誠を誓った裏部隊という顔も持ち合わせていた。

「オーデン老、相手が弱すぎはしないか？」

スペインの国旗とO・P・Fのロゴが刻印されたストライフ強化

型を纏った女性が言う。

「ふむ、主力の実働部隊と前線派の幹部会員は留守の様ですな」

「では、どうでしょうか？」

セバスチャンに質問したのは、エジプト代表の女性だ。
こちらスペイン代表同様にストラーフ強化型を纏っている。

「仕方ないですな。残っている幹部からNo. 未定のコアに関して聞いてみましょうか」

そう言ったセバスチャンは、ツカツカと通路を進む。

その歩みには一切の恐怖は感じられなかった。

たとえ、複数のIS操縦者に守られているからとはいえ、セバスチャン自身は生身であり、IS武装による攻撃を喰らってしまえば死は免れない。

「あ、危ないですよ？ セバスチャンさんはISを纏えないですし

……」

そう言ってセバスチャンの横に付いたのは、5人のなかで最も若いベネルクス代表、アーンヴァル強化型を纏っている女性だ。

セバスチャンはその行動に柔らかな微笑みを浮べる。

「ほほほっ、こんな老いぼれを気に掛けてくれるとはうれしいですね」

他の4人は、セバスチャンの後に続くように通路の奥へと進んでいった。

Side ハーモニグレイス

ハア―イ、初めまして。

私の名前は教えられないけれど、コードネームはハーモニグレイス。

ここIS学園で教師をやっているIS操縦者。

しかあ―し、その実態は……。

O・P・Fのスパイ！

そして、O・P・Fがこっそり作った特殊武装？クロスシンフォニー？を世界で唯一使いこなせる人物なの。凄いね私！

どうせだから？クロスシンフォニー？に関して説明しちゃおう。

これは、巨大な十字架をモチーフに作成された特殊ウェポン。スペアを含め、世界に3つしかない物だ。

内部弾薬の事なんかも考えると、総重量は数百キロくらいになるだろう。

おそらく、普通は、たぶん？一般人では使う事はできない。

私が見た限りでは、織斑先生からは使えそうだけだね？

まあ、それはさて置き、いま私が何処にいるかというと……。

IS学園の地下50メートル。レベル4権限を持つ学園関係者しか入れない秘密空間にいる。

なんで私がココにいるかというと、マリーチ様がIS学園にいらつしやる少し前。

織斑先生の弟と中国代表候補が模擬戦をした際、乱入してきたI

Sのコアが保存されているからだ。
しかも。

表向きは有人機とされているが、実際は無人機であり、学園側で様々な解析が行われ続けている。

ついでに、コアの方も世界に登録されていない未登録モノだという。

セバスチャン老も未登録コアに関して独自に捜査を始めているらしいし、ここらで私も行動を起こすべきだと思ったわけ。

「老に良いところ全部もっていられるのも癪に障りますしね」

それに今日は、都合が良い事に山田先生と織斑先生がIS学園にいないのだ。

ここまで都合が良い日なんてない。

レベル4権限を得られる様に努力しておいて良かった。

「お邪魔します」

答えが返ってくる訳でもないのに言う私。

誰もいないのは当たり前だ。

セキュリティなんかも全て解析し、今日は誰も足を踏み入れていない事は確認済み。

老の古巣である場所だつて、簡単にはココにアプローチできないし、老からも何も言われていない。

サクツと頂く為に、キャンドル型の特殊USBメモリを機器に接続する。

これは接続したという痕跡すら残さないO・P・Fの特別品だ。

《データダウンロード中……しばらくお待ちください》

ああ、そういえば……。

老と織斑一夏は少しだけ似ていると思う。

老に恋しているO・P・F社員も結構多い。

男性社員からも支持が高い。老後はあんなダンディーになりたいとかそんな理由らしい。

マリーチお嬢様にセクハラ繰り返している事実を知ったら、みんなどう思うのだろう？

やってみたいわー。

そうそう、織斑一夏に似ている場所だった。

老に恋する二十代前半女子、名前忘れたがベネルクス代表の人。

他の裏部隊メンバーとは異なり、一人だけ老に対する恋心で作戦をこなしてる感じた。

老も恐らくは恋心に気がついてるが、ただの憧れの様なものと感じているだろう。

しかし、実際は違う。

私は彼女の相談に乗った事があるから、ハッキリと言える！

100%マジ惚れ状態。織斑一夏の周りで苦労している生徒と同じ。

報われる事を神に祈ろう。

言い忘れたが、私はコレでもシスターだ。

神よりも実弾とO・P・Fを信仰していたりするけど、気にしない。

ピロリンッ

可愛らしい音がキャンドルから響く。

どうやら無人IS解析データとコア内部データ回収が完了したみ

たいだ。

キャンドル型の特殊USBメモリを引き抜き、解析部屋からさつさとお暇する。

いつまでもノンビリしているのは不味い様な気がするからだ。私の勘はよく当る。

「それじゃ、お邪魔しました」

一言残して私はその場を後にした。

これで、O・P・Fは未登録コア量産への足がかりを掴む事になるだろう。

なにも世界にいる天才は束博士だけではない。

あそこまで社会的地位を無視した天災は、一人くらいだろうが……。

社会的地位を絶対に脅かされず、狂人の様に延々と研究を続けられる環境ならばO・P・Fに用意されている。

たった一人の天才と、数十人を超える天才。

幸運の女神と勝負の神は、どちらに微笑むのか？

シスターとしては興味が尽きないというモノだ。

O・P・F | NETジャーナル 第八回

「皆様、お久しぶりです。それでは、O・P・F | NETジャーナル第八回を開始したいと思います」

「うきゅう（第八かい。パチパチ）」

「さて、今回も例の如くに感想返信のみです」

「きゅう（武器・特殊武装・超兵器などの設定は後日あげます）」

> k u s a r i 様<

マリーチさまがなにより極秘で武装実験を行っているみたいですね
マリーチさまが使う武装はこの後のイベントで出てくるか楽しみです

束登場ですね

アーテイルからかなりの怒りと敵愾心感じますが武装神姫型は感情が表れやすいのでしょうか

それに母親である束に敵意を向けるのは驚きです

「マリーチ様の用いる武装は、些か特殊だったり、カッコイイ物が多めになりそうな予感がします」

「うきゅうきゅう（母親に従順な子供だけでも、中には反発する子がいいても良いと思うのです）」

>装脚戦車 様、D a i 様<

「まとめてとなつてしまいました、誤字報告ありがとうございます」

「うきゅ（有難う御座います）」

>緒方 紅夜 様<

フルバレル大活躍！！

ちよつと雪羅の出番食つてゐるねwww

最後に出てきたアルトアイネス。

呼び出しに黄金の蜂蜜酒と呪文がいるな。

そして名前のエル。もしかして無名都市のロバ・エル・カリイエ？でもそれだとアラビア南部じゃないといけなし、違うか。

「フルバレル」強いといった謎のイメージとこれからの敵に対する
予防線として大活躍しました」

「うきゅあ、きゅああ、うきゅ（最後に出てきたアルトアイネスは、
PSP版アルトアイネスじゃなくてPC版のアルトアイネスなので、
バトルロンド
召喚にはそれらのほかにエンゲージリングが必要ですよー。エルと
いうのは、作者のアルトアイネスの名前だったりです！）」

>緒方 紅夜 様<

おいおいおいおい。

神姫そのもの作ろうとしてんのかよ。

「ソレはもちろん」

「きゅ（愛ゆえになのです）」

>m o t t i 様<

臨海学校編も一区切りといった所なのでしょう

か
ソレより気になるのは銀の福音のコア、

無人機開発のためらしいですがO・P・FのISが神姫をモチーフにしたものであることから考えると…

まさかミm…んっ？何か音が？ああ！窓に！窓に！

「深読みし、真相に近づく冒険者ほど……」

「うきゅう（狂気に飲まれ召されて逝くのです）」

「でも、その先には無数の神姫天国が在るに違い在りません」

> kusari 様<

溜まってたのを一気に読み終えました、なんだか福音戦はドロテ
アが進化して第のお株を奪う勢いですね

個人的には束がアーテイルのことをどう思っているのか知りたかつ
たです

なんだか夏休みイベントがあっさり終わってしまったのか意外ですて
つきり@クルーズ辺りに行ってラウラとシャルが出番が無いほどに
銀行強盗を地獄に逝かせるシーンを想像していました

次回からは二学期ですね少し気になるのは盾無がマリーチに接近す
るのか楽しみです

そしてドロテアの回りには綺麗な百合の蕾が見えました

「束はアーテイルの事を一瞬だけ気にしましたが、すでに興味の対
象外になっている模様です」

「うきゆきゆう（@クルーズとか銀行強盗とか、お泊りお料理会と
か色々と考えていたのですが、マリーチの設定にO・P・F総帥と
いうのがありますので、そちらを優先しました）」

> 緒方 紅夜 様<

え、あれ？

ヘラクレスISじゃない？

どうことだ！！ 無人機の亜種みたいになるかと思ってたけど、ホ
ライゾンの武神みたいになるのか？

……それもいいな。

そして今気付いたが、武装合体系はメリットよりデメリットの方が大きいよな。

自立系は武装解除したIS二つと自立一機になるけど戦力的には足手まとい二人だし。

片方に武装渡したら実質一人になるし。

やるとしたら自立に陽動させて潜入とか離脱とか。

そう考えるとヘラクレスはいいい選択したか。

「ホライゾンをご存知ですか！ 確かにその様になると思います」

「きゅう（確かにデメリット多いんですね）」

「紅夜 様の言うようにメリットよりもデメリットが多いですね。でも、武装合体系が武装と別々になっていると考えるとかなり強い様など……」

>緒方 紅夜 様<

セバスチャンはまあ、常時あんなもんだろつな。

そして小父様への恋心は報われるのか。

シスター来ましたな。軽い、軽すぎるぞ性格。

まあ、BRの不良シスターみたいにならなくてよかった。

そして研究のことを聞いてR・TYPEとか思いだしてしまった。いやだつてクトゥルフ系統で研究ときたらあの外道研究チーム思いだすでしょう。

バックとかシリンダーとか。

「私も恋心が報われる事を祈ります」

「うきやう？ きやうきゆ（ホントはあんな性格じゃないんですよ？ でも、ほら。PSP版だと色々な性格の神姫がいるので良いかな？ って思ったんです）」

「似たようなチームをO・P・F内に作りたくまりました」

「うきゆ（これで終わりですー）」

「それでは、O・P・F | NETジャーナル？はOvest Po
zzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）
とAccute Dynamixアキュート・ダイナミックスの
提供でお送りいたしました。次回もコレくらいのペースでやりたい
ですね」

Ver・43(前書き)

外伝はまだまだ続く。
ドイツ支部のだけど……。

Side 軍人

ドイツ軍所属、特殊任務部隊。
優秀な女性軍人が一人――。

ですが、彼女は軍の横暴により、罠に嵌められた被害者でした。
遺伝子強化素体を生み出す為の素体。
母体としてではなく、遺伝子の提供者。

彼女には、天賦の才とも言える高い指揮能力と戦闘能力が備わっていたのです。

どのような戦場でも生き残り、如何なる強敵も倒しうる。
一騎当千を体現したような女性でした。

ですが、所詮は一騎――。
いかに人間離れた身体能力を用いたとしても、弾丸を眉間に撃ち込まれれば死んでしまいます。
ほかに、彼女がいる作戦領域をミサイル爆撃すればほぼ確実に殺せるでしょう。

だから軍は考えたのです。
彼女の遺伝子を持った強化人間を作ろうと――。

それは、彼女からしてみれば屈辱でしか在りませんでした。
彼女は確かに軍人であり、軍と国に使われる一つのモノ。
しかし、彼女として人間なのです。
彼女は怒り、抗議の声を挙げましたが、時はすでに遅く――。

何時の間に採取したのか、彼女の遺伝子を持ち合わせた強化人間はこの世に生を受けていました。

しかも、三人――。

さらに軍は、先におこなっていた遺伝子強化素体の実験データからある物を作り出します。

その名は、強化促進剤。

代謝機能の強制促進による自己回復能力を向上させる為の薬品です。

代価として、コレを投与された人間は人よりも年を取るのが早くなり、投与される度に寿命を削ってゆく事になります。

こうして、彼女が気がついたときには、彼女の遺伝子を持つ三姉妹は胎児から赤子へ、赤子から幼子へと姿を変えていました。

「これが、これが……。忠誠を捧げ、すべてを捧げてきた者になることなのか！！ 貴様らは人間をなんだと思っている！！」

「人間？ 何を言っているのだね。ここで誕生した物は戸籍など存在しない。文字通りの物なのだよ。なぜ実験用のモルモットを人間だと思わなければならない」

「きさまア！！」

彼女は投獄され、軍事機密を外部へ持ち出そうとしたという偽りの罪を被せられます。

そして、極秘裏に始末されそうになった時――。

「へえ、ソックリですう。お前、私の元に来いですう。拒――」

「行こう。ここに未練はない」

「……。それじゃ行くですう」

彼女を助けたのは、狂おしいほどの微笑みを浮べた少女でした。後に彼女は見る事になります。

彼女の蝕腕が軍内部をゆっくりと侵蝕し、自らの都合が良い物へと作りかえる様を――。

S i d e 三姉妹

とある施設。そこには、とてもとても仲の良い三姉妹がいました。ですが、その三姉妹。非常に癖が強いのです。

人の話を殆ど聞かない。
猪突猛進で止まらない。
たった一つのことだけにしか興味を示さない。

三姉妹が興味を示した事、それはありとあらゆる銃火器に関する事でした。

それはもう、ドイツが造り出した遺伝子強化素体を軽く凌駕してしまうほどの実力を付けてしまう異常な興味。

5000を超える銃火器を瞬時に選抜、目標物に最も効果的な攻撃方法の思想。

どれをとっても、異常としか言えない才能です。

だからこそ、三姉妹は捨てられてしまいました。

この時代。

ISという抑止力により得られた偽りの平和がある時代。

その平和の中に在って、彼女たちは異質であり、不要な物でした。

ですが、捨てる神あれば拾う神ありとはよく言ったもの。

異常であり、異質である三姉妹を拾った神がいました。

「面白い才能ですう。お前たちの才能、ここで潰えるのは惜しいですう。力と場所をやるですう。あとは、好きにすると良いですう」

三姉妹の前に現れた神様は、酷く恐ろしく、天使の様な微笑みを浮べる少女。

そして、無数の神々と権力、財力といった様々な力を率いていました。

「……」

生まれて初めて、三姉妹は銃火器以外の物に興味を持ち、見惚れます。

この日から、トウーサ三姉妹は神様の忠実なシモベとなりました。

S i d e O . P . F ドイツ支部

戦場――。

そこには、無数の屍を築き、無残に散ばった残骸に微笑む一人の

少女がいた。

少女の名をイルマ・トウーサという。

その服と頬を返り血で染め、頬から滴る紅い液体を舐め取る仕草はどこか妖艶だ。

「ふふ……。うふふ、ははは……。楽しいなあ」

狂ったような微笑みを浮かべ、イルマは手に持った刃物を無情にも振り下ろす。

何ともいえぬ何かが潰れた音が響き、刃物とイルマの手を紅く染めた。

「お姉ちゃん達とお母さんは、私にはまだ早いつて言つてたけど……。刃物の扱いなんて簡単だよね」

忠告を無視して突つ走る姿は、もはや歩く死亡フラグにしか見えない。

そして、イルマは刃物を洗い始める。

手にスポンジを持ち、刃ではない方から洗つて行く。

丁寧に洗い、洗剤が残らないように漱ぎ、しっかりと水をふき取つてからケースに収めた。

「さてと、後は焼くだけだね。汚物は消毒だー！ ヒャッハー」

イルマは無意味にテンションを高くし、残骸を煮えたぎる鍋の中に放り込んだ。

そして、なんの躊躇もせず、火を付けた。

—— 1 時間後。

鍋の中には、かろうじて錆色と表現できそうな固体と液体の中間、ドロツとした何かがあった。

なぜ、錆色の何かが沈殿物にならなかったのか不思議でしょうがない物だ。

「かんせい。お姉ちゃん達とお母さんに食べてもらわなきゃね。

—— あ、その前に、支部のみんなにもあげよう」と

イルマはそう言うと、謎の物体をコップに入れて蓋をして行く。ソレは、パツと見では何らかのシェイクにも見えなくはないシロモノと化した。

「よしよし、かんぺーき。待つてねみんな、いま行くから」

そして、イルマはキッチンという名の戦場を後にした。

戦場と化したキッチンには、穴の開いたフライパン、ぐちゃぐちゃになった様々な野菜、原型を留めていない謎の肉などが散乱している。

何よりもヒドイのは、付けっぱなしのガスコンロと近くに放置されている複数の 9mm パラベラム弾。

—— ドイツ支部、技術開発部。

そこには、男女関係なしに複数の研究員が倒れていた。

倒れる研究員の横には、コップが一つ。錆色のドロツとしたスライムみたいな物が漏れている。

倒れている研究員の中の一人。

元軍人の男性研究員がほく前進をしながら、なんとか無線機の元まで辿り着いた。

震える手で何とか無線機のスイッチをONにし、支部長への無線を開く。

「……。し、しゅ……。ちょう……。ばっ、バイオ……。ハザードが……」

男性研究員はそれだけ言うと、力尽きたように倒れ臥した。

『おい！ 何があった？ バイオハザードだと？ おい！』

無線機からは女性の声が聞えるが、その無線機を持っていた男性研究員の手からはすでに力が失われており、返答が返って来ることはなかった。

『なんだ？ 一体なにが起こってるというのだ！？』

女性の慌てた声が、虚しく技術開発部に響いた。

Ver・43（後書き）

ゼルのんと砲子の活躍をバトロンでまた見たい……。でも、私……。

バトロン歴が実は結構浅いんだよね。2年くらいなのかな？

バトロンって2006年からだった様な気がするし、ジオスタはもっと前からだよな？

Ver. 4.4 (前書き)

ぜるのん愛してる

——ドイツ支部、第二研究開発室。

「俺さ、この戦いが終わったら——。支部長に告白するんだ」

「そつか……。俺はフィネさんに——」

そんな事を言いながら机の下に隠れる男研究員二人組。
そんな二人組が隠れている机は——。

ドガガガガッ！

という爆音と共に消し飛んだ。

「「ひいひい！！」」

そんな二人の間に現れたのは、ニッコリとした可愛らしい元気少女系の微笑みを浮べたイルマ「トゥーサだった。

ただ、最悪な事に専用ISであるゼルノグランド「ベリクを身に纏っている。

「ねえ？　ねえ？　なんで逃げるの？　美味しいよ？　栄養満点だよ？」

イルマが手に持っているのは、多くのドイツ支部員を失神させた最強の飲み物らしき物体^{へいき}。

謎の物体Xとゲルルンジュースを混ぜ合わせ、その中に何か危険物でもぶち込んで混ぜ、トドメとばかりに大量の錆色ペンキでもっ

て色付けしたような感じの一品。
ペンキとは異なり、無臭ではあるが、見ただけで生命の危険を感じる。

「腹が空いては戦は出来ぬって言うらしいさ。ほらほら、遠慮しないで飲んで飲んで」

支部長に告白すると言っていた方、研究員Aの口にコップが押し当てられた。

そして――。

ゴボゴボツという嫌な音を立て、錆色のドロツとした何かが研究員Aの喉に流し込まれて行く。

隣にいる研究員Bは腰が抜け、逃げる事すら出来ずにいた。

あまりにもショッキングな光景であるため、腰を抜かし、放心状態で目を背ける事も出来ない。

「じつ……。アガ……。だずう……。げ……」

なんとか研究員Bに向けて手を伸ばす研究員A。

だが、研究者Aはその途中で白目を剥き、研究員Bに向かって手を向けたまま気を失う。

「気絶するほど美味しかったんだ。よかった。よかった」

満面の微笑みを浮べるイルマ。

イルマは、気を失った研究員Aをその場に優しく寝かせると、瞬時加速で研究員Bに近づき――。

コップを口に無理やり押し込んだ。

「!?!?!?!?!」

抵抗する研究員B。

だが、ISを纏っているイルマの腕力に勝てるはずも無く。研究員Bの声無き悲鳴が、第二研究開発室に響き渡った。

——ドイツ支部、食堂。

入り口には？緊急バイオハザード対策室？と書かれた看板が立てかけられている。

だが、看板の凛々しい文字とは異なり、内部はかなり騒然としていた。

「ああ……。あ、あんなの食ったら、死んじゃいますよ!」

「くつ、同胞よ」

「ああああ……。だ、だが……。ここは大丈夫なハズだ。イルマさまがスタート地点である食堂に戻ってくる可能性は少ない!」

各自、混乱しまくって様々な事を言っている彼ら、彼女らの前には、超巨大な簡易空中投影ディスプレイが設置されている。

そして、そこには第二研究部開発室の防犯カメラから送られて来る映像が鮮明に映し出されていた。

何らかの不具合なのだろう。

音声は拾えていない。

「通信班！ 母さんはまだなの！？」

その光景を見ていたテア＝トゥーサが切羽詰った表情で言う。
今回の事件を起こしているイルマ＝トゥーサの姉であり、トゥーサ三姉妹の次女に当る少女だ。

そのテアをたしなめる声があがる。

「テア、焦っても仕方ありません。母さんはドイツ軍の視察中だったのですから……。研究班長からの最後の無線を受け取り、こちらに向かっている事が分かっているだけでも幸いというもの」

言ったのは、テアとは異なり冷静な表情でディスプレイを見つめるFINE＝トゥーサ。

彼女こそがトゥーサ三姉妹の長女であり、実質的な副支部長としての権力を持ち合わせている。

「それに、母さんの出る幕ではありません。ここは私が行きましよう。」

FINEはそういうと、ISゼルノグラード＝ヘビーを身に纏い出て行った。

—— 1時間後。

結局……。

このあと、何時間たってもFINEが食堂へと戻ってくる事は無く、支部全体に張り巡らされた室内と通路の監視カメラにも、その姿が映ることは無かった。

だが、監視員Aだけは見てしまったのだ。

食堂のある1階から、監視カメラのチャンネルを2階へと移した時――。

2階から3階へと上がる階段を映していた監視カメラが監視角度を変え、3階通路を映したほんの一瞬。

背部パーツを捕まれ、何者かに引きずられるフィネの姿を……。

「……な、なあ？」

「なんだよ？」

「いまさ、2階階段に設置されてるカメラをさ。3階通路側に向けたんだ。そしたらさ……」

「そしたら？」

「……。フィ、フィネ副支部長が……。一瞬だけ映ってさ……。なんかさ、引き摺られてるっていかさ……」

「はあ？ なに言ってるんだお前？ フィネ副支部長はドイツ支部No.2の実力を持つ人だぞ？ 相手がイルマ副支部長だからって負けるわけ無いだろ？」

「そ、そうだよ……な？」

「フィネ副支部長が妹LOVEなのは全員承知の上だが、ISを纏ったフィネ副支部長がテア副支部長とイルマ副支部長に負けた所を見たことあるか？」

「いや……。ないな」

「だろ？ だから、気のせいだつて」

「そ、そうだよな。気のせいだよな、気のせい」

監視員Aは監視員Bに言われ、何もかもを見なかったことにした。
このとき、監視員Aが監視カメラの記録を再生していたのならば
――。

後々の状況は、大きく変わっていたかもしれない。

Ver.44（後書き）

今回の死亡フラグ（回収済みのみ）。

研究員Aと研究員Bの発言 告白系死亡フラグ

フィネイトウーサの発言 ボスキャラの前菜系死亡フラグ（四天王とか）

——ドイツ支部、3階。

3階会議室、そこにある19の椅子には16人の男女が腰掛けている。

開いている席は三つ。

支部長と第二副支部長、第三服支部長の席だ。

そんな会議室に一人、歌を歌いながら少女が入ってきた。

「あれれ？ まだ皆寝ているのかな？」

少女、イルマ・トウーサは気を失っているフィネ・トウーサに軽くキスをする。

イルマは気絶している16人に向かって微笑みを向けながら言う。

「帰ってきたら、お土産話をいっぱい聞かせてあげるからね」

そして、イルマは会議室を後にする。

無論、イルマの言葉に答える者はなく、会議室には何とも言えぬ沈黙が漂っただけだった。

ただ時より——。

「……うう」

とか。

「ぐう……っう」

苦しそうなうめき声が虚しく会議室に響いた。

S i d e テアットウーサ

私はいま、家とも言えるドイツ支部の2階の通路を歩いている。
しかも、ISであるフォートブラッグⅡダスクを展開した状態
だ。

「なんで家にいるのにIS纏わなきゃならないのよ」

「そう言われましても、イルマ様が相手ですし……」

呟きに答えたのは、IS試験操縦者のリカルダ＝ベルナー。

金のセミロングに27歳とは思えぬほどの低身長。

胸も小ぶりなので、一部から合法ロリ扱いされている。

確か、マリーチ様の通っていらっしやるIS学園にも似たような
……。

ヤマヤ？ だったかな？ そんなような名前の教師がいたはずだ。

「ヤマダ・マヤさんですね。元日本代表候補の」

ああ、それぞれ。

……。

「私、声に出した覚えはないんだけど？」

「テア副支部長とは長いですからね。何となく分かりますよ。それと、なぜ？元？かですが、彼女……。優しすぎるんですよ。技術は人一倍なのに、優しすぎたからトドメの一撃に迷いが生じてしまう。勝つ喜びは知ってはいるようですが、それよりも他人の涙を嫌う人……。それが、私の見た彼女への印象ですかね」

なんか勝手に語り始めるリカルダ。

私はソレを無視して前に進むとしたとき――。

ベチヨツ――。

窓の方から生々しい音が聞えた。

「……聞えました？」

「……聞えたわよ？」

「……（にっつ）」

重い沈黙が私とリカルダの間に漂う。

「確認しないと不味いですよね？」

「そうね？」

「……？」

なんだかよくない気配を感じる。

そう、私とリカルダだけの会話のはずなのに――。
まるで、第三者がいるかの様な……。

「知ってると思うけど、私……。幽霊とかダメだから」

「知ってます。私も得意では在りません」

「……」

二人して目を瞑り、深呼吸をする。

スー、ハー。スー、ハー……。だめだ、落ち着かない。

「せえーの、で見ません？」

「いいわ。せえーの、ね」

リカルダの発言に私も心を決める。

そして、大きく息を仕込んだ後――。

「「せえーの」」

バツつとでも音がしそうな勢いで、同時に振り返る私とリカルダ。
その視線の先には……。

デロツとした何かがいた。

「「……」」

「……（にじっ）」

そのデロツとした？白くべたつくなくなにか？をつけた少女……。

いや、よくよく見ればイルマの様にも見えなくはない。

でも、イルマは……。いや、人間は……。首を180度回転させた状態で、窓に張り付くなんてことは出来ない。

「きゃ……」

イルマの首を180度捻じ曲げた様なソレは、可愛らしく小首を傾げた。

しかも、その動作で白くべたつくなくなにかが少女の口当たりに垂れて、非常にエロイ。

なんかもう、アレだよ。

「きゃあああああああああ！！」

悲鳴をあげて逃げだしたって仕方ないよね

私たちが白べたから全力で逃げ去っていたとき、背後から「ケタケタ」と不気味な笑い声も聞えた。

正直、私とリカルダのSAN値は――。

1D5ポイントは間違いなく減っただろう。

――。

――。

――。

どれくらい逃げた在ろうか？

「はあ、はあ、はあ……」

「ゴホッ……。はあ、はあ……。な、なんだったんですかいまの！

「？」

何とか呼吸を整えたりカルダが叫ぶ。
私だつて似たような事を考えているよ。

「そ、そうですね……。しかし、どうしますか？」

さつきから心を読むなど……。

「学生時代からの習慣ですし、いまさらですよね」

ああ、そういえば、リカルダは学生の頃からドイツ支部で働いていたんだつた。

その時から私との付き合いは在る。

さて、これからどうしよう？

Ver・45(後書き)

なんか、外伝が無駄に長くなり始めてる気がする

Ver・46（前書き）

外伝の続きはまた今度

変更

AG

AS

理由

しんかー様の感想を読んで、その通りだなあーと思ったため。

変更

ブルー・ティアーズの追尾レーザーに関して

理由

バッシュ・イナーシャル・キャンセラー

PICなんですよね……。

小説でも制御してる様な描写があるので混乱しそうな私ですが、ブラックボックス化し、マリーチが欲しがる情報の一つとして変更しました。

9月3日。

二学期初の実戦訓練。

初っ端から飛ばしてるのは、一夏と鈴だ。

高威力と高消費の装備で身を固め、短期決戦型へと進化した白式。それを相手取るのは、燃費の良さと安定性を第一とした持久戦型の甲龍。

私が見た限り、第二移行した白式を一夏は持て余している。まったくいいっても良い程に使いこなせてはいない。

その証拠に、最初のこそ一夏が押していたが、いまでは鈴が巻き返している。

一夏は白式の消費を正しく理解しておらず、第一形態の白式の様
に扱っていたのだから、エネルギーが切れ掛かってしまったとして
も仕方のないことだ。

結局、前半戦も後半戦も一夏は鈴に敗北した。
スペック的には圧倒的に白式が有利なのにも関わらず……。

「ドローア、一夏と一戦するですう。300秒以内に決められな
かったら——。O.P.Fドイツ支部から送ってもらったお菓子は
ナシですう」

「5分以内ですか……。承知しました」

ドローアは私に一礼すると、シヨンボリしている一夏に向かっ
て一戦だけお願いしにいった。

最初はなにやら嫌がっていた一夏だが——。

「――？」

「――！……。――？」

「――！？――！！」

何か数回言葉を交わし、白式のエネルギーを充填し始める。

なにを言ったかは知らないが、怯える子羊みたいな瞳で私を1度だけ見たことからなにを話していたかの察しは付く。

私のスパルタトレーニングメニューをダシに使って煽ったのだろう。

たかだか10000発の追尾型ミサイルを避けるだけの回避訓練だった、360度全方向から放たれるエネルギー弾、実弾、実剣などを防ぎ続ける防御訓練などをするだけだというのに、なにがそんなに恐ろしいのだろうか？

別に喰らったからといって死ぬわけじゃない。

しっかりと絶対防御が発動しないようには加減をしている。

充電が終わったのか第二形態白式を纏った一夏が立ち上がり、雪片式型を構えた。

ドロテアも同様にフルバレルを纏い、呼び出した突撃銃を一夏に向ける。

そして、試合開始を告げるアラームがなった直後……。

ドロテアは、構えていた突撃銃を一夏に向かって投げつけると同時に瞬時加速をし、背後に回りさらに呼び出した突撃銃で持つて狙い撃った。

だが、一夏はソレに反応し、二段加速を用いて攻撃を回避。零落白夜を発動して斬りかかる。

—。
—。
—。

結果はドロテアの勝ちだ。

零落白夜を発動させた一夏は、ドロテアにまっすぐ突っ込み、呼び出されたミサイルの嵐に吞み込まれ、豪雨の様に降り注ぐミサイルを雪羅を防御形態に変化させ凌いでいたのだが、絶え間ないドロテアの攻撃によりエネルギーを消費し続け……。

「197秒……。はあ、あの白式は個性が強すぎるピーキー機体です。アレを使いこなせるようになるメニューを考えると、一苦労しそうです」

私は今後の計画の障害に少しの頭痛を覚え、アリーナを後にした。

—。
—。

私は食堂へは向かわなかった。

ドロテア、一夏、セシリア、鈴、シャルロット、箒、ラウラの7人は着替えて食堂へと向かっていったが……。

私は私でやらなければならぬ事がある。

「ウェルクストラ、ハーモニー、首尾はどうですか？」

「ハッ、抜かりなく進んでおります」

「問題はありません」

私が指導室に呼び出した教員二人。

いや、教員の格好をしたO・P・F社員が頭を垂れる。

そして、ハーモニーが顔をあげ、報告を始めた。

「無人機のデータは無事にO・P・F本社へと転送が完了し、未登録コアに関しても現在解析が進んでいます。早ければ来月にでも結果が出るかと」

「出来るだけ急がせるです。未登録コアの解析が完了した暁には、お前たち様に作ったコアのないASも動かせるです」

非常に嬉しそうな顔をするハーモニー。

そして、なにやら疑問の表情を浮かべるウェルクストラ。

「なんですう。榊原先生？」

「……。この場では、ウェルクストラと呼び下さい」

「ふむ、それで？ ウェルクストラは何か言いたいことでも」

「はい、僭越ながら……。ASとは一体？ ISでは無いのですか？」

ま、当然の質問だろう。

本社でもASに関して知られている事は少ないし、知っている物も私が選んだ上位幹部級のみだ。

だがまあ、彼女らにはその試作機を与えてやる予定なので教えて

やっても良いだろう。

「機密中の機密。我が社、O・P・Fを揺るがすほどの機密であっても、聞きたいですかあ？」

「……」

なんとも言えぬ渋い表情を浮べる二人。
なんて可愛らしいのだろう。

「まあ、私はお前たちの事を信頼しているですう。口外しない事は分かっているですう。でもお、もしもお、口を滑らしたりしたら……」

「……抹殺されちゃったりしますかね？」

恐る恐ると言った感じで私に聞くハーモニー。
その表情は私の心を攪り、サディスティックな部分が首をもたげる。

「うふふ……。安心するですう。別に殺したりはしないですう。遺体の処理が面倒ですし、生きていない人間じゃ楽しめないですしね。ちよつと、精神的に壊れてもらうだけですう」

絶望的な表情を浮べる二人。

ハーモニーに至っては逃げ出したそうにしている。
ウェルクストラは微動だにしていなが、やはり少し怯えているらしく震えていた。

「ま、冗談はさておき……。AS、Armory Spirit

Princess——。武装神姫というですう。本来はISのコアなんて使いたくないですがあ、心臓としてちょうど良いので？使ってやっている？ですう。お前たちに用意するのは、その中でも軽武装なもの。ライトアーマータイプをやるですう。もちろん、未登録コアの解析が完了し、代替心臓を作り出す事が出来ればの話ですがあ……」

本当に冗談ですか？　とても言いたげな表情で私を見るハーモニィ。

ウェルクストラは静かに目を閉じながら聞いていた。

そして、ゆつくりと瞳を開きながら言う。

「マリーチ様のご期待に応えるよう精進させていただきます。それでは——。ファブリカ、あまり問題は起こしてくれるなよ？　ほどこどにな」

「榊原先生の言うとおりですよ。特訓なのは分かりますが、学校の備品はあまり壊さないように」

「はい。すみません」

一芝居したところで、山田先生が入ってきた。

「あ、すみません。使用中でしたか……」

そりゃまあ、電気もつけていないのだから気がつかないのはわかるが、外からでも一芝居の声は聞えたと思う。

うっかりやまちゃんとも呼んでやろうか？

「いえ、大丈夫です。いま話は終わったところですので」

「そ、そうだったんですか。ところで、マリーチさんがなにか……？」

「放課後、彼女の行っている特訓で備品の破損が相次ぎまして、その注意を」

という感じに山田先生を言いくるめて行くウェルクストラ。
ハーモニーは私の背中を押して出て行くように言う。

「出来るだけ気をつけるですう」

「出来れば壊さないで欲しいかな？」

につこりと微笑みを浮べるハーモニーの顔を見た後、私は指導室から食堂へと向かった。

時間はギリギリ、ササツと食べて、ササツとアリーナに向かわなければならぬ。

——午後。

実習を行うために戻ってきたアリーナには、一夏の姿がない。

「マリーチさん、食堂で見かけませんでしたか、どちらに行かれていましたの？」

「どっかの馬鹿どもがアリーナの機材を壊すような事をするから、代わりに叱られてやっていただけですう」

ジト目で鈴と篝を見る。

二人は目を逸らし、シャルロットとドロテアはそんな光景に苦笑していた。

「教官にも負けず劣らず、凄まじいほどの訓練内容だからな多少は大目に見てやったらどうだ？」

以前よりもさらに柔らかくなったラウラが言う。

数ヶ月前の堅物は何処へやら、恋とはココまでも人を変えるものなのだろうか？

それとも、これが本来のラウラであり、数ヶ月前のラウラは理想という名の殻に籠っていただけなのだろうか？

まあ、なんにしても良い変化では在るのだろう。

「だから今回は私だけで叱られたですう。それと、セシリア」

「は、はい！」

ちょっと強めに名を呼ぶと、背筋を伸ばし姿勢を正すセシリア。正直、少しだけやりすぎたかもしれないと思う。

「お前のBT兵器稼働率は現状何%ですう？」

「48%ですわ」

「やつと、45%を超えたですかあ？ 60%超えなきゃ白式にはふれる事も出来ないですう」

ブルー・ティアーズはエネルギー系兵器しか持ち合わせていない。

故に、エネルギーを消滅させるという特徴を持つ白式とは相性が最悪だ。

だが、ブルー・ティアーズを解析した結果、このISには面白い特性が備わっている事が判明した。

なんと、ビームの軌道を自在に偏向する事が出来る。

砲身内に何らかの誘導装置が設置されており、ビームを曲げるのだろつと考えていたのだが。

どうやらAICらしき特性を利用し、ビームを停止、停止させている間に方向角度を修正することで文字通りビームの軌道を自在に偏向するという物だった。

PICを発展させAICらしき何かによる作用らしく、停止させる事までは分かったが、どのように角度を修正しているのかは全く分かっていない。

しかし、ブルー・ティアーズから撃ち出されたビームが対象に当たるまで追尾し続ける、追尾レーザーの様な物になる事だけは確かだ。そして、レーザーであるが故、対象に当たるまで止まる事は無いだろう。

どのようにしてレーザーを曲げているのかは、直接ブルー・ティアーズのコアを解析するしかないワケだが……。

第三世代を渡せとイギリス政府に言うわけにも行かない。

そのため、私はブルー・ティアーズが能力を発動させた瞬間のデータを収集する事にした。

だがまあ、ここで一つの問題が生じる。

自在ではないものの、ビームを操る事が出来るようになるのには、最低でもBT兵器稼働率60%が必要であり、現状の稼働率では曲げる事すら容易ではない。

要するにデータ収集どころの話ではないのだ。

「放課後はスパルタですう。動けなくなるまで鍛えてやるですう」

「お願いしますわ」

一夏に負け続け、プライドがボロボロになりかけてからというもの、セシリアの向上心は異常なまでに上がっている。

一夏も筈もある意味で才能と周りの援助により強くなった人物と言えるだろう。

もちろん、セシリアにもBT適性Aという才能がある。

だが、適性が在ったところで、BT兵器というモノは簡単に動かせるシロモノではない。

私の様にBT適性Sならば、ナヴァグラハを14基くらいまでなら身体に無理なく動かせるが……。

「ファブリカ、オルコット、ほどほどにな」

なんだか熱談していた私とセシリアは、織斑先生に釘を指されてしまった。

先ほどまで指導室で二人の教員から怒られていたという設定になっているので無理もない。

こうして、一夏が遅刻し、遅刻した理由が女性だった事が判明し、織斑先生の許可を得たシャルロットが一夏を撃ちまくる事件が在ったが、自業自得だ。

Ver・46（後書き）

実は1回消えたんだ……。

最近、うっかりマウスの横っちょに付いているショートカットのバツクを押しちゃう癖がね……

全校集会。

SHRと一時限目の半分を使用して行われた。
内容は学園祭について――。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

生徒役員の一人が静かに告げる。
そして、出てきたのは――。

「やあみんな。おはよう」

軽い雰囲気を身に纏った少女。

17代目楯無、更識楯無本人が現れた。

更識……。日本を守ってきた暗部。対暗部用暗部と言える家系。

17代目といえば、文武両道・料理の腕前もプロ並・容姿も抜群・指揮者としてのカリスマも持ち合わせた完璧超人だという。

自由国籍権を持ち合わせ、ロシア代表操縦者でもあったはずだ。

また、専用機としてミステリアス・レイディという特殊なナノマシーンを操るISを自主制作したと聞いている。

技術者としても一としても欲しい。

だが、彼女は人を軽んじている。

いつかバランスを崩すだろう。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

IS学園における生徒会長とは、即ち学園最強を意味する。
いまの私では彼女には勝てないだろう。

IS以外のすべてで勝てたとしても、ISの闘いでは絶対に勝てない。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは」

何処からともなく扇子を取り出す生徒会長。

そして、横へとスライドさせると……。空間投影ディスプレイが現れた。

「名付けて、？各部対抗織斑一夏争奪戦？」

ぱんっ！という音をたてて扇子を開く生徒会長。それにあわせてディスプレイには一夏の顔写真が映し出される。
全く持つてなにを考えている事やら……。

「マリーチ様、耳栓を」

「はあ、まったく……。あの生徒会長はなにを考えてるんです？」

「さあ、私には分かりかねます」

ドロテアと少し会話した後、私は耳栓を付けた。
その直後だろう。

ホールが揺れたのは――。

大人数が収容可能なライブ会場に行ったものならば分かるかもしれないが、膨大な声と複数人のジャンプなどによって、洒落などではなく本当にホールなんかは振動するものだ。

さて、生徒会長がなにやら口を開き言っている。
回りも静かになった様なので耳栓を取る事にしよう。

「——織斑一夏を、1位の部活に強制入部させましょう！」

この生徒会長の発言を聞いた直後にドロテアにより耳を塞がれる。

耳栓ではなくて、手で塞がれているため、周りの雄叫びがよく聞えた。

ま、部活に入っていない私には関係ないことだろう。

あの生徒会長がなにやら考えていそうだが、私は私で一夏育成計画を進めれば良いだけのことだ。

こうして、おそらく本人の承諾がない？織斑一夏争奪戦？が開始された。

私の推測が正しければ、良い所は全て生徒会に持っていかれ、部活動には名前貸し出し程度に収まるだろう。

——。
——。

S i d e ドロテア＝リツケン

今日は、教室で特別HRが行われている。

学園祭に向けての出し物を決めるのだろう。

マリーチ様も参加なさっているが、あまりヤル気はないそうだ。

「ドローテア。私たちの最高傑作を持ってきたよ」

「持ってきた」

私の現在いる場所は、第三アリーナピット。

そこには、オヴエストⅡポッツォⅡファブリカ家のメイドであり、O・P・F社研究員でもあるランサメントとエスパディアの姿が在った。

そして、ISを遥かに上回る巨体がその後ろに鎮座している。

「これが……。O・P・F社が創り出したISとは全く異なる兵器」

全身に武装が施された巨人とでも言えば良いだろうか？

もっと分かりやすく言うのなら、休日の早朝にやっている戦隊物に出てくる巨大ロボットの様な容姿だ。

「違う。ISはコンセプトからして兵器じゃない」

蒼いメイド服を纏ったエスパディアが言う。

「可哀想。兵器じゃないのに兵器にされた。私は、篠ノ之束を認めない」

その瞳には。誰にでもわかる様な憎悪が見て取れた。

そして、呼応するかのように巨人が低い唸り声の様な駆動音を響かせる。

「エスパディア、ちょっと熱くなりすぎだよ。それに、熱くなる私の役目なのに！」

なんかちよつと違う方向で非難の視線をエスパディアに向けるランサメント。

ちなみに、ランサメントは紅いメイド服を纏っている。

「あの……。それで、こちらの兵器の名は？」

キラッ！つとでも擬音が付きそうな表情をする二人。

そして、「ふふふ」とマッドサイエンティストの様に笑う。

「良くぞ聞いてくれました！」

「O・P・F日本支部で開発される予定だった名称未定の赤と青の姉妹ISから生み出された超兵器」

「私たちと同じ名前を持ったコアのないISを4体も解体し、その武装を様々な方向から組み合わせる事でISとは異なる存在へと生み変わらせた」

「「名付けて、武装合体？ヘラクレス？」」

やたらとハイテンションで説明をするランサメントとエスパディア。

二人に反応するように立ち上がりうとして天井に頭をぶつけるヘラクレス。

見た目は先に思っていた通り、戦隊物に出て来そうなロボットだ。恐らくはもつと細身だったのだろうが、各所に追加装甲よろしく、様々な武装パーツが付けられている。

肩にはキャノン？アトラス？が付けられ、ショルダーガードには

リアアーマー？エリトラリアユニット？のミサイルポッドが装備されていた。

上半身の各所に設けられた機関銃？コーカサス？。

さらに、？エリトラリアユニット？の外骨格スカートを背部シヨルダーガードとして使用していた。

下半身も凄まじい。

膝をガードするのは脚部装甲？ハイペリオンレッグ？、上下反転させてある為、まるで膝にナイフが付いているかの様だ。

しかも、？ハイペリオンレッグ？にはP I Cによる浮遊・加減速を細かに調整するシステムが搭載されている為、膝蹴りでもされようモノならば、A I Cの停止とは逆に吹き飛ばされる事だろう。

これだけ巨大な物体から放たれる膝蹴りだつて十分な脅威なのに、加速された膝蹴りなんて笑えない。

腰辺りには？アンテュースサブアーム？が付けられている。

太ももに片刃刀？ジュダイクス？が取り付けられている事から、？アンテュースサブアーム？で使うのだろう。

ヘラクレスの横には、I S用に作られたものの出力と重量がおかしな事になり、I Sのエネルギーを無駄食いする大剣？ギラファブレイド？が2本。

「……身体の各所に武装が取り付けられていますが、量子化すれば良いのでは？」

ヘラクレスを見てみてどうしても気になったので二人に聞いてみる。

二人は、苦笑いを浮かべながら答えてくれた。

「いやー、それがね？」

「量子化は、ISコアがなければ出来なかった」

「という理由なんだよ。だから、武装そのものを装甲化してみたり、身体に取り付けるだけで武器として機能する様にしてみたりね」

「弾切れのことも考えて物理装備も持たせた」

「そそ、あとISと違って絶対防御なんて必要ないからね。ヘラクレスは全エネルギーを体を支える為の機構と自身の武器による反動で自滅しないようする為に使ってるよ」。他は主にAIとかにまわしてるね」

「ヘラクレスにはISのような意志はない」

「だけどねー。エスパと私の思考パターンを混ぜ合わせて作り出されたAIが搭載されてるから、ほぼ人間に近いことは出来るかな？まあ、人間としての意志が残っていたりすると自滅しちゃうかも知れないから、人間らしい以上にはなれないけどね」

「難題。崩壊しない精神は難しい」

私は頭が良い方ではないから分からないけれど、とりあえず量子化は出来ないらしい。

ヘラクレスその物をIS学園に輸送するのもO・P・F社が持つ特殊な大型トラックが使われていたらしいし……。

「さてと、ドロテアに頼みたいのはさ。この子の模擬戦相手なんだよ」

「え？ それなら私が日本支部に戻れば良かったのでは？」

「学生の仕事は勉強。だから、私たちから出向いた」

コクコクと頷くながら言うエスパディア。

私の勉強の邪魔にならないように放課後の時間を選択肢、IS学園から許可を得てココまで来たらしい。

「それじゃ、さっそくお願いしても良いかな？」

「はい！」

私はアーテイルを纏ってアリーナへと出る。

そして、後ろを向いたときに見た光景、ピットから四つん這いで出てくるヘラクレスは――。ちよつとマヌケだった。

Ver.47（後書き）

ヘラクレスを登場させました。

ちなみにオリジナルレシピです！

実際に作れますよ。

ランサメントとエスパディアが合計して4体必要ですけどね！！

ちなみに、ゼオの武装盛りレシピも……。

組合せで色々できるので面白いですよね。

ゼオの方は神姫とも組み合わせられますし……。

ヘラクレス？ 頑張ったんですが神姫と組み合わせると、ヘラクレスに取り込まれてる神姫みたいに……。

機会が在ったら写真とって載せてみようかとも思ったのですが、そういうの良いのかな？

Ver. 48

永い、とてつもなく永い様に思えた戦いは、私の――。
アーテイル・フルバレルの敗北で幕を閉じた。

Side ヘラクレス

正式名称未定。

型式未定。

正式武装未定。

骨格未完成。

搭載AI未完成。

製作者より与えられた名は、ヘラクレス。

強く在れと赤い少女は言った。

潔く在れと青い少女は言った。

二人の女性から生まれた一つの形。
可能性の器。

――。
――。

IS学園第三アリーナ。

そこには、アーテイル・フルバレルを纏ったドロテアとヘラクレスが立っていた。

ドロテアはすでに武器を構え、臨戦態勢を取っている。

「それじゃ、初めてー」

ランサメントの元気な声により、戦いは始まった。
だがそれは、とても闘いと言える様なモノではなかった。

一言で言うのなら殲滅戦。

闘いではなく、戦。

ヘラクレスという存在は、量子化が出来ない代わりに装甲そのものを武装として使用する。

ISが武器を呼び出す0.数秒の隙すら存在しないのだ。
しかも、機械であるが為に恐れというモノを知らない。

「ちょ、ちよつと！ ランサメント！ エスパディア！ 私、結構本気で撃ちまくってるのに……！ と、止まんですよ！」

「当たり前」

「ヘラクレスにはISみたいな確固たる意志は存在しないって言ったじゃない。銀の福音の戦闘情報は見たけど、ヘラクレスは回避とか色々な事はやらないよー。悪・即・断みたいな感じで攻撃してくると思うから気をつけてね。あと、ISで言うところのシールドエネルギーは500くらいで少ないから、撃つてれば止まると思うよ？」

そんな会話がなされている中、ヘラクレスは地面に置かれている大剣ギラファブレイドを手に取り、腰のアンテュースサブアームを展開させる。

アンテュースサブアームは、太もみに付いているジュダイクスを装着し、合計4本に増えた手で持ってドロテアに襲い掛かった。

ヴオオオオオオウ！！

ISでは絶対にありえない起動音。

体中のギア、心臓部に当る駆動機関、ありとあらゆる稼動部位からなる様々な音が奏でる獣の咆哮にして、ヘラクレスの雄叫び。

「こ、怖いですよ!？」

恐怖心にかられたのか、一心不乱に撃ちまくるドロテア。

その一発、一発には、第二形態移行した銀の福音が放ったエネルギー弾を軽く上回る威力が込められている。

だが、その攻撃にすら怯まず、恐れず、突き進み、手に持ったギラファブレイドを高く掲げ、ドロテアに向かって振り下ろした。

振り下ろすと同時に両サイドから突くように放たれたジュダイクスは、エクストリーマ・バレルにより吹き飛ばされた。

「瞬時加速には反応しきれないんですね」

ジュダイクスを吹き飛ばしたドロテアは、ギラファブレイドを避けるように瞬時加速で後方へ移動する。

攻撃対象を失ったギラファブレイドは、アリーナに小さなクレーターを創り出した。

「……。え？」

さすがにその光景は、衝撃的だったのだろう。

唖然とした表情をし、ランサメントとエスパディアの方に顔を向けるドロテア。

「あの、クレーターが……」

「あれ？ 言ってなかったけ？」

「ヘラクレスの攻撃力は、エネルギーを防御に回しているISなんかよりも遥かに上。ハイパーセンサーに裂かれているエネルギーもない」

「目は悪いけど、それだけ巨大なら当るしねー。それと、ドロテアのアークテイル・フルバレルは防御型ポイけど、一発もらうと多分……。終わるよ？」

「99.5%の確立でシールドエネルギーが枯渇する」

サーツと音がしそうな勢いで青ざめてゆくドロテア。

そんな事などお構いなしと言わんばかりに、第三アリーナにクレーターを作り出し、そのクレーターに埋ってしまったギラファブレイドをユツクリと引き抜いたヘラクレスは、ドロテアに向かって二度目の進撃を開始した。

ヘラクレスの動きは非常に遅い。

全ての動きにタイムラグが発生し、搭載されたIAはその処理に追われる。

攻撃一つにしても、身体がバラバラにならないように全てのギアを調整し、適切な状態へと最適化を繰り返す。

内蔵銃器武装を使おうものならば、反動で自らの装甲が丸ごと消し飛ばぬように身体の銃身角度、銃口角度を調整し、使用時の理論を書き直す。

その目であるターゲットロックシステムにおいてもハイパーセンサーの足元にも及ばない。

だが、それを膨大な予測処理を行うことで補っている。

それら全てを、ヘラクレスという小さな形に収めている為、重く、遅いのだ。

だが、その遅すぎるといふデメリットを背負い込んでなおもメリツトを生み出す物がある。

機械であるが故の攻撃力。

IS同様に人型では在るものの、大きさは軽く倍を行き、重さに至っては何十倍と言っても良い。

振り下ろされる剣は重力という強い味方をつけ、あらゆるモノを粉碎し、切断する。

突き出される刃は、鋼鉄のギアに支えられ、ISにサポートされた人間の筋肉を軽く凌駕する威力を生み出す。

ISとは異なるコンセプトにより生み出された巨人。

それは、知らず知らずにISという人の形の天敵となっていた。

「こうなれば、切り札すべてを切らせられます！」

ドロテアはそう言つと、全武装を展開し、複数の特殊武装による攻撃とワンオフ・アビリティ？スーパーツインカノン？を発動させる。

超巨大なエネルギー弾、接触時に爆発を起こす中型エネルギー弾、そして無数の追尾エネルギー弾を放つ。

「――！！」

「え？」

その攻撃の際、ドロテアとヘラクレスの視線が交じり合う瞬間

があつた。

一瞬、たった一瞬の交差ではあつたが、ドロテアは見てしまったのだ。

緑色のバイザーの奥、輝く機械仕掛けの一つ目の中にある確かな意志を――。

そして、ヘラクレスはトンでもない行動に出る。

ギラファブレイドを分投げ、中型エネルギー弾を相殺。

アンテュースサブアームも同様にジユダイクスを射出し、追尾エネルギー弾を相殺。

そして、アンテュースサブアームを収納したヘラクレスは両腕を広げ、超巨大エネルギー弾を受け止める。

各部位パラメーターが限界域を突破したのか煙を上げるヘラクレスの両腕。

全ての重量を支えている両脚からはスパークが発生し、目に分かる限界を告げている。

「あのお……。CHIKARAが受け止められて、抱き潰されようとしてるんですけど？」

「これは、予想外」

「うん、予想の範囲を超えてるよ。まさか、咆哮とスーパツインカノンを相殺して、CHIKARAまで潰そうとするなんて」

「でも、やはり」

「いまのヘラクレスじゃこのあたりが限界だね。正義の味方は倒されると一気に強くなるから、次はもうこの戦い方じゃドロテアは

勝てないよ」

超巨大エネルギー弾を粉碎し、いまいもドロテアに向かって突進しそうな状態で機能停止するヘラクレス。

その瞳、緑色のバイザーの奥で輝いていた一つ目は光を失っていた。モノアイ

「……私の負けですね」

「ドロテアの勝ち」

「エスパディア。こういう時は、本人の意志による勝敗が大事なんだよ」

「動いてる方が勝ち」

「むう、エスパディアは相変わらず固いなあ」

その後、第三アリーナを使う為にやってきたシャルロットとセシリアは、アリーナ端で整備を受けているISとは異なる超兵器を目標撃する事になる。

Ver. 48 (後書き)

ヘラクレスってカッコイイよね？

沈黙するヘラクレスを見つめるシャルロットとセシリア。
その表情には、困惑が見て取れる。

「これは？」

「一体なんですか？」

上から下まで、何度も見直す二人。

そんな二人に気を良くしたのか、赤と青の準天才は説明を始めた。

「この子はね。ISとは全く異なるコンセプトを元に創り出した超兵器だよー」

「ISコアは搭載してない」

「武装自体はIS用に作られた物を使用してるけど、ISとは違って操縦者はいらないからね」

「ISは本来、宇宙開拓の為の物」

「でも、この子は違う。この子は最初から兵器として生み出された純粋な兵器。ISにだって引けを取らないよ。まあ、まだ色々無理があるけどね」

ランサメントが大きな胸を張り、自慢する。

エスパディアは控えめに頷いた。

「……」

Side ドロテア「リッケン

シャルロット様とセリシア様に自らの研究成果である？ヘラクレ
ス？の自慢話を始める二人。

私が彼女たち、ランサメントとエスパディアと出会った頃から、
あの自慢癖は存在していた。

止めなければ延々と喋り続け、最長36時間くらい喋っていたよ
うな気がする。

「こちらの二人は、O・P・Fの研究員の方なんですよ。ISとは
異なる兵器開発をコンセプトにした研究を行っていて、今回第一号
が完成したのでこちらでテストを行っていました」

ということ、私は二人の会話を止めるため、区切りが良さそう
な場所では会話に乱入した。

もちろん、気持ちよく喋っていたランサメントからは、避難の視
線を浴びせられるワケだけど……。

「いまは動いていませんが、後ほど動かせるようになりますので
……。シャルロット様、セリシア様、良ければデータ取りに協力し
ては頂けないでしょうか？ 無論、専用機のデータを取らぬ様、こ
ちらで用意した量産型ゼルノグライドとアーンヴァル強化型を仕様
して貰うことになりますが」

シャルロット様とセリシア様は相変わらず混乱していたが、私の

言葉でランサメントとエスパディアはヤル気になってしまったらしい。

そそくさとヘラクレスの再調整を始めた。

「……えつと、あれ？」

「あの、わたくしたちまだなにも……」

「お二人とも、ランサメントさんもエスパディアさんも根っからの研究者でして……。36時間の自慢話と数分の模擬戦だったら、模擬戦の方が良いでしょう？」

即座に頷く二人。

そして、しばらくしてから巨人と二人の戦いが始まった。

シャルロット様もセシリア様も善戦なさっている。

さて、現状での強さを無理やり順位にするならばこんな感じ。

1位、私。

2位、マリーチ様、箒様。

3位、シャルロット様、鈴様、ラウラ隊長。

4位、一夏様。

5位、セシリア様。

私が現状1位な理由は、アーティルフルバレルの出力が安定し、ほぼ無限にも近い砲撃を撃ちだす事が出来るからだ。

あとは、エル様の許可を得て、様々な実験武装を積むようになったからだろうか？

レーザーも在れば、ミサイルもあるしビット兵器まで搭載され、いまのアーティルフルバレルは様々な攻撃が可能となっている。

元々防御型という事もあり、シールドエネルギーの量も莫大だ。

2位が同位なのにもシツカリと理由がある。

マリーチ様のマリーセレス、箒様の第四世代型紅椿の相性を最悪を極める。

マリーチ様の問答無用の攻撃に、箒様の紅椿は耐えてしまうのだ。紅椿の攻撃は、合計10の目を持つマリーチ様に届く事はない。だから、勝敗か付かない事が殆どであり、稀にマリーチ様が勝つのも経験の差だろう。

シャルロット様、鈴様、ラウラ隊長は相変わらずだ。

アーティルフルバレルと同じ、第二形態移行した白式・雪羅の一夏様だが……。

第一形態の頃よりも燃費が悪くなった機体を使いこなせていないいくつかやり方はあると思うが、自分で気がつかなければ意味がないと、マリーチ様から口止めされているし、使い方さえ覚えてしまえば、3位の3人を簡単に圧倒する事が出来るだろう。

ただ、白式とマリーセレス、紅椿の相性は最悪だ。

マリーセレスの目と攻撃速度に攻撃量、紅椿の防御力に尽きないエネルギー。

懷に飛び込んで一撃必殺、これが行える可能性が限り無く低いこの2機を倒す事は、いまの一夏様では不可能だろう。

アーティルフルバレルとの相性も最悪だ。

エネルギー系の攻撃が多いとはいえ、それらすべてを零落白夜の盾で防ごうモノならば、すぐにエネルギー切れを起こす。

数は力なのだ。

セシリア様もエネルギー系の武装が殆どであり、実弾に分類される物もBTのミサイルくらいだろう。

しかも、セシリア様はブルー・ティアーズの基礎とも言えるBT兵器をまだ使いこなせてはいない。

これでは白式に手も足も出ないし、負け続きなせいで精神的に追い詰められての事が、殆どの専用機持ちに敗北している。

この戦いが気分転換にでもなれば良い。

アーンヴァル強化型に搭載されているココレット（ビット兵器）に翻弄されるヘラクレスを見るのは、きっとセシリア様にとっては気分の良い事に違いないだろう。

全身を装甲で固めるヘラクレスには、シャルロット様が操縦する量産型ゼルノグラードの実弾兵装は効き難い。

無論、セシリア様が操縦するアーンヴァル強化型のエネルギー兵器も効き難いのだが、タフなだけでまだ頭の中身は完成されていない。

ココレットを敵と認識し、巨大な大剣で叩き落そうとしたり、体中に設けられた銃器を無駄打ちする様は、なんとも……。

ランサメントさんとエスパティアさんも「あちゃー」とか「認識能力、低」とか言っている。

「もらいましたわ！」

ヘラクレスの背後、首と胴体のジョイントを狙い打つセシリア様。この一撃はヘラクレスの通信系を一次遮断させ、機能停止に陥らせる。

「そこまでー。二人とも有難う。これでまたヘラクレスは強くなれるよ。あと、認識能力が低い事もわかったしね」

「感謝」

二人はそういうと、機能停止したヘラクレスの調整をササッと終わらせ、アリーナピットまで引き上げていった。

Ver・49（後書き）

ヘラクレスにセシリアが自信を取り戻すキツカケになってもらった
りと……。

でも、これで。

本当にヘラクレスの出番はお終い。

次の登場は当分先。

Ver・50

Side ドロテア「リッケン

私はランサメントさんとエスパディアさんを見送る為、第三アリーナを後にした。

誰かと入れ違いになったような気がしなくてもないけれど、巨大なヘラクレスの輸送を手伝っていた為、誰とすれ違ったかは分からなかった。

Side マリーチ「オヴェスト」ポッツォ「ファブリカ

面倒くさい事になってしまった。

まさか、あのラウラ「ボーデヴィツヒがメイド喫茶なんて物を提案するとは……。

メイドを従える身の私がメイドのコスプレをする？

イヤだ。

まあ、そんな事を考えつつ、ミミック計画の所在地でIS学園の学業も疎かになり、色々に参加できないまま3日経ってしまった。

このまま進めば、学園祭には参加できないかも知れない。

メイド姿にならなくても良いと思うとうれしいが、一夏といわれる時間が少なくなると思うと寂しい。

さて、ドロテアの報告では、現在一夏のコーチをしているのは

生徒会長、更識楯無らしい。

「マリーチ様、テストの準備が完了しました」

白衣を着た研究員が私に言う。

どうやら、いまは学園の事を考えていられる余裕はない様だ。

「わかったですう。いま行くですう」

ミミック計画。

ハーモニーグレイスが仕入れてきた無人機と未登録コアの情報。
そして、アメリカ支部が入手した銀の福音のコアだったモノ。

これらを使い。

私は意志を持つ無人機を作り出そうとしている。
他の企業も似たようなことはやっているだろう。
だが、根本的に間違っているのだ。

コアには意志らしきモノが在るのではなくて、確かに意志が存在している。

それが天災により刷り込まれた意志なのか、作成過程で発生した偶然の産物なのかは分からない。

だが、一つだけ言えること――。

武装神姫は、確かに意志を持っていた。

ホビーである私たちですら意志を持っていたのだ。

そして、武装神姫を別の方向で進化させたアストライアーにも意志は存在していた。

ならば、宇宙開拓の為に開発され、兵器と化したISにも意志は在るのだろう。

現にアーテイルが第二形態に移行する少し前、ドローアはアー

ティルの声を聞いたと言っていた。

創造主であり、生みの親である篠ノ之束に牙を剥くような言葉だったらしいが……。

何にせよ。

いま作っているミミックは、天災篠ノ之束にケンカを売るようなモノであることだけは確かだ。

「素体は？」

「銀の福音をベースとし、武装部分を全解除。内部骨格、外部骨格共に安定しています。P I Cで補助していますので、二足歩行も可能です」

二足歩行というのは凄く難しい。

人間は生まれつき二足歩行が出来る生き物だが、それはその様に進化し、その様に育てられたからなのだ。

いまの技術を持ってしてもP I Cを使用しなければ、完璧な二足歩行は不可能に近い。

しかもだ。

肝心のI Sコアは完全なブラックボックスであり、私でも手が出せる代物ではない。

弄れば壊れる。

100個コアが在ったとしても、100個とも壊れてしまっただろう。

だが、ここでハーミニーグレイスが入手した未登録コアの情報が役立った。

ブラックボックスの一遍にふれる事に成功したのだ。

「ゴスペルコアよりデータを抽出、C S Cに変換データを転移開始」

何かにより壊された銀の福音の意志とでも言えば良いのだろう。
ソレは復讐を願っていた。

大切な者を脅威に晒された怒りを抱え込んでいた。

そして、自らをISとは異なる物にして欲しいと願っているように思えたのだ。

だから私は、願いを叶える。

「データ受信完了まで、あと12%」

これにより、ゴスペルコア……。銀の福音に使用されていたコアは間違いなく壊れるだろう。

だが変わりに、天災が作ったコアとは異なる三色のコアが誕生する。

本当に良い材料を手に入れることが出来た。

「データ受信完了。CSC1号メルキオール、CSC2号バルタザール、CSC3号カスパーの起動を確認」

最高に出来になった。

だが、これ以上は作れないだろう。

銀の福音のコアは壊れ、その意志はこの3つに受け継がれた。

これほど強い意志を持つコアはそうそう見つからない。

「ミミックにCSC1号メルキオールを接続。経過を見るですう。
私は自室にいるから、何か在ったら呼ぶですう」

「了解しました」

私は研究室を後にする。

ミミックは出来た。しかし、これでは武装神姫を量産する事は出来ない。

強い意志を持つコアという素材がなければ、CSCを作る事が出来ない以上、これから先への進行は不可能だ。

「ま、他の手段を模索するしかないですう。1つのコアから3つのCSCが作れただけでも良しとするですう」

ミミックの経過報告を聞くため、私は一日中O・P・F総帥としての仕事をこなす事になった。

そして、受けた報告は――。

稼動したミミック1号メルキオールは、小学生ほどの智識しか持ち合わせておらず、一々教えなければならぬという不具合が発生しているらしい。

CSCに情報を入れたとしても中途半端となってしまったとの報告も受けた。

おそらく、情報は情報であり、経験を伴った物ではないからなのだろう。

兵器としてみればまったく持って使い物にならない。

廃棄物も良いところだ。

だけどもあ、O・P・Fは普通ではない。

むしろ、研究員一同は感激し、涙すら流していた。

新しい生命にも近い物を生み出した。と、そう言っていた。こちらにもこちらとしての矜持がある。

失敗？ 不要物？ ジャンク？ 別にいいじゃないか。

全部引き込んで、引き入れて、私の望むものにしてみせよう。

ただその前に……。

「おっと、お嬢様どこに行こうとしてるのかな？」

「寝室ですう」

「まだまだ、仕事は残っているよ？　IS学園には説明してあるから安心して欲しい。それでもボクは先のことを考えて行動しているからね」

何とかして、この仕事地獄から抜け出したい。

Ver.50（後書き）

ミミック作成完了

誰も襲わないよ？

ミミックは本来複数の量産機ですが、こちらでは1機だけです。
あと2機作れますが、作りません。

必要な物

未登録コアの情報

復讐心を覚えたISSコア（現物）

無人機の構造情報

銀の福音の構造情報

ミミック（武装神姫）の構造情報

武装神姫の構造情報

コアセットアップチップ

擬似CSCの無色三種類（この作成時にCSCの構造情報が必要）

スーパーコンピュータシステム349基

すべてをそろえる財力

人員を揃える財力

人を従えるカリスマ性

外部に情報を漏らさない隠蔽性

天災に喧嘩売る勇氣

夢とロマンを追いかける紳士or淑女という名の研究員が複数

バイアクヘーを呼び出す事よりも難易度が高いです。
たぶんね？

Side マリーチⅡオヴエストⅡポッツォⅡファブリカ

さすがの私も驚いてしまった。

中間テスト免除の手紙が送られてきた時は……。

「これはなんですか？」

私は目の前で微笑むロレーナに言う。

「ん？ IS学園の中間テストを免除してもらった証だよ？」

中間テスト免除って……。

まあ、私は有名大学を出ているワケだから問題はないのだけど、
良いのか？

問題ないのか？

「問題ありませんよ。その様にボクが調整したからね」

心を読むなど、昔から言っているだろう。

「いやー。お嬢様は考えが顔に出やすいからね」

「ほっとけですう」

とりあえず、退屈なテストは受けなくても良さそうだ。

まあ、一夏と会えない時間が長引いてしまっけれど……。

「でもまあ、ミミックの育成が忙しいですう」

ちなみに、私の目の前でよちよち歩き、フラフラと彷徨っている。稀にコケたり、転がったりと……。まともな二足歩行も行えないらしい。

「うきゅーう？」

さらに言つのならば、小学生ほどの知識を持ち合わせていると報告されたのにだ。

うきゅー以外の言葉を聞いたことがない。

しかもだ。二足歩行が難しいのはよく分かる。

だが、二足歩行用に作られた素体を用いながらコケる、転ぶ、コ
ロがる。

幼稚園生以下だろコレ？

「うきゅきゅ」

まあ、ミミックの素体は身長144cm、体重97kg、スリー
サイズB74・W53・H76という感じだから幼い感じがあるの
は許せるが……。許せるのだが……。

「だあー！！ これ以上、部屋を荒らすんじゃないですう！」

「うきゅ？」

いかに幼さを思わせる体付きをしていようと、ミミック1号メ

ルキオールの身体はISと同じ素材で出来ている。

コケたり、転んだりすれば床がへこみ、コロがれば絨毯が痛む。そしてだ。

その腕力も凄まじい。

試しに与えた人形は一瞬でボロボロにされたし、IS用の弾の入っていないライフルすらも潰して見せた。

生物とは異なり、本能的な加減が行えないという事が分かった。ただけでも良かったのかもしれないが……。

人間に接触する際、出力を最低限まで抑えるというプログラムを当日にぶち込んでおいて良かったと思う。

ソレが無かったら……。

今頃私は、ぐちゃぐちゃのミンチに変わっていたことだろう。

「きゃきゃっ」

怒られたという事すら理解せず、声をかけられた事に喜ぶミニツク1号。

はあ、こんなので学園祭当日までにはコノ状況を何とかしたい。

Side ミニツク1号メルキオール

時は少し戻り、O・P・F日本支部兼本社。

世界で1機だけ、意志を芽生えさせた無人機がいた。

ISという教本と教材を基にし、ISとは異なる形で生み出されたソレは――。

とてもではないが、兵器と呼べるものではなかった。

自意識を持ち合わせてはいたが、知能は無く。

機械で在るにも関わらず、プログラムだけではなく経験すらも必要とする。

一つの擬似生命の形と言えなくもないが……。

「うきやー」

人間に比べて遥かに力の強いソレを身に抱えた者達のストレスたるや……。

凄まじいモノがあることだろう。

「クソッ、1号はどこに行った!」

「銃弾の嵐にも耐える扉を潰すとか……。どう上に報告すりゃいいんだよ」

「おい、気をつける! マリーチ様がお入れになったプログラムは人間指定の物だけだ。機密情報入ったオフラインPC潰されたら洒落にならんぞ!」

「演算室は絶対に死守しろ!」

O・P・F社にいる社員、老若男女問わず総出で1号探索が行われる。

外には出られないようにプログラムされている為、他社、他国に機密が漏れる事はない。

しかし、内に抱え込んでいる以上、被害は全て内側に発生してしまふ。

「ああ……。こ、この前のボーナスで買ったばかりの洋服があ」

個室にまで及んだ被害により、ボーナスで買った洋服を引き裂か

れた女性。

「まだ、このゲームプレイしてなかったのに！」

積み重ねていたゲームが見事にペシャンコにされた男性。

「……。わ、私のケーキ……。私の……」

1時間並ばなければ買えないとまで言われる高級ケーキを無残に潰された女性。

「うぎゃー！？ ほ、報告書があ！？」

やっと印刷が終わり、これから報告書を提出しようとした矢先、報告書を盛大に廊下にバラまかれ、踏みつけられる男性。

一見被害は軽いように見える。

1号のやっている事は、あくまでも子供の悪戯程度にしか過ぎないのだが……。

一日中、絶え間なく悪戯が続けられては堪忍袋の緒が切れるというもの。

だが、1号はISのボディを使用して作られている為、生身の人間では相手にすらならないし、下手に相手をするプログラムが存在で出力は最低限とはなっているが、怪我をすることは目に見えている。

とはいえ、社内である為にISで対処する事も難しい。

IS学園での試運転を終えたランサメントとエスパディアのヘラクレスは、その巨体ゆえに室内では身動きすら取れない。

もちろん、通路が壊れても問題ないというのならば話は別だが……

…。

「出撃は無理」

「IS学園でのテストで砲身がイカれたり、骨格と外骨格装甲が大きなダメージを受けたからね」。修理に1ヶ月くらい掛かるかな？
あと、ギラファブレイドを振り回したり、ドロテアのア攻撃を受け止めたりしたから、両腕の肘ジョイントと両脚の膝ジョイントも壊れちゃったしね。取り替えなきゃいけないからピクリとも動かないよ」

「諦めて」

もとより出られる状態ではないようだ。

こうして、O・P・F社員（研究員のぞく）に取っては悪夢にも近い日々が開始されようとしていたのだが……。

「はあ、仕方ないですう。私が引き受けるですう。とりあえずお前たち、さっさと仕事戻れですう」

マリーセレスを展開し、1号を羽交い絞めにするマリーチの姿は、O・P・F社員（主に被害を受けていた人）達にとって女神の様にすら見えることだろう。

もとより社内支持率脅威の100%を誇るマリーチである。

その支持率が、さらに万全たる物になった事は言うまでもない。

――。

――。

――。

——時は経過し、1号を引き受けたマリーチの私室。
そこには、偶然ベッドの上でエネルギー切れを起こし、寝ている
ような格好をしている1号が在った。

「起動限界はほぼ24時間ですか。専用エネルギー充電機クレイ
ドルの開発と予備エネルギー補給機も作らないとダメそうですね」

マリーチはマリーセスを起動させ、エネルギー切れで停止して
いる1号を抱かかえる。

そして、研究室へと向かった。

なんだかんだと、面倒見の良いマリーチであった。

「ほつとけですう」

Ver. 51（後書き）

ミミックの使用武器は3つ。

太ももに収められているピストル（ナイフに取り付け可能）

バリステイック・ナイフ（ピストルに取り付け可能）

フリムファクシ（スカートです。取り外し可能）

コアを持たないヘラクレス同様、装甲を量子化使用する事は出来ない。

服を着るという概念を持たない。

モノを食べることはできない。

戦わなければほぼ24時間活動できる。

見た目はミミック（身長144cm、体重97kg、スリーサイズ
B74 - W53 - H76）。

S i d e ドロテア＝リッケン

学園祭当日。

マリーチ様は本社のお仕事が忙しく、参加する事は出来なくなつた仕舞つた。

そして、一夏様も参加なさつて良い状態ではないと思う。

度重なる生徒会長の悪戯により、心身ともに疲弊。お食事もあまり食べていないようだ。

あの生徒会長が何をしたいのか、私には今一分からない。

「ドロテアさんお願い。て、手が震えちゃつて」

「こちらは私がやりますので、切り分けの方をお願いします」

ちなみに、私の役割は料理となっている。

本業がメイドという事もあり、最初は接客班だったのだけど……。セシリア様が用意した無駄に高級な食器の数々、ティーセットも

高級感を漂わせている。

私はこういうモノの価値を知らないけれど、おそらく結構な値段なのだろう。

でも、マリーチ様が使っている物に比べると……。

「ドロテアさんって、良くコレだけ高級感出してる物を普通に扱えるよね」

「いえ、普通というワケでもないのですが……。ほら、私ってマリイチ様専属メイドですし、マリイチ様はO・P・F総帥ですからね」
「なるほど、いつもこんなのに囲まれてるんだ。私だったら逃げ出しそう」

おそらく、ここに用意された物よりもさらに高級な品々に囲まれているのだろう。

ただ、ここに在る物も一般の方々が触れる機会が少ない食器である事は確か。

これらを手が振るえたりすることなく扱えたのが私だけだったため、私も料理担当となったワケなのだ。

「あ、そのポツキー冷しておいてください。ケーキを切り分けたので、切っておいたイチゴを乗せて接客班に渡してあげてください」

外が騒がしいおかげで、料理担当がいる場所の声は外というか、接客場所までは聞えない。

ただたんに薄い壁一枚で見えない様にしているだけなのにね。

「アイスティー用にコップを少しだけ冷して置いてください。あ、ホット用のカップにお湯を入れて少しあっためておきましょう。熱湯はダメですよ？」

「……はい」

サクサクと支持を出し、接客班が持ってくるメニューに対応する。割と楽しい。

それにしても、接客班が戻ってくる頻度を考えるに……。長蛇の列でも出来てるんじゃないだろうか？　と思うくらいだ。

早い時は30秒、長くても4分以内には接客班が戻ってくるし「いらっしやいませ」と「またのおこしを」の声が結構な頻度で聞えてくる。

みんな、一夏様目的なのだろうけど……。

シャルロット様は同じ女性にも受けが良くて人気なようだ。

箒様、セシリア様は微妙な人気というか……。なんだか相手を怯ませていそうな勢いがある。

ラウラ隊長に至っては、その強さに惚れた方々也多いらしく、一夏様の話を振ると突然可愛らしくなる為、一部で物凄い人気を獲得している。

「執事にご褒美セット一つ、アイスで」

「メイドにご褒美セット一つ、こっちもアイス」

「ケーキセット二つ、ショートケーキとロールケーキ、チーズケーキとシフォンケーキ、飲み物は両方ともホット」

「メイドにご褒美セット一つ、またアイスー」

「了解しました」

執事にご褒美セットはその名の通り、一夏様関連のメニューだ。

冷したポッキーにホット or アイスティーのセットであり一番安上がりなメニューだったりもする。

一夏様が注文した人にポッキーを食べさせてもらうという内容なのだけど、一部の女子に大ウケ。

知り渡れば絶対にES学園中の生徒がやってくると思う。

ちなみに、メイドにご褒美セットも同じ様な内容だけど、こちらはメイドを選択する事ができる。

一番人気はシャルロット様、二番目はラウラ隊長、三番目はいない。

箒様とセシリア様は今の所一回も頼まれてはいない状況だ。

ケーキセットは私が作ったケーキ5種類のうち2種類を選び、ホット or アイスティーのセットになっている。

多分、一番お金が掛かっているだろう。

ショートケーキ、チョコレートケーキ、チーズケーキの3品にロールケーキ、シフォンケーキを加えた5品だ。

何故かは知らないが、ロールケーキとシフォンケーキのメニュー欄には？ドロテアお手製！？と掛かれており、一番注文が多い。

ロールケーキはココア生地使用し、生チョコクリームを巻いてある。最後に生キャラメルソースを適量かけてあげれば完成だ。

シフォンケーキはいたって普通のシフォンケーキ。切り分けたシフォンケーキの横にミントの葉を乗せたバニラアイスと苺のソースで彩り完成。

ショートケーキ、チョコレートケーキ、チーズケーキの3品は、他の料理担当の方々が協力して作っていた。

どれも美味しそうな出来だと思う。

「はい、出来ました。接客班に渡してあげてください」

「はい」

完成したメニューを接客班に渡す事を担当にしている方に渡し、次の準備に取り掛かる。

サクサクと消化していかなければ、詰ってしまいそうな勢いが在るような気がしたからだ。

「次は……。メイドのご褒美セット5つ、アイスで」

「……はい？」

私の記憶が正しければ接客班でメイド服を着てるのは4人のハズ。5つは人数的に無理なんじゃ？

「えーっとね。生徒会長が手伝いにきちゃってね。織斑君が休憩に入ったから……。5つは全部生徒会長目当ての人」

生徒会長の人気は凄まじい。

前々からなにやら生徒会長に憧れているみたいな事を言っていた方々を見たことは在るけれど……。

「ポッキー足りなくなりますよ？」

「どうしよつか？」

「ポッキーが切れると無言の圧力に耐えながら用意しなければ行けなくなるでしょうし……」

「まだ、予備が家庭科室に大量に冷してあるけど？」

「このままのペースではソレもすぐになくなるかも知れませんね。一夏様の人気を考えての量だったのですが、まさか生徒会長まで参戦なさるとは」

「料理担当の事を考えて欲しいよね」

「「「同感」」」」

こうして、私たち料理担当の受難は――。

学園祭が終わるまで続いた。

O・P・F | NETジャーナル 第九回？

「はぁい。は・じ・め・ま・し・てえくん O・P・Fのキモイ方、グリーン＝フィリフトよお。フブキのアドウムちゃんとおミミックの雪羅ちゃんは、お・や・す・み」

「今回とお次回のジャーナルは、あたしが担当する予定ねえ。よろしくねえ」 それじゃ、さっそくあたしの説明を仕様かしらん」

名前：グリーン＝フィリフト

O・P・F所属太平洋イハンスレイ担当研究員兼現場監督、男性。

類稀な指揮官としての才能を持ち合わせる変態（紳士ではない。姐御である）。

元アメリカ海軍所属の大佐だったが、とある事件を切欠に退役。退役後はO・P・Fの研究員兼現場監督として活躍している。

他のマリーチ信者を上回る狂信者であり、絶対的な忠誠を誓い、マリーチからの信頼も高い。

デューク・東郷と並ぶほどの技術を持ち合わせ、エイムは異常なほどだ。

金髪をオールバックにし、月桂冠を常に被っている。

その身体は異常なまでに筋肉質であり、顔が美形な為にアンバランス感がハンパない。

あまり服を着ない性格なのか、黒のブーメランに白衣のみというスタイルを貫いているが、視察の時や他の企業へ行く場合は、黒のスーツを愛用。

元々の口調は非常に厳しく、軍人調で在った。
しかし、それではO・P・F社員にウケがよくなかったため、少しでも心の壁を取り払おうと努力した結果……。
その努力が間違った方に実を結び、変態（紳士ではない。姐御である）になってしまふ。

喋り方さえ気にしなければ、基本的に良い人。
一部から、拷問官と呼ばれている。

また、ブラジル支部のウトウルス、フルエフルのアレニウス姉妹の義母（義父）でもある。

「んまつ、こんな感じがしらあん？ それじゃあ、感想の返信をして行くわよお」

<White Seal 様>

ちょwww

ガチな戦場かと思ったらwww

しかしポイズンクッキングを軽く凌駕するとは……。
恐ろしい娘ッ！

「あら！ イイ男……。じゃないわね。あたし、ドイツ支部に行った事がないんだけどお。なんだかあ、面白そうねえ？ 軍隊式の料理で良いならお・し・え・て・あげるわよお」

<骨皮筋男様>

BIG BOSS

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ 体力

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ 気力

蛇「あ、新しのレーションか？ 色はDレーションに似ているが・
・まあ、こういうのは大抵美味いやつだ」

パクツ

BIG BOSS

[illegible][illegible]

デンッ デデン！ デン！ デン！ デン！

「ボス！？ 返事をしてくれ！ スネーーーーク！！」

「（超野太い声で（イメージ）スネー————ク——！」

<緒方紅夜様>

PICは受動的慣性消去というもの。

（がキャンセラーではなくコントロール（制御）なら出来るが（それでも怪しい）、キャンセラーではたして出来るのだろうか。（まあ、原作でも消去じゃなくて制御じゃないのか？、と思うけど）こちら辺、素直に反射・プリズムビット積んだ方が実用的な気がし

てたんだよなー。

うーむ、結局コアにはISコアを原点にしますか。
たしかに手っ取り早くやるならいい参考になりますからね。
白騎士とか白式とか人格らしきものあるし、もうフルバレルそのまま
でというか、それ以上になってきてますしね。

ライトアーマーということは、ウェルクストラ・ヴァローナあたり
か？

ポモツクとかきたら吹くな。

いい年した女性がああ姿だったらwww

「それは、あたしも思ったわあ。あ、あたしじゃなくてアファ子……？
名も無き武装神姫ね？ 色々考えた結果変更したらしいわあ
ん。ほらあ、どこぞの大隊の小太りな狂人さんも似たような事をし
てたじゃない？ 見たような感じよね？」

「あら！ そ・れ・わあーん。あたしにポモツクになって欲しいつ
ていうフラグかしらあーん？ あ、あたし、ここだけのモブじゃな
いわよ？ 本編にも登場？ 予定？ よお？」

<しんかー様>

武装神姫の神はGodというよりSpiritではと思います。God
はキリスト教の唯一神ですから、人工物である神姫を「神の娘」
と呼ぶのはちよつと違和感があります。どちらかというと、「科学
の力で生まれた神秘的な少女たち」というニュアンスが強いのでは
ないでしょうか？

「アフア……。名も無き武装神姫も納得してたようねえ。ちょっとお、オツム足らない子だからあ、言い回しとかあ色々とお・し・え・て・あげてねえ」

<緒方 紅夜 様>

思いだしたのは前回と合わせて、

「なにこのロボット兵」

いやだってはいはいで出てきて、豪快に攻撃、モノアイに意志がー。
うん、○ピユタのあれだこれ。

格好いいなヘラクレス！

フレームとかちゃんとあればもつと強いんじゃない？

武装を組み立てて体にしたから部品の細かさがネックになってるけど、鎧みたい着る仕様にしたらバランスはだいぶ改善される。

内部骨格で支えて武装で靱性を出して。

フルバレル敗北。

というかヘラクレスを認めましたね。

こうなると次のが気になるなーw k t k

「いいじゃないロボット兵！ 素敵だわあ」。 (ココから超野太い声で(イメージ) 目があ！目がああ！？ (ココからオカマヴォイス) とか言いたいわよねえ？」

「オリジナルのヘラクレスを崩さずに何処まで強化できるかが問題だわあ。あとあ、なんだかんだでえISにはない運用時の目に見え

て分かるデメリットが欲しいのよねえ。ついでにい、ヘラちゃん（ヘラクレス）はあデモベも参考にしてるわぁん」

<緒方 紅夜 様>

さて、子孫とでも言うべき者の誕生。種族として確立するのか、それとも。

ロマンはつきません！！

まあ、ここまできたら自己修復、自己増殖、自己崩壊（寿命）まで目指したいよね研究者としては。

「このあたりは色々と考えてるのだけとお、ハッピーエンドよりもおバッドエンドの方が好きなあたしはどうしたらイイのかしらあ？」

<しんかー 様>

自分はスキンファクシ派ですかね。コンパクトで自己主張しすぎない外見と確かな性能で内のストラーフさんのデフォルト武装です（笑）

ナターシャとミミックの再開が待ち遠しいです。

「あらあ？ あたしはスパッキ……？ なに違うの？ ああ、意味を間違えちゃったのね。あ・た・しのオバカさん」

「ストラーフは扱いが難しいわねえ。mk2との性格差が何とも言

えないわぁん。どっちが良いのかしらぁ？　むしろ、あたしがストライフ装備を着るべきなのかしら？　そして、ナターシャちゃんを拉致って来いって事よね？　いいわ！　お・ね・え・さ・んに任せてちょうだぁ〜い」

「ま、こんな感じかしらね？　大丈夫よね？　お化粧崩れてないかしら？　平気？　ねえ、平気？」

「あたしの登場は、ちょっと何時になるか分からないけどお、登場するわぁん。予定ではあのエムとお密接な関係になるそうよぉ〜んき・た・いしててねえ〜」

「（超野太い…）それでは、O・P・F | N E Tジャーナル？はO vest Pozzo Fabbrica（オヴエスト ポッツォファブリカ）とA / cute アキュート・ダイナミックス Dynamixの提供でお送りした。次回は未定だ。基本的にアフア……名も無き武装神姫の気分次第だ。（オカマヴォ……）まったねえ〜ん」

Ver.53(前書き)

修正

顔に続き

顔に頭突き

理由

誤字

CE L L E

様に感謝

学園に目掛け、桁違いな速度で走ってゆく存在が一つ。

O・P・F 特性の擬態処理を施されたソレは、一般人の目につく事無く走ってゆく。

Side O・P・F

豪華な装飾が施された廊下を全力で走るものがいた。

普段は冷静沈着であり、ダンディで通っているセバスチャンが焦りの表情を露にしている。

「マリーチお嬢様！」

セバスチャンはマリーチの私室へと繋がる扉をあける。

勢い余って扉を粉碎してしまったが、いまは気にも止めていない。

「ああん？　ったくなんだってんだよ？」

「大変で御座います。IS学園に亡国機業の実働部隊が侵入したとの情報が！」

「ん？　セバスチャンが昔所属していたところだったですよねえ？　何か問題でもあるんですかあ？　IS学園だって弱かないですよ」

マリーチは、ISマリーセレスの触手を全て使い1号を拘束して

いた。

だが、1号はソレすらも押し退けようとしている。

「ヤツラは人死にさえ気にしませんぞ！ しかも、今日は学園祭。簡単にIS学園に入れますぞ。一般人を盾にされれば手出しは出せませぬぞ」

その言葉にピタリと動きを止めるマリーチ。
連動して止まってしまったマリーチの触手を弄る1号。

「……。いまから行って間に合うですかあ？」

「無理ですな」

「では、どうするですう？ おそらくは一夏本人と第二形態移行した白式が目的ですう。最悪、白式だけ回収し、一夏本人は暗殺というパターンが在りそうですう」

マリーチは拘束を解除し、腕を組み瞳を瞑る。

1号は遊んでもらえなくなったと判断したのか、マリーチの触手を叩いた。

「うきやあ？」

「……」

「……」

マリーチとセバスチャンは同時に1号を見る。
そして、同時に頷いた。

「マリーチお嬢様、良い事を思いついたのですが」

「私も良い事を思いついたですう。たぶん、同じ事を考えてるハズですう」

「ほほほっ、マリーチお嬢様とこのセバスチャンの相性は最高ですからなあ」

「それはないですう。変態と一緒にされると困るですう。迷惑ですう」

両膝を突き、涙を流すセバスチャン。

そんなセバスチャンを横目で見ながら、マリーチは1号の頭を撫でる。

「1号、お前に任務を与えるですう」

「うきゅー？」

表情というモノを持たない1号は小首を傾げた。

そして、不思議そうにマリーチの方へ顔を向ける。

そんな可愛らしい行動を行う1号の見た目は、可愛らしさからは程遠いものがあった。

分かりやすく言うのならば、デッサン人形だろう。

さらに細か言うのならば、マテリアルフォースだろうか？

「1号、お前の役目は二つ。お前のデータ内に存在している織斑一夏の生存確認、その生命を脅かす者と思う存分遊んでくると良いで

すう。武装は擬態可能なエウクランテをBモードにして使えですう」

「きゃ」

マリーチの言葉を理解したのか、寝転がっていた1号は立ち上がる。

そして、研究室へと走って行く。

「よろしかったのですかな？ 他の企業に察知されれば事ですぞ？」

「色違うから大丈夫ですう。それに、何か言われてもフルスキン型とでも言えば良いですう。でも、念のため……。1号回収班をIS学園近くに待機」

「承知いたしました」

Side 1号

IS学園の敷地に侵入した1号は、織斑一夏を探す。

探し始めてすぐに見かけたのは、愚痴を呟き、IS学園敷地から逃げようとしている女性だった。

「……くそつ、くそつ」

女性の無意識の呟きを捕らえる1号。

そして、1号の意志はマリーチから与えられた？その生命を脅か

す者と思う存分遊んでくると良いですう？という言葉を実行に移す。

「……………」

1号は女性に気がつかれぬ様に忍び寄り、隙を伺う。
そして、女性が公園に入り、気を抜いた瞬間――。
飛び掛った。

「クソッ、なんだてめえっ……………!？」

1号は寸前でこちらを振り向いた女性に覆いかぶさり、動きを封じる。

そして、潰さない程度の握力で両腕を握り始めた。
手加減されていながら、とんでもない握力で握られている為、焦りの表情を見せる。

「な、なんだてめえ！ ふっ、ふざけんな！」

何とか1号を振り払おうと抵抗を始めるが、ISを纏っていないただの人に1号をどうにかする事など出きるはずもない。
だが……………。

「……………」

抵抗を繰り返す女性を見て、小首を傾げる1号。
そして、抵抗を？遊び？と思ったらしく1号は女性の拘束を解き……………。
蹴り飛ばした。

「ぐえっ！」

血を吐き、地面を転がる女性。

1号はその光景を見ている。

「うきやゝ」

そして、嬉しそうな鳴き声をあげ、続け様に蹴り飛ばした。

1号自身の出力は加減されているが、纏うエウ克蘭テBの出力は調整されておらず、サッカーボールの様に弄ばれる女性。

「……」

数回蹴り飛ばされ、何も言わなくなる女性。

必死に痛みを耐え、顔のない1号を睨みつける。

「うきゅ」

さらに蹴りを入れようとした時、1号の足は女性に当たる寸前で停止した。

「きゅ??」

「誰かは知らんが、そこまでだ。ソイツには聞きたい事が山ほどある。殺されては困るのでな」

ラウラは静かな声で1号に告げる。

1号は新たな女性が誰であるのか理解しようと検索を開始していた。

「きゅ」

小さな鳴き声を上げ、1号はO・P・Fのロゴが刻まれた翼を広げる。

そして、蹴り飛ばしていた女性の足を掴み、ラウラの手前に放り投げた。

「がはっ！」

背中から地面に叩きつけられた女性は悶絶した。

1号はラウラの方に顔を向け、まるであげるとでも言っているかのようなジェスチャーをする。

「……。O・P・F。マリーのところのか」

ラウラが手前で苦しんでいる女性に近づいた時――。

「きゃっ」

1号がラウラを押し退けた。

それと同時に2回の軽い爆発音が響いた。

「くっ、何をしている！ セシリア、撃て！」

撃たれた1号は立ち尽くし、ピクリとも動かない。

「おい、大丈夫か！？」

ラウラが1号に近づこうとしたとき、味方に何かあったのだろう。即座に味方の方へ移動するラウラ。

そして、ラウラのIS装甲が飛散し、襲撃者が女性の元へ近寄っ

てきた。

「迎えに来たぞ、オータム」

「くっ……私を呼び捨てに……」

襲撃者がボロボロになった女性を拾い上げようとした時、襲撃者が持っていた小型レーザー・ガトリングが1号の手により握り潰された。

1号はそのまま身体全身で体当たりするかのように襲撃者にぶつかり、バイザー型ハイパーセンサーに覆われた顔に頭突きをかます。

「うっうううきやあああああつ!!」

悲鳴の様な咆哮をあげると共に、襲撃者の腹部に蹴りを入れる。襲撃者もただ蹴飛ばされるだけではなく、ピンク色に光るナイフで1号の顔面を切り裂きに掛かった。

「なっ!? 貴様……」

切り裂かれた1号の顔。

破損した一部分からは、人間の顔ではなく様々な機械が見て取れる。

「ちっ、分が悪い」

襲撃者はそういうと、セシリアとラウラの足止めを行っていたビットの一部を1号に差し向け、至近距離で自爆させた。

その一撃は1号にダメージを与え、逃げるのに十分な隙を作り出す事が出来た。

「悪いが、コイツを渡すわけには行かん」

襲撃者はそういうと、飛来してきた方向へ離脱する。

1号は爆破により受けたダメージを隠すようにし、その場から高速で立ち去った。

「——！！」

「——？——！？」

遠くから聞えてくる二人の声を無視し、O・P・F本社、マリィチの元へと戻って行く。

この1号の存在は、後にO・P・Fと亡国企業との間に様々な争いを発生させる原因となる。

Ver. 53 (後書き)

雨にぬれて風邪を引きました。
次回の投稿が遅れるかも知れません。

Ver. 54 (前書き)

短い、凄く短い。

しかも、オリジナルとあんまり変化ない……。

数をこなせばその内、上手く書けるようになるよね？

高層ビルの最上階、O・P・F日本支部が良く見える最高級の部屋。

そこで、包帯を巻いた痛々しい姿の女性が少女に詰め寄っていた。

「てめえ……。私があわけわからねえ野郎にやられてるのを見てやがったな……」

「……フツ」

「……このガキが……！　笑うんじゃない……！」

女性は倒れ込む様にして少女を壁に叩きつける。

だが、女性の怒りはそれだけでは納まらず、腰からナイフを引き抜き少女の頬に当てた。

「ふざけやがって！　その顔、切り刻んでやる……！」

「やめなさい、オータム。うるさいわよ」

少女にナイフを突きつける女性、オータムを止めたのは、バスルームから出てきた美しい容貌の女性だった。

その容姿は、どこかアーンヴァルに似ているのだが真逆の雰囲気をもっている。

「スコール……！」

「怒ってばかりいると老けるわよ。落ち着きなさい、オータム」

スコールと呼ばれた女性はバスローブのままでソファアーに腰を下ろす。

オータムは渋々といった感じで少女の拘束を解き、ナイフを仕舞いながらスコールを悔しそうに見つめた。

「お前は……知っていたのか？　こうなるということを」

「ええ……まあ、O・P・Fがあそこまで積極的だったのは予想外だったかしらね」

「どうして……。どうして、私に言わない！　私は……私は、お前の！」

「わかってるわ、オータム。ちゃんとわかってる。あなたは私の大切な恋人」

「わ、わかっているなら……いい」

スコールの微笑みは、オータムの怒りを忘れさせたらしく頬を紅く染めさせうつむかせる。

その様子は、まるで初恋の乙女のようにあどけなく、可愛らしいものがあつた。

オータムのそんな表情を見たスコールは、嬉しくなったのか微笑みを深めた。

「おいでなさい、オータム。髪を洗ってあげる。今日は疲れたでしょう？？」

「あ、ああ」

その様子を見る少女は呆れた表情で二人を見ていた。次の瞬間には冷徹な表情を浮かべ、部屋を出て行く。

「エム、ISを整備に回しておいて頂戴。？サイレント・ゼフィールス？はまだ奪って間もない機体だから、再度調整が必要よ。それにアレとの戦闘データを取っておいて頂戴」

「わかった」

エムと呼ばれた少女は、スコールにそう答えるとドアを閉めた。閉めた後、廊下で少し思いに耽っていた時に聞えてきた甘い声によりエムは深い溜息を付いた。

「はぁ……。しかし、あのIS……。無人機？」

少し難しい表情をしたエムだったが、すぐに考える事をやめたのか、胸のロケットを強く握り締め廊下を歩いていった。

9月25日、金曜日。

マリーチは未だにO・P・F日本支部兼本社にいた。

「1号が遭遇した機体。アラクネとサイレント・ゼフィルス」

「はい。1号のデータから見る限り、盗まれた機体と形状が一致しました」

無数の空中投影型ディスプレイが設置されている。

その画面には、1号が見た映像が映し出されており、サイレント・ゼフィルスの姿が確認されていた。

そして、1号のセンサーであり目であるアトラナートシステムがアラクネに使用されたコアの存在を確認し、暫定位置を割り出している映像も見て取れる。

「……。亡国機業、中々侮れないですう」

「1号のフェイスを切り裂くなど様々な点に置いて、サイレント・ゼフィルス操縦者の腕前は凄まじいものが在ります。おそらくですが、BT適性およびIS適性は両方ともSである可能性が高いです。それと、アレだけの交戦で1号の正体に気がついた可能性が――」

様々な憶測を口にする女研究員。

マリーチはソレを聞きながら、考えていた。

（じいが仕入れた情報では、ゼフィルスの操縦者の名は？織斑マド

力？。コードネーム、エム。織斑……。どういう事ですか？ 容姿は織斑千冬のソックリ。年齢は織斑一夏よりも少し下？ 織斑夫婦が失踪した時期を考えてもすでに誕生しているハズ。情報が足りない。織斑マドカ……。欲しい！ 欲しいですう！）

「あの……。聞いていますか？」

「聞いてるですう。織斑マドカの情報を徹底的に洗い集めるですう。私はマドカが欲しくて欲しくてたまらないですう。2号をグラフィオスにいつでもセットできるようにしておくですう。織斑マドカを手に入れたら……。私が教育して私のモノにしてやるですう。髪の毛長くしてえ、徹底的な恐怖で髪の毛が白くなるまでえ拷問漬けにすればあ……。性格的にもグラフィオスみたいになりそうでえ、いまから楽しみですう」

「……………犯罪では？」

「ああん？ 私がルールなんですう。タダでさえ一夏育成計画が上手く行つてなくてイライラしてるですう。娯楽くらいあつても良いですう。ほら、さっさと調べろですう」

「了解しました」

女研究員は手元のキーボードを操作し、様々な場所へ連絡して行く。

その光景を見ながら、マリーチは微笑みを浮べていた。

Side ドロテア＝リッケン

一夏様方と談笑を交えながら夕食をとる。
マリーチ様がO・P・Fに戻ってから数日経ったけれど、戻ってくる気配はない。

「えっ！？ 一夏の誕生日って今月なの！？」

「お、おう」

突然シャルロット様が大声をあげる。
しかも立ち上がったいた。

「い、いつ！？」

「9月、27日だよ。ちよっ、ちよっと落ち着けて」

「う、うん」

一夏様に言われて席に付くシャルロット様。
シャルロット様にしては珍しい行動だと思う。

「に、日曜日だよね！？」

身を乗り出し、確認をするシャルロット様。一夏様が気圧されて
少しだけ後ろに身を引いていた。

ラウラ隊長とセシリア様のお二人は、横目で一夏様を睨むような
感じで見ている。

「に、日曜日だな」

「そっか……。うん、そうだね。うん！」

シャルロット様は呟きながら頷く。

そして、一夏様の横に座っていたセシリア様がパンを置き、一夏様に話しかける。

「一夏さん、そういう大事なことはもっと早く教えてくださらないと困ります」

「え？ お、おう。すまん」

セシリア様の気迫に圧され、なぜか謝る一夏様。

一夏様って弱い様な気がする。

押し倒して既成事実を作ってしまったえば、案外アツサリ手に入るのかも？

「とにかく、27日の日曜日ですわね」

セシリア様は、純白の革手帳になにやら書き込んでゆく。

「お前は どうしてそういうことを黙っているんだ」

シャルロット様の横にいるラウラ隊長が口を開いた。

なにやら殺気みたいなものが箒様と鈴様に向けられる。

「ふん。しかし、知っていて黙っていたヤツもいることだしな」

「「う！」」

ラウラ隊長に睨まれ、箒様と鈴様が身を固める。

でもまあ、仕方ない事だろう。

一夏様はあまり気にしていない様だけど、誕生日というモノは色々といイベントが在って大事な点数稼ぎなものらしい。

「べ、別に隠していたわけではない。聞かれなかったただけだ」

「そ、そうそうよ！ 聞かれもしないのに喋るとKYにまるじゃない！」

言い訳をする篤様と鈴様。

なんとも見苦しく見えてしまう。

「一夏様のお誕生日が9月27日だと分かったただけでも良いではありませんか。ね？」

お二人に助け舟を出し、微笑みを浮べてみた。

篤様と鈴様から好意的な視線を送られ、ラウラ隊長とセシリア様は渋々納得したような感じで頷く。

シャルロット様は相変わらずトリップしたまま戻ってきていないようだ。

というか、シャルロット様……。

突然喋らなくなったと思ったら、トリップしていたのですね。

「ドロテアさんの言うとおりですわね。とにかく……一夏さん、予定は空けておいてくださいな！」

「あ、ああ。一応、中学のときの友達が祝ってくれるから俺の家に集まる予定なんだが、みんなも来るか？」

「も、もちろん！ 何時から？」

「私はマリーチ様を待たなければなりませんので……。マリーチ様がお戻りになられたら伺っても良いでしょうか？」

「ああ、大丈夫だ。えーっと、時間は4時くらいかな。ほら、当日ってあれがあるだろ？」

IS高速バトルレース？キャノンボール・ファスト？。

O・P・Fフランス支部、クトウグアⅡデュルフェ様が心血を注いでいらつしやる国際大会のことだ。

でも、IS学園では少し違う。

市の特別イベントとして催される。一種の娯楽の様にもなっているが、なんらかの目的が在った方が良いことは確かだし、国際大会の練習として参加する生徒がいることも確かだ。

数名いるフランス代表候補の中でも、O・P・Fの息が掛かった者たちはみなキャノンボール国際大会を目指し、頑張っていると聞いている。

なんでも、キャノンボール出場選手になる事が出来れば、国の代表候補ではなくともO・P・Fフランス支部キャノンボール代表として特務機が与えられるそうだ。

特務機というのは、専用機と訓練機の間にあるような機体なのだけど……。

1ヶ月くらいかけて専用機のようにセットアップし、代表である間だけ使用する事ができる。

だが、本来の所有者は別におり、その所有者から許可を剥奪されたり、別の者が許可を得た場合は、先に許可を出されている者はもう認識されなくなってしまうという代物だ。

専用機よりも自由に動かせるワケではないので、専用機との差は確かにある。

しかし、最初からキャノンボール仕様として作られた機体の性能

がある為、専用機との差を技術力で埋める事が出来るまでになったと聞いた。

「キャノンボール……。私のアーティル・フルバレルでは不利ですね」

誰にも聞えないように呟き、視線を外に向ける。

マリーチ様は何時になったら帰って来るのだろうか？

太平洋。地図にない基地よりもさらにわかり難く、さらに難解な基地。

名をイハンスレイという。

「本当に来たね。ウトウルス」

「うん、来たね。フルエフル」

鳴り響くアラームは鳴り止み、イハンスレイ内部に入る為の入り口は全て閉鎖される。

そして、全域に特殊シールド？ン・カイ？が張り巡らされた。

「……」

異界といっても問題ではないそこに、一人の少女が佇んでいた。その表情には焦りが見える。

「……」

「無駄だよね？　ウトウルス」

「そうね。ン・カイは様々な通信も遮断するわ。フルエフル」

一人の少女の前には、ブラジル支部支部長ウトウルス「アレニウスとフルエフル」アレニウスの姉妹が立ち塞がる。

その顔には微笑みを浮べていた。

「あれがサイレント・ゼフィルスだね？ ウトウルス」

「そうね。ブルー・ティアーズの発展形とされている物ね。フルエフル」

サイレント・ゼフィルスを纏う少女は、右腕だけで長大なライフ？ スターブレイカー？ を構える。

しかし、それだけではウトウルスとフルエフルは表情すら変えない。

「あんな玩具でどうするのかな？ ウトウルス」

「オールベルン、ジールベルンの力を知らないみたいね。フルエフル」

二人は、ISを展開した。

一瞬で白い光と黒い光が全身を包み込み、物質構成を始める。

数秒で白い装甲と黒い装甲に包まれたウトウルスとフルエフル。

その姿は、まるで神話に登場する戦乙女のような。

「何が目的だ」

「貴女に決まっているでしょう？ 織斑マドカさん。そうだよ？ ウトウルス」

「ええ、私たちの目的は織斑マドカ、貴女自信。間違っていないよ。フルエフル」

オールベルンのウトウルスとジールベルンのフルエフルは刃を抜きながら言う。

そして、瞬時加速よりもさらに早い速度でサイレント・ゼフィルスは左右に移動した。

「貴女を回収するね。頭の中のマノマシーンは死滅させてあげるから大丈夫だよ。ね？　ウトウルス」

「その後には、素敵な素敵な拷問が待ってるよ。マリーチ様の忠実な僕にしてもらえよ。ナノマシーンは取り除いてあげるから大丈夫よ。フルエフル」

さらに早い速度で二人は少女、織斑マドカの手を取りくるくると回り始める。

無論、マドカとて無抵抗なワケではないのだが、拘束が想像以上らしく抵抗できずにいた。

「クッ……」

サイレント・ゼフィルスの特徴であるバイザー型ハイパーセンサーが顔を隠してる為、遠くから見れば楽しそうに見える。

実際はかなり激しい闘ぎ合いをしているハズなのだが……。

「無駄無駄。第二世代だけど第二世代じゃない。マリーチ様の偉大な技術のおかげ……。ね、ウトウルス」

「ISの第二世代、第三世代の差なんて、O・P・Fの専用機からしてみれば意味ないね。マリーチ様の技術は世界一だからね。フルエフル」

両サイドから抱き付くようにしてマドカに密着するウトウルスとフルエフル。

マドカの隠されている顔からは表情は伺え難いが、唯一見える口元は血が滲むほど噛み締めている。

「さあ、逝きましよう。ねえ、ウトウルス」

「ええ、そうね。フルエフル。ああ、大丈夫よ？　すぐに気持ちよくなるわ。さあ、逝きましよう。織斑マドカ……。いえ、貴女の新しい名前はグラフィオス」

「ソレに相応しい見た目にしてあげるからね。期待してね？　すっごく楽しいからね？」

白と黒の姉妹はクスクスと笑いながらマドカの両腕を掴み、イハンスレイの奥深くへと連れて行く。

激しい抵抗を繰り出されているのか、引き摺られてゆく通路の廊下はボロボロになっていた。

「クソッ……！！　はなせ！！」

マドカの叫びは虚しく、イハンスレイに響き渡る。

だが、その叫びを耳にする者たちは全て海底都市の住人だけであり、一つの神に心奪われた者たちのみ。

「ああ、また一人増えるな」

「ええ、そうね。また一人同志が増えるのね」

こうして、織斑マドカは表舞台から姿を消した。

Ver. 56 (後書き)

本来は、イレイズドを襲うエムですが……。

銀の福音はO・P・F社が持っているため、O・P・F社が秘密に建造したイハンスレイに襲撃したらワナだったよ？ 的な感じですよ。

Mは何処で使おうかなーとかはもう決まっています。

人体改造とかはしないでしょ？

たぶん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2670x/>

武装せし神の姫

2011年11月27日18時54分発行